静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第11集

大谷川 II

(遺構編)

昭和59・60年度巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業
埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原・元宮川遺跡)

本文編

1987

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第11集

大　谷　川　II

（遺構編）

昭和59・60年度巴川（大谷川）総合治水対策特定河川事業
埋蔵文化財発掘調査報告書（神明原・元宮川遺跡）

本文編

1987

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

神明原・元宮川遺跡は、弥生時代から奈良時代にかけての低湿地における集落遺跡として知られ、周辺には登呂遺跡・有東遺跡・汐入遺跡などの著名な集落遺跡のほか、宮川古墳群・伊庄谷横穴群、上の山遺跡などの古墳群もみられ、この地の中心的な遺跡の一つと考えられていた。昭和55・56年度には、静岡市教育委員会による大谷川河川改修事業関連の調査が実施されて遺跡の性格の一端が明らかにされたのであった。

この調査の成果をうけて、昭和58年度～60年度の３ケ年をかけて現地調査を実施し、昭和61年度より資料整理作業を継続している。その調査の成果はめざましく古代の大谷川の流路から人形（ひとがた）・馬形木製品・斎串・ト骨やおびただしい数の土器などの祭祀遺物が出土し、神明原・元宮川遺跡を流れる大谷川が古代の大規模な「水辺の祭」の場であったことが解明された。この事実は、今までの静岡平野における歴史認識に大きな変更を迫るものであり、今後静岡平野の歴史を構成する上で貴重な手がかりとなるであろう。そしてまた、日本の古代祭祀形態を考える上に重要な資料をもたらすものであろう。

本報告書は、大谷川―神明原・元宮川遺跡の調査報告の「Ⅱ」であり、昭和58年度に刊行した「大谷川Ⅰ」に続く昭和59・60年度調査の報告である。主として、遺構のあり方に焦点をあて遺構ならびにそれに伴う遺物をとりあげた。現地調査・資料整理の期間を通じて様々な問題が提起されてきたが、その解明のため努力をつづけてきた次第である。しかし、本報告においてはまだまだ未解決の問題が多い。さらに努力していきたい。

なお、この調査に深い理解と協力をいただいた静岡県静岡土木事務所の方々に深い感謝の言葉をささげるものである。あわせて静岡市教育委員会の配慮に対して心から謝意を表するとともに、静岡県教育委員会の指導・助言に感謝するものである。終りに、本調査に従事し、その整理や報告書の執筆に力をあわせた所員の労苦に感謝したい。

昭和62年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長　斎藤　忠

例　　言

1. 本書は静岡市大谷地先に所在する神明原・元宮川遺跡の発掘調査報告書の第二分冊である。昭和59・60年度に発掘調査された遺構を報告するが、遺物については遺構から出土したうちの一部のみにとどめ、次年度以降にまとめる予定である。
2. 調査は「巴川（大谷川）総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査業務」として静岡県静岡土木事務所の委託を受けて静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。なお昭和58年度は財団法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所が実施し、昭和59年5月1日から財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が承継したものである。
3. 昭和59年度調査は昭和59年4月1日から昭和60年3月31日まで行い、昭和60年度は昭和60年4月8日から昭和61年3月31日まで行った。
4. 発掘調査体制は次のとおりである。

   昭和59年度　所長斎藤忠　常務理事（調査研究部長）池谷和三　調査研究1課長植松章八　主席調査研究員栗野克巳　調査研究員成島仁　小嶋日出一

   昭和60年度　所長斎藤忠　常務理事八代龍一　調査研究部長岡田恭順　調査研究1課長植松章八　主席調査研究員栗野克巳　調査研究員森下春美　足立順司　矢田勝　鈴木基之　寺田甲子郎　成島仁　小嶋日出一

   昭和61年度　所長斎藤忠　常務理事八代龍一　調査研究部長岡田恭順　調査研究1課長植松章八　調査研究員成島仁　矢田勝　寺田甲子郎
5. 本書は静岡県埋蔵文化財調査研究所の職員が分担して執筆した。執筆分担は以下のとおりである。

   第Ⅰ章・第Ⅲ章第1節西大谷3区・第2節水上4区・水上8～11区……寺田甲子郎

   第Ⅱ章・第Ⅲ章第2節水上1～3区・水上7区・第3節宮川5・6区……矢田勝

   第Ⅲ章第1節大谷1・2区・西大谷4～8区・第2節水上5・6区・第3節宮川3・4区・第Ⅳ章……成島仁
6. 本書の編集は静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

凡　　例

本書の記述については、以下の基準に従い、統一をはかった。

1. 調査区の位置は、大谷川の河口起点よりの距離を用いた。

2. 発掘区の中の一部分を限定する場合、南北・東西のグリッド座標により、それぞれ85列～87列、F列～H列のように用いた。

3. 遺物実測図には、報告書での見出番号、遺物番号を併記し、必要により遺構番号を加えた。

4. 遺構一覧表に示した数値の単位はmであり、小数点以下第3位を四捨五入した。

5. 挿図中等高線に付した数値の単位はmである。

6. 遺構・遺物の標記は次のとおりである。

遺構遺物の標記

遺　構　（S）				遺　物	
A	柵	G	小鍛治遺構	W	木製品	土器は番号のみで符号なし
B	竪穴住居跡	H	掘立柱建物	P	土製品	
C	祭祀遺構	P	小穴・土坑	S	石製品	
D	溝	L	護岸遺構	M	金属器	
E	井　戸	R	旧河道	B	玉　類	
F	土　壙	X	その他	E	その他	

7. 遺構番号は各地区（大谷地区・西大谷地区・水上地区・宮川地区）毎に設定したため同一番号が重複している場合もある。遺物番号は各調査区毎に設定した。

目　　次

序
第　Ⅰ　章　　調査の経過 …… 1
第１節　調査の計画 …… 1
第２節　調査の方法 …… 1
第３節　調査の経過 …… 2
第４節　基本土層 …… 6

第　Ⅱ　章　　環　　境 …… 10
第１節　大谷川流域と条里地割 …… 10
第２節　大谷川水系と神明原・元宮川遺跡 …… 10

第　Ⅲ　章　　遺跡の概要 …… 21
第１節　大谷・西大谷地区 …… 21
大谷２区 …… 21
大谷１区・西大谷４区 …… 25
西大谷５区 …… 29
西大谷６区・７区 …… 29
西大谷８区 …… 36
西大谷３区 …… 43
第２節　水上地区 …… 47
水上１区 …… 47
水上２区 …… 63
水上３区 …… 66
水上５・６区 …… 74
水上７区・水上10ｂ区 …… 77
水上４区・水上10ａ区低湿地 …… 92
水上10ａ区 …… 104
水上10ｃ区 …… 110
水上11区 …… 112
水上８区 …… 117
水上９区 …… 125
第３節　宮川地区 …… 127
宮川３区 …… 127
宮川４区 …… 151
宮川５区 …… 164
宮川６区 …… 179

第　Ⅳ　章　　ま　と　め …… 203
参考文献 …… 208

挿 図 目 次

第 1 図　調査地点位置図 …… 5
第 2 図　大谷地区土層模式図 …… 6
第 3 図　西大谷地区土層模式図 …… 6
第 4 図　水上地区土層模式図 …… 7
第 5 図　宮川地区土層模式図 …… 7
第 6 図　旧河道模式図 …… 9
第 7 図　大谷川周辺条里図（遺跡分布図）…… 13
第 8 図　大谷川周辺小字集成図（昭和10年代）…… 15
第 9 図　大谷川周辺空中写真（昭和21年撮影）…… 17
第 10 図　遺跡全体図 …… 19
第 11 図　大谷・西大谷地区グリッド配置図 …… 22
第 12 図　大谷２区等高線図 …… 23
第 13 図　大谷２区土層断面図 …… 24
第 14 図　大谷１区ＳＸ 01 実測図 …… 26
第 15 図　大谷１区・西大谷４・５・６・７区全体図 …… 27
第 16 図　西大谷６・７区土層断面図 …… 30
第 17 図　西大谷７区（北区）古墳時代前期面等高線図 …… 31
第 18 図　西大谷７区（北区）８・９層遺物分布模式図 …… 32
第 19 図　西大谷７区（北区）７層Ｊ33グリッド遺物図 …… 33
第 20 図　西大谷７区（北区）８・９層出土土器実測図 …… 34
第 21 図　西大谷７区（北区）８・９層出土玉類実測図 …… 35
第 22 図　西大谷８区・水上５・６区全体図 …… 37
第 23 図　西大谷８区・水上６区土層断面図 …… 38
第 24 図　西大谷８区Ｚ48・49グリッド遺構実測図 …… 39
第 25 図　西大谷８区ＳＨ 378 実測図 …… 41
第 26 図　西大谷８区ＳＰ 354 出土土器実測図 …… 42
第 27 図　西大谷８区ＳＰ 354 実測図 …… 43
第 28 図　水上地区グリッド配置図 …… 48
第 29 図　水上１・２・３区・西大谷３区全体図 …… 49
第 30 図　水上１区土層図 …… 51
第 31 図　水上１区ＳＥ 261 実測図 …… 52
第 32 図　水上１区ＳＥ 261 中層出土遺物実測図 …… 54
第 33 図　水上１区ＳＸ 323 遺物分布模式図 …… 55
第 34 図　水上１区ＳＸ 323 出土土器実測図 …… 56
第 35 図　水上１区紫茶色粘土直上出土土器実測図 …… 57
第 36 図　水上１区ＳＥ 192 実測図 …… 59
第 37 図　水上３区土層図・実測図 …… 68
第 38 図　「構井ノ坪」関連地籍図（大谷地区部分、明治９年作成）…… 81

第 39 図　水上 6 区ＳＤ 228 実測図 …… 75
第 40 図　水上 7 区・水上10ｂ区等高線図 …… 79
第 41 図　水上 7 区土層図 …… 81
第 42 図　水上 7 区・水上10ｂ区流路変遷図 …… 82
第 43 図　水上 7 区・水上10ｂ区土層断面図 …… 82
第 44 図　水上 7 区流路別出土土器実測図 …… 83
第 45 図　水上 7 区ＳＲ 807 実測図 …… 84
第 46 図　水上 7 区ＳＲ 807 出土土器実測図 …… 85
第 47 図　水上 7 区ＳＸ 806 実測図 …… 85
第 48 図　水上 7 区ＳＸ 805 実測図 …… 85
第 49 図　水上 7 区ＳＲ 808 出土土器実測図 …… 86
第 50 図　水上 7 区ＳＸ 803 実測図 …… 87
第 51 図　水上 7 区ＳＸ 804 実測図 …… 87
第 52 図　水上 7 区ＳＸ 801 実測図 …… 87
第 53 図　水上 7 区ＳＸ 803 ・ＳＸ 804 出土土器実測図 …… 88
第 54 図　水上 7 区ＳＸ 801 出土遺物実測図 …… 89
第 55 図　水上10ａ区低湿地土層断面図 …… 94
第 56 図　水上 4 区・水上10ａ区全体図 …… 96
第 57 図　水上10ａ区ＳＸ 624 出土状況図 …… 97
第 58 図　水上10ａ区ＳＸ 624 遺物分布模式図 …… 99
第 59 図　水上10ａ区ＳＸ 624 ａ群出土土器実測図 …… 100
第 60 図　水上 4 区・水上10ａ区遺構出土土器実測図 …… 101
第 61 図　水上10ａ区ＳＸ 624 出土遺物実測図 …… 102
第 62 図　水上10ａ区ＳＸ 624 ｄ群出土土器実測図 …… 103
第 63 図　水上10ｃ区ＳＰ 727 実測図 …… 110
第 64 図　水上10ｃ区・水上11区全体図 …… 111
第 65 図　水上11区ＳＨ 576 周辺平安時代遺構図 …… 115
第 66 図　水上10ａ区・水上10ｃ区・水上11区遺構出土土器実測図 …… 116
第 67 図　水上 8 区・水上 9 区全体図 …… 119
第 68 図　水上 8 区低湿地土層断面図 …… 119
第 69 図　水上 8 区古墳時代遺構平面図 …… 121
第 70 図　水上 8 区ＳＸ 775 出土土器実測図 …… 122
第 71 図　水上 8 区古墳時代遺構実測図 …… 123
第 72 図　水上 9 区ＳＨ 570 実測図 …… 125
第 73 図　宮川地区グリッド配置図 …… 130
第 74 図　宮川 3 ・ 4 区全体図 …… 131
第 75 図　宮川 3 区ＳＤ 181 実測図 …… 133
第 76 図　宮川 3 区ＳＤ 145 実測図 …… 134
第 77 図　宮川 3 区ＳＤ 182 実測図 …… 135
第 78 図　ＳＸ 477 ～ＳＸ 484 位置図 …… 136
第 79 図　宮川 3 区ＳＸ 484 遺物分布図 …… 137

第 80 図　宮川 3 区ＳＸ 483 遺物分布図 …… 138
第 81 図　宮川 3 区ＳＸ 482 遺物分布図 …… 139
第 82 図　宮川 3 区ＳＸ 480 遺物分布図 …… 139
第 83 図　宮川 3 区ＳＸ 477 遺物分布図 …… 140
第 84 図　宮川 3 区ＳＸ 478 遺物分布図 …… 141
第 85 図　宮川 3 区ＳＸ 481 遺物分布図 …… 142
第 86 図　宮川 3 区ＳＸ 479 遺物分布図 …… 143
第 87 図　宮川 3 区ＳＲ 485 出土土器実測図 …… 144
第 88 図　宮川 3 区ＳＲ 486 遺物分布模式図・土層断面図 …… 145
第 89 図　宮川 3 区ＳＲ 486 出土墨書土器実測図 …… 146
第 90 図　宮川 4 区ＳＲ58・55・54・53出土土器実測図 …… 155
第 91 図　宮川 4 区旧河道内遺物分布模式図 …… 156
第 92 図　宮川 4 区旧河道内遺物分布模式図 …… 157
第 93 図　宮川 4 区ＳＲ55出土鍬実測図 …… 158
第 94 図　宮川 4 区ＳＲ56遺物分布模式図 …… 159
第 95 図　宮川 4 区ＳＲ56出土須恵器実測図 …… 160
第 96 図　宮川 4 区ＳＲ56出土木製品実測図 …… 161
第 97 図　宮川 5 ・ 6 区全体図 …… 165
第 98 図　宮川 5 区掘立柱建物実測図 …… 168
第 99 図　宮川地区土層図 …… 169
第 100 図　宮川 5 区旧河道内主要遺物分布図 …… 172
第 101 図　宮川 5 区ＳＲ 201 ・ 202 出土土器実測図 …… 173
第 102 図　宮川 5 区ＳＲ 201 出土墨書土器実測図 …… 174
第 103 図　宮川 5 区ＳＸ 336 実測図 …… 174
第 104 図　宮川 5 区ＳＸ 336 出土土器実測図 …… 175
第 105 図　宮川 6 区旧河道内主要遺物分布模式図（その１） …… 181
第 106 図　宮川 6 区旧河道内主要遺物分布模式図（その２） …… 183
第 107 図　宮川 6 区ＳＲ 317 ・ＳＲ 316 出土土器実測図 …… 186
第 108 図　宮川 6 区ＳＲ 320 ・ＳＲ 314 出土土器実測図 …… 187
第 109 図　宮川 6 区旧河道内出土墨書土器実測図 …… 188
第 110 図　宮川 6 区ＳＲ 312 出土土器実測図 …… 189
第 111 図　宮川 6 区ＳＲ 313 下層木製品出土状況実測図 …… 191
第 112 図　宮川 6 区ＳＲ 313 断面図 …… 192
第 113 図　宮川 6 区ＳＲ 313 下層出土土器実測図 …… 193
第 114 図　宮川 6 区ＳＸ 335 実測図 …… 194
第 115 図　宮川 6 区ＳＸ 335 出土主要遺物実測図 …… 195
第 116 図　西大谷地区・水上 5 区井戸状遺構実測図 …… 197
第 117 図　水上地区井戸状遺構実測図１ …… 198
第 118 図　水上地区井戸状遺構実測図２ …… 199
第 119 図　水上地区井戸状遺構実測図３ …… 200
第 120 図　宮川 3 区井戸状遺構実測図 …… 201

第121図　宮川3・5区井戸状遺構実測図 …… 202

挿表目次

第 1 表　周辺遺跡地名表 …… 12
第 2 表　大谷1区ＳＸ 01 出土銭貨一覧 …… 25
第 3 表　西大谷7区小穴一覧表 …… 35
第 4 表　西大谷5・7区溝状遺構一覧表 …… 35
第 5 表　西大谷8区溝状遺構一覧表 …… 41
第 6 表　西大谷8区柱穴・小穴（土坑）一覧表 …… 44
第 7 表　西大谷3区小穴・土坑一覧表 …… 45
第 8 表　西大谷3区溝状遺構一覧表 …… 46
第 9 表　水上1区ＳＸ323主要遺物一覧表 …… 55
第 10 表　水上1区小穴一覧表 …… 60
第 11 表　水上1区溝状遺構一覧表 …… 62
第 12 表　水上2区小穴一覧表 …… 63
第 13 表　水上2区溝状遺構一覧表 …… 66
第 14 表　水上3区小穴一覧表 …… 69
第 15 表　水上3区溝状遺構一覧表 …… 69
第 16 表　「構井ノ坪」関連小字一覧表 …… 73
第 17 表　水上5・6区小穴一覧表 …… 76
第 18 表　水上7区小穴・溝状遺構一覧表 …… 91
第 19 表　水上4区溝状遺構一覧表 …… 94
第 20 表　水上4区小穴・土坑一覧表 …… 95
第 21 表　水上10ａ区ＳＸ624主要遺物一覧表 …… 104
第 22 表　水上10ａ区小穴・土坑一覧表 …… 105
第 23 表　水上10ｃ区小穴・土坑一覧表 …… 107
第 24 表　水上10ａ区溝状遺構一覧表 …… 108
第 25 表　水上10ｃ区溝状遺構一覧表 …… 109
第 26 表　水上11区小穴・土坑一覧表 …… 113
第 27 表　水上11区溝状遺構一覧表 …… 114
第 28 表　水上8・9区溝状遺構一覧表 …… 118
第 29 表　水上8・9区小穴・土坑一覧表 …… 126
第 30 表　宮川3区主要遺物一覧表 …… 147
第 31 表　宮川3区小穴一覧表 …… 147
第 32 表　宮川3・4区溝状遺構一覧表 …… 154
第 33 表　宮川4区主要遺物一覧表 …… 162
第 34 表　宮川4区小穴一覧表 …… 163
第 35 表　宮川5区小穴・柱穴一覧表 …… 176
第 36 表　宮川5区溝状遺構一覧表 …… 179
第 37 表　宮川6区内河道部主要遺物一覧表 …… 180
第 38 表　宮川6区小穴一覧表 …… 196
第 39 表　宮川6区溝状遺構一覧表 …… 196
第 40 表　祭祀遺構分類表 …… 208

図 版 目 次

図版 1		遺跡全景――北より
図版 2		水上３・７・８・９・10・11区、宮川３・４区全景――北より
図版 3		水上10区全景――東より
図版 4		水上８・９・11区全景――東より
図版 5		宮川４区（左岸）全景――北より
図版 6		宮川３区全景――西より
図版 7		宮川６区全景――南より
図版 8	1	大谷２区全景――北より
	2	大谷２区土層帯
	3	大谷２区丸木舟出土状況
	4	大谷２区櫂出土状況
図版 9	1	大谷１区・西大谷４区全景（旧河道）――北より
	2	西大谷４区土層帯（Ｓ21グリッド旧河道内覆土）
	3	西大谷４区土層帯（Ｒ22グリッド旧河道内覆土）
図版 10	1	西大谷４区旧河道跡右岸部
	2	大谷１区旧河道内中洲状部分（１）
	3	大谷１区旧河道内中洲状部分（２）
図版 11	1	大谷１区ＳＸ 01
	2	大谷１区ＳＸ 01 銭貨出土状況
図版 12	1	西大谷５区表土除去後全景――南より
	2	西大谷５区全景――南より
図版 13	1	西大谷６・７区全景――北より
	2	西大谷６区（旧河道）全景――南より
図版 14	1	西大谷７区（北区）平安末～鎌倉時代面
	2	西大谷７区（北区）ＳＥ 132 井戸枠
	3	西大谷７区（北区）ＳＥ 132 掘り方
	4	西大谷７区（北区）古墳時代前期面
図版 15	1	西大谷７区（北区）７層遺物出土状況
	2	西大谷７区（北区）８層遺物出土状況
	3	西大谷７区（北区）８・９層玉類出土地点
	4	西大谷７区（北区）８・９層遺物出土状況
図版 16	1	西大谷８区南半部（旧河道）全景――北より
	2	西大谷８区旧河道跡右岸部
	3	西大谷８区土層帯（右岸部および旧河道内覆土）
図版 17	1	西大谷８区48・49列遺構
	2	西大谷８区ＳＰ 353
	3	西大谷８区ＳＰ 349
	4	西大谷８区北半部――北より

5　西大谷８区遺構検出状況――北より
図版 18　1　西大谷８区柱穴列――南より
2　西大谷８区ＳＰ 354 ・ＳＰ 355
3　西大谷８区ＳＥ 332
図版 19　1　西大谷３区全景――北より
2　水上１区近世粘土採掘跡
3　水上１区中世水路群
4　水上１区全景（古墳時代～平安時代）――北より
図版 20　1　水上１区ＳＥ 261 掘り方
2　水上１区ＳＥ 261 中層壺形土器出土状況
3　水上１区ＳＥ 261 中層腰掛出土状況
4　水上１区ＳＥ 261 下層広鍬出土状況
5　水上１区ＳＥ 261 蔓状植物遺存体出土状況
図版 21　1　水上１区ＳＥ 192 掘り方
2　水上１区ＳＥ 192 上層礫群出土状況
3　水上１区ＳＥ 192 中層遺物出土状況
図版 22　1　水上１区ＳＸ 323 遺物出土状況
2　水上１区ＳＸ 323 北側土器群出土状況
3　水上１区ＳＸ 323 西側土器群出土状況
図版 23　1　水上１区紫茶粘土層直上遺物出土状況
2　水上２区全景――北より
3　水上２区ＳＰ 142
4　水上２区ＳＰ 142 中層壺形土器出土状況
図版 24　1　水上３区中世溝状遺構
2　水上３区ＳＤ 453
3　水上３区ＳＤ 455
4　水上３区北西拡張部分
図版 25　1　水上２区ＳＤ81――南より
2　水上１区ＳＤ81――北より
3　水上１区ＳＤ 178
4　水上１区ＳＤ 160
5　水上１区ＳＲ 150
図版 26　1　水上１区ＳＲ 150 土層帯
2　水上１区ＳＲ 150 五輪塔出土状況
3　水上１区ＳＲ 150 五輪塔出土状況
4　水上１区ＳＲ 150 五輪塔出土状況
図版 27　1　水上３区ＳＤ 456
2　水上３区ＳＤ 456 遺物出土状況――西より
3　水上３区古墳時代遺構
4　水上３区ＳＥ 463 掘り方
5　水上３区ＳＰ 464

図版 28　1　水上３区ＳＤ491
　　2　水上３区ＳＥ468
図版 29　1　水上５・６区全景――南より
　　2　水上６区全景――北より
図版 30　1　水上６区ＳＸ217（近世粘土採掘跡）
　　2　水上５区ＳＥ208
図版 31　1　水上５区ＳＥ212
　　2　水上６区ＳＥ317
図版 32　1　水上６区ＳＥ221
　　2　水上５区ＳＥ222
図版 33　1　水上６区ＳＤ228
　　2　水上６区ＳＤ228馬骨出土状況
　　3　水上６区ＳＤ228大平鉢・礫出土状況
　　4　水上６区ＳＤ228土層帯
図版 34　1　水上４区全景――北より
　　2　水上４区ＳＰ41
　　3　水上４区ＳＤ５（右）・ＳＤ６（左）
　　4　水上４区ＳＥ８
　　5　水上４区ＳＥ13井戸枠
　　6　水上４区ＳＥ13
図版 35　1　水上10区65・66・67列平安末～中世面全景――南より
　　2　水上10区ＳＰ598
　　3　水上10区ＳＤ595
　　4　水上10区ＳＤ589・ＳＤ600
図版 36　1　水上10区65・66・67列低湿地ＳＸ624――南より
　　2　水上10区65・66・67列低湿地ＳＸ624――北より
図版 37　1　水上10区ＳＸ624――東より
　　2　水上10区ＳＸ624ａ群土器出土状況
　　3　水上10区ＳＸ624ｂ群土器出土状況
　　4　水上10区ＳＸ624ｄ群土器出土状況
図版 38　1　水上10区ＳＸ624ａ群
　　2　水上10区ＳＸ624有孔円板出土状況
　　3　水上10区ＳＸ624有孔円板出土状況
　　4　水上10区ＳＸ624剣形模造品出土状況
　　5　水上10区ＳＸ624勾玉形模造品出土状況
図版 39　1　水上10区ＳＲ673土層断面
　　2　水上10区ＳＸ624ｂ群高坏形土器出土状況
　　3　水上10区ＳＸ624ｂ群台付盌形土器出土状況
　　4　水上10区ＳＸ624ｄ群壺形土器出土状況
図版 40　1　水上10区65・66・67列低湿地――南より
　　2　水上10区65・66・67列低湿地――北より

図版 41　1　水上10ａ区南半部――北より
　　2　水上10ａ区北半部――南より
図版 42　1　水上10ａ区72・73列遺構
　　2　水上10ａ区ＳＤ690
　　3　水上10ａ区ＳＰ694・ＳＰ695周辺遺構
　　4　水上10ａ区ＳＤ634
図版 43　1　水上10ａ区ＳＥ632
　　2　水上10ａ区ＳＥ651
　　3　水上10ａ区ＳＥ651井戸枠
図版 44　1　水上10ｃ区全景――南より
　　2　水上10ｃ区全景――北より
図版 45　1　水上10ｃ区ＳＤ765
　　2　水上10ｃ区ＳＤ765遺物出土状況
　　3　水上10ｃ区ＳＰ768
図版 46　1　水上７区全景――北より
　　2　水上７区全景――南より
　　3　水上７区ＳＸ462連続土坑――西より
　　4　水上７区ＳＸ467水田状遺構――北より
図版 47　1　水上７区ＳＲ807（１）
　　2　水上７区ＳＲ807（２）
　　3　水上７区低湿地土層断面
図版 48　1　水上７区ＳＸ806遺物出土状況（１）
　　2　水上７区ＳＸ806遺物出土状況（２）
　　3　水上７区ＳＸ805遺物出土状況（１）
　　4　水上７区ＳＸ805遺物出土状況（２）
図版 49　1　水上７区旧河道土層断面
　　2　水上７区旧河道土層断面
　　3　水上７区ＳＲ810遺物出土状況（１）
図版 50　1　水上７区ＳＲ810遺物出土状況（２）
　　2　水上７区ＳＲ810遺物出土状況（３）
　　3　水上７区ＳＲ812遺物出土状況（１）
図版 51　1　水上７区ＳＲ812遺物出土状況（２）
　　2　水上７区ＳＸ802土製人形出土状況
　　3　水上７区ＳＸ802土製人形・土製馬形出土状況
図版 52　1　水上７区ＳＸ803・ＳＸ804遺物出土状況
　　2　水上７区ＳＸ803遺物出土状況
　　3　水上７区ＳＸ804遺物出土状況
　　4　水上７区ＳＤ618
図版 53　1　水上７区ＳＸ801――西より
　　2　水上７区ＳＸ801――南より
　　3　水上７区ＳＸ801土製馬形出土状況

図版 54　1　水上７区南半部旧河道
　　2　水上７区ＳＲ813土製馬形出土状況
　　3　水上７区ＳＲ813墨書土器出土状況
　　4　水上７区しがらみ状遺構ＳＸ816
図版 55　1　水上10ｂ区旧河道――南より
　　2　水上10ｂ区旧河道――北より
　　3　水上10ｂ区旧河道杭列（１）
　　4　水上10ｂ区旧河道杭列（２）
図版 56　1　水上８区全景――南より
　　2　水上８区旧河道
　　3　水上８区旧河道遺物出土状況
図版 57　1　水上８区ＳＸ775（１）
　　2　水上８区ＳＸ775高坏形土器出土状況
　　3　水上８区ＳＸ775（２）
　　4　水上８区ＳＸ775壺形土器出土状況
　　5　水上８区ＳＸ775坏形土器出土状況
図版 58　1　水上８区古墳時代遺構ＳＰ580・ＳＰ584・ＳＰ585
　　2　水上８区ＳＰ584
　　3　水上８区ＳＰ585
　　4　水上８区ＳＰ580
図版 59　1　水上９区ＳＤ407（左）・ＳＤ577（右）
　　2　水上９区ＳＤ405（右）・ＳＤ406（左）
　　3　水上９区ＳＨ570
　　4　水上９区ＳＨ570柱穴１
　　5　水上９区ＳＨ570柱穴２
図版 60　1　水上９区低湿地土層断面
　　2　水上９区Ｃ89グリッド内トレンチ土層断面
　　3　水上８区旧河道土層断面
図版 61　1　水上８区低湿地土層断面
　　2　水上８区Ｇ80・Ｈ80グリッド内トレンチ土層断面
図版 62　1　水上11区南半部全景――北より
　　2　水上11区85・86列奈良・平安時代遺構面――西より
図版 63　1　水上11区88列奈良・平安時代遺構面――北より
　　2　水上11区ＳＨ576
　　3　水上11区ＳＤ448土器出土状況
図版 64　1　水上11区ＳＥ554検出状況
　　2　水上11区ＳＥ554掘り方
　　3　水上11区ＳＥ554底面
　　4　水上11区ＳＥ554井戸枠内中層遺物出土状況
図版 65　1　宮川３区全景――南より
　　2　宮川３区低湿地・旧河道

図版 66　1　宮川３区Ｉ94・Ｊ94グリッド遺構
　　2　宮川３区南半部遺構
図版 67　1　宮川３区低湿地地形（ＳＲ 485）
　　2　宮川３区旧河道ＳＲ 487
図版 68　1　宮川３区旧河道ＳＲ 486
　　2　宮川３区ＳＲ 486 ミニチュア膳出土状況
　　3　宮川３区ＳＲ 486 ミニチュア杵出土状況
　　4　宮川３区ＳＲ 486 箸状斎串出土状況
図版 69　1　宮川３区ＳＸ 483
　　2　宮川３区ＳＸ 479
図版 70　1　宮川３区ＳＤ 181
　　2　宮川３区ＳＤ 181 遺物出土状況
　　3　宮川３区ＳＤ 181 遺物出土状況
　　4　宮川３区ＳＤ 181 中央部
図版 71　1　宮川３区ＳＤ 145
　　2　宮川３区ＳＤ 145 土層帯
図版 72　1　宮川３区ＳＤ 182
　　2　宮川３区ＳＤ 182 部分
図版 73　1　宮川３区ＳＥ 103
　　2　宮川３区ＳＥ 103 井戸枠
図版 74　1　宮川３区ＳＥ 170
　　2　宮川３区ＳＥ 170 井戸枠
図版 75　1　宮川３区ＳＥ 424
　　2　宮川３区ＳＥ 424 井戸枠
　　3　宮川３区ＳＥ 147
　　4　宮川３区ＳＥ 429
図版 76　1　宮川４区全景――南より
　　2　宮川４区北半部
図版 77　1　宮川４区ＳＲ58
　　2　宮川４区ＳＲ58土器出土状況
　　3　宮川４区ＳＲ58部分
図版 78　1　宮川４区ＳＲ56（ポールは「相星五十戸」木簡出土地点）
　　2　宮川４区ＳＲ56部分
図版 79　1　宮川４区ＳＲ56遺物出土状況
　　2　宮川４区ＳＲ56動物形土製品・土器・礫出土状況
　　3　宮川４区ＳＲ56土器出土状況
　　4　宮川４区ＳＲ56出土礫一括
図版 80　1　宮川４区ＳＲ55
　　2　宮川４区ＳＲ55鍬出土状況
図版 81　1　宮川４区ＳＲ54出土状況――西より
　　2　宮川４区ＳＲ54斎串・皿状木製品出土状況

3　宮川4区ＳＲ54墨書土器出土状況
4　宮川4区ＳＲ54灰釉陶器出土状況
図版 82　1　宮川4区ＳＲ51――西より
2　宮川4区ＳＲ52――西より
図版 83　1　宮川5区北半部全景――北より
2　宮川5区南半部全景――南より
図版 84　1　宮川5区南部水路群・柱穴群――北より
2　宮川5区ＳＥ217
3　宮川5区ＳＥ217断面
図版 85　1　宮川5区旧河道部――南より
2　宮川5区ＳＲ201出土状況――南より
3　宮川5区ＳＲ201橋桁状遺構出土状況――東より
図版 86　1　宮川5区ＳＲ201儀鏡出土状況
2　宮川5区ＳＲ201灰釉手付小瓶出土状況
3　宮川5区ＳＲ201銭貨出土状況（ＳＸ340）
4　宮川5区ＳＲ202――南より
5　宮川5区ＳＲ202遺物出土状況――南より
図版 87　1　宮川5区ＳＸ336――東より
2　宮川5区ＳＸ336鍬出土状況
3　宮川5区ＳＸ336遺物出土状況
図版 88　1　宮川6区全景――南より
2　宮川6区旧河道
図版 89　1　宮川6区ＳＲ317
2　宮川6区ＳＲ316墨書土器出土状況
3　宮川6区旧河道北半部
図版 90　1　宮川6区ＳＲ321
2　宮川6区ＳＲ320遺物出土状況
3　宮川6区ＳＲ314遺物出土状況
図版 91　1　宮川6区ＳＲ312遺物出土状況
2　宮川6区ＳＲ312鈴出土状況
3　宮川6区ＳＲ312人形土製品出土状況
4　宮川6区ＳＤ322遺物出土状況――西より
図版 92　1　宮川6区ＳＲ319遺物出土状況――東より
2　宮川6区旧河道南部
3　宮川6区ＳＲ313上層遺物出土状況
図版 93　1　宮川6区ＳＲ313
2　宮川6区ＳＲ313土層断面――南より
3　宮川6区ＳＲ313遺物出土状況――南より
図版 94　1　宮川6区ＳＲ313遺物出土状況――東より
2　宮川6区ＳＸ335遺物出土状況（１）
3　宮川6区ＳＸ335遺物出土状況（２）

図版 95　1　宮川 6 区ＳＸ 335 遺物出土状況（３）
　　2　宮川 6 区ＳＸ 335 遺物出土状況（４）
　　3　宮川 6 区ＳＲ 313 遺物出土状況（５）

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査の計画

静岡市の北方に位置する文珠岳を源とする巴川は静岡市北東部浅畑沼から東下し、途中長尾川・吉田川等の支川を合わせて清水市の中心市街地を流れ、清水港へと注いでいる。とくに下流部は低地部を縫うように流れているため水はけが悪く、氾濫が起こりやすく、昔から浸水被害が何度も発生してきた。さらに流域の自然遊水地まで市街化が進みわずかな雨でも災害を引きおこすようになった。静岡県（静岡土木事務所）では、昭和54年度より巴川総合治水対策特定河川事業として、河道改修、放水路および遊水地の建設をはじめとする事業をすすめている。このうち静岡市南東部の大谷川放水路の建設は巴川本川下流部の負担軽減と大谷川の浸水被害の軽減を目的としたもので、大谷川放水路建設工事に伴い下流部の神明原・元宮川遺跡で事前の発掘調査が実施された。各年度における調査は次のとおりである。

昭和55年度　静岡市教育委員会　高松地区（右岸330 m－610 m）、1,800 ㎡

昭和56年度　静岡市教育委員会　高松地区（右岸610 m－710 m）、1,300 ㎡

昭和58年度　静岡埋蔵文化財調査研究所　西大谷1・2区（左岸660 m－830 m）、宮川1区（右岸1,377 m－1,407 m）、宮川2区（左岸1,377 m－1,400 m）、計3,905 ㎡

昭和59年度　静岡県埋蔵文化財調査研究所　大谷1・2区、西大谷4～7区（左岸370 m－660 m）、西大谷3区・水上1・2区（左岸830 m－997 m）、西大谷8区、水上4～6区（右岸720 m－988 m）、計8,913 ㎡

昭和60年度　静岡県埋蔵文化財調査研究所　水上3区・水上7～9区、宮川4区（左岸997 m－1,377 m）、宮川6区（左岸1,400 m－1,500 m）、水上10・11区・宮川3区（右岸988 m－1,377 m）、宮川5区（右岸1,407 m－1,500 m）、計16,550 ㎡ なお巴川（大谷川放水路）特定河川緊急整備事業として稲妻1区・2区の発掘調査が行われた。

資料整理は現地調査終了後の昭和61～63年度の3ヶ年を予定しているが、実測図・写真整理・出土遺物の水洗・注記および復元・実測の一部については現地調査と併行してすすめている。なお調査報告書の作成計画は次のとおりである。

昭和58年度　大谷川Ⅰ、西大谷1・2区、宮川1・2区（既刊）

昭和61年度　大谷川Ⅱ（遺構編）昭和59・60年度現地調査地区（本書）

昭和62年度　大谷川Ⅲ（遺物編）

昭和63年度　大谷川Ⅳ（遺物編・考察編）

本書は巴川（大谷川）総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査報告書の第2冊目にあたるもので、昭和59・60年度に調査された大谷1・2区、西大谷3～8区、水上1～11区、宮川3～6区の遺構編を収録している。

第2節　調査の方法

調査区の設定は大谷土地改良区第二工区による地区割にしたがい、河口起点より370 m上流地点～500 m上流地点を大谷地区とし、以下500 m～850 m地点を西大谷地区、850 m～1,250 m地点を水上地区、1,250 m～1,500 m地点を宮川地区とした。これに大谷地区は1～2、西大谷地区は1～8、水上地区は1～11、宮川地区は1～6の番号を調査順に付し調査区名とした。

調査区全域に大谷川改修用の座標系に合わせ10×10 mのグリッドを設定した。グリッド網には南から

北へ１・２・３…の数字を、西から東へＡ・Ｂ・Ｃ…のアルファベットを付し座標を組んだ。各グリッドはこの座標によりＡ１・Ｂ２のように標記した。なお南北列は遺跡全体を通し一貫して付せられているが、東西列のアルファベットは各地区毎に与えた。大谷地区・西大谷地区は２地区で西大谷系グリッドとした。

調査の実施にあたり調査区周囲に安全柵を設置し事故防止に備えた。表土は重機により除去し、その後は人力により包含層を掘り下げ、ベルトコンベアーで搬出した。

現地調査の写真は６×７版中型カメラを主に用い35㎜カメラを併用した。６×７版・35㎜の白黒写真と35㎜のカラースライドの組合せで写真記録とした。各調査区と遺跡の全景写真については航空写真撮影を行った。

実測図の縮尺は平面図・断面図とも１：20で作成したが詳細図が必要な場合には１：10の作図も行った。現地調査にあたって作成した実測図は全てマイクロフィルム撮影を行い、アパチュアカード化した。

なお遺構・遺物の標記については凡例に示したとおりである。

第３節　調査の経過

昭和59年度の発掘調査は、昭和59年４月１日から昭和60年３月31日まで行われた。調査区は大谷１・２区、西大谷３～８区、水上１・２・４～６区である。昭和60年度の発掘調査は、昭和60年４月８日から昭和61年３月31日まで行い、調査区は水上３・７～11区、宮川３～６区である。以下にその調査経過を記述する。なお一部の整理作業については現地発掘作業と併行してすすめた。

調　査　経　過

昭和59年度

４月　器材運搬等発掘調査準備を行い、作業員を手配する。大谷地区は重機による表土除去を行い、測量基準点を設定する。周囲に安全柵を施し、集水桝・水中ポンプを設置する。旧大谷川部分に重機によるトレンチ設定。

５月　大谷地区　旧大谷川内遺物包含層を精査する。砂丘下層の遺物包含層（縄文時代～弥生時代）の調査に着手する。

西大谷地区　西大谷４～７区の表土を重機により除去する。測量基準点を設定し、安全柵を設ける。

水上地区　重機による表土除去を開始し、併行して安全柵・測量基準点を設置する。水上４区の遺構検出作業に着手する。

６月　大谷地区　大谷１区の旧大谷川河床を検出し、全景写真を撮影した後実測作業を行う。

西大谷地区　西大谷４区旧大谷川内の中世堆積層である暗灰色粘土層を掘り下げ砂礫層を精査する。

水上地区　水上４区の遺構を精査し実測作業を行う。水上２区の遺構検出作業を行う。

７月　大谷地区　大谷２区は重機により表土を除去し縄文～弥生時代包含層を精査する。丸木舟を検出し土層観察および土層断面図を作成する。

西大谷地区　西大谷４区の旧大谷川河床検出作業を行い、一部写真撮影および実測作業に入る。

水上地区　水上４区の実測作業を継続する。水上２区は遺構精査と併行して写真撮影・実測作業を行う。

８月　大谷地区　丸木舟の全容を検出し、写真撮影・実測の後取り上げ作業を行う。

西大谷地区　西大谷３区で遺構を精査し写真撮影の後実測作業を行う。西大谷４区は河床を検出し実測作業を行う。西大谷５区の遺構精査を行う。西大谷６区は旧大谷川内中世堆積層を調査する。西大谷７区は重機による表土除去を行う。

9月　西大谷地区　西大谷3区の実測作業を完了する。西大谷5区の遺構を検出し実測作業を完了する。西大谷6区の旧大谷川河床を検出し実測作業を行う。西大谷7区では中世面の遺構を精査し実測作業を行う。

水上地区　水上1区の近世面遺構精査を開始する。

10月　西大谷地区　西大谷6区は縄文～弥生時代包含層の調査を完了する。西大谷7区の中世包含層を掘り下げ、古墳時代前期包含層を精査する。

水上地区　水上1区の近世遺構を精査する。中世の旧大谷川支流であるSR150を精査し実測する。

11月　西大谷地区　西大谷7区で古墳時代前期の包含層より多量の土器と管玉・ガラス玉などが出土し実測・写真撮影を行う。

水上地区　水上1区の近世遺構の調査を終了し、全景写真を撮影した後、実測作業を行う。さらに第二面の平安時代・中世の遺構を精査する。水上5区は遺構検出作業に着手する。

12月　西大谷地区　西大谷8区で重機による表土除去を行う。

水上地区　水上1区の平安時代・中世の遺構を精査し、写真撮影実測作業を行う。さらに古墳時代包含層の精査を開始する。水上5区の遺構を検出し、写真撮影・実測作業を行う。水上6区は重機による表土除去を行う。

1月　西大谷地区　西大谷8区は清掃後先行トレンチを掘削する。

水上地区　水上1区の古墳時代包含層の精査を行うとともに平安時代の井戸状遺構SE192の精査を行う。水上6区は粘土採掘跡の精査を行う。

2月　西大谷地区　西大谷8区の旧大谷川内堆積層を精査し、写真撮影・実測作業を行う。

水上地区　水上1区の古墳時代前期の遺構を精査し、写真撮影・実測作業を行う。水上6区の粘土採掘跡を精査し、写真撮影・実測作業を行う。

3月　西大谷地区　西大谷8区の微高地上遺構検出作業を行う。

水上地区　水上6区の平安時代末の溝状遺構SD228を検出する。

昭和60年度

4月　器材の運般等発掘調査の準備をすすめるとともに継続地区の調査に着手する。

西大谷地区　西大谷8区の古墳時代前期の遺構集中部を精査し、掘立柱建物跡の検討を行う。

水上地区　水上6区のSD228の精査および実測・写真撮影を行う。水上9区は重機による表土除去を行い、周囲に安全柵を設ける。調査区にグリッドを設定する。近世の水田状遺構を精査する。

5月　西大谷地区　西大谷8区の古墳時代前期の遺構の実測・写真撮影を行う。

水上地区　水上3・7区で重機による表土除去を行う。水上9区は包含層の精査を行う。水上10区の現大谷川法面の重機による表土除去を行う。水上11区は重機による表土除去を行い、遺構精査に着手する。

6月　水上地区　水上3区の近世遺構を精査・実測後、古墳時代遺構を検出する。水上7区は近世の遺構面を精査する。水上9区の溝状遺構井戸状遺構を精査し、実測作業を行う。水上11区奈良・平安時代遺構を検出し精査を行う。

宮川地区　宮川3区の現大谷川法面の重機による表土除去を行う。宮川4区は重機による表土除去を行い周囲に安全対策を施し、測量基準点を設置する。

7月　水上地区　水上3区の古墳時代遺構を精査し実測・写真撮影を行う。水上7区の近世遺構を精査し、実測写真撮影を行う。水上9区で掘立柱建物跡を検出し精査する。法面観察で水上9区から水上8区にかけて低湿地地形を検出する。水上11区の奈良平安時代の掘立柱建物跡・溝状遺構・井戸状遺構・小穴を精査する。

宮川地区・宮川４区旧大谷河道ＳＲ52～55の包含層精査を行う。一部実測・写真撮影を行う。

８月　水上地区　水上７区は重機による表土除去を行い、旧大谷川河道を検出する。発掘区全域に先行トレンチを入れる。周囲に安全対策を施す。水上９区は低湿地の土層調査を行い断面図を作成する。水上11区は実測作業・写真撮影を行う。水上８区中近世包含層の精査を開始する。

宮川地区　宮川４区ＳＲ54～56の精査を行うとともに遺物分布図を作成し、写真撮影を行う。北半部のＳＲ57・59・60の精査を開始する。

９月　水上地区　水上７区は南部の奈良平安時代～中世の旧河道を精査するとともに、中央部古墳時代後期河道内遺物群を精査し一部実測作業・写真撮影を行う。水上８区中近世包含層を掘り下げ砂層上面の遺構を精査する。水上10Ｃ区の表土を重機により除去し、測量基準点・安全柵を設置する。

宮川地区・宮川４区は北半部のＳＲ57・59・60の精査を継続するとともにＳＲ51～56の連続断面の実測を行う。

10月　水上地区　水上７区の古墳時代後期河道の精査を継続し実測作業も併行する。水上８区はＳＸ775土師群を精査し、実測・写真撮影を行う。水上10ｂ区・水上10ａ区の表土除去を行い先行トレンチを入れる。

宮川地区　宮川３区で重機による表土除去を行い測量基準点・安全柵を設置する。宮川４区の北半部ＳＲ58～60を精査し、実測作業を行う。宮川６区の重機による表土除去を行う。

11月　水上地区　水上７区は古墳時代後期河道の精査の後河床検出作業を行い、全景写真を撮影し、平面図・断面図を作成する。水上８区は旧大谷川河道の無遺物砂層を重機で除去し、遺物包含層の精査を行う。水上10ａ区低湿地上層の平安末～中世の遺構を精査する。

宮川地区　宮川３区の調査区全域にトレンチを設定し、包含層の精査を行う。宮川４区は清掃の後全景写真を撮影する。宮川５区で重機による表土除去を実施する。

12月　水上地区　水上10ａ区低湿地の土師器群ＳＸ624を精査し、遺物分布図を作成する。水上10ｂ区の近世流路を精査する。

宮川地区　宮川３区ＳＲ485の土器集中箇所を精査する。微高地上の遺構を検出する。宮川５区の旧大谷川河道ＳＲ201・ＳＲ202・ＳＲ203を精査し実測・写真撮影を行う。微高地上の包含層を精査する。

１月　水上地区　水上10ａ区の遺構を精査し実測・写真撮影を行う。水上10ｂ区の旧大谷川堆積層を精査する。

宮川地区　宮川３区のＳＲ485土器集中箇所の精査を継続する。微高地上の溝状遺構・小穴群・井戸状遺構を精査する。平安時代末～鎌倉時代の旧河道ＳＲ486を精査する。宮川５区の微高地上遺構を精査し実測・写真撮影を行う。宮川６区の旧大谷川河道ＳＲ311～317を精査し、実測・写真撮影を行う。

２月　水上地区　水上10ｃ区の遺構を精査し、実測・写真撮影を行う。水上10ｂ区の旧大谷川河床を検出し、実測・写真撮影を行う。

宮川地区　宮川３区の実測作業を行う。宮川５区の西壁土層断面図を作成する。宮川６区のＳＲ311～316を精査し遺物分布図を作成する。

３月　宮川地区　宮川６区の旧大谷川内遺物を実測し、取り上げ後写真撮影を行う。

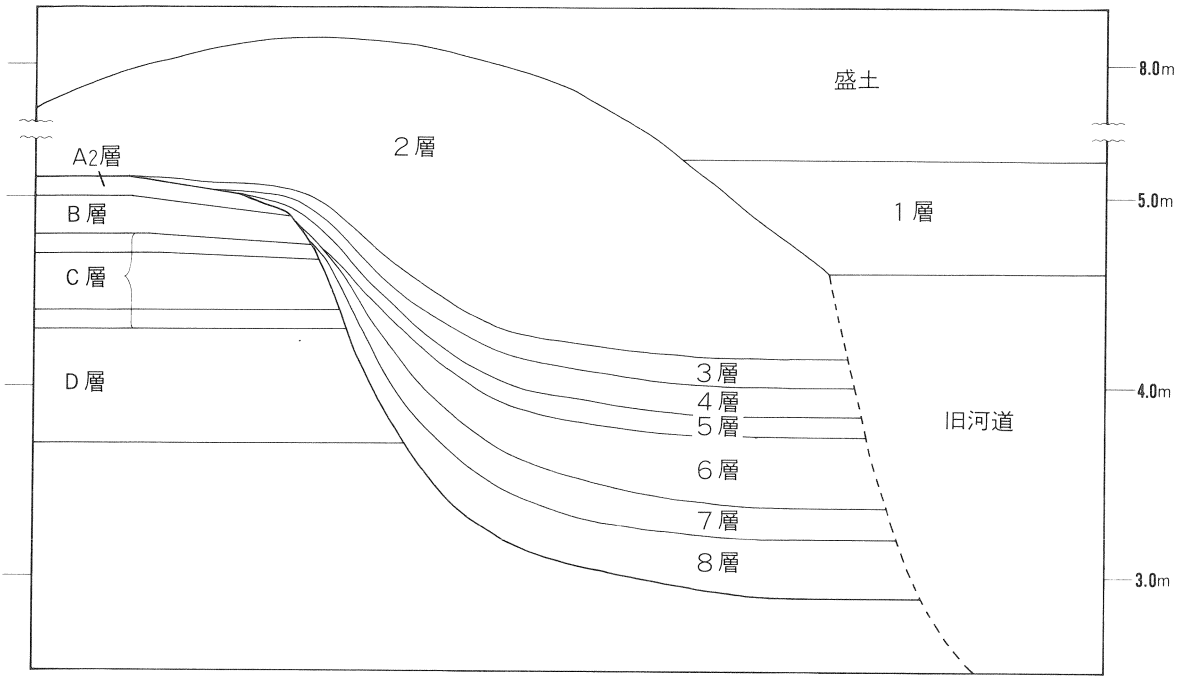
現地のプレハブ・資器材を撤収し現地調査を終了する。

恩田原
富士見台二丁目
富士見台三丁目
富士見工業
片山
宮川
国立静岡大学
白山神社
サッカー場
ラグビー場
テニスコート
諏訪神社
池ヶ谷池
大谷
大谷団地
駿河台団地
公園
大正禅寺
大谷(小)
静岡大谷電話交換局
高松二丁目
静岡総合木材センター
宮竹二丁目
高松公園
水上
西大谷
八坂神社
倶利加羅堂
不動明王
南(中)
静岡放送局
整地中
高宮橋
茲貞院
敷地二丁目
帝釈寺
母子保健総合センター
大里東(小)
高松
市乳児院
(工事中)
浜川
敷地橋
咲見橋

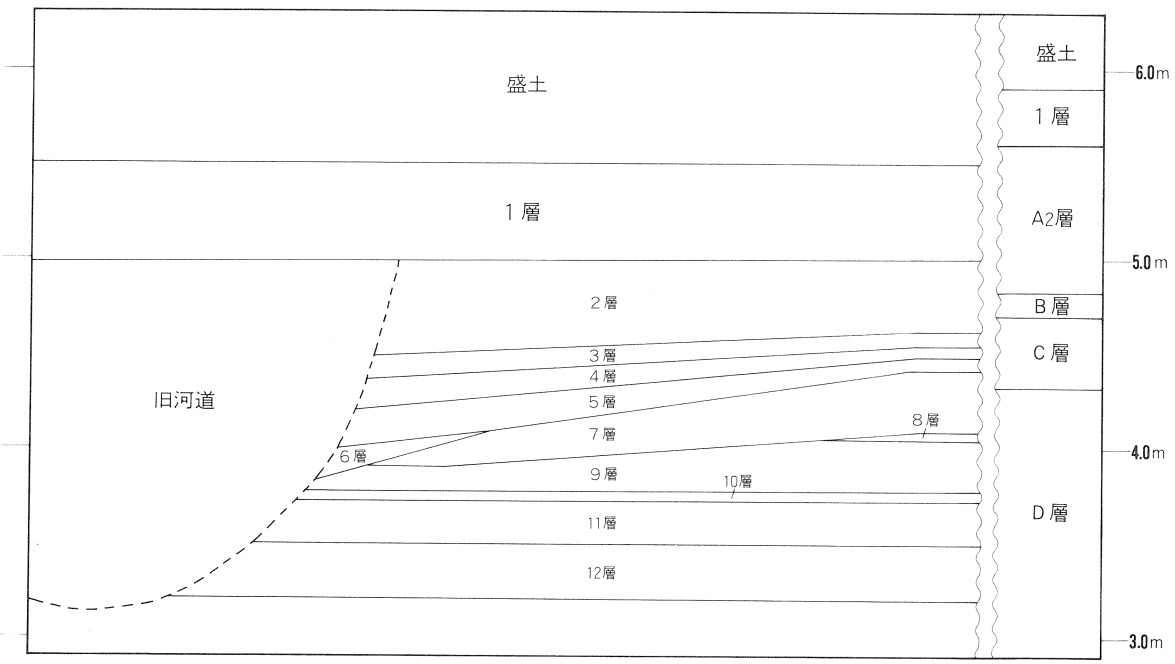
第1図　調査地点位置図

第4節　基　本　土　層

本遺跡は1微高地2低湿地3旧河道に分けられる。微高地においては近世以降の攪乱を受け包含層はほとんど遺存していないが、低湿地周辺には遺物包含層が良好に遺存している地区もみられる。地区毎に低湿地周辺の層位について記述する。なお旧河道内の遺物包含層については調査区により堆積状況が異なるため第Ⅲ章の各地区の土層説明にゆずることとし、ここでは河道の形成、変遷についてのみ言及する。



第2図　大谷地区土層模式図



第3図　西大谷地区土層模式図

微高地の基本層序

A1層　黄灰色砂質粘土層である。水上地区・宮川地区にみられる基盤層で、古墳時代前期～近世の遺構面である。

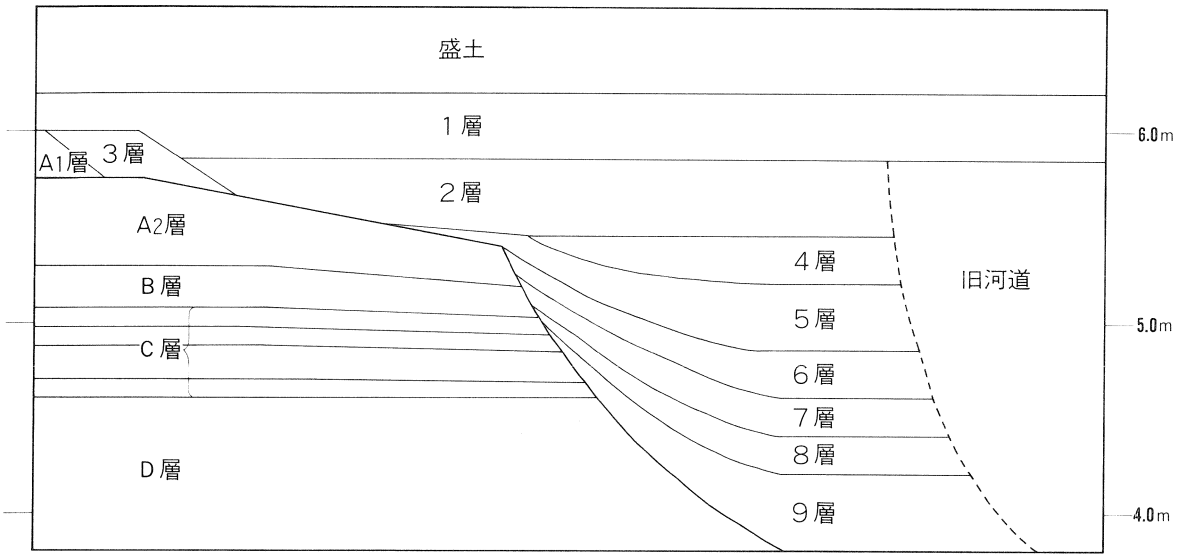
A2層　白色および灰白色の粘土層である。遺跡全体にみられほぼ水平の堆積を示すが、低湿地縁辺では緩傾斜がみられる。西大谷地区では古墳時代初頭～近世の遺構面である。

B層　黒色あるいは黒灰色の粘土層で腐植を含んでいる。

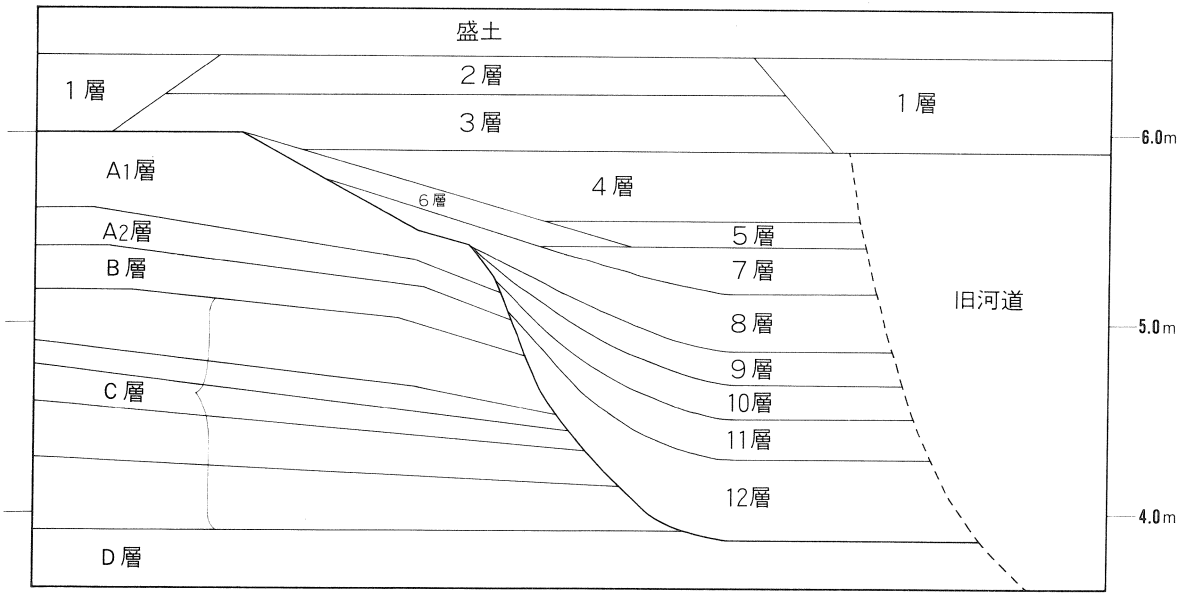
C層　灰白色あるいは灰黒色を呈する粘土層で、腐植の多い箇所は灰黒色となり、灰白色粘土と灰黒色粘土が互層をなす調査区もある。

D層　青灰色シルト層。青灰色粘土をストライプ状にはさむ海成シルト層である。

A2～D層は遺跡全体を通してみられ、本遺跡の基本層序を形成している。



第4図　水上地区土層模式図



第5図　宮川地区土層模式図

低地内埋積土と遺物包含層

(1) 大谷地区（第2図）

1層　南に広がる砂丘の標高が高いためこれに合わせるための客土である。

2層　砂丘による堆積層であり、厚さ約4mにもおよぶ砂層である。河口より490m上流付近にまでみられる。

3層　砂混りの粘土層であり、弥生時代中期の遺物を包含する。

4層　茶褐色粘土層であり縄文時代晩期の遺物包含層である。

5層　暗灰色粘土層。大沢スコリア（B.P.2700年）を含む。

6層　暗茶褐色粘土層である。腐植を含み遺物は認められない。

7層　黒色砂層である。縄文時代後期の遺物包含層。ヒシの実などの植物遺存体を検出する。

8層　黒灰色粘土層である。遺物は認められない。

(2) 西大谷地区（第3図）

南部の西大谷4～7区は低湿地および旧大谷川河道であり微高地の基本層序はみられないが、北部の西大谷3区・西大谷8区は微高地の堆積がみられる。相互の関係はその間に旧大谷川河道をはさみ判然としない。

1層　青灰色粘土層。近世以降の耕作土である。

2層　黄灰白色粘土層である。上面は平安時代末～中世の遺構面となる。

3層　茶褐色粘土層。古墳時代後期から奈良時代の遺物を包含する。遺構はみられない。

4層　暗灰色粘土層で古墳時代前期の遺物を包含する。

5層　暗灰色シルト層であり、4層同様古墳時代前期の遺物を包含する。

6層　黒色細砂層。古墳時代前期の遺物を包含する。

7層　暗褐色粘土層。遺物は検出されていないが、大谷地区の3層に整合する。

8層　茶褐色粘土層。大沢スコリア（B.P.2700年）が検出された。大谷地区4層に整合する。

9層　暗茶褐色粘土層である。大谷地区の5層に整合する。

10層　粘土混り砂層。大谷地区6層に整合する。

11層　灰褐色粘土と黄灰色粘土が互層をなす。

12層　砂混りの灰黒色シルト層である。

なお7～12層では遺物は検出されていない。

(3) 水上地区（第4図）

1層　青灰色粘土層で、近世以降の耕作土である。

2層　黄灰色粘土層。灰色砂が地点により含まれる。上面は平安時代～近世の遺構面である。

3層　茶褐色粘土層。水上11区でのみ検出された。奈良時代～平安時代の遺構面である。

4層　灰白色粘土層である。古墳時代中期末～後期初頭の遺構面である。2層に外見上は酷似する。

5層　黒茶色粘土層。古墳時代前期～中期の遺物を包含する。

6層　暗灰黒色粘土層。黄白色の微粒子を含み、大沢スコリア（B.P.2700年）である可能性も考えられる。

7層　緑茶色腐植土層。縄文時代後期の遺物を包含する。

8層　黒灰色粘土層である。低湿地縁辺では砂の堆積もみられる。無遺物層である。

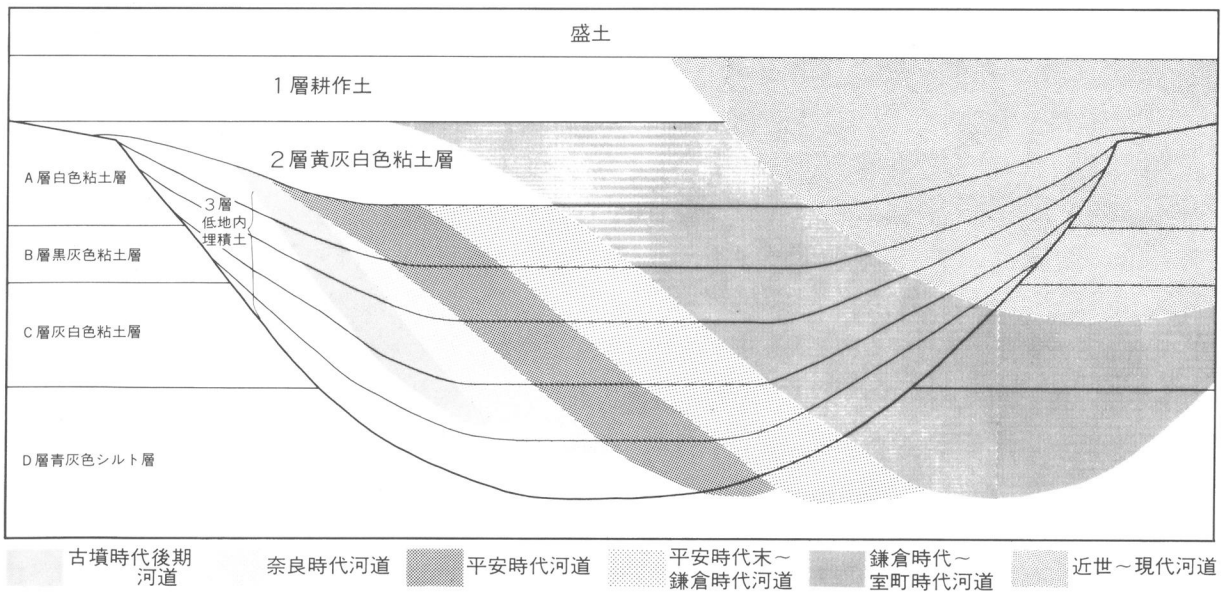
9層　暗灰色砂混り粘土層。低湿地内最下層にあたり粘土成分の多い箇所と砂成分が多い箇所がみられる。なお6～9層は大谷地区4～7層に類似している。

(4) 宮川地区（第5図）

1層　青灰色粘土層で、近世以降の水田耕作土である。
2層　暗青灰色粘土層である。中世の遺物を包含する。
3層　茶灰色粘土層。平安時代の遺物包含層である。
4層　茶色粘土層で、古墳時代後期の遺物包含層である。
5層　灰黄色粘層で、古墳時代後期の遺構面である。
6層　黄白色粘土層である。古墳時代中期の遺物を包含している。5層・6層は水上地区4層に整合する可能性がある。
7層　暗青灰色粘土層である。遺物は検出されていない。
8層　灰黒色粘土層で腐植を含む。水上地区5層に整合すると考えられる。
9層　茶褐色粘土層であり、腐植を含む。水上地区6層に整合すると考えられる。
10層　褐色腐植土層。水上地区7層と整合すると考えられる。
11層　灰黒色砂質土層。水上地区8層と整合する。
12層　暗灰色細砂土層で灰黒色砂質粘土ブロックを含む。水上地区9層と整合する。

(5) 旧大谷川の形成（第6図）

本遺跡で重要な位置を占める旧大谷川は、その形成過程において低湿地との密接な関係が認められる。古墳時代中期には帯状の低湿地内に水路的な流れが存在するが、古墳時代後期になると低湿地内埋積土を激しく浸食し河川としての形状を整える。低湿地内に形成されたこの旧大谷川は曲流・浸食をくりかえし低地内埋積土のみならず微高地の基本層序をも浸食するようになる。宮川3・4区のSR51～56・SR486・487はこの状況を顕著に表わしている。



第6図　旧河道変遷模式図

第II章　環　　境

神明原・元宮川遺跡の地理的環境と歴史的環境については、すでに刊行されている『大谷川Ⅰ』(1984）の第Ⅱ章で述べられている。そこで本章では、今回作成した「大谷川周辺条里図」(第7図）をもとに本遺跡の立地について述べたい。

第1節　大谷川流域と条里地割

本遺跡の立地する静岡平野南東部に条里地割がほぼ全域にわたって存在したことは、現在静岡市役所が所蔵している旧地籍図（昭和10年代作成）や、1946（昭和21）年撮影の米軍空中写真によって確認されている。この地域の条里地割の起源が、どの時代まで遡ることができるかは不明であるが、静岡平野北東部の内荒遺跡で検出された律令期の溝状遺構・建物群が、同地域の旧地籍図に示された条里地割の方向と一致しており、大谷川周辺地域の条里地割も律令期に遡る可能性がある。そこで、古墳時代から律令期をへて中世まで連続する本遺跡の立地を検討するにあたり、大谷川周辺の条里地割の分布は重要な資料となった。具体的には、条里地割が確認できる地域とできない地域、条里地割の中で長地型地割、変形条里等の分布と旧小字名、等高線、河川・用水路・溜池、土地利用、旧村・小字界、道路網、表層地質等の分布を含めて考察していきたい。

第2節　大谷川水系と神明原・元宮川遺跡

大谷川の流域平野は、東側を有度山丘陵部の台地状緩斜面、北側と西側を安倍川扇状地末端部に形成された自然堤防、南側を浜堤・砂丘によって区画された地域である。北側の自然堤防は、駿府城付近から曲金地区狐ケ崎坪（以下、地籍の呼称は旧小字による）北西部を通り、小鹿地区鍛冶屋敷を結ぶ小鹿街道がのる曲金微高地であり、西側の自然堤防は駿府城付近から八幡山と有東山の間を通って、高松地区神明原を結ぶ久能街道がのる久能街道微高地である。大谷川に流れ込む水系は主に有度山西麓に発し、北から長沢川・異龍沢川・池ケ谷沢川・伊庄沢川・大正寺沢川の5本の小河川である。

今回、条里地割の検討にあたり、曲金微高地の北に展開する小鹿沢川水系と久能街道微高地の南西側に展開する大谷川右支川・浜川水系の一部を含めて条里図を作成した。以下に、検討結果の要点を報告したい。

①条里地割の方格軸は、今回作成した範囲では同一の規則性を有しており、施工単位・順序・時期は不明であるが、単一のプランで施工されたものと考えられる。南北軸はN－38°－Wである。

②坪内部の地割は長地型が卓越してみとめられた。

③縦長地型と横長地型の分布は、曲金地区狐ケ崎坪・沓形坪では横長地型、曲金地区蔵前坪・会下前坪・小久保田坪をはじめ、有東地区南東部・大谷地区北西部・高松地区全域で縦長地型が圧倒的分布を示し、小鹿地区では横長地型がやや優勢であるが、横長地型と縦長地型がモザイク形に分布している。これらの分布は等高線と重ねてみると、等高線にほぼ直交して長地型の長辺がくることが多い。曲金地区の軍神社付近の旧東海道微高地と曲金微高地の分岐点（標高15ｍ）から東側で曲金微高地の北側は東に向かう斜面となっており、縦長地型が卓越する。曲金微高地の南側と有東山南側では南に向かう斜面となっており横長地型が卓越している。長地型の長辺が等高線にほぼ直交するように施工された理由は水田用水の取水が坪内のどの長地型にも均等に行渡り、かつ排水もとどこおりなくできるような工夫のためと考えられる。小鹿地区の横長地型と縦長地型の混在は、この地区の北西部が曲金微高地の末端斜面となり、南西部と南部がそれぞれ小鹿沢川と長沢川がつくった小規模な押出状扇状地の末端斜面となる

ことにより、複雑な用排水系を必要としたためと考えられる。
④以上のように、用水系の効率的な配置を考えて縦長地型と横長地型を施工したと仮定すると、同様に一連の問題として条里の阡陌線の設定基準点と阡陌線座標軸の傾斜角度の設定も考えることができる。③で述べた等高線と坪内の長地型の長辺が直交する関係が最も正確にあらわれているのが曲金地区である。この地区では、曲金微高地を軸線にして北東部と南西部の等高線がほぼ直交している。この直交する等高線を阡陌線として設定し、あわせて坪内の長地型の縦横の配列を設計したと推定できる。したがって条里の阡陌線の設定基準点も曲金微高地上にあった可能性がある。
⑤条里地割施工の工区境を示すものとして小鹿地区堂々メキにある二ツ池が考えられる。二ツ池は条里地割が施工された区域の南東隅にあたり端を条里の阡線と陌線によって区切られている。この二ツ池の南の陌線を基準にみると、小鹿地区では陌線の北側には長地型が多く存在しているのに対して南側では条里の規制にしばられていない地割がみられる。さらにこの陌線の延長線上は高松地区と有東・石田地区の境界線となっている。また、大谷川地区新出道ノ坪西端で、1923（大正12）年に発掘された杉畷馬捨場の円墳が陌線の上にある。以上の諸点から、この陌線は条里地割施工の工区境の一部として考えてよいと思われる。⑥条里地割のみられない地域は根方街道沿いの地域と大谷地区の稲妻坪より以南の大谷川周辺（以下、大谷川南部周辺と略す）である。
Aまず根方街道沿いの地割は根方街道を基軸に設定され片山廃寺の寺域もこれにならっている。理由は有度山丘陵部の等高線にほぼ並行して根方街道が緩やかにカーブしながら通っており、これに規制されたものと考えられる。しかし、片山廃寺から小鹿地区堀ノ内にかけて丘陵部の斜面にもかかわらず、ほぼ規則的な方格地割が見られる。地割の軸線はN－3°－Wである。
B大谷川南部周辺地域は、西側は久能街道、東側は福久ノ坪、南側は下瀬田坪まで、旧大谷川の蛇行の跡を各所に残し、複雑な地割を示している。この地域の1876（明治９）年の地籍図（第38図）を見ると圧倒的に畑地が多いことがわかる。大谷低地を蛇行しながら流れる大谷川は攻撃斜面側をたえず浸食し、河道を変えていった。旧河道には多くの粘土・砂礫が堆積され微高地状を呈するようになっていく。これらの微高地での農業は水がかりも悪く、畑作に向いていたと考えられる。また水田の中に畑がある島畑状の地帯は、門村浩の「静清地域の地形分類図」（1966）に示された「旧河道跡」とほぼ一致している。
しかし、この地域でも大まかな方格地割を見ることができる。本宮川坪を南北に通る道と南側を通る宮川道の方格軸の方向性（N－18°－W）は、この地域全体に一般的なものであり、さらに久能街道をわたり、高松地区神明原でも同様な方格軸が認められる。これは等高線に示された大谷低地の谷線が軸線となっているものと考えられる。しかしこれも単に自然条件による規制のみではなく人為的な地割規範が設定されていた可能性もあろう。
また構井ノ坪を中心とした南部は、中世居館の設営によって地割を改変させた可能性もある（第Ⅲ章第１節水上地区・水上３区参照）。北の本宮川坪は、地籍図からも方形の地割の中央に南から道がつけられていることが確認でき、神社があった可能性をうかがわせる地点もある。このことは1672（寛文12）年の『駿州久能御神領宮川村大谷村片山村御検地帳』にも坪字名として「本宮川宮脇」「本宮川宮ノ後口」とあり神社があったことを示唆している。また宮川部落に伝承する話に1685（貞享２）年の大谷川の氾濫により宮川の人々は東の丘陵部へ移住し、以前住んでいた所なので本宮川と名づけたという。今回の発掘調査で古墳時代後期から奈良時代にかけての大量の祭祀遺物が検出された宮川６区は本宮川坪の南西部に位置しており、神社を含めた本宮川坪と何らかの関係がある可能性もあるかもしれない。この大谷川南部周辺で条里地割が地籍図上で確認できるところは、北の本宮川坪と稲妻坪の坪界線と壹丁畑坪と下川口坪の坪界線だけである。
なお、昭和60年度に行なわれた稲妻地区発掘調査の中で稲妻１区北部で東西方向の溝状遺構が10本以

第1表　周辺遺跡地名表

	遺跡名	所在地	種別	時期	遺構	遺物	主な出典	備考
1	神明原・元宮川遺跡	静岡市高松・宮川・水上・西大谷・大谷	集落跡、祭祀跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	竪穴住居跡、井戸、掘立柱建物、溝、祭祀遺構、旧河道、高床倉庫跡	縄文土器・石斧(打)、丸木舟・櫂、弥生土器、石錘、土師器、須恵器、鉄鏃、灰釉陶器、山茶碗、鍬、木簡、祭祀遺物(土製品・木製品・石製品)、銙帯、絵馬等	ア・イ・エ	『県史』1(1930) 『静岡県郷土研究』5(1935) 1954・1980・1981・1983～1985年度調査 (エ)「大谷堀ノ坪」、『静岡県郷土研究』第5輯(1935)
2	天神森遺跡	静岡市登呂二丁目	散布地	古墳	集落	土師器	ウ	1983年度調査
3	汐入遺跡	静岡市高松・宮竹	集落跡	弥生・古墳・中世	高床倉庫跡、住居跡 井戸・水路・畦畔	弥生土器・土師器・木製農耕具・土錘・古銭	イ	1978・1979・1983年度調査
4	登呂遺跡	静岡市登呂五丁目	集落跡、水田跡	弥生(後)・古墳	住居跡12、高床倉庫跡4、水田跡	弥生土器・石器・石斧・木製農耕具・建築用材・銅環・玉類・田下駄・矢板・礎板・土師器	イ	1943・1947～1950・1965年度調査『登呂』(1949)、『登呂本編』(1954) 国特別史跡(1952)
5	下島遺跡	静岡市下島	散布地	弥生～古墳		弥生土器・土師器	イ	
6	水洗遺跡	静岡市登呂五丁目・高松	散布地	古墳		土師器	イ	
7	有東遺跡	静岡市豊田三丁目・富士見台一丁目・有東三丁目・登呂一丁目	集落跡、水田跡	弥生(中・後)～古墳	住居跡・水路・畦畔	弥生土器・土師器・須恵器・磨製石器・木製農耕具	ウ	1947・1948年度調査 1980・1981年度調査(市立商業校地) 1981年度調査(静岡南警察署用地) 1981・1982年度調査(市立富士見小校地) 『有東遺跡Ⅰ』(1983)
8	馬捨場遺跡	静岡市有東三丁目	散布地	弥生？	組合木棺		ア	『県史』1(1930) 『考古学』加藤・芹沢(1938) 1923年度発掘 (今回、旧地籍図上に位置を明示しえた)
9	鷹の道遺跡	静岡市南八幡町石田一丁目・石田二丁目	散布地	弥生・古墳		弥生土器・土師器・木製品	イ	
10	豊田遺跡	静岡市豊田一丁目・曲金三丁目	集落跡	弥生(中)～古墳(初)	住居跡・畦畔・水田溝・湧水施設	弥生土器・砥石・有頭石錘・木製品(建築材・農耕具等)	イ	1980・1984・1985年度調査 『駿河・豊田遺跡』 『鐘紡跡地確認調査報告書』
11	有明遺跡	静岡市有明町	散布地	弥生		弥生土器	イ	『静岡県総合庁舎県営有明団地建設用地内遺跡確認発掘調査報告書』(1980)
12	小黒遺跡	静岡市小黒	集落跡、水田跡	弥生(末)～古墳(初)	住居跡・高床倉庫跡・溝状遺構・畦畔	弥生土器・土師器・木製品(琴・農具等)・有鉤銅釧・鉄斧	イ	1982・1983年度調査 (産業館・体育館用地)
13	三菱工場内遺跡	静岡市小鹿二丁目	水田跡	奈良・平安		土師器・須恵器	イ	
14	競輪場東遺跡	静岡市小鹿二丁目	散布地	奈良・平安		土師器・須恵器	ア	
15	曲金A遺跡	静岡市小鹿一・三丁目	集落跡	弥生～古墳		弥生土器・土師器	イ	『考古学年報』「曲金遺跡」**(1949)**
16	曲金B遺跡	静岡市曲金二丁目	集落跡	古墳～奈良 平安	井戸	土師器・須恵器・平瓦	イ	1982年度調査(西豊田小校地)
17	谷津山古墳群	静岡市柚木・沓谷・春日町三丁目・瓦場町・音羽町	古墳	古墳	前方後円墳2、竪穴式石室、円墳2、横穴式石室、組合箱式石棺	銅境・鉄鏃・石製品・鉄刀・玉類・鉄刀・銅鋺・耳環	ア・イ	『県史』1
18	八幡山古墳群	静岡市八幡	古墳	古墳	円墳3、横穴式石室組合箱式石棺	耳環・玉類・須恵器	イ	
	八幡山城跡	静岡市八幡	城跡	戦国	曲輪跡・土塁・堀・畳段		イ・エ	『安倍郡誌』文明8(1476)年伊勢新九郎長氏が小鹿範満に対するため築くといわれる。『甲陽軍鑑』永録11(1568)年武田信玄が駿河侵入時、当城に陣場をおく。
19	有東砦跡	静岡市有東一丁目	城跡	戦国	曲輪跡・堀		イ・エ	『駿国雑誌』有東山砦は今川家の時、福島某居す。
20	上ノ山遺跡	静岡市東大谷	墳墓跡、集落跡	縄文(早・中)弥生～古墳	高床倉庫跡・周溝墓・住居跡	縄文土器・打製石斧・石鏃・石錘・弥生土器・鉄鏃・鉄剣・銅鏡・ガラス小玉	イ	1982年度調査
	上ノ山古墳群	静岡市東大谷	古墳	古墳	円墳1、方墳13・横穴式石室	大刀、玉類、耳環、金環、銅釧、鉄刀、刀子、土師器、須恵器	イ	2～10号墳1982年度調査
21	東大谷古墳群	静岡市東大谷	古墳	古墳	3基、横穴式石室	須恵器・大刀	イ	
22	井庄段遺跡	静岡市大谷・井庄段	散布地、集落跡	縄文～弥生	住居跡	縄文土器・弥生土器	イ	
	井庄段古墳群	静岡市大谷・井庄	古墳	古墳	円墳1(方墳)1、横穴式石室	埴輪(円筒・朝顔)・須恵器・勾玉・丸玉・ガラス小玉・大刀・刀子・耳環・須恵器	イ・イ	1968年度調査 1972年度調査『駿河井庄段古墳』
23	清泉寺窪遺跡	静岡市大谷宮川	散布地	縄文		縄文土器・磨製石斧・石錘	イ	
24	清泉寺窪瓦窯跡	静岡市大谷宮川	窯跡	奈良・平安	窯窯・平窯	丸瓦・平瓦	イ	片山廃寺の瓦を焼成。国史跡片山廃寺として追加指定。1971年度調査
25	宮川丘陵遺跡群 白山神社古墳	静岡市大谷片山	古墳	古墳			イ	
	宮川遺跡	静岡市大谷宮川	包含層、集落跡	先土器・縄文・弥生・古墳・平安・近世	土壙・円形周溝墓・ピット・鍛冶跡・瓦窯跡	ナイフ型石器・縄文土器(押型文)・打製石斧・石鏃・弥生土器・鉄滓・山茶碗・丸瓦・平瓦・木製農耕具	イ	1973年度調査『駿河宮川遺跡』
	宮川古墳群	静岡市大谷宮川	古墳	古墳	7基(方墳2、円墳2、帆立貝式1)、横穴式石室、家形石棺組合箱形石棺	耳環・管玉・勾玉・丸玉・小玉・鉄刀・大刀・刀子・鉄鏃・飾金具・鏡板・須恵器・土師器	イ	1号墳・1959・1974年度調査『駿河丸山古墳』3・5号墳1974年度調査 7号墳1973年度調査『駿河宮川遺跡』
26	片山遺跡	静岡市大谷片山	散布地	弥生・古墳	溝	弥生土器・石錘・土師器	イ	
27	片山廃寺跡	静岡市大谷片山	寺院跡	奈良・平安	礎石・基壇(金堂・講堂・僧房)	瓦・須恵器・土師器	イ	1948・1956・1966・1967年度調査 『日本考古学年報』1948年度 『駿河片山廃寺調査略報』(1966) 国史跡(1966)
28	片山丘陵遺跡群 大段Ⅰ遺跡	静岡市大谷片山大段	散布地	先土器		ブレード	イ	
	大段Ⅱ遺跡	静岡市大谷片山大段	散布地	縄文(中)		縄文土器・石槍・石鏃・石匙・石錘	イ	
	静岡大学構内古墳群	静岡市大谷片山	古墳	古墳	10数基、(横穴式石室10)組合箱形石棺	鉄鏃・刀子・玉類・大刀・耳環・土師器・須恵器	イ	1～5号1966年度調査 9～10号1973年度調査
29	小鹿館跡	静岡市小鹿堀ノ内	居館	戦国	(関連旧小字 堀ノ内、下堀ノ内、堂々メキ、堂前ノ坪、蔵ノ後、鍛冶屋敷)		エ	『今川家譜』今川範政の2男範頼・3男範鹿はともに小鹿郷に住み、小鹿姓を名乗る。文明8(1476)～長享元(1487)の伊勢新九郎との争いに敗北。 (エ)「小鹿館」の推定範囲の外側に円を描く道が旧地籍図から検出できた。スクリーントーンでこれを示した。「小鹿館」との関連の可能性あり。『静岡県郷土研究』第5輯

※主な出典の記号は、16頁の条里関連図作成手続の④ア～エからとった。　※遺跡番号28に含まれる遺跡のうち東側の大半が図中から外れるため、その説明は省いた。

第7図　大谷川周辺条里図（遺跡分布図）

第8図　大谷川周辺旧小字集成図（昭和10年代）

上確認されており、これが、壹丁畑坪と下川口坪の坪界線と一致している可能性も考えられる。
⑦大谷川南部周辺と根方街道沿いの丘稜部の畑地との間の水田は条里地割がみられる。ただし、大谷川南部周辺に隣接する前田ノ坪・花之谷津坪・馬場坪では変形条里が確認される。
⑧大谷川南部周辺の東側と西側で条里地割が確認されたにもかかわらず、今回の発掘調査の結果、稲妻1区北部以外では確認できなかった。そのことは、東側の条里地割が、大谷川南部周辺を除外して実施された可能性を示しているといえよう。
⑨曲田坪以北の大谷川周辺(以下大谷川北部周辺と略す)は南部と異なり、全て条里地割が実施されており、大谷川自体も条里地割によって河道を規制され上恩田原坪から小川橋坪まで、ほぼ直線的に坪境を南に流れ、久七坪から曲田坪まで、坪境を再び直線的に南に流れている。また大谷川支流の長沢川も浜井出ノ坪の南側の坪境を直線的に西に流れて大谷川本流に合流している。大谷川は北部では流入する水量も少なく南部と比べると、河道を直線的に改修することが容易であったと考えられる。条里地割に規制されて蛇行による河道変遷のない長沢川は大谷地区で最も発達した天井川のひとつとなっている。大谷川北部周辺はほとんど長地型の坪並となっているが、稲妻1区北部と連続する下川口坪・新井橋坪は地割のタイプが異なっており、性格を異にしている。

地籍図による検討の結果、得られた神明原・元宮川遺跡にかかわるものを要約したい。
①統一的な条里土地割が曲金微高地付近を中心に実施された可能性がある。
②非条里地区の片山廃寺付近には独自の方格軸がある。
③大谷川周辺は稲妻坪を境として南北に地割が大きく異なる。
④大谷川南部周辺は地形条件に左右され、独自の方格軸があること。本宮川坪には神社があった可能性をうかがわせる地点もあり、本遺跡との何らかのかかわりも考えられる可能性もある。
⑤大谷川北部周辺は地里地区に組み込まれ、人工的な河川改修を受けていると考えられる。
⑥大谷川流域の条里地割の施工年代は現在のところ不明である。しかし静岡市北東部にあたる内荒遺跡周辺の旧地籍図にみられる条里地割が発掘調査により、律令期の遺構群と密接な関係があることが確認されており、大谷川流域の条里地割と内荒遺跡周辺の条里地割とがほぼ同一の方格軸を有することから、大谷川流域の条里地割が律令期に遡る可能性もある。

条里関連図(第7・38図)作成手続

第7図　大谷川周辺条里図(遺跡分布図)は以下のような手順で作成した。
①静岡市所蔵・昭和10年代、地籍図(1/600)〔A図〕を1/3000に縮小編集し原図をつくる。(地割、道路など新規工事部分は、できるかぎり旧状を記入する)
②静岡県作成・昭年33年測図・静清広域都市計画図(1/3000)〔B図〕を原図に重ねて・有度山丘陵部・有東山・八幡山・谷津山の等高線(5m間隔)、方位を記入する。
③陸地測量部作成・明治20年測図・地形図「久能山」(1/20000)〔C図〕をもとに、海岸線・平野部の等高線(1.25m間隔)を原図に記入する。明治期に丘尾切断された谷津山、掘削された八幡山等も旧状に復元する。その際、補正用に静岡市作成・昭和初期測図・静岡市都市計画による実測図(1/3000)〔D図〕を使用する。
④遺跡分布を、原図に記入する。
資料(ア)静岡県教育委員会(1979)「静岡県遺跡地図・静岡県遺跡地名表」　(イ)静岡市教育委員会(1985)「静岡市遺跡地名表・静岡市遺跡地図」　(ウ)静岡県教育委員会(1983)『有東遺跡Ⅰ』　(エ)静岡県教育委員会(1981)『静岡県の中世城館跡』　(オ)静岡県教育委員会(1980)『静岡県歴史の道調査報告書 --東海道 —』

第38図「構井ノ坪」関連地籍図は以下のような手順で作成した。
①大谷土地改良区作成・昭和50年・「大谷土地改良区第二工区整理前土地図」(1/1200)〔E図〕の地割・道路・水路を増田作一郎氏所蔵・明治9年作成「大谷村地籍図」(1/600)〔F図〕によって、E図の道路・水路・地割を明治9年段階のものと同じものに修正した第1原図(1/1200)を作成する。
②F図に記載されている地番を第1原図の一筆ごとに転記する。
③増田作一郎氏所蔵・明治13年筆写『大谷村地租改正反別帳』により②で転記された一筆ごとの土地利用状況を第1原図に色分けする。(明治9年の土地利用図が完成する)
④大谷土地改良区作成・昭和50年「大谷土地改良区第二工区整理後土地図」(1/1200)〔G図〕に、発掘調査で使ったグリッド配置図〔1/1000〕〔H図〕を同一縮尺にして重ね、第2原図(1/1200)を完成させる。
⑤第1原図に第2原図を重ねてグリッド配置図を転記する。
⑥⑤の作業の完了した第1原図のグリッド方眼に発掘によって検出された旧大谷川河道を書き入れる。(発掘調査によって判明した水上7区南部の東側への流路、水上1、3区のSR150、西大谷2区の東側からの旧河道の流入個所などを記入)
⑦地籍図の地割・土地利用をもとに「構井ノ坪」の周濠を検出する。
⑧1946(昭和21)年米軍撮影空中写真により、耕地界が判別できたものを一点鎮線で記入する。

第 9 図　大谷川周辺空中写真— 1946 （昭和21） 年米軍撮影

水上8区SX775(古墳時代中期末～後期初)
土師器(高坏・壺・坏)

水上7区SX802(古墳時代後期)
馬形土製品・人形土製品

宮川6区SR312(古墳時代後期～奈良時代)
墨書土器「神」・馬形土製品・人形土製品
勾玉・丸玉・管玉

宮川4区SR56(古墳時代後期)
木製形代・土製形代

水上7区SX805
(古墳時代後期)
土師器甕

水上7区SX806(古墳時代中期末～後期初)
土師器(高坏・坏)

宮川6区SX339
(古墳時代後期～奈良時代)
馬形土製品・人形土製品

宮川6区SX335(古墳時代後期)
人形木製品・刀形木製品・斎串・壺

宮川4区SR53(平安末～鎌倉時代)
墨書土器・短刀・鉄鏃・斎串

水上7区SX801
(古墳時代後期)
土師器坏・甕・馬形土製品
・手捏土器

水上7区SX803・804(古墳時代後期)
土師器(坏・甕)

水上1区SE261(古墳時代前期)
平鍬・腰掛・壺

水上1区SE192(平安時代)
墨書土器3点・緑釉陶器・曲物

大谷1区SX1(中世)
銭貨・馬骨

西大谷7区一括遺物(古墳時代前期)
古式土師器・碧玉製管玉・ガラス小玉

西大谷4区旧河道(中世)
呪符木簡・人形木製品

宮川6区SD322
(古墳時代後期～奈良時代)
馬形土製品・人形土製品
・手捏土器

稲妻2区
稲妻1区
宮川6区
宮川2区
宮川4区
宮川3区
宮川1区
宮川5区
水上9区
水上8区
水上7区
水上3区
水上2区
水上10b区
水上1区
水上11区
水上10c区
水上10a区
水上4区
水上5区
水上6区
西大谷3区
西大谷2区
西大谷1区
西大谷8区
西大谷6・7区
西大谷5区
西大谷4区
大谷1区
大谷2区

水上10c区SP727(古墳時代前期)
舟形木製品

宮川3区SR486
(平安末～鎌倉時代)
木簡・墨書土器・斎串

宮川5区SX336(古墳時代後期)
土師器坏・須恵器坏・鍬

水上11区SE554(奈良時代)
手捏土器・壺・ひょうたん

宮川3区SR485(古墳時代中期～後期)
土師器・須恵器・馬形土製品

水上10区SX624(古墳時代中期)
土師器(高坏・坩・壺・甕・台付甕)
滑石製模造品

水上6区SD228(平安末～鎌倉時代)
馬骨・斎串・大平鉢

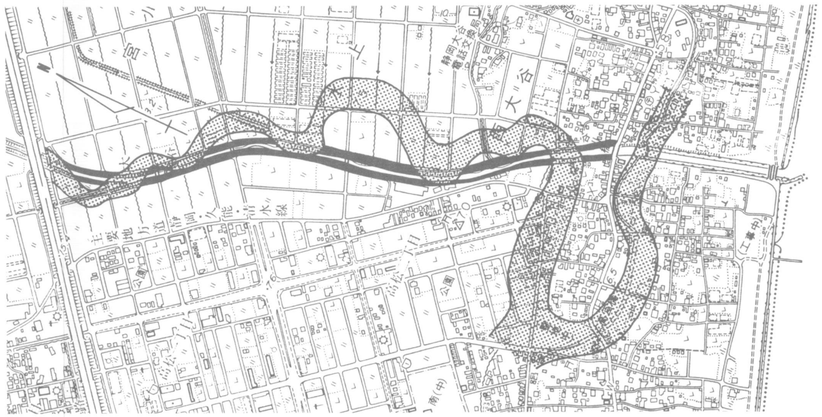
宮川5区SX340(中世)
銭貨

宮川3区SD181(古墳時代中期)
溝

高松地区(静岡市教育委員会発掘調査地区)

0 100 m

第10図　遺跡全体図



旧大谷川河道推定図

第Ⅲ章　遺跡の概要

昭和59・60年度の調査は大谷地区の１・２区、西大谷地区の３～８区、水上地区の１～11区、宮川地区の３～６区で実施した。遺跡の南限に位置する大谷２区では砂丘下の粘土層から丸木舟をはじめとして縄文時代から弥生時代中期にいたる遺物を検出した。大谷１区から西大谷４区は大谷川の旧河道にあたり祭祀遺物の出土がみられた。西大谷３区は微高地にあたり粘土採掘跡やピットが検出された。西大谷５区～８区の南半部では旧河道と古墳時代前期の遺物包含層が顕著であった。西大谷８区の北半部は弥生時代後期末～古墳時代前期の集落を検出することができた。水上地区では微高地部分と旧河道が交互に検出され古墳時代中期から近世にいたる遺構・遺物が多く検出された。宮川地区では旧河道内から大量の祭祀遺物が出土したなかに、祭祀遺構と認識できる個所を含んでいた点が注目される。また、微高地上の遺構にも奈良時代から平安時代にかけての井戸、掘立柱建物がみられ木簡や墨書土器も出土している点で注目される。

第１節　大谷・西大谷地区

大谷２区　（第12図）

1. 概　　要

大谷２区は河口起点より370ｍ上流に位置し現大谷川左岸にあたる。厚さ約４ｍにおよぶ砂層（第13図６～10層）の下に縄文時代後期・縄文時代晩期・弥生時代中期の遺物を包含する粘土層を検出したが遺構はみられない。

11層は弥生時代中期の包含層で壺形土器を検出した。12層は大沢スコリア（B.P.2700年）を含む13層より上位にあり丸木舟・櫂・合せ弓などの木製品の出土をみた。15・16層は砂が主体であり、ヒシの実などの植物遺存体とともに木製ヤス、石皿、丸木弓などが検出された。

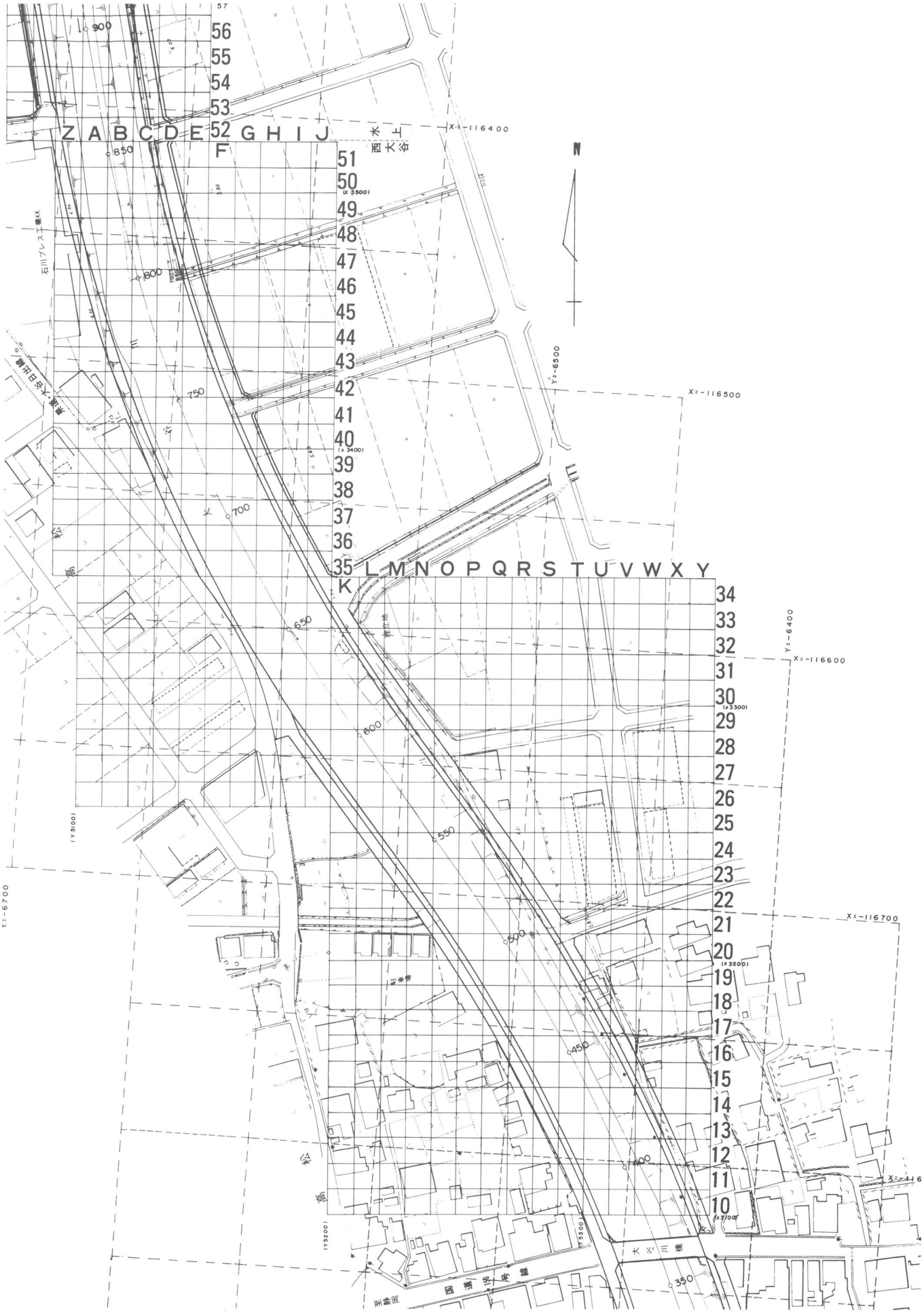
2. 地形の変遷

11～17層の堆積は白色粘土、黒色粘土、白色粘土、灰色シルトの順位で堆積した基盤粘土層が窪地状をなす部分にのみみられる特徴的な堆積である。礫はまったく含まれず低湿地内におだやかに堆積した粘土層であるが、９列から12列に左岸ともよべる基盤層の高まりがみられ、14列を中心に南北方向に帯状の最深部をつくり、15・16列で再び高まる傾向をみせている。

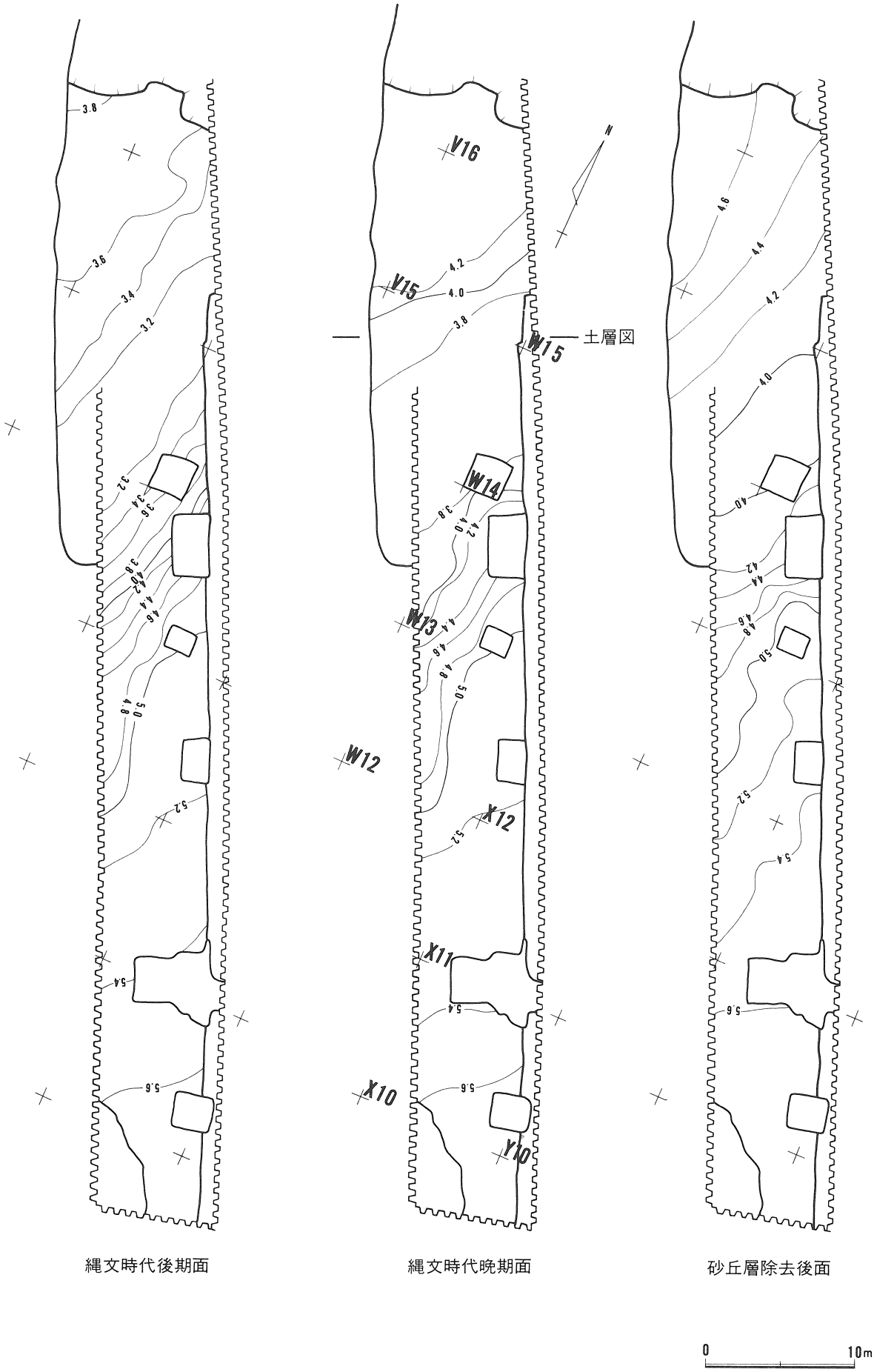
縄文時代後期の面では左岸部から最深部にかけて水平距離10ｍに対し1.8ｍの比高差をはかる。遺物は帯状の最深部に沿うように検出された。縄文時代晩期になると岸部と最深部との比高差は1.2ｍと浅くなるが、帯状の最深部の位置に変化はない。丸木舟はⅤ13～14グリッドにかけての最深部で発見された櫂、合せ弓なども縄文時代後期と同様に岸状の高まりに沿って出土している。弥生時代中期になっても地形的変化は少なく最深部の位置・方向とも同一である。

3. ま と め

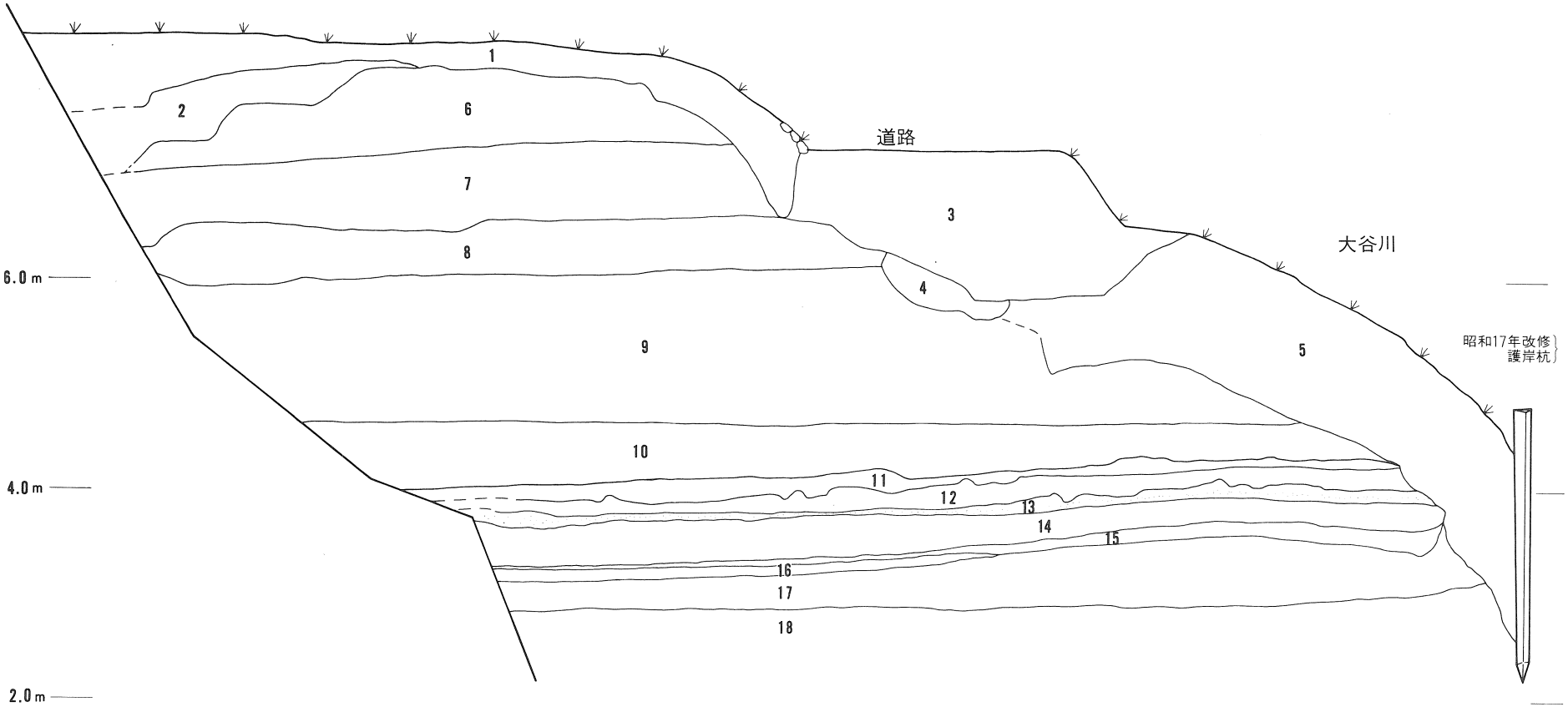
大谷２区では低湿地と微高地が検出されたが、微高地上には遺構も遺物もまったく検出されず、遺跡の南限を示していることが明らかとなった。低湿地内では予想もしなかった縄文時代後期から弥生時代中期にいたる遺物が出土した。このことは大谷川の形成される前段階において広がっていた沼沢地が魚貝類やヒシの実などの採集地となっていたことを意味し、周辺遺跡との関連をふまえて今後の発掘調査に重要な方向性を示したと言えよう。



第11図　大谷・西大谷地区グリッド配置図



第12図　大谷2区等高線図



第13図　大谷2区土層断面図

1 表土層(砂層)
2 表土層
3 盛土層(舗装道路基礎)
4 攪乱層
5 表土層
6 砂層
7 砂と礫の互層
8 砂と礫の互層　砂丘
9 砂と礫の互層
10 砂層
11 砂混暗灰色粘土層(弥生時代中期包含層)
12 茶褐色粘土層(縄文時代晩期包含層)
13 茶褐色粘土と黄灰色粘土の互層
(含、大沢スコリアB.P.2700年)
14 暗茶褐色粘土層
15 黒色砂層
16 腐植物混黒色砂層　縄文後期包含層
17 黒灰色粘土層
18 黒色砂礫層

大谷1区・西大谷4区（第15図）

1. 概　　要

大谷1区および西大谷4区は河口起点より450 m 上流に位置し、現大谷川の左岸部にあたる。全域が旧河道であり、大谷1区の16列に左岸が検出され、西大谷4区の25列に右岸が検出された。また19列を中心に中洲状の地形がみられ旧河道を二分する様相を呈する。旧河道の幅は約105 m におよび、古墳時代中期から近現代にいたるまでの小流路が蛇行をくりかえして幅105 m の河川敷を形成している。左右岸および中洲を構成する粘土層は大谷2区でみられる低湿地内の土層と整合し、低湿地地形を浸食して河道が形成されたものである。

2. 遺構各説

旧河道跡　旧河道は互いに重複しているため位置や幅を明確にすることは困難であったが、遺物の出土状況から古墳時代中期・古墳時代後期・鎌倉時代・中世・近世～昭和17年の流路の位置を推定した。

古墳時代中期の旧河道はS20・21グリッドを中洲状の高まりに沿って北から南に流れる。この部分は河床最深部標高が0 m にまで到達し、厚さ2 m におよぶ砂礫で被覆されている。遺物の量は少ないものの完形の壺形土器が1点出土した。

古墳時代後期の旧河道は中洲状地形の両側でT列とS列に分離された状態とみられる。いずれも80 cm ほどの厚さをもつ粘土混り砂礫層で覆われ、土師器・須恵器が散見されるが、量的にはS列の方が多くS21グリッドでは土器だまりもみられた。

鎌倉時代の旧河道も古墳時代後期とほぼ同一地点を北から南に流れるが川幅をやや広げている。覆土は暗灰色の粘土にかわる。R21グリッドでは2号木簡（「亠　南無阿□□□）と3号木簡（「天足　　）に伴って人形（ひとがた）木製品、箸状木製品、小型板塔婆、鏃形木製品、金剛草履、鉄鏃・短刀などの祭祀的な遺物も出土している。またT20区では同一層位より折敷も検出された。

中世の旧河道は全域に広がり沼沢地化の様相を呈し、暗青灰色粘土で広く覆われる。遺物はほとんど含まれない。

近世～昭和17年までの旧河道はU16グリッド付近を北東から南西に流れている。検出された左岸はこの時代の岸である。河道内は赤褐色の砂礫で被覆され、わずかに志野焼皿や五輪塔などが検出されたのみである。

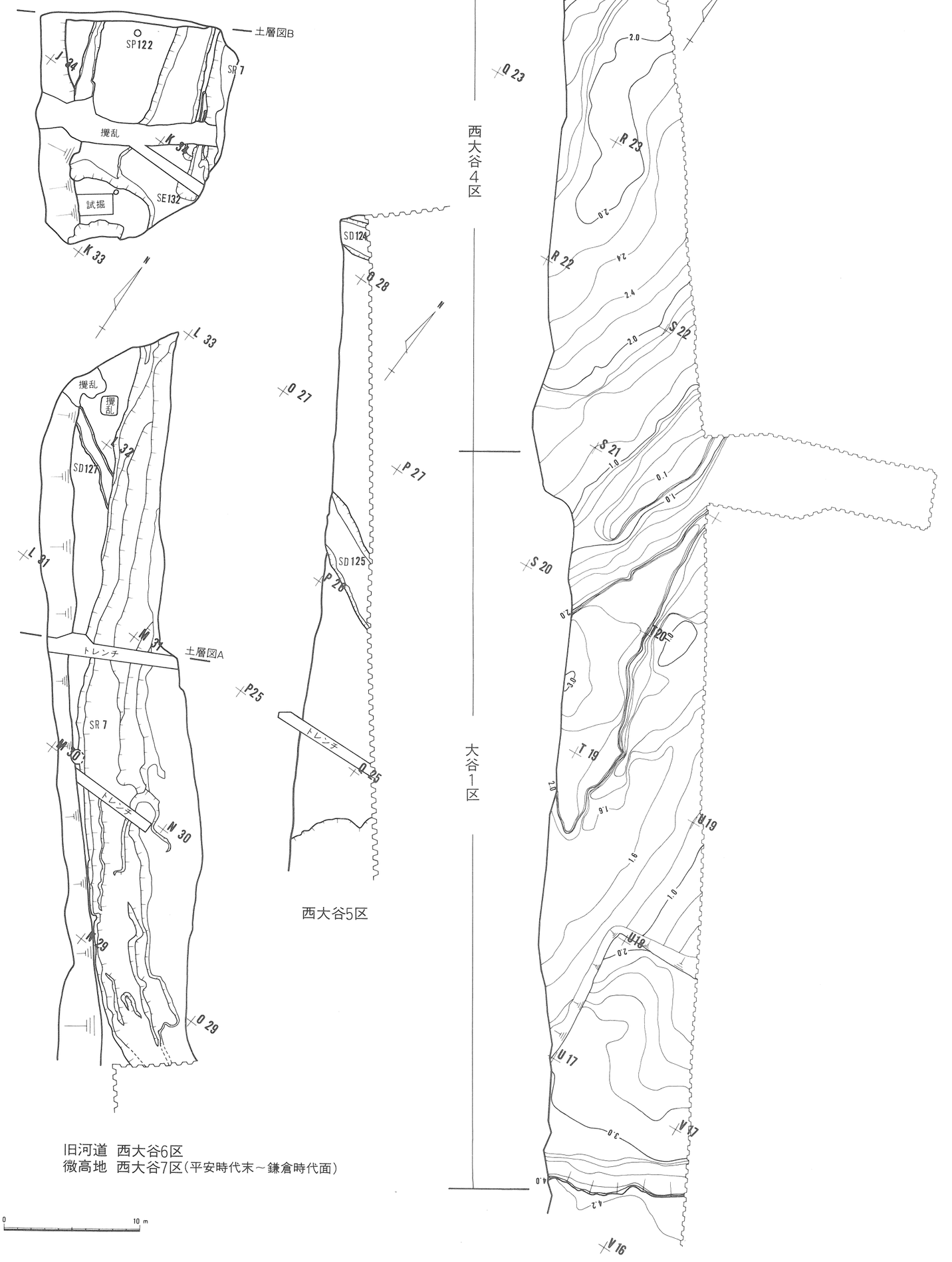
SX01　（第14図）S20グリッドで検出された集石遺構である。鎌倉時代の旧河道とほぼ同時期と思われる。地形的には旧河道に面した中洲状部分の縁辺にあたる礫は6 m 四方の範囲に広がり、周辺に人頭大以上の礫があり、中心部にはこぶし大の円礫がおかれる。このうち9個の礫に火を受けた痕跡がみられるがそれらは散在している。出土遺物は2点の馬骨と92枚の宋銭がみられる（第2表）。馬骨は大型の礫が集中する部分で検出され、1点は下顎骨が良好に遺存していた。銭貨は西側部分に密集しており、初鋳年代1039年の「皇宋通宝」の12枚を最高に、初鋳年代621・845年の「開元通宝」から初鋳年代1225年の「大宋元宝」まで24種類がある。遺構の年代は銭貨の鋳造年代と、明銭を含まない点から13世紀を上限とすることができよう。

銭貨名	王朝名	初鋳年	枚　数	銭貨名	王朝名	初鋳年	枚　数
開元通宝	唐	621～845	6	嘉祐元宝	宋	1056	1
宋通元宝	宋	968	1	熙寧元宝	宋	1068	7
至道元宝	宋	995	2	元豊通宝	宋	1078	5
咸平元宝	宋	998	3	元祐通宝	宋	1086	10
景徳元宝	宋	1004	3	紹聖元宝	宋	1094	7
祥符元宝	宋	1008	3	元符通宝	宋	1098	3
祥符通宝	宋	1008	1	聖宋元宝	宋	1101	3
天禧通宝	宋	1017	2	大観通宝	宋	1107	2
天聖元宝	宋	1023	4	政和通宝	宋	1111	5
景祐元宝	宋	1034	2	嘉定通宝	南　宋	1208	2
皇宋通宝	宋	1039	12	大宋元宝	宋	1225	1
至和元宝	宋	1054～55	1	不　　明			4
嘉祐通宝	宋	1056	2				

第2表　大谷1区SX01出土銭貨一覧（計92枚）

遺構の性格は不明ながら、馬骨が出土している点と同時代の旧河道（R21グリッド）から呪符木簡や人形木製品などの祭祀遺物が出土していることから、祭祀的性格をもつ可能性もある。銭貨も西大谷6区宮川4・5・6区の旧河道内で検出されており、目的をもった投棄であろう。

第14図　大谷1区ＳＸ01実測図



第15図　大谷1区・西大谷4・5・6・7区全体図

西大谷5区（第15図）

1. 概　　要

西大谷5区は河口起点より550ｍ上流に位置し、現大谷川の左岸となる。大谷2区、西大谷6・7区と整合する低湿地内の粘土層堆積を示すが、遺物の包含量は希薄である。遺構は平安時代以降に掘削された溝状遺構（SD124）と弥生時代後期末～古墳時代初頭の溝状遺構（SD125）の2個所のみである。

2. 遺構各説

SD125　O26・P26グリッドで東西方向に検出された溝状遺構である。確認面での幅は3.0ｍ、延長は約9ｍを測る。深さは0.37ｍであるが、検出面での標高が3.8ｍ～3.9ｍであり、後世の削平を受けていることは確実である。基本土層のレベルを参考に復元すると、当初の深さは0.9ｍ～1.0ｍと推定される。出土遺物は壺形土器・甕形土器を中心とする土器片のほか木製柄杓、不明木製品、砥石などが出土した。弥生時代後期末～古墳時代初頭の集落は現大谷川の対岸（右岸）の微高地上で検出されている。西大谷5区は右岸の微高地から連続する低湿地の東向きの傾斜面に相当することから、右岸の集落域に対応する遺構の存在が予想される。

西大谷6・7区（第15図）

1. 概　　要

西大谷6・7区は河口起点より580ｍ上流に位置し現大谷川左岸にあたる。旧河道部分を西大谷6区とし旧河道以外の包含層を西大谷7区と呼称した。旧河道はゆるやかな湾曲をみせながらほぼ調査区を北から南に縦断する。微高地は本来の低湿地地形が粘土の堆積により微高地化した地区であるため井戸状遺構・溝状遺構・小穴などをもつ集落が営まれるのは平安時代末～鎌倉時代のみであった。しかし、低湿地地形が残っている部分であっても北半部では傾斜面上に古墳時代前期の遺物が大量に投棄されていた。33・34列は大谷2区から続く低湿地内包含層の遺存状態が良く、古墳時代前期の遺物を大量に包含する地点でもあるため以下に詳述する。

2. 土　　層

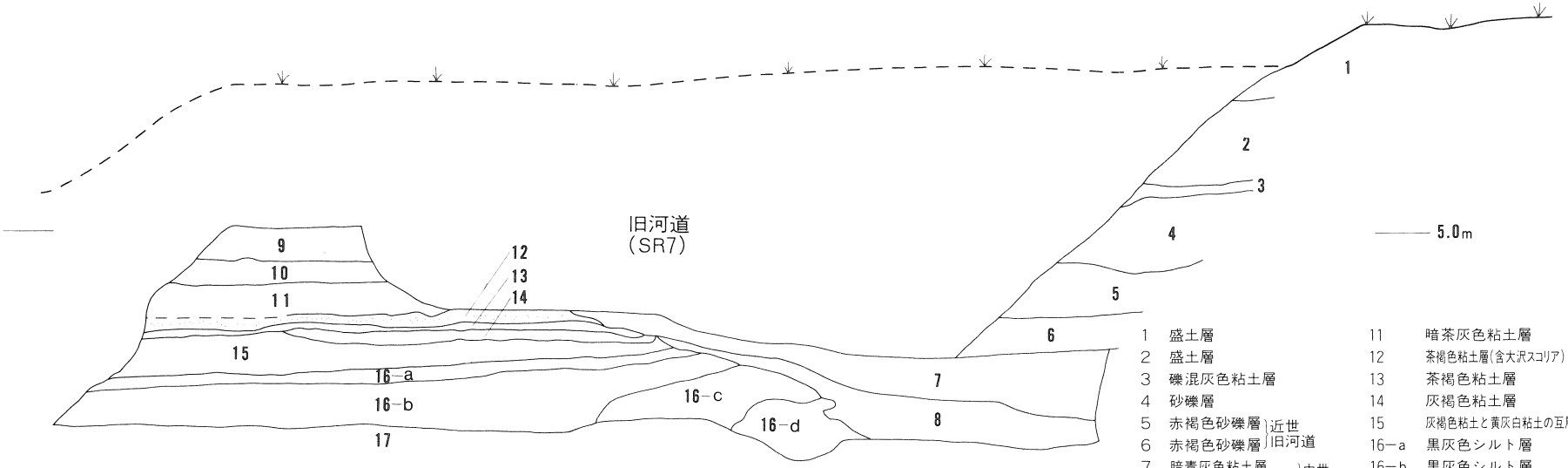
1層は表土層であり重機によって除去した。2層は近世以降の耕作土である。3・4層は溝状遺跡（SD128）の覆土である。5層は黄灰白色を呈する粘土層で平安時代を中心とする小海進期に沼沢地化して堆積した土層と考えられ、土中に含まれるリン酸鉄が還元し白色を呈しているとみられる。5層上面では井戸状遺構（SE132）、溝状遺構（SD128他）、小穴（SP122）などが検出される。また5層は中近世においてはさかんに採掘され、その痕跡が水上1区や水上6区に顕著にみられる。6層は茶褐色の粘土層である。古墳時代後期から奈良時代までの須恵器・土師器を包含するが遺構はみられない。7層は暗灰色の粘土層で土師器のみを包含する。古墳時代前期末頃と考えられる。8・9層も古墳時代前期の包含層である。この8・9層については南西から北東に傾斜する地形の窪地部分にまず9層の黒色砂層が堆積し、そののち8層の暗灰色砂質粘土層が堆積したものと観察できる。両層とも遺物を大量に包含していた。12層では富士火山を起源とする火山灰（大沢スコリア－B.P.2700年頃）がみられる。12層は大谷2区の13層と整合する。15層は大谷2区の15・16層と整合し、縄文時代後期の包含層と思われるが遺物はきわめて少なく判然としない。

3. 5層の調査

5層では旧河道（SR7－西大谷6区）のほか井戸状遺構1基、溝状遺構5本、小穴3個所が検出された。

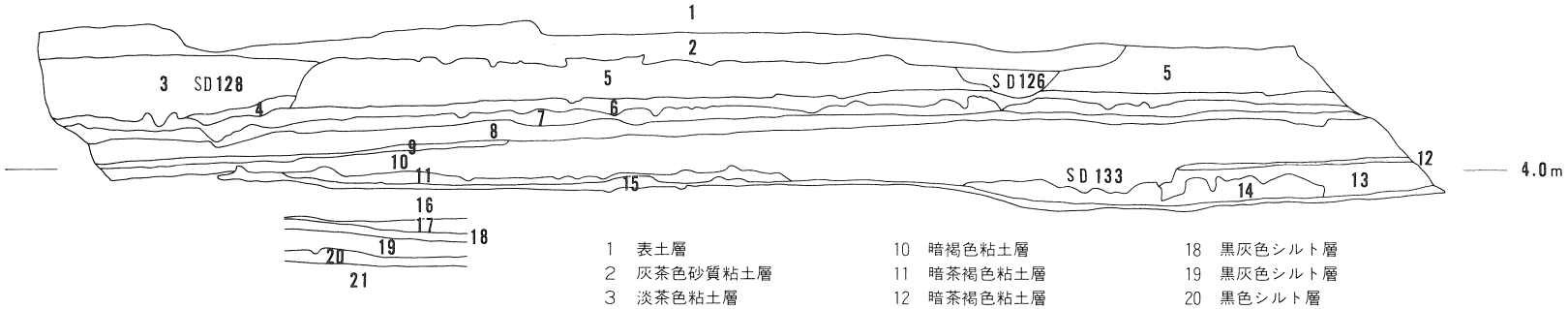
SR7　中世の旧河道（第15図）と近世から昭和17年の旧河道が重複して検出された。右岸部のみの検

第16図　西大谷6・7区土層断面図



土層図A

1	盛土層	11	暗茶灰色粘土層
2	盛土層	12	茶褐色粘土層(含大沢スコリア)
3	礫混灰色粘土層	13	茶褐色粘土層
4	砂礫層	14	灰褐色粘土層
5	赤褐色砂礫層 近世旧河道	15	灰褐色粘土と黄灰白粘土の互層
6	赤褐色砂礫層 近世旧河道	16−a	黒灰色シルト層
7	暗青灰色粘土層 中世旧河道	16−b	黒灰色シルト層
8	砂混暗青灰色粘土層 中世旧河道	16−c	黒色シルト層
9	黄灰白色粘土層(平安末～鎌倉)	16−d	黒灰色細砂層
10	黄茶褐色粘土層	17	黒色砂礫層

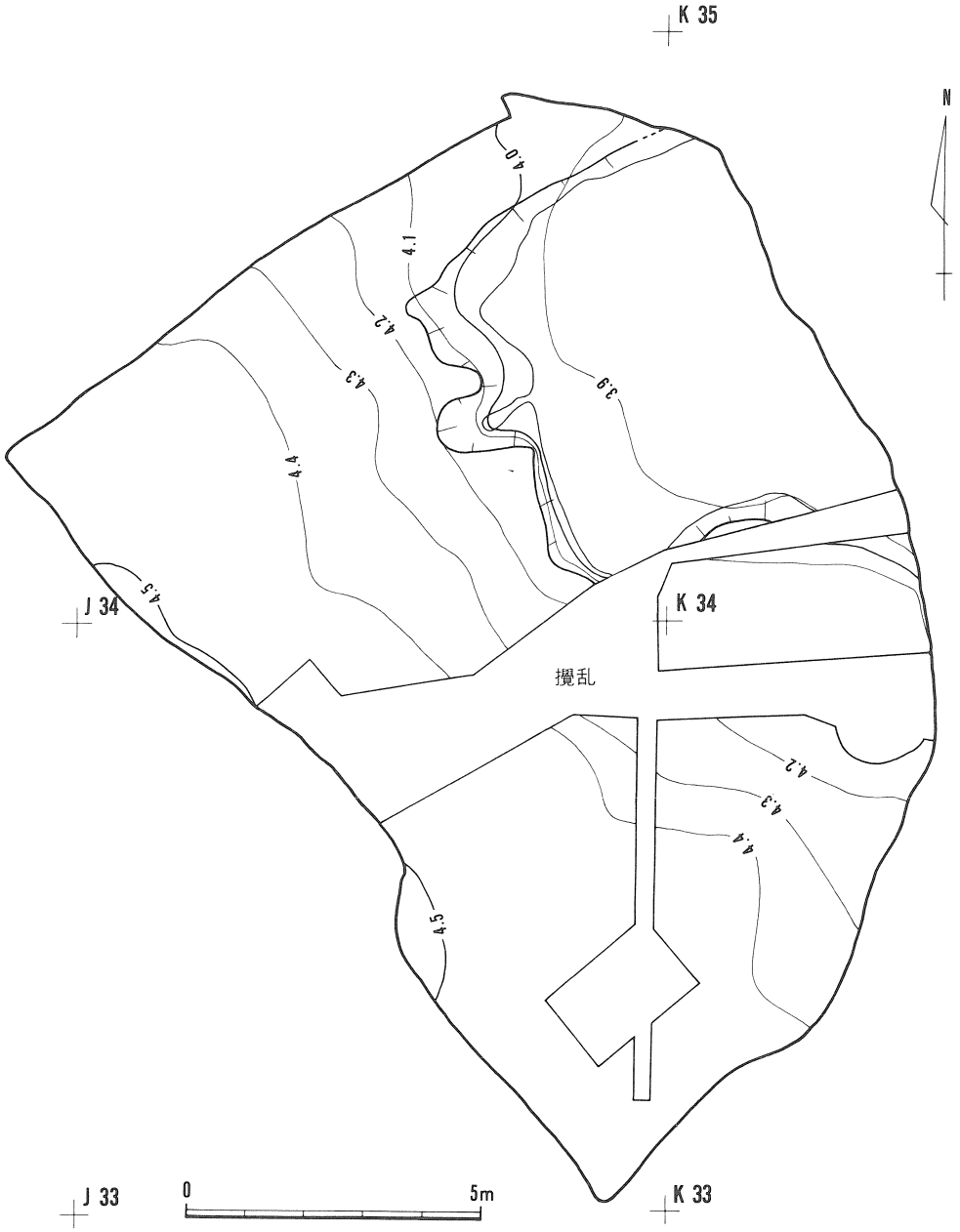


土層図B

1	表土層	10	暗褐色粘土層
2	灰茶色砂質粘土層	11	暗茶褐色粘土層
3	淡茶色粘土層	12	暗茶褐色粘土層
4	5層の崩落土層		(含、大沢スコリアB.P.2700年)
5	黄灰白色粘土層(平安末～鎌倉)	13	暗茶褐色粘土層
6	茶褐色粘土層	14	暗緑灰色粘土層
7	暗灰色粘土層 古墳時代前期	15	粘土混砂層
8	暗灰色砂質粘土層 古墳時代前期	16	灰褐色粘土と黄灰白粘土の互層
9	黒色砂層 古墳時代前期	17	暗灰色粘土層

18	黒灰色シルト層	
19	黒灰色シルト層	
20	黒色シルト層	
21	黒色砂礫層	

0　2m

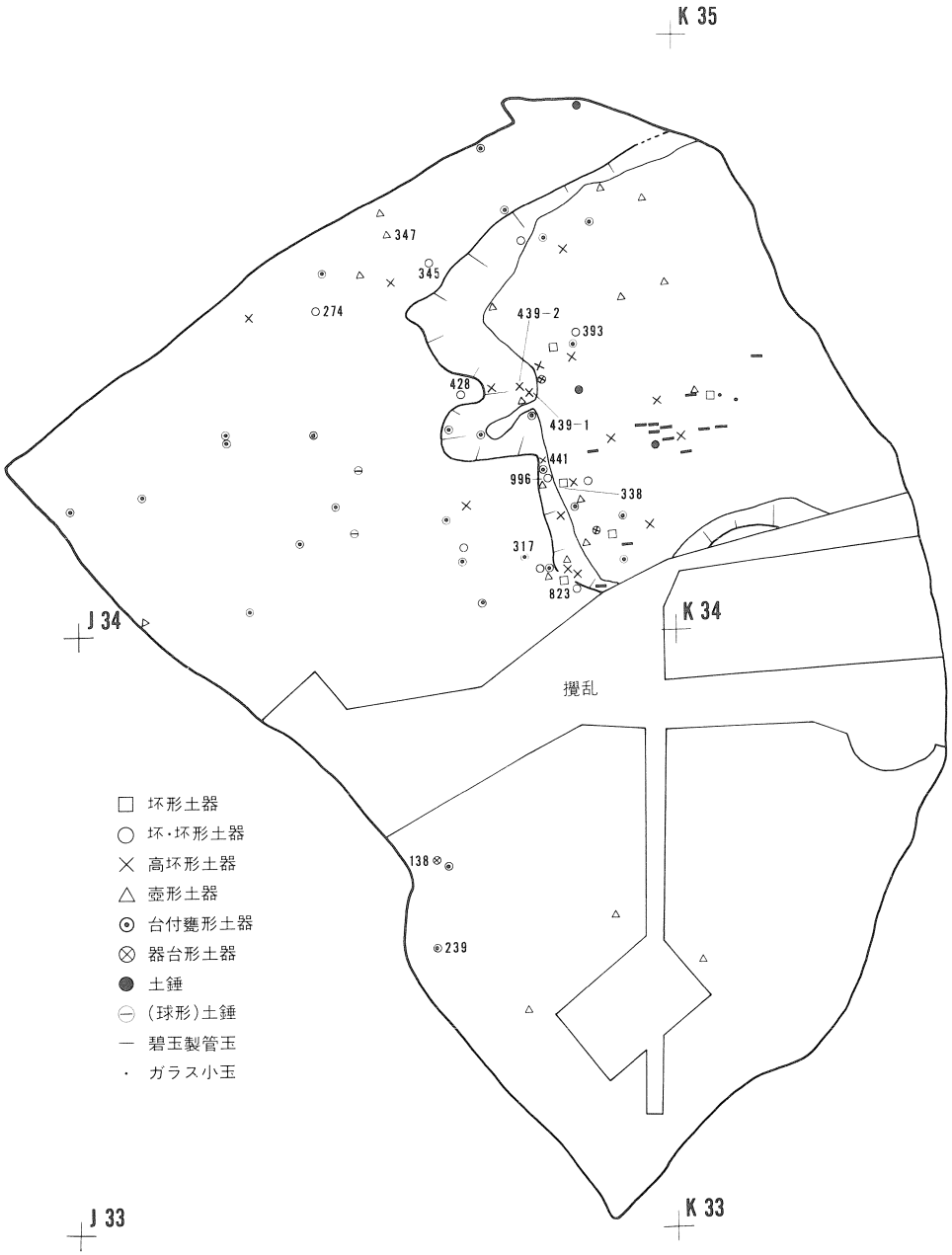


第17図　西大谷７区（北区）古墳時代前期面等高線図

出であったため川幅は不明である。中世の旧河道は暗青灰色の粘土層（７・８層）を覆土としている。出土遺物は少ないが漆椀が３点検出された。近世から昭和17年までの旧河道は赤褐色砂礫層（５・６層）を覆土にもち陶磁器片が出土している。

ＳＥ132(第116図)　Ｋ33グリッドで検出された井戸状遺構である。上面をヒューム管埋設に伴う掘削により破壊されているため全容は明らかではないが、直径1.65ｍほどの円形掘り方をもつと推定される。井戸枠は四隅に角柱をもつ縦板組である。角柱は掘り方底面に小坑を穿ち据えている。縦板は西辺に幅５㎝～10㎝程度のものが８枚残存していた。角柱の上端部には柄穴がみられることから横桟によって縦板をとめていたと考えられる。

掘り方底面は標高3.69ｍを測るが、全面を水留とするのではなく、北側に寄せて２段に掘り込み水留をつくりだしている。井戸枠内覆土中層より赤彩された手捏ねの小皿形土器が出土している。年代は



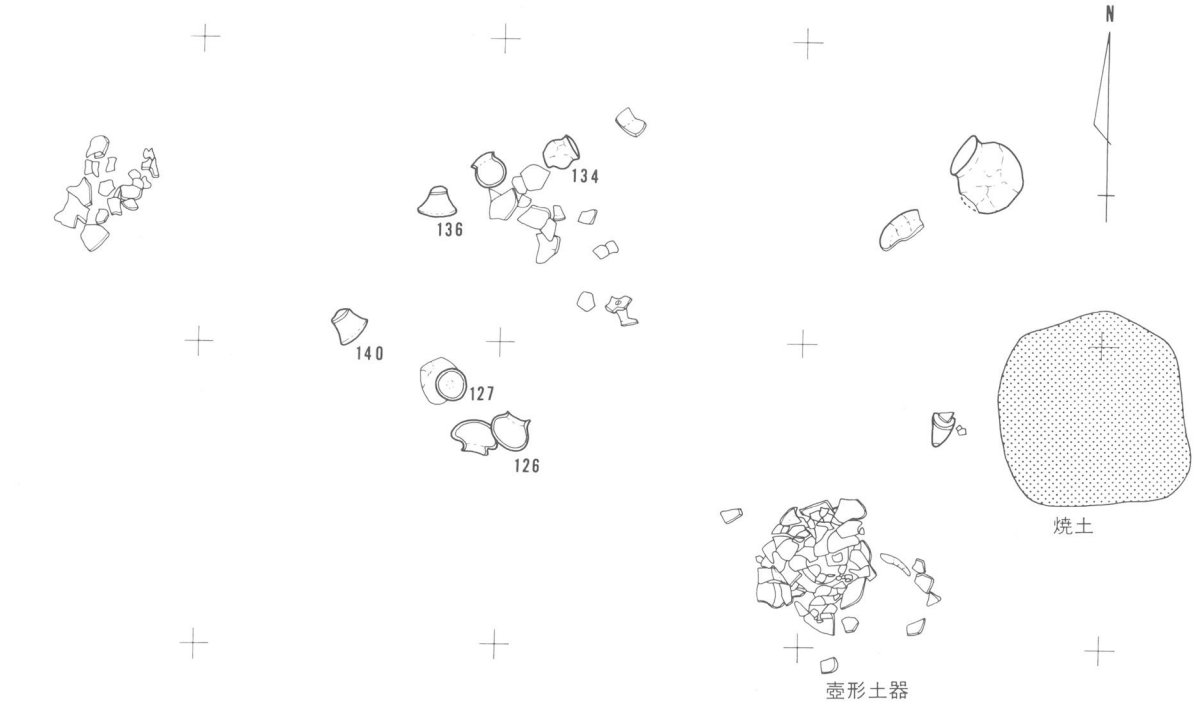
第18図　西大谷７区（北区）８・９層遺物分布模式図

層位から平安時代末から鎌倉時代と推定する。

SP122　Ｊ34グリッドから検出された円形の小穴である。長径0.75ｍ、短径0.66ｍ、深さ0.32ｍを測るが、関連する小穴はなく柱穴とは考えられない。覆土中から盃形を呈する完形の手捏土器２点が出土している。

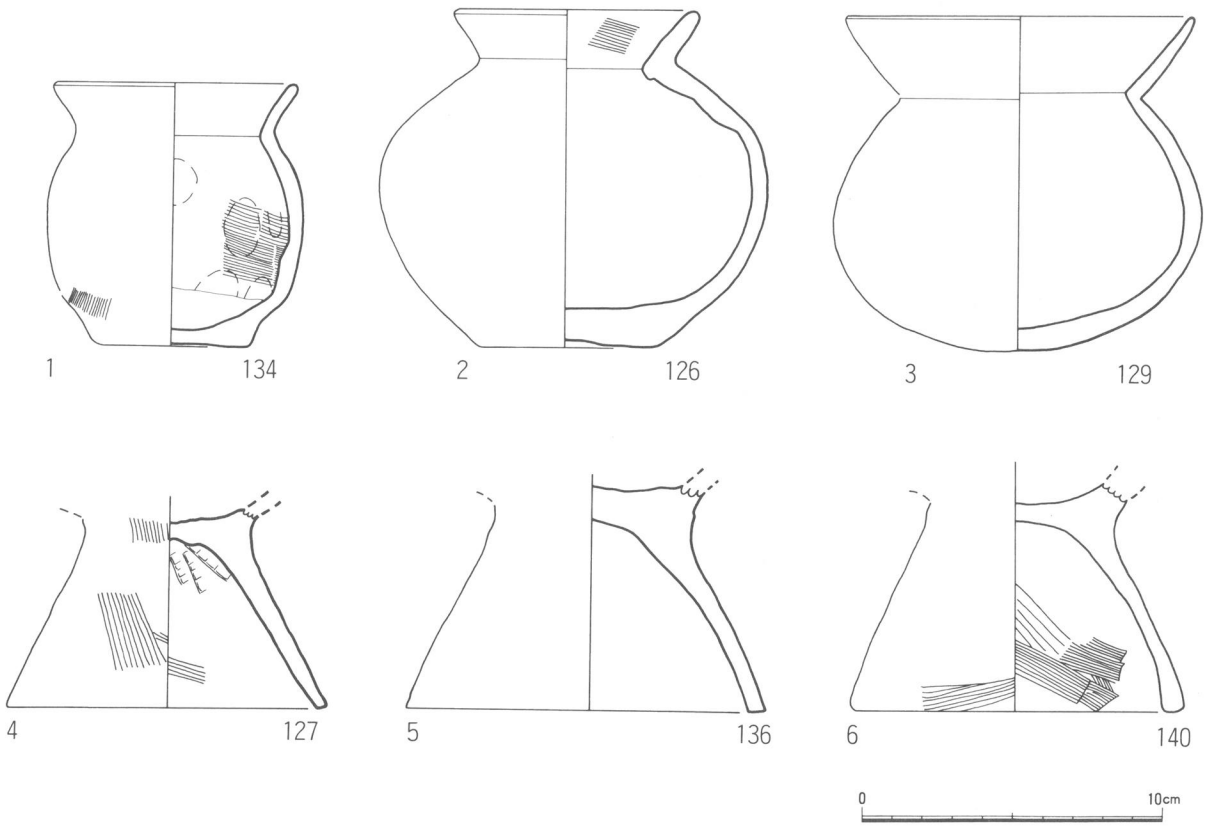
4.　7層の調査

Ｊ33グリッドで焼土とともに台付甕形土器、壺形土器、高杯形土器などが一括で出土した（第19図）。柱穴などはみられず住居跡とはならない。集落の中心からも離れていることから屋外の炊事場的な個所と考えられる。

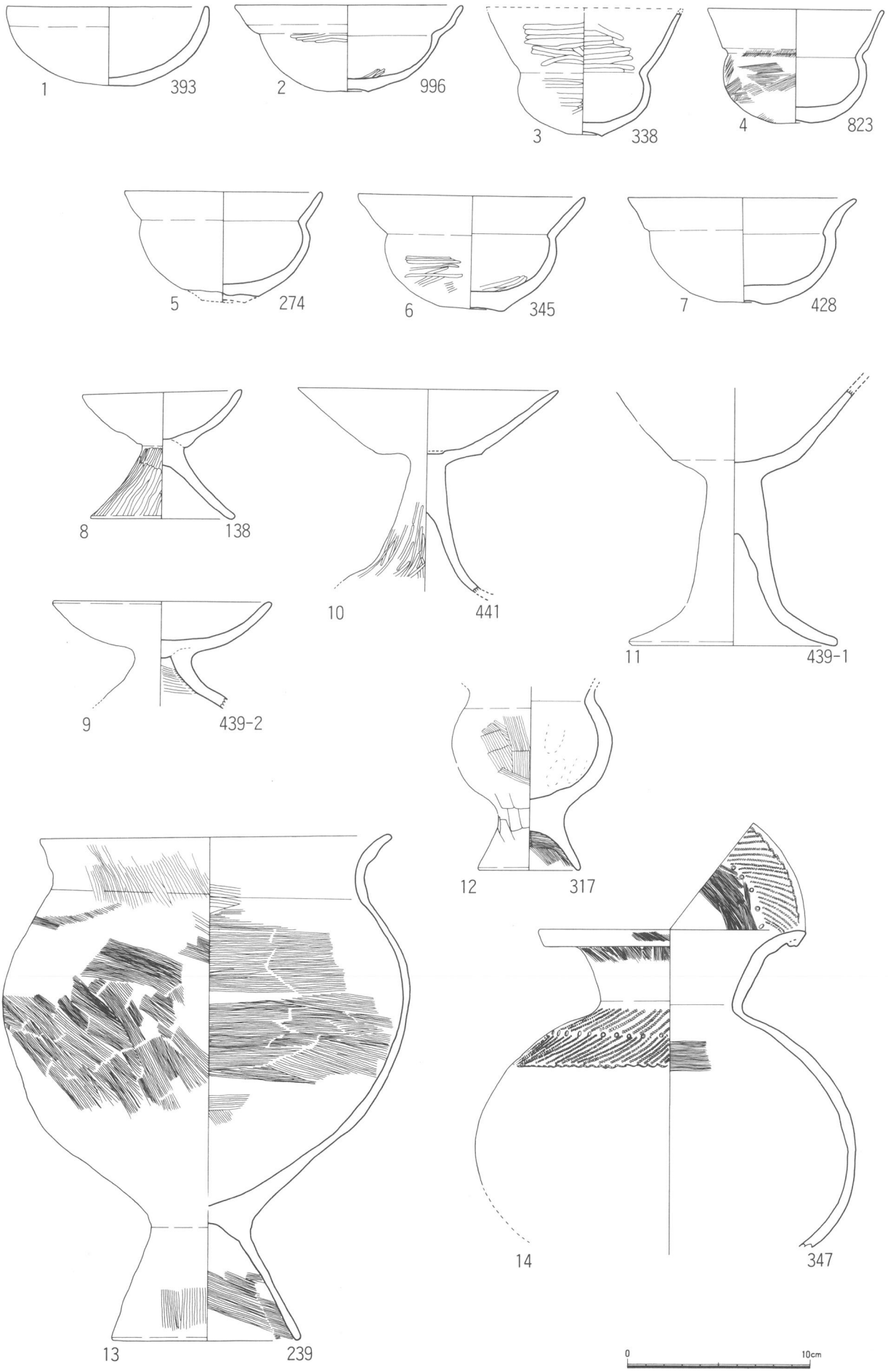


0 1m

7層遺物分布図



第19図　西大谷7区（北区）7層J 33グリッド遺物図



第20図　西大谷7区（北区）8・9層出土土器実測図

第3表　西大谷7区小穴一覧表

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標　高	特記事項
SP121	M30	1.00	0.95	0.63	0.95	4.61	
SP122	J34	0.75	0.66	0.32	0.88	4.75	手捏土器2点
SP123	J・K34	0.50	0.40	0.18	0.8	4.91	

第4表　西大谷5・6・7区溝状遺構一覧表

遺構番号	グリッド	延　長	幅	深　さ	遺構面標　高	特記事項
SD124	N28	（1.24）	0.84	1.12	4.16	中世時代以降
SD125	O26	（9.00）	3.00	0.37	3.79	弥生時代末～古墳時代（前期）
SD126	J34	（2.35）	0.55	0.10	4.81	平安時代末～中世
SD127	K31	（2.72）	0.42	0.21	5.04	平安時代末～中世
SD128	K34	（8.00）	1.75	0.50	4.74	平安時代末～中世
SD129	K・J33	（3.56）	3.20	0.33	4.97	平安時代末～中世
SD130	K34	（3.15）	0.74	0.28	4.36	平安時代末～中世
SD133	J34	（6.92）	1.65	0.29	4.02	

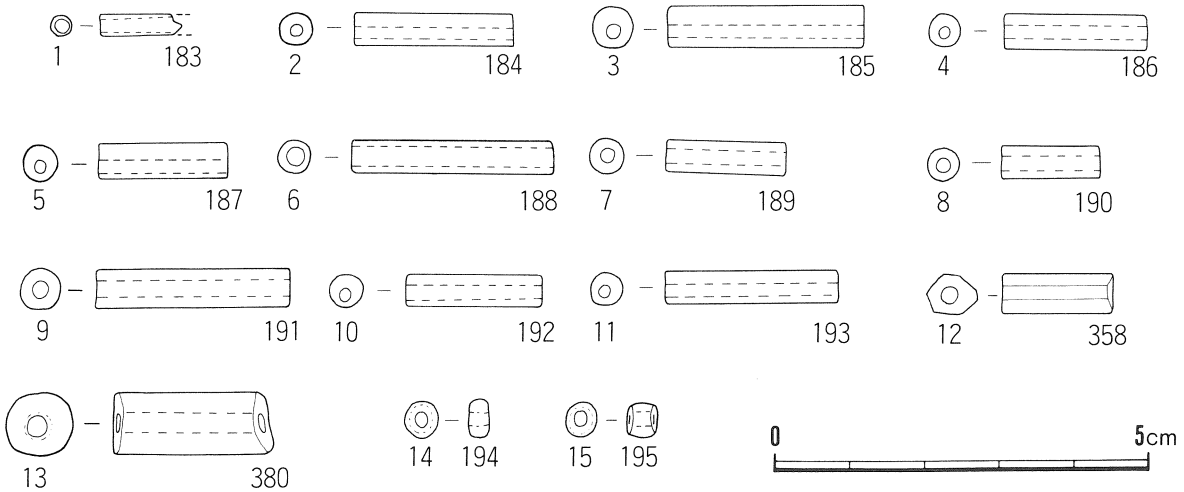
5.　8・9層の調査

8・9層は南西から北東に下降する傾斜面上に堆積した包含層である。北東部の窪地部分での標高は3.9ｍを測り、最高位との比高差は0.6ｍである。遺物は土器を中心にJ34・K34グリッドにわたって検出されるが（第18図）、甕形土器は周辺に多く出土し、高杯形土器、器台形土器、坩形土器などは窪地の縁で多く出土している。玉類は窪地中央部に密集する傾向を示していた。器種構成では壺甕類が過半数を占めている。

また窪地の縁に沿って20本の杭が打ち込まれていた。

6.　ま　と　め

本遺跡で古墳時代前期の遺構が集中するのは西大谷8区を中心とする微高地上である。西大谷8区と西大谷7区の検出面での比高差は1ｍ～1.5ｍと大きく低湿地にむかう急な傾斜面上に西大谷7区が位置する。また出土遺物は、玉類をはじめとして坩形土器や器台形土器など祭祀的性格を認めることができる。本遺跡での祭祀のあり方は「水辺のまつり」に代表され、この西大谷7区のあり方が「水辺のまつり」の初現的形態をもつと考えられる。



第21図　西大谷7区（北区）8・9層出土玉類実測図

西大谷８区（第22図）

1. 概　　要

西大谷８区は河口起点より720ｍ上流に位置し、現大谷川の右岸にあたる。南北140ｍにおよぶ細長い調査地区である。南半部は中世の旧河道が検出され、北半部の微高地上では48・49列を中心に弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺構が検出された。包含層は１層のみで、盛土層と近世以降の耕作土を除去すると基盤層の黄灰白色粘土層になり、掘り込まれた遺構が確認された。検出された遺構には掘立柱建物（ＳＨ378）、溝状遺構（ＳＤ348、359）、大型柱穴列、土坑（ＳＰ354）などがあり、切り合いをみせながら連続して構築されていた。

2. 遺構各説

ＳＨ378（第25図）　Ｚ48グリッドにある桁行２間染間１間の掘立柱建物である。桁行3.73ｍ、染間3.17ｍを測る。平側の柱間寸法は等間隔とならず2.25ｍと1.50ｍとなり北側で狭い。柱穴掘り方は長方形プランを基本とするが不整形である。寸法は長短軸ともに40㎝～50㎝ほどの範囲におさまる。礎板を残す柱穴が２個所あり１枚あるいは２枚の板を用いている。柱穴のひとつであるＳＰ336はＳＰ337を切り、ＳＰ372はＳＤ348に切られていることから溝状遺構や大型柱穴をもつ掘立柱建物が構築される前段階の建物であり、もっとも古い時期が想定される。

ＳＤ348　Ｚ48・49グリッドにまたがって検出された三日月形を呈する溝状遺構である。延長3.55ｍ、最大幅1.0ｍ、深さ0.24ｍを測る。ＳＤ348はＳＨ378を切り、大型建物の柱穴ＳＰ350、ＳＰ333によって切られている。このことから、ＳＨ378の次段階で大型建物の前段階に構造されたことになる。同一規模のＳＤ359もＳＰ340、ＳＰ360によって切られていることから、ＳＤ348とＳＤ359は同一時期のものである。

大型柱穴群（第24図）　48・49列には長軸約1.5ｍ、短軸約１ｍ程度の掘り方をもつ柱穴が９個所発見された。Ａ－Ａ′列には北からＳＰ349、ＳＰ333、ＳＰ340、ＳＰ360がならび、Ｂ－Ｂ′列には北からＳＰ353、ＳＰ355、ＳＰ350がならぶ。掘り方は明らかではないものの礎板の存在から、Ｂ—Ｂ′列の東側にＳＰ330とＳＰ377が確認できた。礎板は７個所の柱穴で検出され40㎝×60㎝の板材を１枚、あるいは15㎝×20㎝程の板材を２枚敷いていた。このうちＳＰ340の礎板は一木造りの梯子を断ち切り転用していた。

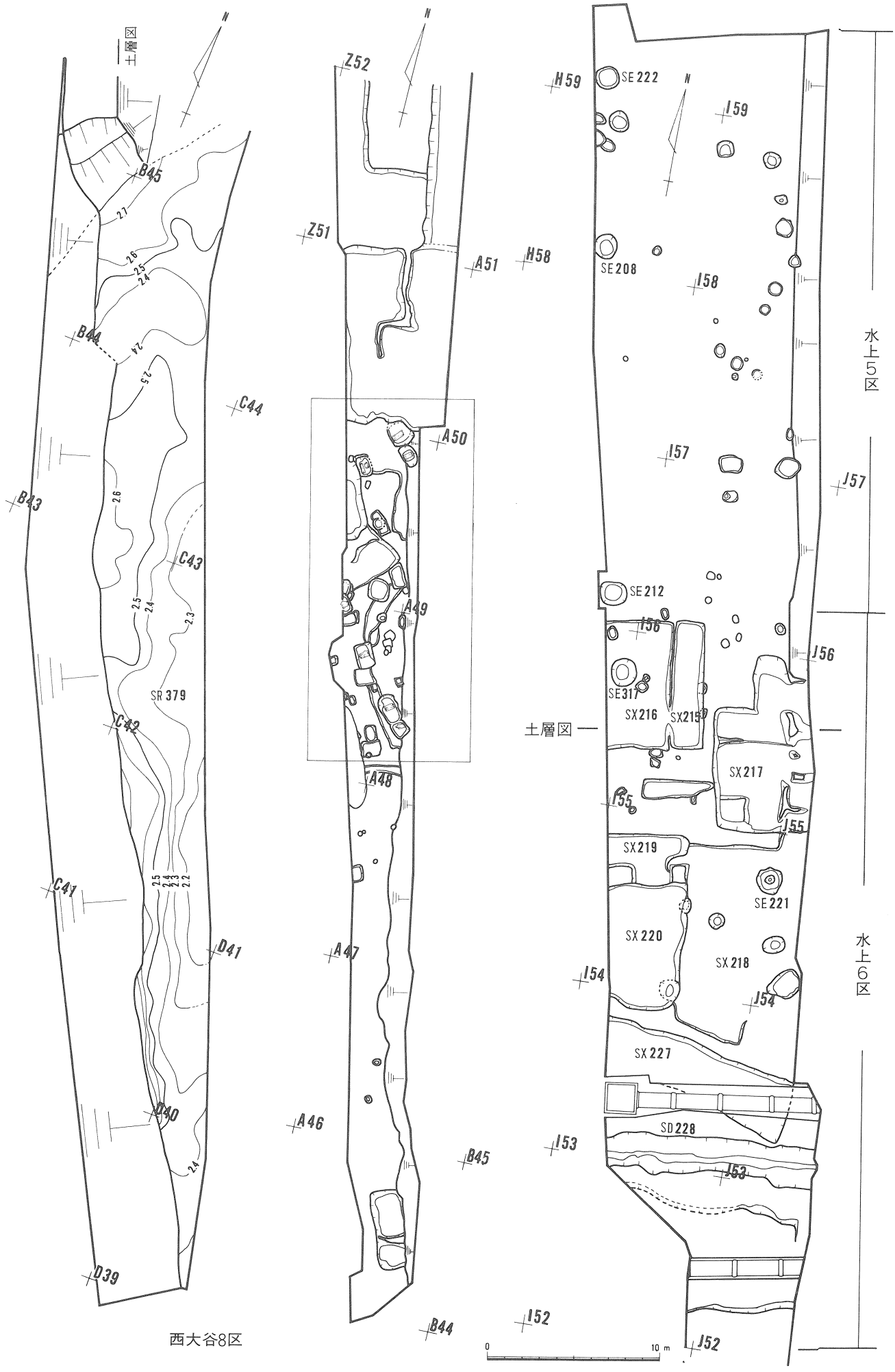
ＳＰ349・ＳＰ333・ＳＰ340（Ａ－Ａ′列）は直線上にならび柱間寸法が3.4ｍで等間隔に配置されている。これを掘立柱建物の平を構成する柱列の一部とした。ＳＰ353・ＳＰ355・ＳＰ350（Ｂ－Ｂ′列）も直線上にあり、柱間寸法も3.35ｍと等しい。したがってこれもセットと考えられる。Ａ－Ａ′列とＢ－Ｂ′列は同一の規格をもって構築されているが一軒の建物とみるには、軸線方位のわずかな相異もあり問題が残る。

この大型掘立柱建物はＳＤ348、ＳＤ359を切って構築され、土坑状遺構ＳＰ354によって切られていた。

ＳＰ354（第27図）　Ｚ49グリッドにあり大型掘立柱建物の柱穴ＳＰ355を切っている。直径0.58ｍを測る不整円形の土坑状遺構である。深さは0.12ｍと浅い。内部には古墳時代初頭に比定される壺形土器（第26図）が出土した。

ＳＥ332（第116図）　Ｚ49で検出された素掘りの井戸状遺構である。長軸1.24ｍ、短軸1.21ｍを測る隅丸正方形の平面プランを有する。深さは0.72ｍを測る。覆土から平安時代以降の遺構と推定される。

ＳＲ379（第22図）　39列から44列にかけて検出された旧河道である。Ａ44グリッドで検出された岸は右岸となる。河道は北東から流れ込み屈曲して南東にむかっている。中世旧河道の蛇行で攻撃斜面側の頂点に相当する。河床最深部標高は2.2ｍを測り、検出面との比高差は3.3ｍと非常に深い。遺物はほとんど含まれず土師器・須恵器の小片と漆椀が出土したのみである。ＳＲ379は西大谷６・７区のＳＲ７に連

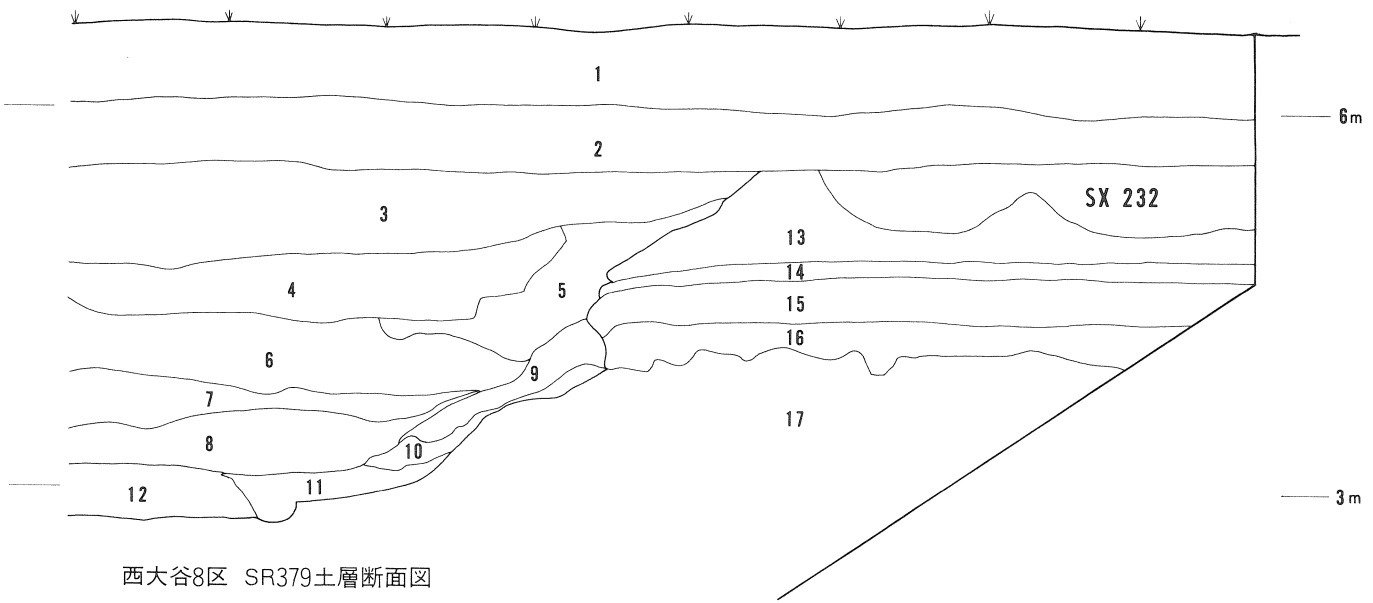


第22図　西大谷8区、水上5・6区全体図

1　盛土層
2　灰色砂質粘土(表土)層
3　茶灰色砂質土層
4　灰色砂質粘土層
5　小礫混灰色粘土層
6　灰色細砂層
7　有機物混灰色細砂層
8　灰色砂と灰色粘土の互層
9　小礫混灰色粘土層
10　15層の崩落土層
11　14・15・16・17層の崩落土層
12　粘土混砂礫層
13　黄白色粘土層
14　黒色粘土層
15　青灰色粘土層
16　淡茶灰色シルト層
17　青灰色シルト

旧河道内埋積土（中世）

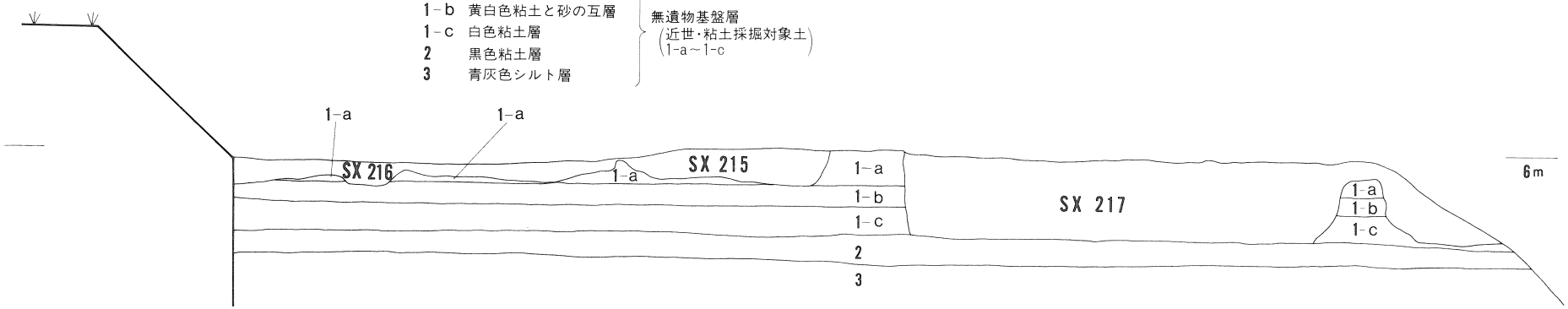
無遺物基盤層



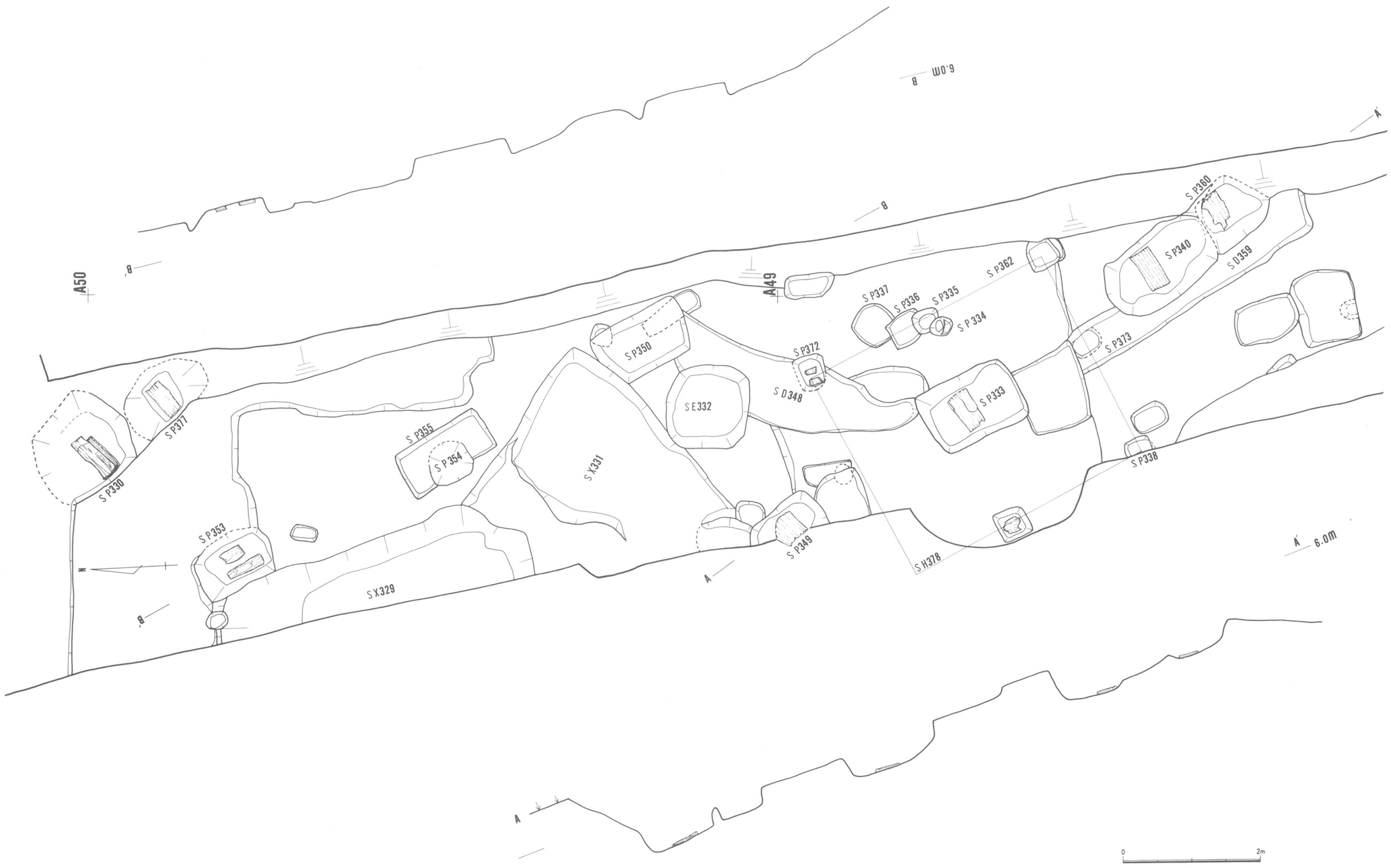
西大谷8区　SR379土層断面図

1-a　黄白色粘土層
1-b　黄白色粘土と砂の互層
1-c　白色粘土層
2　黒色粘土層
3　青灰色シルト層

無遺物基盤層（近世・粘土採掘対象土 1-a～1-c）



水上6区　土層断面図



第24図　西大谷8区Z48・49グリッド遺構実測図

続する旧河道跡である。

3. ま と め

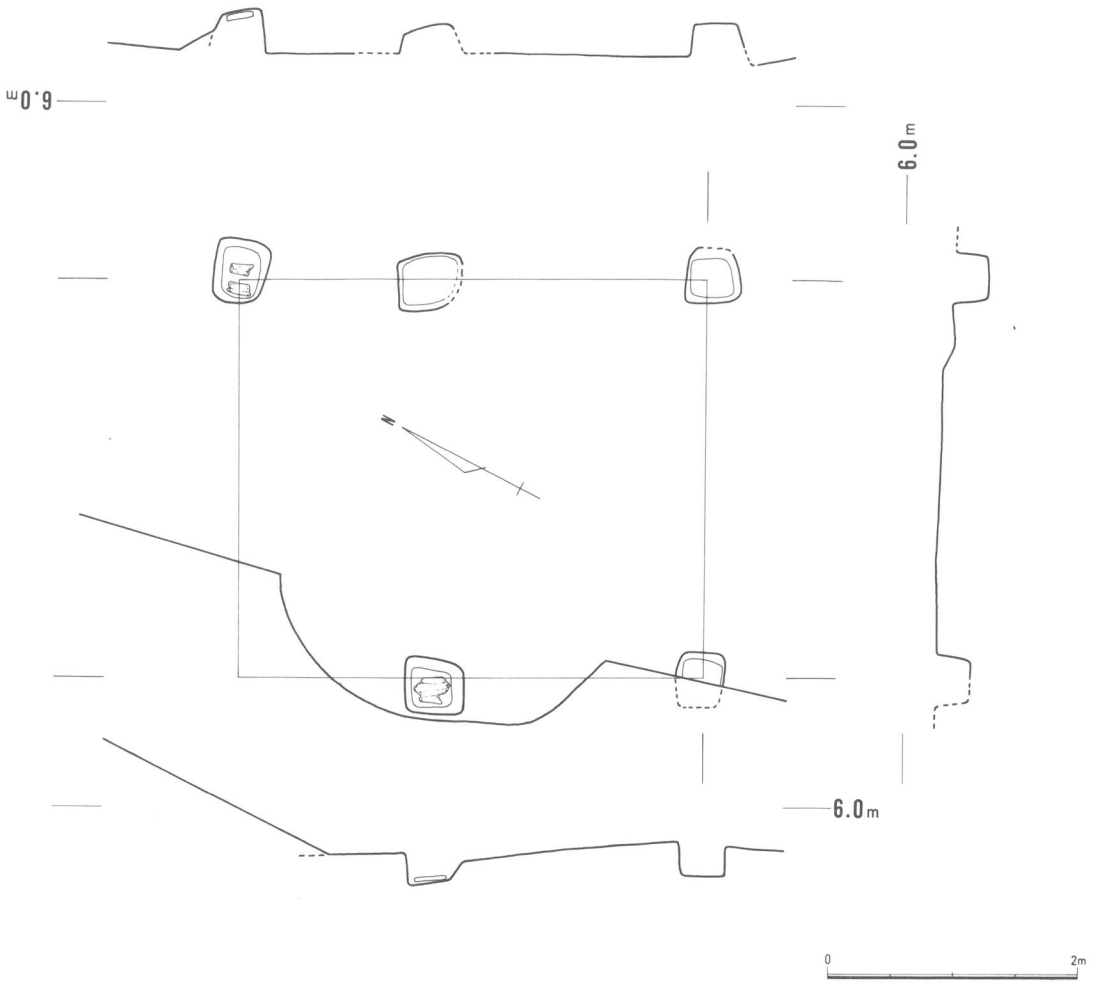
西大谷８区は南北に細長い調査区であったが48・49列で検出された掘立柱建物をもつ集落の存在が明らかとなった成果は大きい。遺構の変遷と年代を切り合い関係や遺物からまとめてみると以下のようになる。

第１段階　　SH378が存続した時期
第２段階　　SD348・SD359が存続した時期
第３段階　　大型の掘立柱建物が存続した時期
第４段階　　SP354が掘削された時期

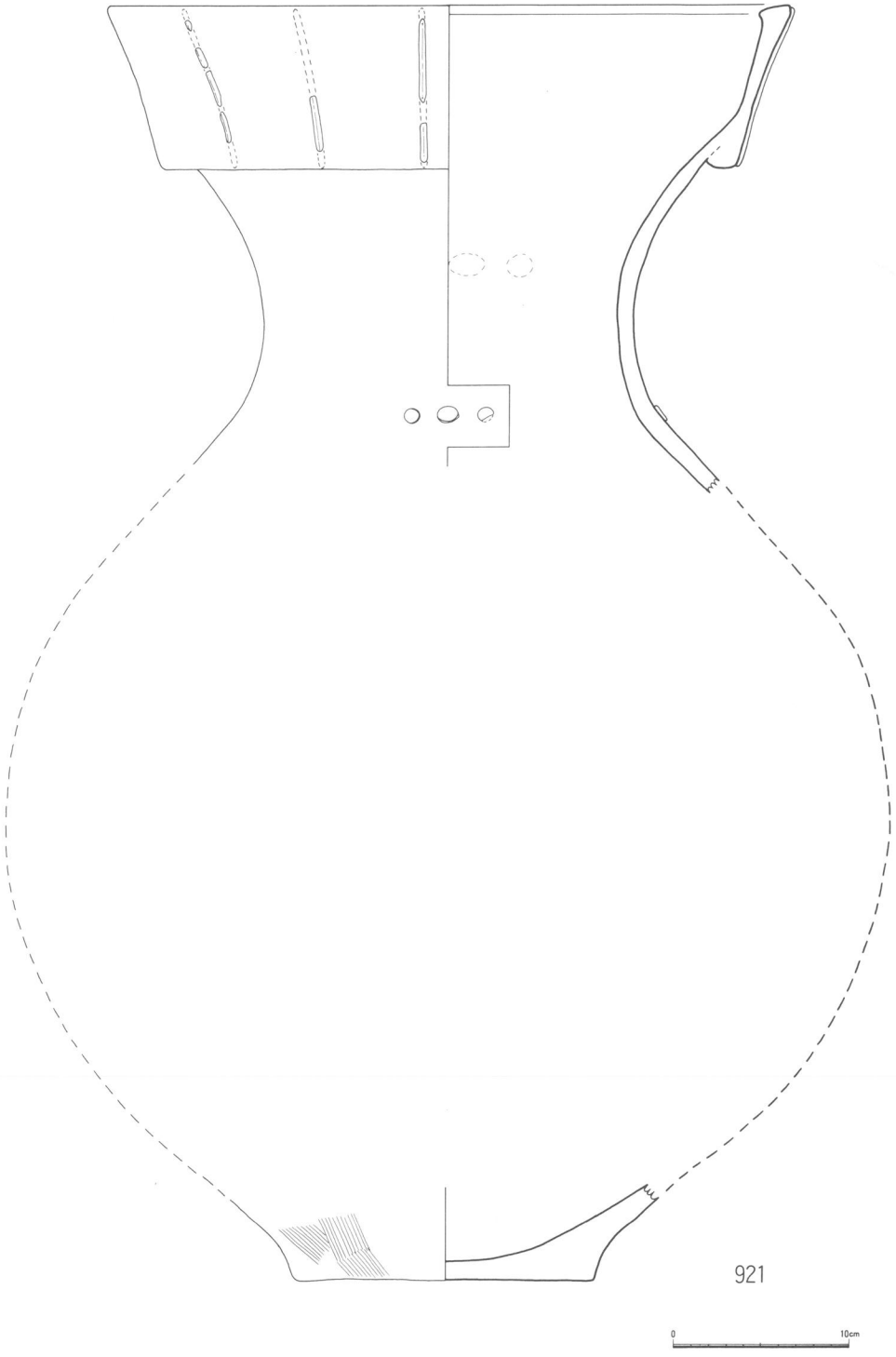
第４段階のSP354から出土した壺形土器は古墳時代初頭に比定されることから下限年代が決まる。柱穴、溝状遺構から出土した土器片は弥生時代後期末頃に比定できる。したがって第１段階から第４段階は、弥生時代後期末～古墳時代初頭の変遷としてとらえることができる。50列以北は近世の粘土採掘

第５表　西大谷８区溝状遺構一覧表

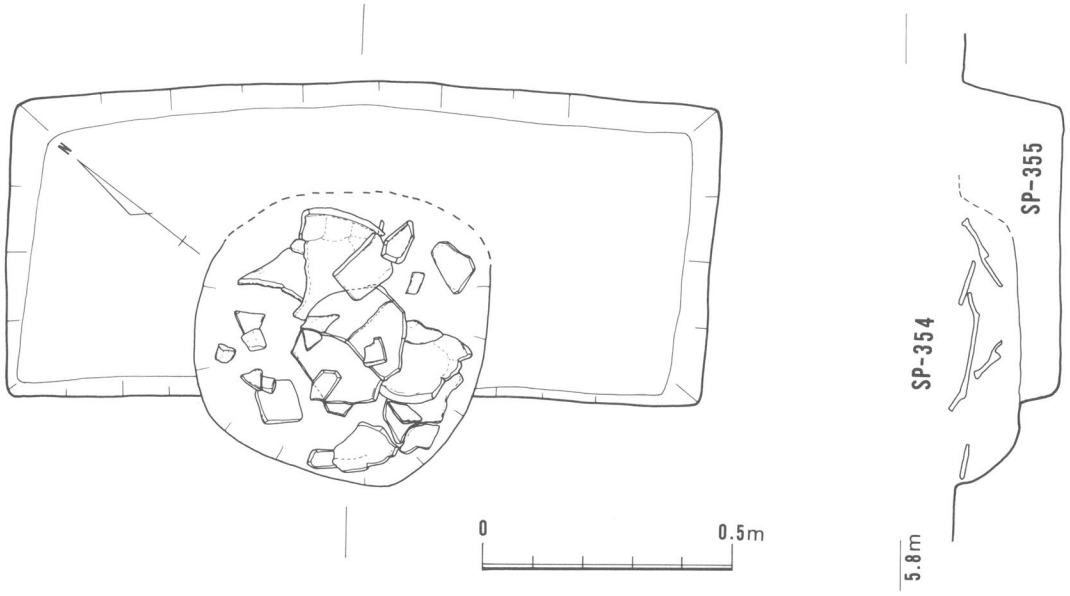
遺構番号	グリッド	延　長	幅	深　さ	遺構面標高	特記事項
SD342	A48	2.08	0.50	0.30	5.62	
SD348	Z48・49	(3.55)	1.00	0.24	5.62	
SD359	Z・A49	(4.20)	0.72	0.30	5.67	



第25図　西大谷８区SH378実測図



第26図　西大谷8区SP354出土土器実測図



第27図　西大谷8区SP354実測図

によって基盤層深部まで破壊され、47列以南は耕作によって削平されていた。集落域の範囲を想定する場合にこの撹乱が障害となったが、水上1区および水上5・6区では同時期の遺構が散見される程度であること、昭和57年度に静岡市教育委員会によって調査された高松1・2区でも掘立柱建物が発見されていることから高松1区から西大谷8区の低湿地に面した微高地上に集落の中心があることが確実となった。

西大谷3区（第29図）

1. 概　　要

現大谷川右岸で河口起点より830ｍ上流に位置する長さ25ｍの調査区である。南側は、昭和58年度の調査区である西大谷2区に接し旧大谷川右岸を形成している。調査区中央やや東側に南北に走る現代水路があり撹乱を受けていた。基盤層である白色粘土の上に黄灰白色粘土層が南西に緩やかに傾斜しながら堆積している。現代用水路東側ではこの粘土層上面に溝状遺構・小穴・井戸状遺構が検出され、平安時代末から鎌倉時代の遺構面となっている。用水路西側では黄灰白色粘土層は薄くC50グリッドではほとんど検出されなかった。C51グリッドのSX66、B50グリッドのSX67は近世の粘土採掘跡であり、黄灰白色粘土と基盤の白色粘土層が採掘されていた。さらに下層では50列北側から51列にかけて12ｍ～17ｍの幅で調査区を横断するように基盤の白色粘土が採掘されていた。埋土中の遺物より古墳時代前期と推定される。同種のものは水上1区でも検出されている。D50グリッドでは埋土の暗茶褐色粘土にも小穴が掘り込まれていた。

2. 遺構各説

SD68　B50グリッドからC51グリッドで検出された。幅0.60ｍで弧状に存在し、延長18.50ｍ、深さ0.21ｍを測る。内側には小穴も検出され、居住域を区画した溝とも考えられる。覆土中より山茶碗が出土している。

SE62　D50グリッドで検出された。長径1.34ｍ、短径1.21ｍの長円形プランをもち、深さ1.71ｍを測る素掘りの井戸状遺構である。掘り込み面は黄灰白色粘土で、底面の青灰色シルト層が滞水層と考えられる。

第6表　西大谷8区柱穴・小穴・土坑一覧表

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標高	特　記　事　項
SP229	A48	—	—	0.12	—	5.61	
SP330	Z49	(1.50)	(1.50)	0.15	(1.00)	5.40	礎板
SP333	Z48	1.44	0.95	0.43	0.66	5.62	礎板
SP334	Z48	0.33	0.28	0.29	0.85	5.60	
SP335	Z48	0.39	0.33	0.25	0.85	5.65	
SP336	Z48	0.51	0.47	0.24	0.92	5.60	SH378
SP337	Z48	0.62	0.58	0.17	0.94	5.60	
SP338	Z48	0.39	—	0.25	—	5.71	SH378
SP339	Z48	0.54	0.38	0.12	0.70	5.70	
SP340	A48	1.74	1.00	0.52	0.57	5.63	礎板
SP341	Z48	0.95	0.65	0.21	0.68	5.63	
SP343	A47	0.26	0.22	0.13	0.85	5.65	
SP344	A47	0.30	0.24	0.15	0.80	5.67	
SP345	A47	0.18	0.15	0.14	0.83	5.66	
SP346	A46	0.43	0.37	0.15	0.86	5.45	
SP347	A46	0.45	0.35	0.18	0.78	5.49	
SP349	Z48	1.15	0.85	0.35	0.74	5.69	礎板
SP350	Z49	1.40	0.83	0.22	0.59	5.62	
SP351	Z49	0.92	0.30	0.13	0.32	5.46	
SP352	Z49	(0.40)	(0.30)	0.22	(0.75)	5.62	
SP353	Z49	1.16	0.77	0.18	0.66	5.62	礎板
SP354	Z49	(0.58)	0.58	0.12	(0.85)	6.00	
SP355	Z49	1.52	0.60	0.28	0.39	5.69	
SP356	Z49	0.39	0.22	0.06	0.56	5.70	
SP357	Z48	—	—	0.21	—	5.63	
SP358	Z48	1.15	0.92	0.16	0.80	5.61	
SP360	A48	1.08	0.89	0.21	0.82	5.32	礎板
SP361	Z48	1.22	0.57	0.11	0.47	5.61	
SP362	Z49	0.50	0.44	0.23	0.88	5.57	SH378
SP363	A48	0.75	0.33	0.20	0.44	5.59	
SP364	Z48	0.28	0.27	0.05	0.96	5.58	
SP365	Z48	1.05	0.85	0.07	0.81	5.63	
SP369	Z49	0.87	0.65	0.13	0.75	5.62	
SP370	Z48	(0.30)	(0.25)	—	(0.83)	5.42	
SP371	Z48	0.70	0.33	0.16	0.47	5.63	
SP372	Z48	0.55	0.43	0.20	0.78	5.52	礎板（SH378）
SP373	Z48	0.45	(0.35)	—	(0.78)	5.46	
SP374	A44	0.24	0.20	0.15	0.83	5.65	
SP376	Z48	0.47	0.43	0.26	0.91	5.64	礎板（SH378）
SP377	Z49	(1.35)	(0.85)	0.16	0.63	5.34	礎板

第7表　西大谷3区小穴・土坑一覧表

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標高	特　記　事　項
SP63	D50	0.58	0.44	0.13	0.76	5.58	
SP64	D50	0.48	0.46	0.14	0.96	5.60	
SP69	D50	0.54	0.39	0.51	0.72	5.58	
SP70	D50	0.32	0.30	0.09	0.94	5.60	
SP71	D50	0.30	0.23	0.11	0.77	5.61	
SP72	D50	0.42	0.30	0.17	0.71	5.60	
SP73	D50	0.28	0.28	0.10	1.00	5.58	
SP74	D50	0.24	0.23	0.07	0.96	5.59	
SP75	D50	0.32	0.30	0.21	0.94	5.63	
SP76	D50	0.32	0.29	0.05	0.90	5.63	
SP77	D50	0.24	0.23	0.11	0.96	5.58	
SP78	D50	0.33	0.28	0.11	0.85	5.58	
SP79	D50	0.28	0.21	0.11	0.75	5.63	
SP80	D50	0.31	0.28	0.14	0.90	5.63	
SP82	D51	0.24	0.22	0.20	0.92	5.60	
SP83	D51	0.32	0.25	0.11	0.78	5.62	
SP84	D51	0.26	0.23	0.14	0.88	5.61	
SP85	D52	0.20	0.17	0.06	0.85	5.58	第一面
SP86	D52	0.28	0.25	0.11	0.89	5.57	黄灰白色粘土層
SP88	C51	0.77	0.67	0.34	0.87	5.40	
SP91	C50	0.37	0.24	0.11	0.65	5.30	
SP92	C50	0.44	0.29	0.19	0.66	5.33	
SP93	C50	0.25	0.23	0.09	0.92	5.34	
SP94	C50	0.38	0.26	0.12	0.68	5.36	
SP95	C50	0.28	0.24	0.09	0.86	5.27	
SP96	C50	0.34	0.31	0.09	0.91	5.33	
SP97	C50	0.38	0.32	0.06	0.84	5.30	
SP98	C50	0.25	0.24	0.06	0.96	5.33	
SP99	C50	0.25	0.24	0.13	0.96	5.28	
SP100	C50	0.23	0.21	0.09	0.91	5.31	
SP101	C59	0.26	0.22	0.15	0.85	5.35	
SP102	C51	0.50	0.39	0.17	0.78	5.25	
SP103	B51	0.44	0.31	0.04	0.70	5.18	
SP104	B52	0.51	0.46	0.09	0.90	5.33	
SP105	C50	0.32	0.26	0.16	0.81	5.33	
SP151	D50	0.24	0.23	0.16	0.96	5.45	
SP152	D50	0.27	0.25	0.20	0.93	5.40	
SP153	D50	0.32	0.28	0.04	0.88	5.42	第二面
SP154	D50	0.32	0.29	0.18	0.91	5.42	黒茶色粘土層
SP155	D50	0.41	0.37	0.37	0.90	5.45	

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長短＝1）	遺構面標高	特　記　事　項
SP156	D50	0.26	0.22	0.12	0.85	5.48	
SP157	D50	0.62	0.54	0.20	0.87	5.44	
SP158	D50	0.24	0.22	0.15	0.92	5.47	
SP159	D50	0.29	0.28	0.10	0.97	5.47	
SP160	D50	0.50	0.22	0.14	0.44	5.46	
SP161	D50	0.20	0.18	0.12	0.90	5.48	
SP162	D50	0.16	0.14	0.08	0.88	5.47	第二面
SP163	D51	0.28	0.24	0.06	0.86	5.55	黒茶色粘土層
SP164	D51	0.31	0.27	0.10	0.87	5.55	
SP165	D51	0.25	0.20	0.07	0.80	5.52	
SP166	D51	0.38	0.37	0.18	0.97	5.54	
SP167	D51	0.31	0.22	0.13	0.71	5.52	
SP168	D51	0.23	0.21	0.13	0.91	5.49	
SP169	D51	0.16	0.16	0.12	1.00	5.41	

第8表　西大谷3区溝状遺構一覧表

遺構番号	グリッド	延　長	幅	深　さ	遺構面標高	特　記　事　項
SD28	D50	37.90	2.70	0.55	5.52	昭和58年度 西大谷2区SD28に連続（中世初頭）
SD68	B50	18.50	0.60	0.21	5.13	平安時代末～鎌倉時代
SD81	D51	2.70	0.74	0.13	5.63	

第2節　水　上　地　区

水上1区（第29図）

1. 概　　要

水上1区は、河口起点より855m上流に位置し、現大谷川左岸部にあたる。地形的には、微高地である。ここでの遺物包含層は、次の3面が確認された。第1面では、近世の粘土採掘跡が4個所検出され調査区全面におよんでいた。第2面は、平安時代後期から中世にかけての面である。9層の黄褐色粘土を掘り込んでいる溝状遺構SD81と大型水路SR150が主要な遺構である。（第2面検出の中世遺構については、水上3区であわせて述べる。）第3面は、古墳時代前期から平安時代中期にかけての面である。古墳時代前期の遺構としては、15層の白色粘土から掘り込まれた井戸状遺構SE261、粘土採掘跡SX262ほか4個所。古墳時代中期の遺構としては、手捏土器等が一括出土したSX322。平安時代の遺構としては、井戸状遺構SE192が検出された。SE261とSE192は、ともに祭祀的性格をうかがわせる遺物が出土している。なお、L59グリッド、L58グリッドの現代水路より東側で、10層の紫茶粘土直上から古墳時代中期の土器が検出されている。（第35図　図版23－1）

2. 遺構各説

近世粘土採掘跡（図版19－2）　近世粘土採掘跡は、SX151・156・157・158の4個所が確認された。いずれも、4層の黄灰褐色粘土と9層の黄茶褐色粘土を30～40cmほど採掘しているもので、現大谷川に並行して約4.5m幅で南北約82mにわたって検出された。覆土中から、近世陶磁器が出土している。

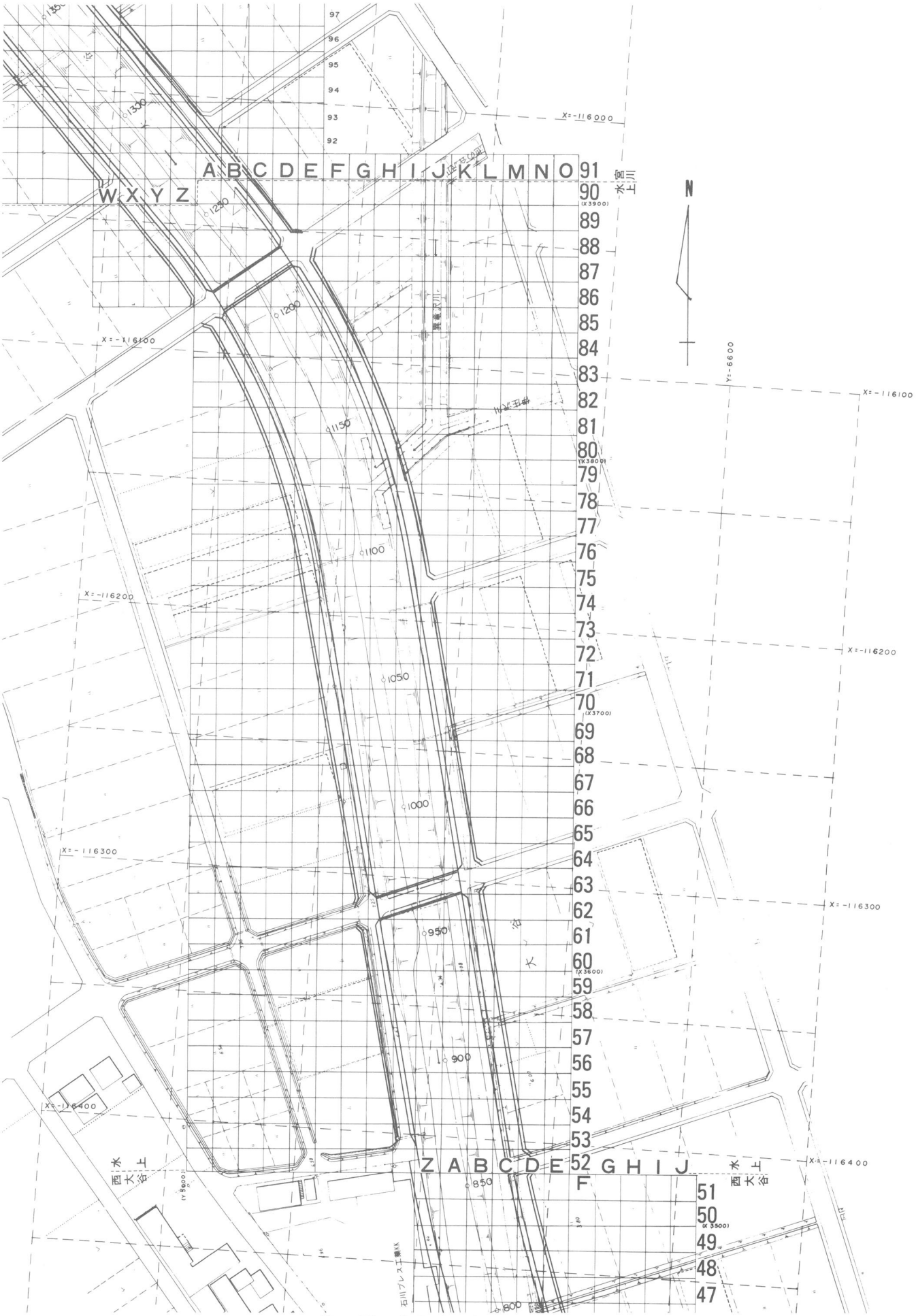
SE261（第31図、第32図、図版20）　L59グリッドで検出された井戸状遺構である。確認面で長径2.86m、短径2.83m、深さ1.45mを測る円形プランをもつ素掘りの井戸である。

a 構造と機能　掘り方は4段階からなる。第1段階は、円形プランをもち、堅固な白色粘土層を深さ、0.45m掘削し、幅0.35m前後のテラス状の平坦面をつくりだしている。第2段階は、長径2.69m、短径1.65m、深さ0.45mの長円形の掘り込みである。白色粘土と黒色粘土の互層と、シルト層への漸移層への掘削であり、約45度の傾斜をもたせている。第3段階は、伏流水の湧出するシルト層を深さ0.55mにわたり垂直に掘削している。堪水による井壁の一部崩落が確認されたものもこの層である。第4段階は井底中央部にみられる直径0.39m、深さ0.10mの円形の掘り込みである。この掘り込みに、はめ込まれた状態で検出されたのが、リング状に巻かれた植物遺存体である。この第4段階は、22層の暗青灰色砂質粘土層に掘り込まれている。第3段階、第4段階あわせて湧水を溜める「水溜」と考えられる。

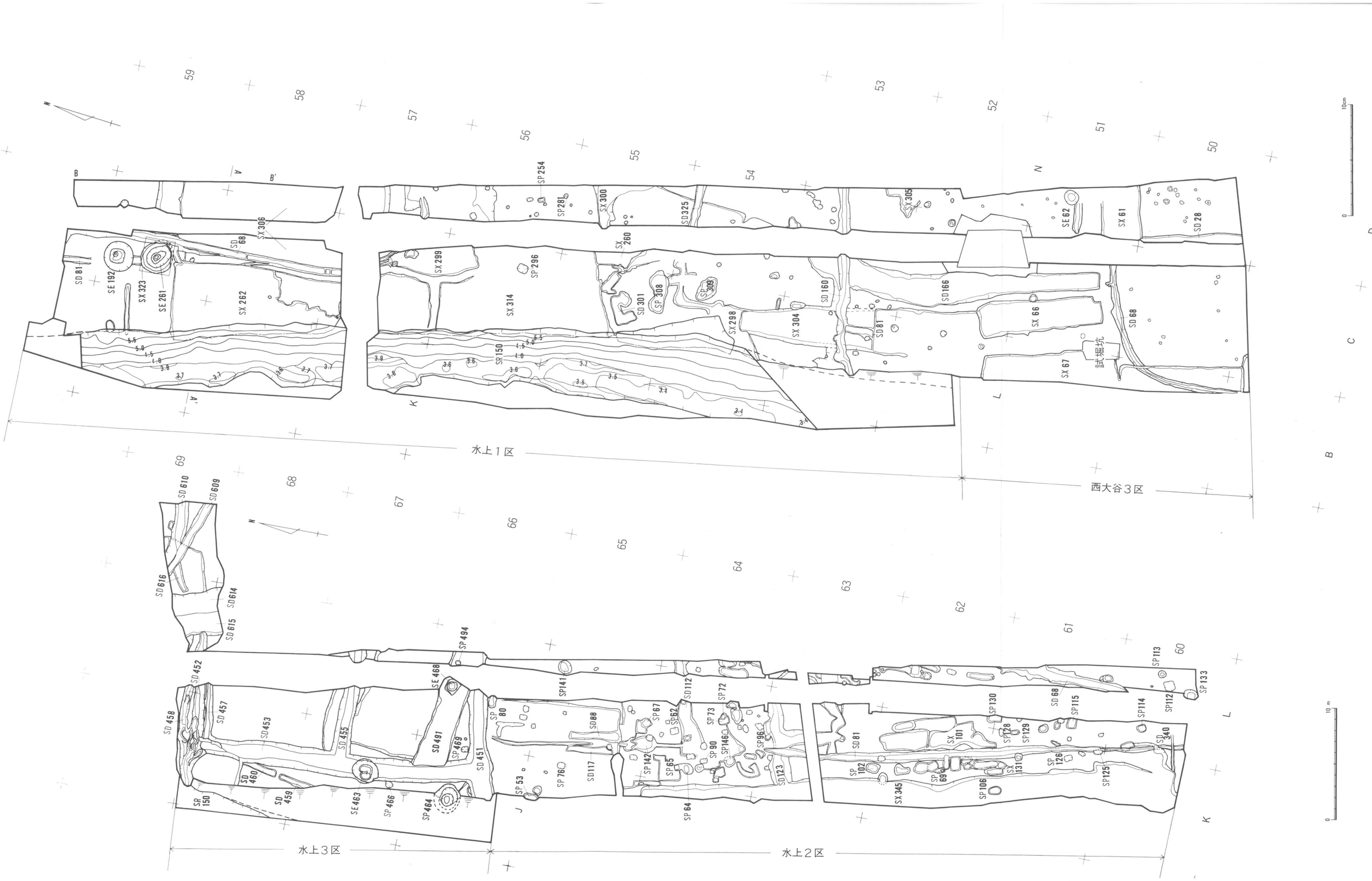
b 出土遺物と井戸祭祀　主要遺物は、下層と中層から出土している。

下層では、井底のリング状植物遺存体の直上5cmの位置で木製広鍬の身が検出された。この広鍬の上には、30～40cmの厚さで砂質粘土が堆積していることから、井戸使用前か井戸浚え直後に井底に置かれたものと考えられる。井底には井神に対する豊水祈願を目的として、生活用具などを納置し、井戸浚えのときそれらを取り上げ、終了後再び井底へ納置する民俗事例もあり、本遺跡出土の広鍬も時代はへだたるが、今後検討を加えていきたい。

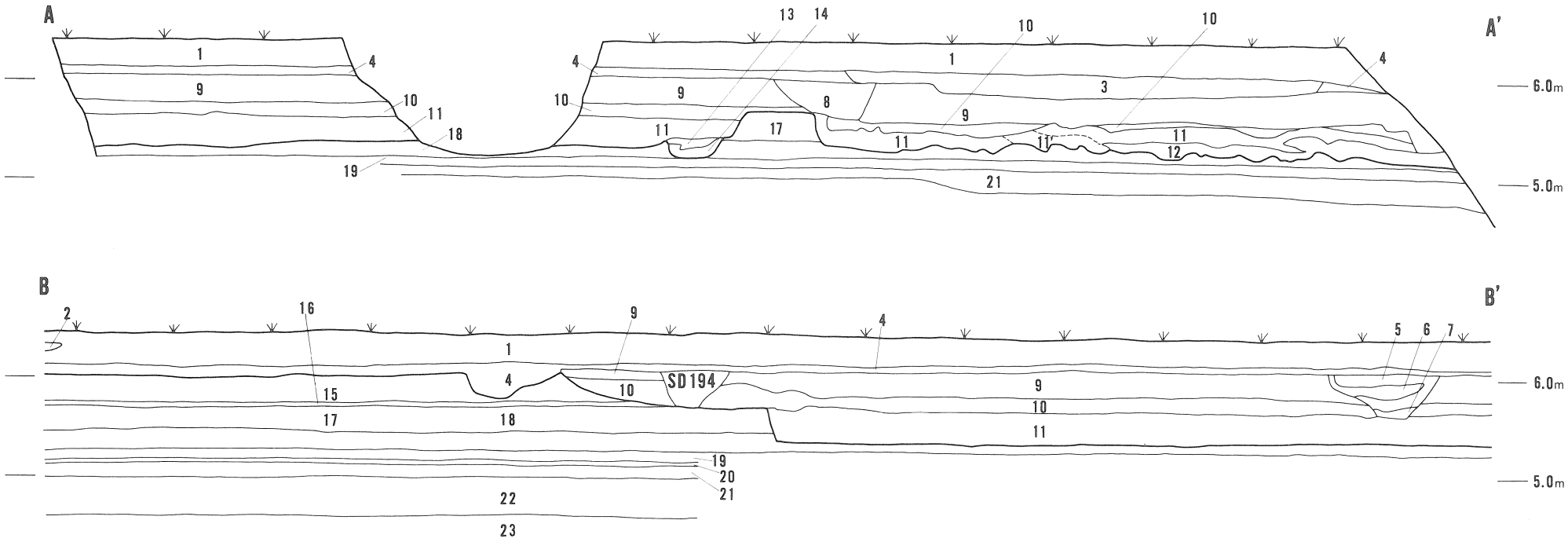
中層からは、一木作りの腰掛状木製品（762）と古式土師器の壺形土器（758）が発見された。前者は、下層のシルト層に脚の部分が埋められるような状態で検出され、後者の壺は、腰掛状木製品の直上3cmの位置で出土した。また壺の周辺からは木片、小礫、土師器の台付甕形土器、高坏形土器、壺形土器の破片などが井戸側の法面に沿うようにして検出された。これらの遺物を含む中層は、シルトの混じった粘土からなる。



第28図　水上地区グリッド配置図



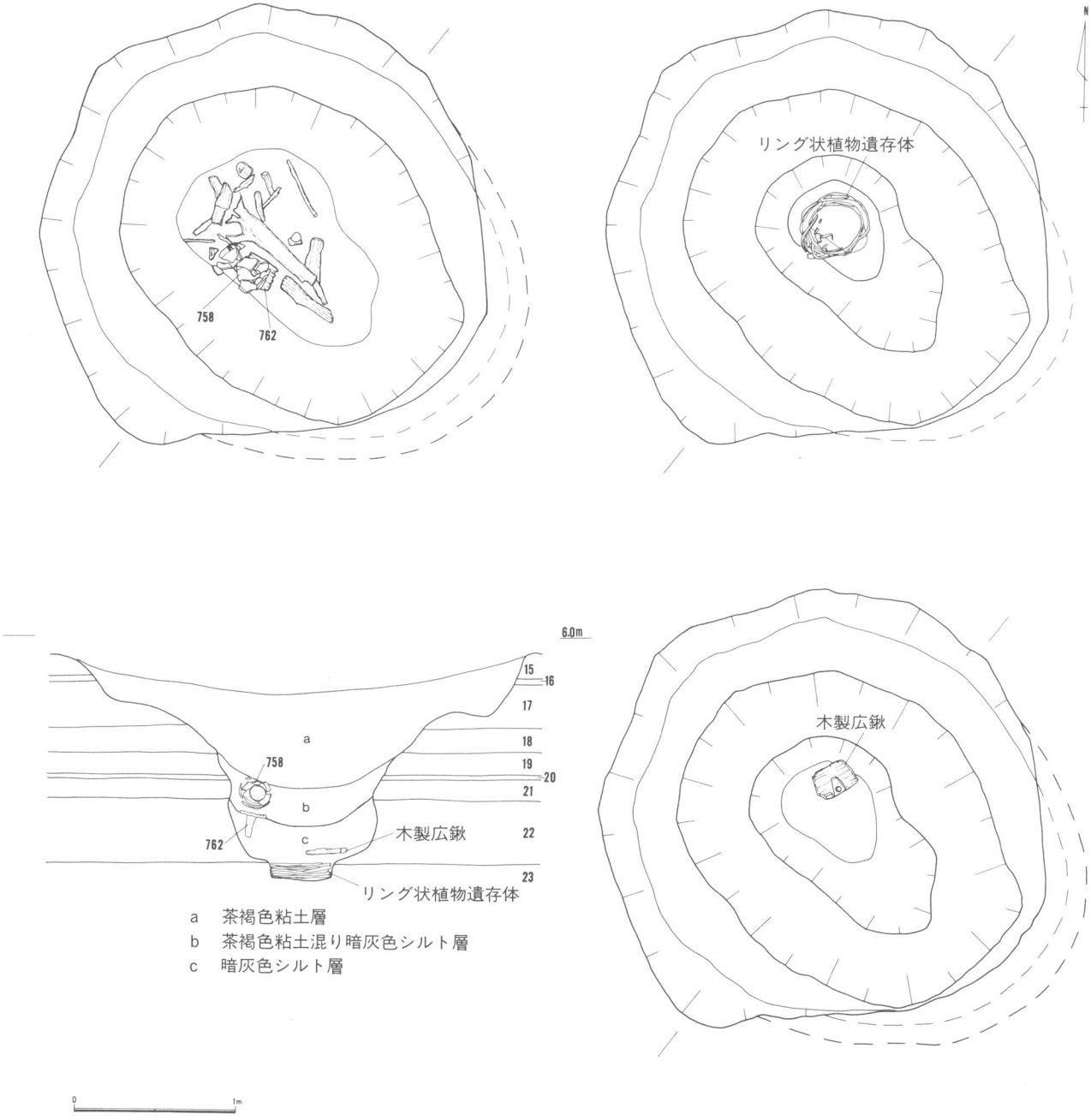
第29図　水上1・2・3区・西大谷3区全体図



第30図　水上1区土層図

1．灰褐色砂質粘土層（耕作土）
2．黒灰色粘土ブロック（17、18層の粘土塊）
3．黄色粘土ブロック混り灰褐色粘土層（近世粘土採掘跡S×157の埋め土）
4．黄灰褐色粘土層（上面が近世遺構面、中近世の堆積か）
5．茶褐色粘土層
6．黄色粘土ブロック混り茶褐色粘土層　SD178の覆土
7．灰黄砂質粘土層
8．赤褐色粘土層（SD81の覆土）
9．黄茶褐色粘土層（上面が平安後期の遺構面・「平安海進」による堆積か）
10．紫茶色粘土層（上面が古墳中期）
11．黄色粘土粒混り茶黒色粘土層（上面が古墳前期末～中期初頭の遺構面）　古墳前期の粘土採掘跡SX262、306の埋め土
11'．黄色粘土混り茶黒色粘土層（砂質多い）
12．黄白色砂質粘土層
13．灰白シルト層
14．黒色粘土混り灰色砂質粘土層　SD68の覆土
15．灰白色砂質粘土層
（この層の上面でSE192、SE261の掘り方が確認できた。
B点より南へ3mほどの地点より北側は砂質が強くなっている）
16．黄白色砂質粘土層
17．白色粘土層
18．黒色粘土層
19．青灰色粘土層（シルトを含む）
20．黒色粘土層
21．青灰色砂質粘土層
22．暗灰色シルト層
23．暗青灰色、砂質粘土層

0　2m



第31図　水上1区SE261実測図

中層出土の腰掛状木製品とその直上で検出された壺形土器は、検出状況から考えるとセットで納置された可能性が強い。これは、第３段階・第４段階の埋積（素掘りの井壁からの砂質粘土の剥落などによる自然埋積）が完了した後、井戸機能終了時の埋井の祭料とも考えられる。上層での夥しい土器片の検出は、埋井祭祀が行なわれ、井戸としての機能、神性がともに消滅した後、土器捨て場となったと推定している。なお穿井と埋井祭祀の執行された時期は、出土遺物およびＳＤ68に切られていることから、古墳時代前期とする。

ＳＤ68　（第29図）　水上２区Ｌ62グリッドから水上１区Ｌ58グリッドまで40ｍにわたって検出されている。直線的に南下し、Ｌ57グリッドで南東方向に弧を描いて曲がり、Ｍ57グリッド南部では、再び直線的に東流する溝状遺構である。確認面で最大幅 0.88ｍ、深さ 0.72ｍ、延長 54.75ｍを測る。覆土中より古式土師器片が出土しており、古墳時代前期の溝といえる。

ＳＸ262・ＳＸ306（第29図）　ともにＳＥ261の南側で検出された粘土採掘跡である。両者は、Ｋ59・Ｌ59グリッド南部からＬ57・Ｍ57グリッドまで拡がる。前者は、長さ 23.0ｍ、幅 5.9ｍ、後者は長さ 18.4ｍ、幅 7.1ｍを測り、深さは両方とも 0.45ｍである。いずれも15・16・17層の白色粘土を採掘対象としているが、下層の黒色粘土も 0.1ｍほど掘り込まれている。

またＳＸ262・ＳＸ306はともに覆土として下層に11層の黄色粘土粒混り茶黒色粘土（層厚 0.35ｍ）をもち、ここから古式土師器の壺形土器が出土している。さらに、11層の土質は撹拌された状態で堆積しておりＳＸ 262 ・ＳＸ 306 を埋め戻した土とも考えられる。

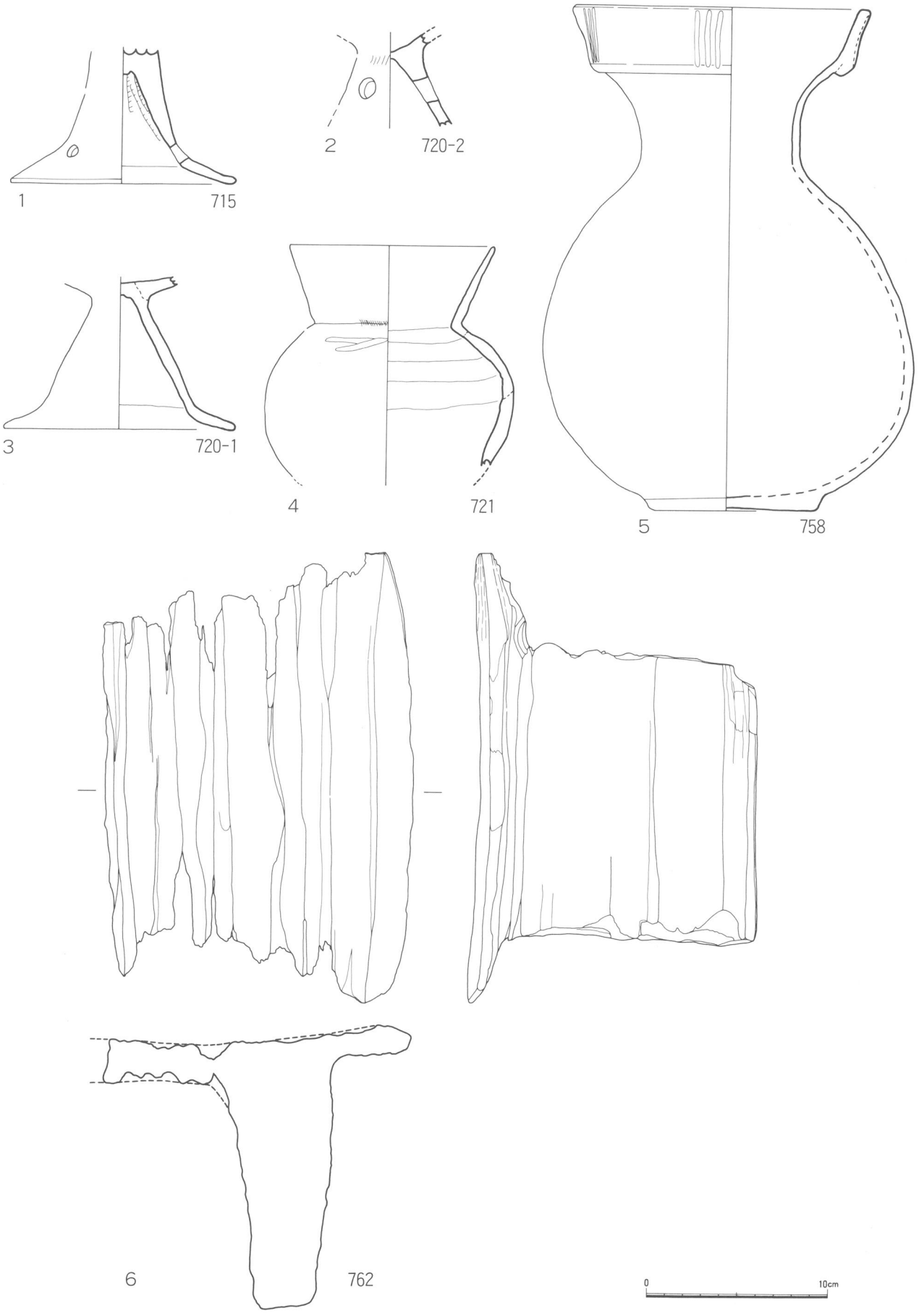
ＳＸ 323（第33・34図　図版22）　ＳＥ261の埋積土が陥没して形成された擂鉢状の窪地内にみられた土器集中部である。長径 1.54ｍ、短径 1.27ｍ、深さ 0.26ｍを測る窪地内の北側・南西側・南東側に集中して土器群が検出された。手捏土器14点、壺形土器（小型）19点、高坏形土器15点、壺形土器12点、甕形土器９点、台付甕形土器４点、坩形土器６点、坏形土器１点、総計80点が出土した。出土状態はいずれも土圧で直上から押しつぶされた状態で出土しており、原位置をあまり動いていないと考えられる。ＳＸ323は出土遺物から古墳時代中期のものと考えられる。

出土遺物とその祭祀性（第９表）　北側土器群では土器総数31点のうち広口の壺形土器（小型）が13個、手捏土器が14個出土した。これらのうち壺形土器（小型）の中に手捏土器が入った状態で出土したものが２例（656－1の中に 657 ・668の中に 669）、器形の異なる手捏土器３点が組み合わせられたような状態で出土した個所も１例検出された（658・662・666）。北側土器群の分布は３群の中で最も密集している。

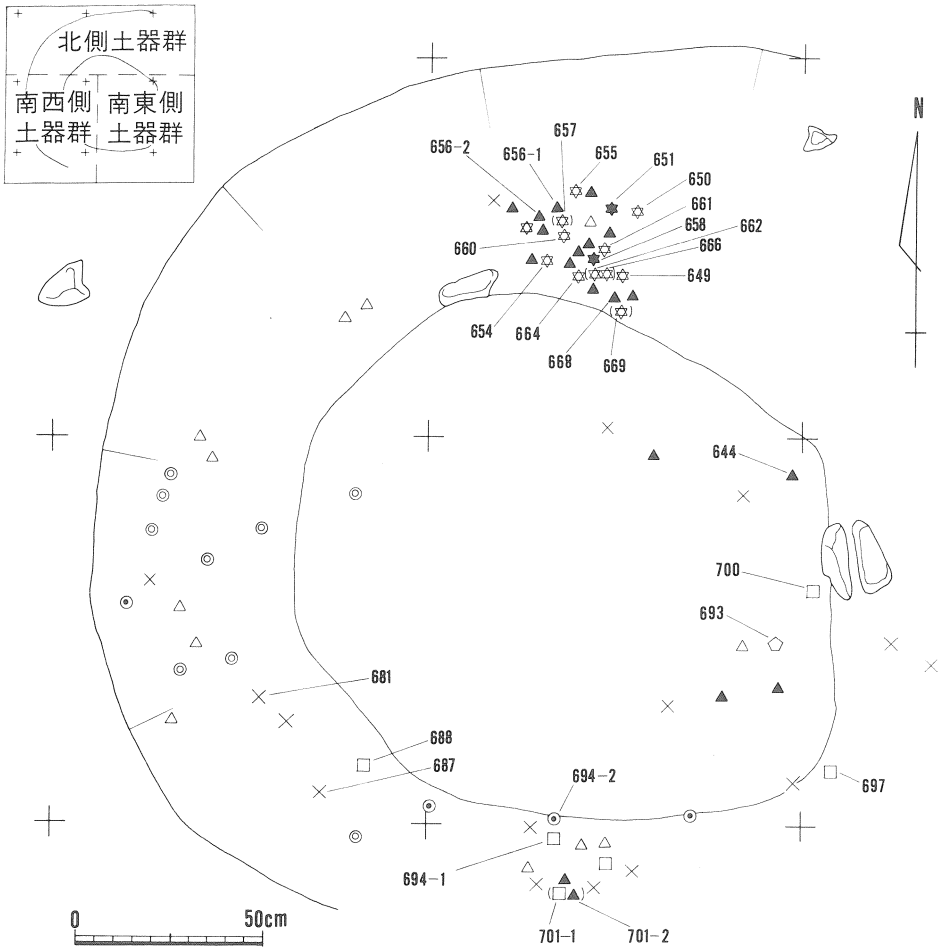
南西側土器群では甕形土器９点、壺形土器５点、高坏形土器４点を含む土器総数21点が見られた。

南東側土器群では、高坏形土器10点、広口の壺形土器（小型）６点、坩形土器５点、壺形土器４点を含む土器総数28点であった。

ＳＸ 323 の土器群は、中央の窪地を囲むように分布している。さらに祭祀的性格が強いといわれる手捏土器や高杯形土器がそれぞれ、北側と南側に分かれて出土している。また壺形土器（小型）の中に手捏土器を入れたり、手捏土器３個が重なった状態での出土状況もみられる。



第32図　水上1区SE261中層出土遺物実測図

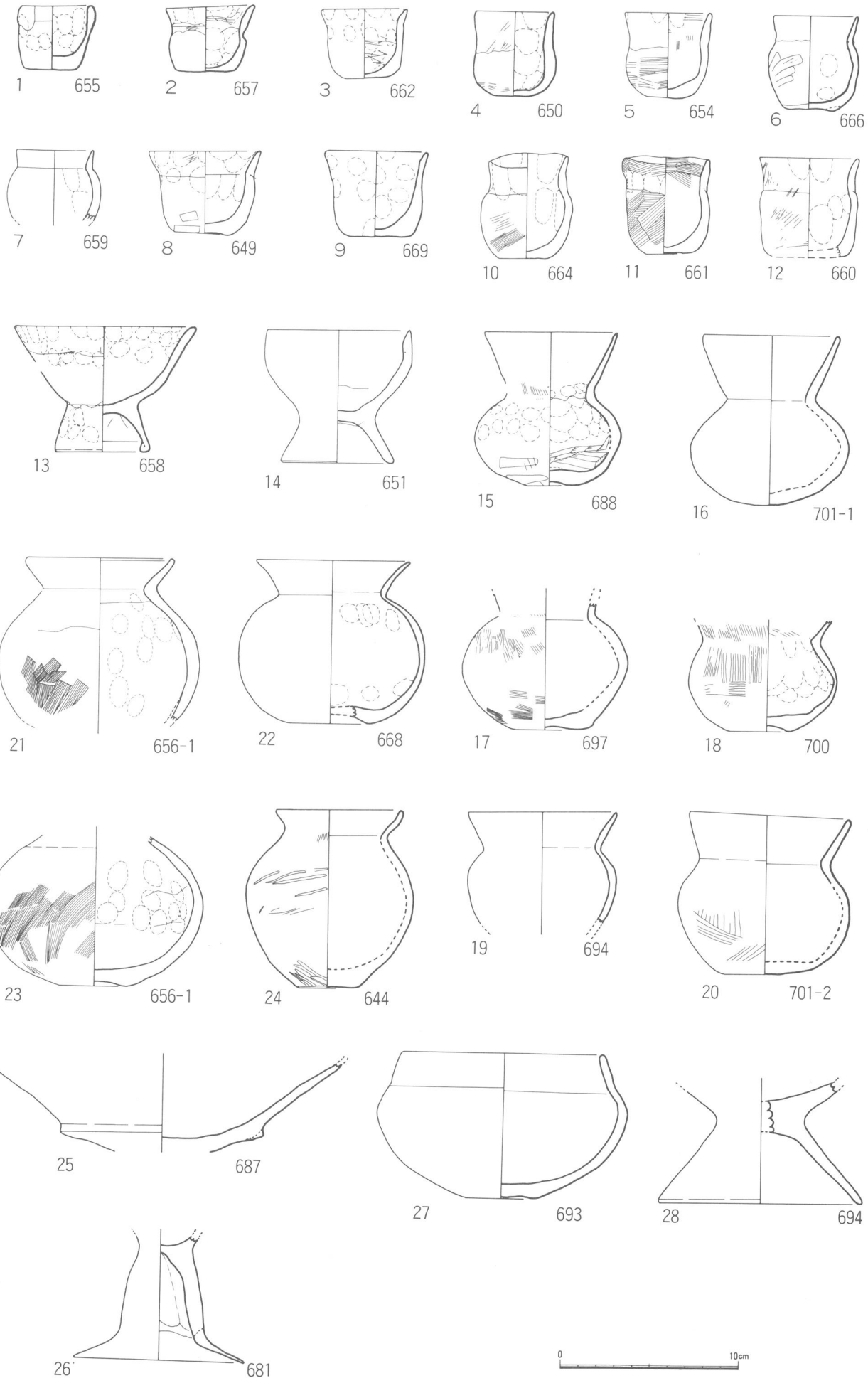


第33図　水上1区SX323遺物分布模式図

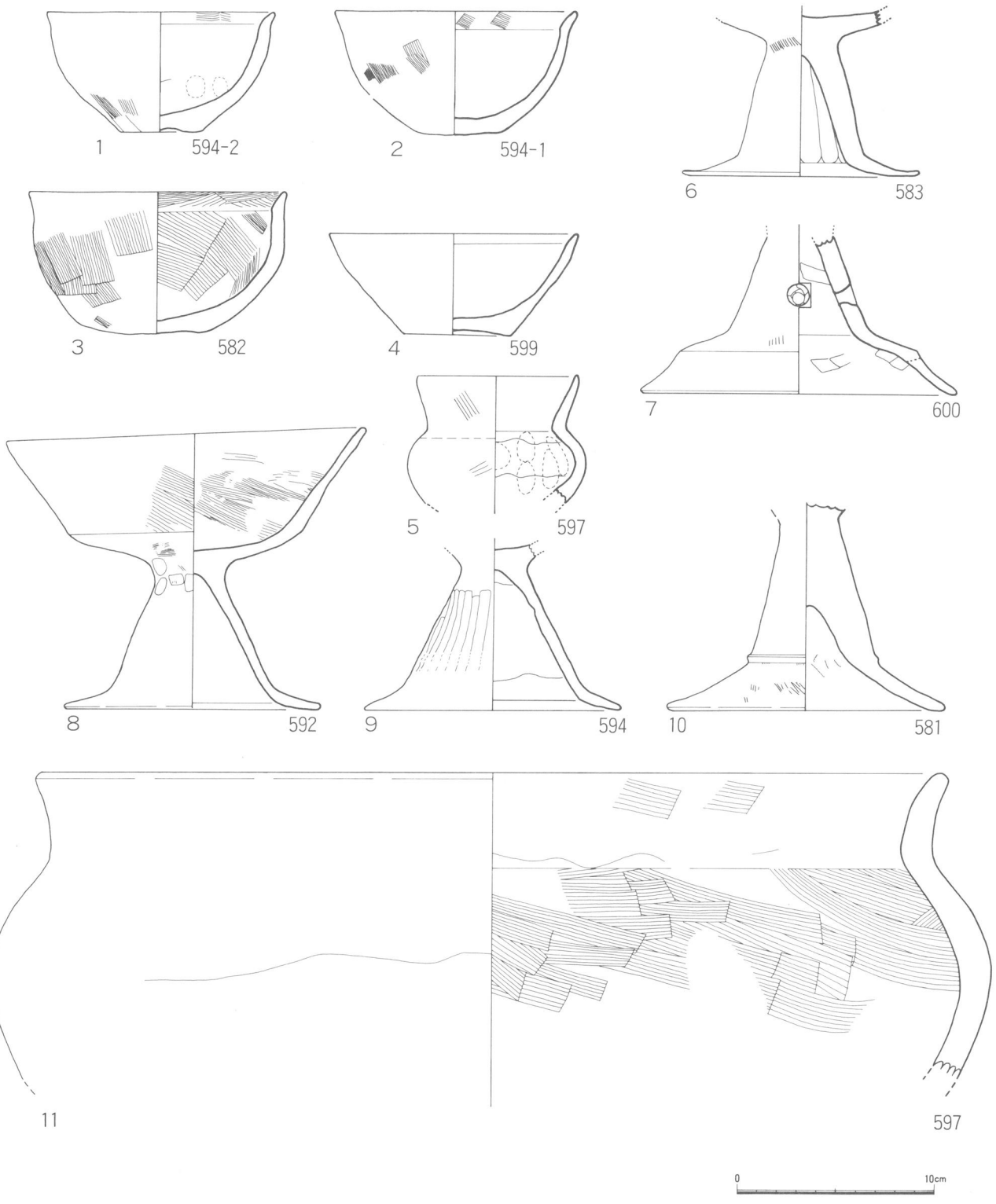
第9表　水上1区SX323主要遺物一覧表

種類		記号	北側土器群		南西側土器群		南東側土器群		合計	
			個	%	個	%	個	%	個	%
土師器	高杯形土器	×	1	3.2	4	19.0	10	35.7	15	18.8
	杯形土器	⬠	0	0	0		1（1）	3.6	1	1.2
	坩形土器	□	0	0	1	4.8	5（2）	17.9	6	7.5
	壺形土器	△	3	9.7	5	23.8	4	14.3	12	15.0
	壺形土器(小型)	▲	13（3）	41.9	0		6（2）	21.4	19	23.8
	甕形土器	◎	0	0	9	42.9	0	0	9	11.2
	台付甕形土器	◉	0	0	2	9.5	2	7.1	4	5.0
手捏	壺形土器	✡	12（9）	38.1	0		0	0	12	15.0
	台付壺形土器	✸	2（2）	6.5	0		0	0	2	2.5
合計			31	100	21	100	28	100	80	100

※（　）内は完形



第34図　水上1区SX323出土土器実測図



第35図　水上1区紫茶粘土層直上出土土器実測図

SE192（第36図　図版21）　L59グリッド北西部で検出された井戸状遺構である。確認面で長径2.66ｍ、短径2.58ｍ、深さ1.79ｍを測る円形プランを持つ素掘りの井戸である。

a 構造と機能　掘り方は、2段階からなる。第1段階は確認面から深さ0.55ｍほど椀状に掘り下げられており、「井戸側」と考えられる。第2段階は一辺約1.25ｍの正方形プランで、滞水層部分が深さ1.2ｍ、ほぼ真下に掘り下げられており、「水溜」と考えられる。

b 出土遺物と井戸祭祀　主要遺物は、上中下3層で出土している。

下層（e、f）のf層からは、残存長2.05㎝の横櫛が検出されている。

中層（c、d）からは、灰釉陶器の碗3点（いずれも墨書土器）、緑釉陶器の皿1点、残存長42.5㎝の側板に目釘が残存する曲物状木製品1点、人頭大の礫2個が下層のシルト直上に置かれたような状態で検出された。

上層（a、b）からは人頭大の礫96個が密集した状態で出土した。礫の間の土からは土器片がほとんど検出されなかった。

下層のf層から、出土した横櫛（665）は「水溜」内部での単独出土であり、穿井時または井戸浚えの際の祭祀的性格をもつ投棄であると考えられる。

上層出土の人頭大の礫96個と中層出土の礫2個とは、出土状況から一体のものと考えられる。また水上5区の井戸状遺構SE222（平安時代）でも井戸枠内に人頭大の礫を大量に投棄していることから、井戸廃棄に伴って礫を投入することがあることは確実であり、SE192の礫も井戸廃棄を意図して投入したとしてよいであろう。

礫群の直下で検出された墨書土器、緑釉陶器、曲物状木製品は同一面からの出土であり、一括性が認められ、礫による井戸廃棄（埋井）の前段階の投棄である。また出土層位は帯水層がほぼ埋まって井戸としての機能を終了する段階である。

灰釉陶器の墨書を見ると、「風」（609－1）は風の異体字、「兼」（609－2）は、生と米の合わせ字、「賀」（624－2）は賀の異体字とも考えられる。これらの墨書字句はそれぞれ吉祥句を表わしている可能性も考えられる。

以上の上・中層出土遺物の出土状況から、埋井にかかわると思われる祭祀の祭料として吉祥句を墨書した碗、緑釉皿、曲物状木製品が有機的に関連して用いられ、それらが投棄された直後に大量の礫が投棄されたといえよう。また、この祭祀が行なわれたのは灰釉碗、緑釉皿の年代（猿投窯編年での折戸53号窯式併行期）から10世紀後半と考えられる。

本遺跡において井戸にかかわる祭祀に墨書土器・緑釉陶器などを用いた例は、このSE192が唯一の例である。また井戸の規模も同時代のものと比較して大きい。このことからSE192が数ある井戸の中で特異な地位をもっていたと推定してもよいかもしれない。

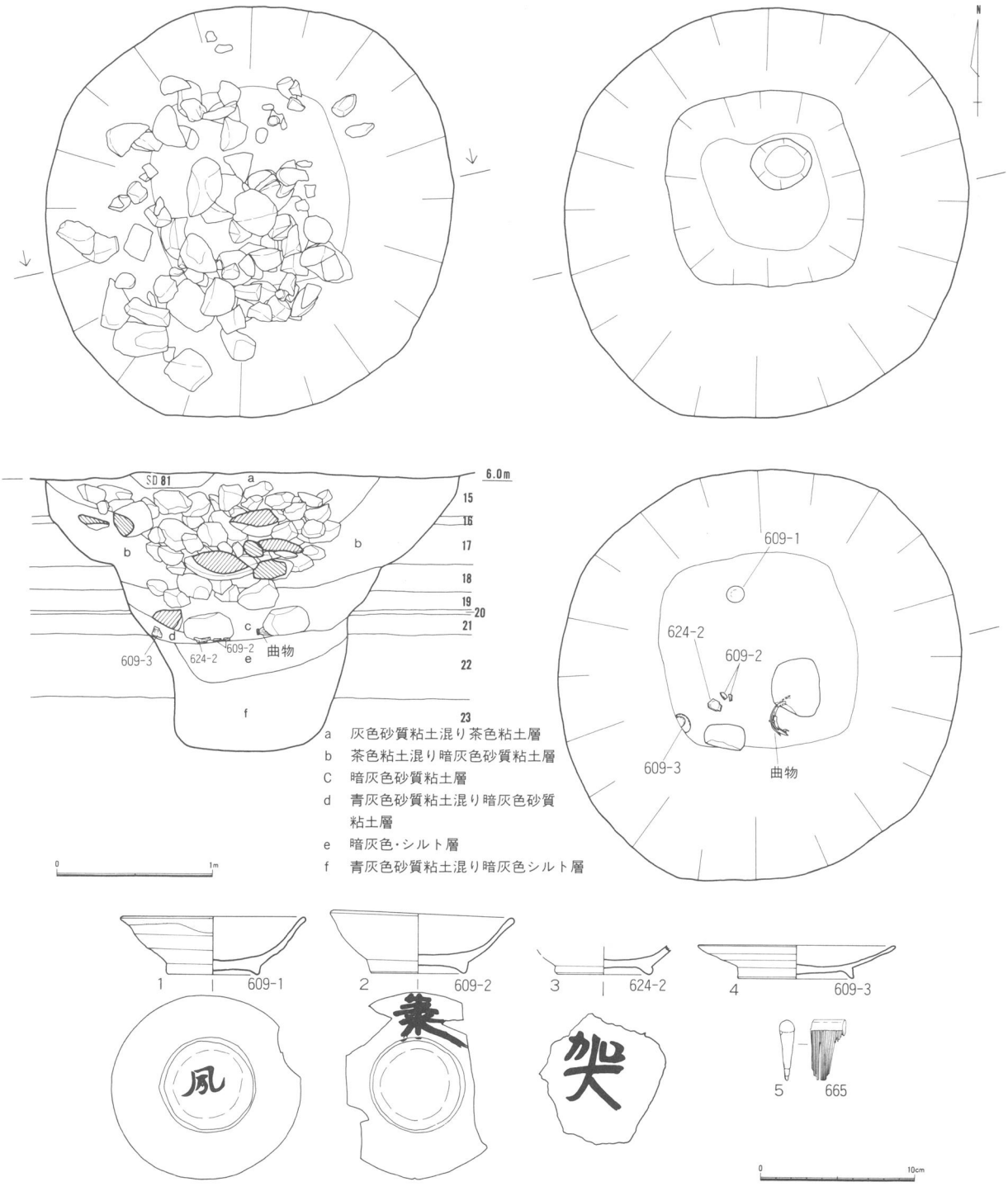
3. 小　　結

本調査区では時代を異にした3個所の祭祀遺構が検出された。要点を以下に略記する。

①井戸状遺構ＳＥ261では使用前または使用時の祭祀に木製平鍬が用いられ、また埋井時の祭祀に腰掛状木製品と壺形土器がセットで納置された可能性がある。

②ＳＸ323は窪地部分の斜面に手捏土器を主体とした土師器群が器種ごとに一括投棄された跡であり、滑石製模造品は1点も検出できなかった。

③ＳＥ192の埋井時の祭祀として中層の同一面から検出された3点の墨書土器と緑釉皿1点さらに篩とも考えられる曲物1点はそのセット関係が認識できた。



第36図　水上1区SE192実測図

第10表　水上1区小穴一覧表

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標高	特　記　事　項
SP159	M54	1.51	0.36	0.64	0.24	5.75	
SP167	M59	0.78	0.49	0.30	0.63	5.96	
SP168	M56	0.44	0.31	0.17	0.70	5.96	
SP169	M56	0.63	0.36	0.49	0.57	5.92	
SP170	M56	0.42	0.29	0.19	0.69	5.92	
SP171	L56	0.37	0.32	5.71	0.86	6.01	
SP172	L58	0.47	0.33	0.10	0.70	6.00	
SP173	M58	0.58	0.49	0.19	0.84	5.97	
SP174	M58	0.58	0.46	0.14	0.79	6.01	
SP175	M58	0.56	0.45	0.13	0.80	6.01	
SP176	M58	0.51	0.41	0.16	0.80	5.98	
SP177	M58	0.45	0.38	0.15	0.84	6.02	平安時代
SP179	M56	0.44	0.32	0.14	0.73	5.91	
SP180	M54	0.46	0.34	0.16	0.74	5.77	
SP181	M54	0.77	0.38	0.29	0.49	5.74	
SP182	M54	0.44	0.33	0.38	0.75	5.76	
SP183	M54	0.85	0.38	0.33	0.45	5.76	
SP184	M54	0.67	0.32	0.24	0.48	5.74	
SP185	M54	0.95	0.67	0.43	0.71	5.68	
SP186	M54	0.11	0.46	0.44	0.41	5.68	
SP187	M54	0.68	0.46	0.20	0.68	5.80	
SP188	M54	0.67	0.42	0.17	0.63	5.81	
SP189	M54	0.75	0.31	0.24	0.41	5.76	
SP190	M54	1.63	0.59	0.18	0.36	5.78	
SP191	M53	0.96	0.45	0.45	0.47	5.70	
SP322	M57	0.82	0.47	0.02	0.57	5.98	
SP323	M57	0.51	0.38	0.05	0.76	5.98	
SP324	M57	0.47	0.35	0.05	0.74	5.98	
SP193	M57	0.43	0.37	0.03	0.86	5.77	
SP251	M54	0.47	0.43	0.07	0.91	5.72	
SP252	M54	0.66	0.49	0.06	0.74	5.70	
SP254	M56	0.65	0.31	0.46	0.48	5.74	古墳時代前期、礎板検出
SP255	M56	0.65	0.33	0.16	0.51	5.76	
SP256	M56	0.32	0.23	0.06	0.71	5.75	
SP257	M56	0.29	0.25	0.11	0.86	5.76	
SP258	M56	0.19	0.16	0.09	0.84	5.79	
SP259	M56	0.37	0.28	0.11	0.75	5.75	

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標高	特　記　事　項
SP263	N52	0.64	0.54	0.13	0.84	5.54	
SP264	M52	0.75	0.59	0.13	0.79	5.65	
SP265	N52	0.37	0.27	0.03	0.73	5.50	
SP266	N52	0.24	0.17	0.05	0.71	4.93	
SP267	N52	0.31	0.29	0.02	0.94	5.36	
SP268	N52	0.27	0.21	0.03	0.78	5.35	
SP269	M52	0.27	0.24	0.23	0.89	5.72	
SP270	M53	0.47	0.38	0.16	0.81	5.47	
SP271	M53	0.77	0.25	0.12	0.32	5.50	
SP272	M53	1.06	0.65	0.06	0.61	5.49	
SP273	M59	1.13	0.65	0.12	0.58	5.73	
SP274	M53	0.47	0.34	0.04	0.72	5.50	
SP275	M54	0.42	0.29	0.25	0.69	5.48	
SP276	M55	0.31	0.28	0.19	0.90	5.55	
SP277	M55	0.29	0.27	0.04	0.93	5.58	
SP278	M55	0.36	0.31	—	0.86	—	
SP279	L59	0.66	0.65	0.21	0.98	5.89	
SP281	M56	0.44	0.33	0.41	0.75	5.71	礎板検出
SP282	M55	0.25	0.24	0.08	0.96	5.71	
SP283	M55	0.22	0.19	0.15	0.86	5.55	
SP284	L52	0.56	0.49	0.51	0.88	5.29	
SP285	L52	0.38	0.29	0.08	0.76	5.27	
SP286	L53	0.31	0.25	0.14	0.81	5.42	
SP287	L53	0.52	0.36	0.20	0.69	5.51	
SP288	M53	0.31	0.20	0.22	0.65	5.58	
SP289	M53	0.51	0.38	0.11	0.75	5.56	
SP290	L59	0.48	0.27	0.21	0.56	5.89	
SP291	K58	0.32	0.25	0.14	0.78	5.24	
SP292	L53	0.49	0.35	0.10	0.71	5.39	
SP293	L53	0.35	0.28	0.15	0.80	5.45	
SP295	M54	0.38	0.36	0.17	0.95	5.48	
SP296	L56	0.92	0.78	0.48	0.85	5.25	古墳時代前期
SP303	M54	0.82	0.52	0.30	0.63	5.56	
SP307	M54	0.51	0.48	0.13	0.94	5.53	
SP308	L55	3.64	1.21	0.18	0.33	5.50	
SP309	L54	2.48	1.49	0.11	0.60	5.44	
SP310	L54	1.09	0.26	0.03	0.24	5.51	
SP311	L53	1.27	0.61	0.29	0.48	5.51	
SP312	M53	0.34	0.31	0.08	0.91	5.61	

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標高	特　記　事　項
SP313	M54	1.31	0.89	0.05	0.68	5.48	
SP315	M53	0.44	0.28	0.08	0.64	5.53	
SP316	L52	0.66	0.65	0.11	0.98	5.26	
SP317	M54	0.71	0.68	0.20	0.96	5.54	
SP318	M56	0.37	0.32	0.20	0.86	5.59	
SP319	L57	0.56	0.43	0.06	0.76	5.56	
SP320	M56	0.65	0.54	0.41	0.83	5.59	
SP321	L57	1.20	0.65	0.07	0.54	5.38	

第11表　水上1区溝状遺構一覧表

遺構番号	グリッド	延　長	幅	深　さ	遺構面標高	特　記　事　項
SD68	L62～L58	54.75	0.88	0.72	6.11	古墳時代前期
SD81	K66～L52	133.10	1.60	0.46	6.05	平安時代後期
SD152	L54	2.15	0.73	0.22	5.16	
SD153	L54	3.46	0.57	0.50	5.75	
SD154	L54	6.10	0.74	0.42	5.64	
SD155	L54	5.06	1.38	0.91	5.49	平安時代
SD160	L53	17.25	1.55	1.10	5.73	平安時代後期
SD161	M53	3.02	0.80	0.71	5.72	
SD163	L56	1.60	0.95	—	5.75	
SD164	L56	5.18	0.91	0.51	5.90	
SD165	L57	1.86	0.36	0.27	5.58	平安時代後期
SD166	M52	37.20	3.35	2.35	5.90	平安時代後期
SD178	L58	2.98	1.47	0.46	6.04	鎌倉時代
SD194	L59	5.79	0.96	0.68	5.75	
SD195	M57	1.72	0.73	0.52	5.63	
SD253	M54	1.98	0.31	0.27	5.70	
SD280	K59	4.30	0.46	0.37	5.70	
SD294	L57	19.14	0.61	0.73	5.43	
SD301	L55	4.53	1.53	0.77	5.48	
SD325	L54	10.40	0.75	0.51	5.65	

水上２区（第29図）

1. 概　　要

水上２区は河口起点より937ｍ上流に位置し現大谷川左岸部にあたる。地形的には微高地にあたる。ここでの遺物包含層は１層のみ検出された。盛土と近世以降の耕作土の直下に基盤層である黄灰白色砂質粘土（水上１区の15層に整合する）が露出し、この上面に古墳時代前期から近世までの遺構が混在して検出された。このうち調査区西側では近世粘土採掘跡ＳＸ345（長さ47.4ｍ、最大幅3.8ｍ、深さ0.14ｍ）が南北に掘り込まれ、水上１区の近世粘土採掘跡ＳＸ157に連続している。また平安後期の水路ＳＤ81が調査区中央を南北に貫き、南東部では古墳前期の溝状遺構ＳＤ68（水上１区であわせて述べる）が南流している。調査区北部中央には古墳時代前期の土坑ＳＰ142が検出された。このほか多くの小穴、土坑が検出された。とりわけＫ64グリッドを中心とする北部では柱穴とみられる小穴が多数確認できた。しかし確認面が後世の開発による撹乱を受けているために、遺構底面がわずかに残るのみで、しかも出土遺物も限られており、年代推定の困難なものが多く、小穴・土坑群の性格は不明なものが多い。

2. 遺構各説

ＳＰ142（図版23－３－４）　Ｋ65グリッド南辺に位置し、隅丸方形のプランを有し、長径2.24ｍ、短径1.03ｍ、深さ0.54ｍを測る土坑状遺構である。遺構中央部は南北に平安時代後期の水路ＳＤ81によって破壊されかつ近世の耕作で削平されており、表土を除去すると遺構覆土がただちに確認され、その中央から古式土師器の壺形土器が検出された。ＳＰ142の底部は基盤層のシルト層にまで達しており、井戸状遺構になる可能性もある。

第12表　水上２区小穴一覧表

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝１）	遺構面標高	特　記　事　項
ＳＰ50	Ｋ65	0.40	0.25	0.08	0.63	6.08	
ＳＰ51	Ｊ65	0.31	0.21	0.01	0.68	6.00	
ＳＰ5	Ｊ66	0.24	0.22	0.08	0.92	6.11	
ＳＰ5	Ｊ65	1.32	0.58	0.27	0.44	6.07	
ＳＰ5	Ｋ65	0.42	0.26	0.02	0.62	6.18	
ＳＰ5	Ｋ64	0.42	0.33	0.08	0.79	6.23	
ＳＰ5	Ｋ64	0.30	0.29	0.03	0.97	6.19	
ＳＰ57	Ｋ64	1.08	0.48	0.05	0.44	6.08	
ＳＰ58	Ｋ64	0.51	0.41	0.16	0.80	6.02	平安時代
ＳＰ59	Ｋ65	0.55	0.43	0.21	0.78	6.13	
ＳＰ60	Ｋ64	0.61	0.49	0.09	0.80	6.17	平安時代
ＳＰ61	Ｋ64	0.96	0.60	0.18	0.63	6.18	
ＳＰ62	Ｋ64	0.66	0.51	0.21	0.77	6.21	
ＳＰ63	Ｋ64	0.62	0.59	0.37	0.95	6.12	古墳時代前期
ＳＰ64	Ｋ64	1.08	0.93	0.38	0.86	6.21	
ＳＰ65	Ｋ64	0.62	0.56	0.19	0.90	6.15	
ＳＰ66	Ｋ64	0.77	0.72	0.22	0.94	6.20	
ＳＰ67	Ｋ64	0.83	0.80	0.28	0.96	6.16	

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標高	特　記　事　項
SP69	K62	1.01	0.34	0.29	0.34	6.22	
SP70	K62	1.11	0.79	0.19	0.71	6.10	古墳時代前期
SP71	K62	0.61	0.49	0.15	0.80	6.18	
SP72	K64	0.60	0.41	0.28	0.68	6.15	
SP73	K64	0.93	0.58	0.22	0.62	6.15	
SP76	J65	0.65	0.56	0.35	0.86	6.09	
SP77	J65	0.79	0.75	0.42	0.95	6.07	
SP78	K66	0.58	0.47	0.17	0.81	6.13	
SP79	K66	0.57	0.47	0.12	0.82	6.14	
SP80	K66	1.07	0.68	0.27	0.64	6.13	古墳時代前期
SP83	K65	0.39	0.34	0.03	0.87	6.11	
SP84	K65	0.31	0.27	0.01	0.87	6.14	
SP85	K65	0.44	0.37	0.02	0.84	6.17	
SP86	K65	0.66	0.44	0.04	0.67	6.02	
SP89	K64	1.10	0.48	0.02	0.44	6.17	
SP90	K64	0.56	0.41	0.13	0.73	6.09	
SP91	K64	0.50	0.46	0.04	0.92	6.08	
SP92	K63	0.79	0.46	0.14	0.58	6.15	
SP93	K64	0.70	0.43	0.09	0.61	6.19	
SP94	K64	0.67	0.49	0.05	0.73	6.03	
SP95	K64	0.62	0.54	0.07	0.87	6.06	
SP96	K63	0.67	0.49	0.04	0.73	6.15	古墳時代前期
SP97	K64	0.51	0.17	0.04	0.33	6.22	
SP98	K64	0.19	0.17	0.06	0.89	6.19	
SP99	K64	0.19	0.18	0.10	0.95	6.23	
SP100	K64	1.32	0.81	0.12	0.61	6.20	
SP102	K62	1.14	0.86	0.12	0.75	6.19	
SP103	K62	1.46	0.61	0.27	0.42	6.20	
SP104	K62	1.32	0.51	0.20	0.39	6.16	
SP105	K62	0.52	0.43	0.21	0.83	6.16	
SP106	K61	0.46	0.29	0.21	0.63	5.88	古墳時代前期
SP108	L62	0.67	0.64	0.14	0.96	6.20	
SP109	L62	0.82	0.44	0.05	0.54	6.18	
SP111	L61	0.82	0.51	0.10	0.62	6.04	
SP112	L60	0.95	0.84	0.28	0.88	6.00	古墳時代前期
SP113	L60	0.66	0.66	0.27	1.00	6.05	古墳時代前期
SP114	L60	0.86	0.74	0.24	0.86	6.09	
SP115	L61	0.92	0.84	0.18	0.91	6.08	
SP116	K61	0.64	0.62	0.11	0.97	6.09	

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標高	特　記　事　項
SP118	K65	0.27	0.26	0.02	0.96	6.19	
SP124	L60	1.24	0.51	0.30	0.41	6.08	
SP125	K61	0.74	0.42	0.08	0.57	6.10	
SP126	K61	0.69	0.50	0.35	0.72	6.15	
SP127	L61	0.84	0.55	0.21	0.65	6.15	古墳時代前期
SP128	K61	0.69	0.36	0.03	0.52	6.12	
SP129	K61	0.73	0.41	0.13	0.56	6.12	
SP130	L61	1.29	0.59	0.15	0.46	6.15	
SP132	K61	0.64	0.25	0.08	0.39	6.15	古墳時代前期
SP133	L60	1.26	0.90	0.49	0.71	6.01	
SP137	L64	0.54	0.31	0.12	0.57	6.20	
SP139	L64	0.38	0.32	0.06	0.84	6.15	
SP140	K62	0.93	0.57	0.38	0.61	6.18	
SP141	K65	1.23	1.14	0.65	0.93	6.20	古墳時代前期
SP142	K64	2.24	1.03	0.54	0.46	6.15	古墳時代前期
SP143	K65	1.15	1.00	0.20	0.87	6.09	
SP144	L61	0.44	0.29	0.14	0.66	6.12	
SP145	K64	0.34	0.27	0.02	0.79	6.07	
SP146	K64	1.00	0.93	0.11	0.93	6.18	
SP147	K64	0.61	0.59	0.02	0.97	6.15	
SP148	K64	0.64	0.48	0.06	0.75	6.18	
SP149	K63	0.31	0.31	0.09	1.00	6.16	
SP326	K63	0.49	0.41	0.14	0.84	6.17	
SP327	L63	0.39	0.32	0.20	0.82	6.20	
SP328	L63	0.31	0.28	0.07	0.90	6.14	
SP329	L63	0.28	0.26	0.08	0.93	6.14	
SP330	L63	0.32	0.24	0.09	0.75	6.18	
SP333	L62	0.23	0.20	0.15	0.87	6.24	
SP334	L61	0.54	0.41	0.11	0.76	6.17	
SP336	L61	0.32	0.29	0.11	0.91	6.17	
SP337	L61	0.66	0.49	0.08	0.74	6.11	
SP338	L61	0.58	0.38	0.11	0.66	6.01	
SP339	K61	0.70	0.21	0.09	0.30	6.05	
SP341	L60	0.22	0.17	0.09	0.77	5.98	
SP342	K64	0.35	0.27	0.07	0.77	6.20	
SP343	L63	(0.92)	(0.78)	0.04	0.85	6.08	

第13表　水上２区溝状遺構一覧表

遺構番号	グリッド	延　長	幅	深　さ	遺構面標高	特　記　事　項
SD74	K63	5.34	1.46	0.60	6.19	
SD82	K66	3.08	0.58	0.27	6.12	
SD88	K65	4.56	1.03	0.54	6.11	古墳時代前期
SD107	L62	2.84	0.52	0.22	6.22	
SD117	K65	4.06	0.70	0.40	6.09	
SD119	J64	2.38	0.51	0.39	6.1	
SD120	K64	3.31	0.68	0.34	6.09	
SD121	K64	1.04	0.85	0.32	6.08	
SD122	K64	4.96	2.09	1.10	6.22	
SD123	K63	7.04	1.92	1.04	6.18	
SD134	L62	1.99	0.68	0.13	6.22	
SD340	K60	2.63	0.21	0.18	6.08	
SD344	K63	5.06	1.18	0.41	6.07	

水上３区（第29図）

1. 概　　要

水上３区は河口起点より997ｍ上流に位置し現大谷川左岸部にあたる。地形的には微高地である。ここでの遺物包含層は次の３面であった。第１面では、２層の暗灰褐色砂質粘土を覆土とする中世溝状遺構が検出された。これらの溝状遺構は周辺地籍図からの考察を含めて、中世居館跡の一部と推定している。第２面は４層の紫茶色粘土を覆土とする古墳時代中期の遺構群、第３面は、５層の茶褐色粘土を覆土とする古墳時代前期の遺構群がそれぞれ検出された。第２面、第３面ともに、溝状遺構と井戸状遺構（土坑状遺構）と小穴群が確認された。

2. 遺構各説

ＳＸ617　K67グリッドを中心に、基盤層である６層の黄白色粘土を掘り込んだもので確認面での標高6.1ｍ、深さ0.1ｍ、東西残存長10.3ｍ、南北全長6.6ｍを測る長方形の遺構である。ＳＸ617の中には４個所の小穴があり、小穴の覆土中から古式土師器片が検出された。

ＳＤ491（図版28－1）　J66・K66グリッドの北部にあり、ＳＸ617の南側に接し、基盤層である６層の黄白色粘土と７層の白色粘土を掘削している。延長10.2ｍ、幅3.04ｍ、深さ0.39ｍを測る東西方向の溝状遺構である。覆土中から古代土師器片が検出された。

ＳＤ465　J66・K66にありＳＤ491の南側に約30㎝隔てて並行して検出された東西方向の溝状遺構である。延長9.06ｍ、幅0.65ｍ、深さ0.10ｍを測る。覆土中から古式土師器片が検出されている。

ＳＤ609　L69グリッドにある東西方向の溝状遺構である。延長9.90ｍ、幅0.92ｍ、深さ0.49ｍを測る覆土中からは古式土師器が検出されている。

ＳＤ459・ＳＤ460　ともにJ68グリッドにある南北方向の溝状遺構である。前者は延長2.91ｍ、幅0.59ｍ、深さ0.46ｍを測る。後者は延長3.25ｍ、幅0.61ｍ、深さ0.13ｍを測る。ともに覆土中から遺物は検出されなかった。覆土は５層の茶褐色粘土であった。

以上の古墳時代前期の５本の溝状遺構のうち、ＳＤ491・ＳＤ465・ＳＤ609はＳＸ617の南辺および北

辺にほぼ並行し、SD459・SD460はSX617の西辺に並行している。

SP464（図版27—5） J66グリッドで検出された土坑状遺構である。長径2.69m、短径1.96m、深さ0.74mを測る。西半分は、1942（昭和17）年の大谷川改修時に破壊されていた。掘り方は、円形プランで3段階に掘削されている。底面直上の覆土中から古式土師器片が出土した。この覆土の内側に、深さ約0.65mを測る2段階目の掘り方が検出されている。この掘り方の内面全体からは、炭化物が一面に付着して検出された。底部には焼土、灰が確認できた。覆土中からは、礫が数点検出されたが、火をうけた痕跡は見られない。また土錘1点、手捏土器1点が古式土師器と伴出している。SP464は形状から見て、掘削当初は井戸として使用された可能性をもつものの、2段階目の掘り方が1段階目の掘り方とほぼ同じ規模であり、炭化物・焼土の検出状況から見て、炉または廃棄物を焼却するための土坑として使用された可能性もある。

なおSX617の方格軸と周辺の溝状遺構の方格軸がおおむね一致している。

SD456（図版27—1・2） J66グリッド北部からK67グリッド南部に位置し、延長13.13m、最大幅3.72m、深さ0.15mを測る溝状遺構である。覆土第4層の紫茶粘土層からは、多数の土師器片と3点の手捏土器が検出された。

SE468（第117図 図版28—2） K66グリッドに位置し、5層の茶褐色粘土層に掘り込まれた井戸状遺構である。掘り方の東側3分の2が現代水路により破壊されていたため、遺構として確認できたのは底面のみであった。底面は一辺約1.15mの方形のプランを有し、その中央部に直径0.92m、深さ0.07mの円形の掘り込みがある。円形の掘り込みは7層の砂層に達しており、水溜の機能をもつと考えられる。井戸枠などの検出はなく、現状では素掘りと推定しておく。覆土中から検出された土師器片から古墳時代中期とした。

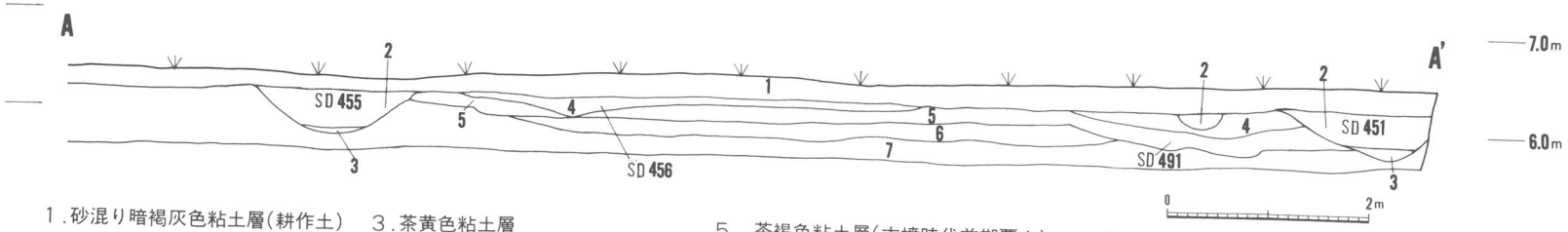
J67・K67グリッドの5層上面から、6層の紫茶粘土層を覆土とする11個所の小穴が検出され、K67グリッドの6層からは炭化物が、一辺約1.2mの範囲で検出された。前述の小穴群と6層中から出土した土師器片により、古墳時代中期とした。

SE463（第117図 図版27—4） J67グリッドで検出された素掘りの井戸状遺構である。長径2.22mを測り円形プランを有する。深さは0.98mを測る。遺構中央部をSD453によって切られているため、全容を明らかにすることは困難であった。下段部は砂層に掘り込まれ、「水溜」の機能を果したと考えられる。下段部の覆土中から土師器片が検出されたが、年代の推定はできなかった。

SR150（図版25—5、26） 水上3区のJ68グリッドの西部と水上1区の西部全域で検出された大型水路状遺構である。確認された全長は約171m、幅8.2m、深さ2.55mである。水上1区での検出状況を見ると、標高5.95mの中世遺構面から45〜50度の傾斜で左岸部が掘削されている。水路底面は、幅約2.0mの平坦面となっており、右岸部も左岸部と同様の傾斜で0.3mの立ち上がりが確認された（別個体）。また、礫群の間から銭貨4枚が検出された。初鋳年代621年または845年の「開元通宝」1枚、1023年の「天聖元宝」1枚、1408年の「永楽通宝」1枚の計3枚の輸入銭と表裏両面ともに摩滅した銅銭1枚である。これらの銭貨は、一括投棄と考えられる。また、覆土最下層から白磁、青磁片も検出されている。SR150の年代は銭貨の鋳造年代から15世紀初頭をさかのぼらないと考えられる。

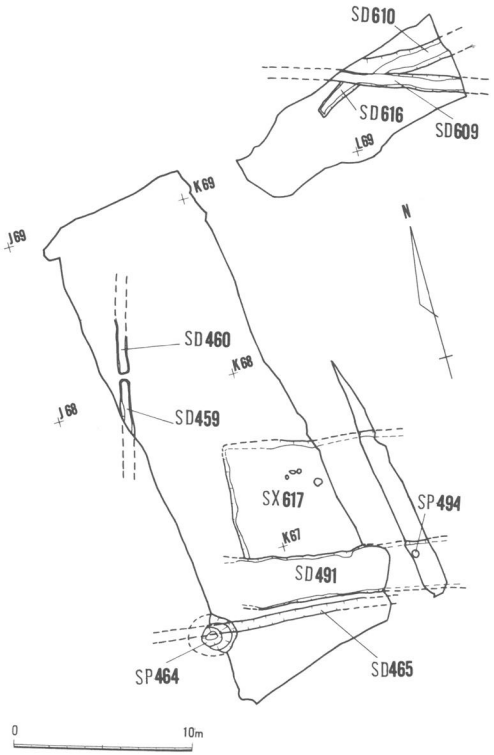
SD451（図版24—1） 水上3区J66・K66グリッドで東西方向に検出された、東から西へ流れる溝状遺構である。確認面での延長は9.46m、幅1.57m、深さ0.41mを測る。SD451の覆土は2層の暗灰色粘土層である。

SD458・SD457・SD452 いずれも水上3区北部のJ68・J69グリッドで東西方向に検出され、東から西に流れる溝状遺構である。SD458・SD457は、基盤層である7層の白色粘土層に掘り込まれ、前者は延長14.05m、幅2.20m、深さ0.86mを測る。後者は延長4.88m、幅0.72m、深さ0.24mを測る。S

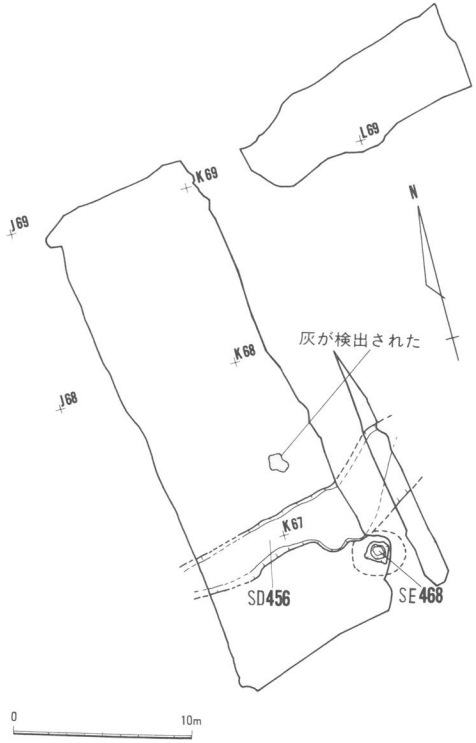


1．砂混り暗褐灰色粘土層(耕作土)
2．暗灰褐色砂質粘土層
3．茶黄色粘土層
4．紫茶色粘土層(古墳時代中期覆土)
5．茶褐色粘土層(古墳時代前期覆土)
6．黄白色粘土層
7．白色粘土層(A'地点より北へ5m付近より南は砂層となる) 基盤層

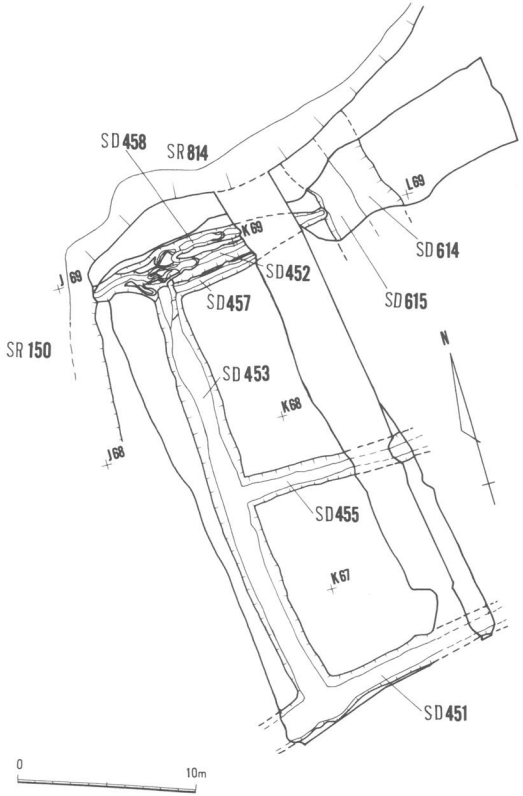
水上3区土層断面図



古墳時代前期遺構群



古墳時代中期遺構群



中近世遺構群

第37図　水上3区土層図・実測図

D452はSD458の覆土を掘削して作られたもので、延長14.05m、幅1.10m、深さ0.20mを測る。SD458・SD457の覆土は、2層の暗灰褐色粘土層である。

SD455（図版24－3） 水上3区のJ67・K67グリッドで東西方向に検出され、東から西へ流れる溝状遺構である。確認面での延長は、10.90m、幅は1.71m、深さは0.47mを測る。覆土は2層の暗灰色粘土層である。

SD453（図版24－2） 水上3区のJ68グリッドからJ66グリッドまで南北方向に検出された溝状遺構である。確認面での全長は24.18m、幅は2.26m、深さ0.52mを測る。覆土は2層の暗灰色粘土層である。

SD614・SD615（図版24－4） いずれも水上3区北西拡張部分のK69グリッドで南北方向に検出された。前者の延長は4.65m、幅は2.15m、深さは0.39m。後者の延長は4.10m、幅は2.05m、深さは0.36mを測る。覆土はともに2層の暗灰褐色砂質粘土である。

第14表　水上3区小穴一覧表

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標高	特　記　事　項
SP464	J66	2.69	1.98	0.95	0.74	6.37	古墳時代前期
SP466	J66	0.63	0.54	0.48	0.86	6.12	
SP469	J66	0.56	0.48	0.24	0.86	6.15	
SP470	K66	0.25	0.20	0.14	0.80	6.15	
SP472	J67	0.11	0.11	0.12	1.00	6.13	
SP473	J67	0.42	0.41	0.11	0.98	6.10	
SP474	J67	0.32	0.22	0.18	0.69	6.12	
SP475	J67	0.27	0.21	0.12	0.78	6.05	
SP476	J67	0.13	0.12	0.10	0.92	6.10	
SP477	J67	0.20	0.17	0.19	0.85	6.10	
SP479	J67	0.26	0.19	0.28	0.73	6.08	
SP480	J67	0.32	0.24	0.13	0.75	6.08	
SP481	J67	0.18	0.17	0.07	0.94	6.08	
SP482	J67	0.14	0.14	0.08	1.00	6.07	
SP483	J67	0.20	0.14	0.08	0.70	6.10	
SP484	K67	0.24	0.18	0.15	0.75	6.02	
SP485	K67	0.38	0.19	0.05	0.50	6.03	
SP486	K67	0.35	0.19	0.11	0.54	6.03	
SP492	K67	0.44	0.38	0.09	0.86	6.03	
SP493	J66	0.21	0.18	0.08	0.86	6.02	
SP494	K66	0.41	0.38	0.35	0.93	6.19	古墳時代前期

第15表　水上3区溝状遺構一覧表

遺構番号	グリッド	延　長	幅	深　さ	遺構面標高	特　記　事　項
SD451	K66	9.46	1.57	0.41	6.18	中近世
SD452	J68	14.05	1.10	0.20	5.85	中近世

遺構番号	グリッド	延　長	幅	深　さ	遺構面標高	特　記　事　項
SD453	J 67	24.18	2.26	0.52	6.15	中近世
SD455	K 67	10.90	1.71	0.47	6.18	中近世
SD456	K 67	13.13	3.72	0.15	6.19	古墳時代中期
SD457	J 68	4.88	0.72	0.24	6.08	
SD458	J 68	14.05	2.20	0.86	5.85	
SD459	J 68	2.91	0.59	0.20	6.07	
SD460	J 68	3.25	0.61	0.13	6.09	
SD465	J 66・K 66	9.06	0.65	0.10	6.17	
SD491	J 66・K 66	10.20	3.04	0.39	6.05	
SD609	L 69	9.90	0.92	0.49	5.84	古墳時代前期
SD610	L 69	4.26	1.22	0.46	5.86	
SD614	K 69	4.65	2.1	0.39	5.65	
SD615	K 69	4.10	2.05	0.36	5.65	
SD616	K 69	2.16	0.74	0.12	5.61	古墳時代前期

2. 小　　結

中世大型水路状遺構ＳＲ150と中世居館（第38図）

水上１・２・３区はいずれも1876（明治９）年作製の大谷村地籍図によれば旧小字「構井ノ坪」北西辺に位置している。この「構井ノ坪」は地元では「構井のおしろ」とも呼ばれ、かつてここに「武士の居館」があったという伝承がある。今回、同地籍図による旧小字・地割と1880（明治13）年筆写の『有度郡大谷村地租改正反別帳』による一筆ごとの土地利用状況を同一図面に表わし、あわせて発掘調査用グリッド座標系を記入した合成図（第38図）を作成し、旧地籍図により推定できることがらと、発掘調査によって確認できたことがらを総合して、水上１・３区の中世大型水路状遺構ＳＲ150の性格を考えていきたい。

中世居館との関連を推定できる地名として、まず屋敷の構を意味する「構井ノ坪」。「構井ノ坪」を北東、南西から囲むようにして「新堀ノ坪」「堀ノ坪」がある。これらは堀割を想定させる。さらに「構井ノ坪」の北西の「竹之内坪」、西側の「西大内坪」は、それぞれ武士の屋敷（館）を示唆している。「西大内」という表現からは居館の西側部分を示していると考えられる。また周辺にある「大弓ノ坪」「馬場坪」「出口ノ坪」も弓場・馬場・居館の出口の存在を推定させる。「大弓ノ坪」の東に隣接する「下景政坪」「上景政坪」は景政という中世武士的人名との関連も考えてよいかも知れない。

また旧小字の検討資料とした1672（寛文12）年『駿州久能御神領宮川村大谷村片山村御検地帳』を見ると、「上半坪」の「上半」は、「上半堀」。「構井ノ坪」の「構井」は「構ノうしろ」と記されている。「上半坪」には堀が存在した可能性が考えられ、さらに「構ノうしろ」は現在伝承されている「構井のおしろ」とも関連があると考えられる。

地割と土地利用から考えると、まず「堀ノ坪」にある逆Ｌ字形の水田が、現大谷川まで続いていることがわかる。これが堀の一部であると安本博は『静岡県の中世城館跡』（1981）で推定している。さらにこの堀は北にのび、「新堀ノ坪」の南東部（72列付近）まで達していることが、水田分布から推定できる。また水上系Ｎ72グリッド付近で、現大谷川から北東側に湾曲して東側の水田部分に連続する地割境は、蛇行を伴う旧河道の存在を示唆しており、これが「構井ノ坪」の北側の堀として転用され、「新

第38図　「構井之坪」関連地籍図（大谷地区部分、明治9年作成）

堀ノ坪」の小字名に関連したとも考えられる。発掘調査からわかったことは、この「構井ノ坪」の南側と北側の掘推定地がそれぞれ西大谷１・２区と水上７区で検出された旧大谷川流路とほぼ一致することである。このことは、地籍図上で堀と推定できるものが、旧大谷川流路そのものの一部の区間である可能性が高いことを意味している。

コの字形の堀（A）に囲まれた内側に、さらに２重にＢ・Cの堀が地籍図から推定できる。このＢ、Cの堀については、沼館愛三が『静岡県郷土研究』第５輯の「有度山塊を中心とせる古城館址之研究」(1935）の中で「構といふ地名」に言及され、「遺構一部の所有者神谷氏の言に依れば、土圍と濠を以て圍まれたる方形の屋敷城であった」としている。また、「現在は開墾せられて其遺構として認むべきものがない」と述べているものの一部がその範囲に含まれることは明らかである。前記の『地租改正反別表』によればＢ・Cを含む道路敷で囲まれた方形区画内は神谷清吉氏の所有とあり、それが昭和初期以前に作成されたと推定できる地籍図（大谷農協所有）では地割線が変更され、畑地はほとんど水田に変えられてしまっている。よって破壊は明治９年以降昭和初期以前ということになる。

大型水路状遺構として検出されたＳＲ150は、コの字形の堀（A）と連結して「構井ノ坪」の周濠となっていたと考えられる。「構井ノ坪」関連居館址は第38図に示したように東西を南北に走る根方街道（大谷街道）と久能街道に囲まれ、北辺を「大弓ノ坪」の北側を東西に通る宮川道、南辺を大正寺沢川に囲まれた逆台形の縄張りの中に旧大谷川流路の蛇行を防御用の堀として巧みに利用し、「構井ノ坪」を中核部分とした平城と推定しうる。

中世は、平安期と同様水位の高い時代であり、水上７区土層図の第41図を見てもわかるように川幅が広がり、それまでの川岸の居住域が浸水し、比較的高操な微高地部分である「構井ノ坪」部分が島状に点在することとなり、中世の居住域となったものと考えられる。ＳＲ150は前述したような防御的役割の周濠をつくるためばかりでなく、水はけをよくするためのバイパスの機能も兼ねていたと推定している。

その後、中世の終末をむかえると、防御的周濠の機能は不要となり、かつ湾曲部の水はけは直流部と比べると悪く、粘土がしだいに厚く埋積していき、新田開発の対象地となっていったと考えられる。同時に直流部分のＳＲ150はバイパスから本流へと機能を変えていったと思われる。

なお、1820（文政３）年に書かれた『駿河記』にある「高松、構之森」「古此処に城ありて……」の「構之森」と大谷の「構井ノ坪」との異同は不明である。

第16表　「構井ノ坪」関連小字一覧表

大谷「構井ノ坪」関連		高松「構之森」関連				
1876（明治９）地籍図	1672（寛文12）検地帳	1809（文化６）駿河記	1830（文政13）駿河国新風土記	1843（天保14）駿國雑誌	1861（文久元）駿河志料	1912（大正元）大里村誌
	（坪名）					
構井ノ坪	構ノうしろ	構之森	カマへの森	構へノ森	構の森	
堀ノ坪	堀	四荒神社	荒神社		社	
新堀ノ坪	新堀	堀	堀		堀	
竹之内坪	竹之内	鑓場	鑓場		鑓場	鎗畑
西大内坪	西大内	大屋敷	大屋敷	大屋敷	大屋敷	奥屋敷
大弓ノ坪	大弓					神明原（文久４年再建五輪塔１基）
上景政坪		古此処に城ありて四隅に荒神を祭る。後合て一社とすと云。	昔この所に城ありて城の四隅に荒神ありしを合せ祭りたりといふ。		古此所に城廓ありて四隅に祭れる社存りしを後に一社に遷し祭ると云ふ。	矢塚（所々ニアリ、小ナル森ナリ）
下景政坪	景政					
馬場坪	場々					久保田・森（五輪塔あり）
上半坪	上半坪					高松
	※「坪字操出シ之目録」(1805)参照					

「構之森」の説明

水上５・６区（第22図）

1. 概　　要

水上５・６区は河口起点より860ｍ上流に位置し、現大谷川右岸にあたる。微高地であるため遺構検出面が高く表土下20㎝30㎝で基盤層になる。したがって包含層は１面しか認められず同一面に古墳時代初頭の小穴から近世の粘土採掘跡までが検出された。

2. 遺構各説

ＳＥ208（第22図）　Ｈ58グリッドで検出された素掘りの井戸状遺構である。直径1.4ｍの円形プランをもつ。掘り方底面の標高は5.7ｍを測り検出面との比高差は0.5ｍと浅い。断面形はすり鉢を呈する。出土した土器より古墳時代後期の井戸状遺構と考える。

ＳＥ317（第22図）　Ｈ55グリッドで検出された素掘りの井戸状遺構である。長径1.65ｍ、短径1.46ｍの長円形プランをもつ。掘り方底面の標高は4.8ｍを測り、検出面との比高差は1.24ｍである。出土した土器から平安時代の井戸状遺構と考える。

ＳＥ221（第22図）　Ｊ54グリッドとＪ54グリッド境界部分で検出された木組の井戸状遺構である。長軸1.42ｍ、短軸1.38ｍの不整円形プランを有する。井戸枠は四隅に角柱をもつ縦板組である。横機の存在は崩壊が著しく明らかでない。中央よりやや東寄りに掘り込まれた水留めは井戸枠底面より35㎝深く、標高4.81ｍを測る。検出面との比高差は0.8ｍである。出土遺物から平安時代の井戸状遺構と考える。

ＳＥ212（第22図）　Ｈ56グリッドで検出された素掘りの井戸状遺構である。長軸1.61ｍ、短軸1.34ｍの不整形掘り方プランをもつ。掘り方底面の標高は5.18ｍで検出面との比高差が0.1ｍである。出土した山茶碗から平安時代末期の井戸状遺構とした。

ＳＥ222（第22図）　Ｈ59グリッドで検出された井桁の井戸枠をもつ井戸状遺構である。直径1.35ｍの円形プランを呈する。掘り方底面の標高は5.58ｍで、検出面との比高差は0.43ｍと浅い。井桁は１段で幅20㎝、長さ80㎝程度の板材４枚を柄によって組んでいる。廃棄時に20㎝大の礫を井戸枠内に投棄している。出土遺物は土器の破片のみで年代は明らかではないが、平安時代と推定した。

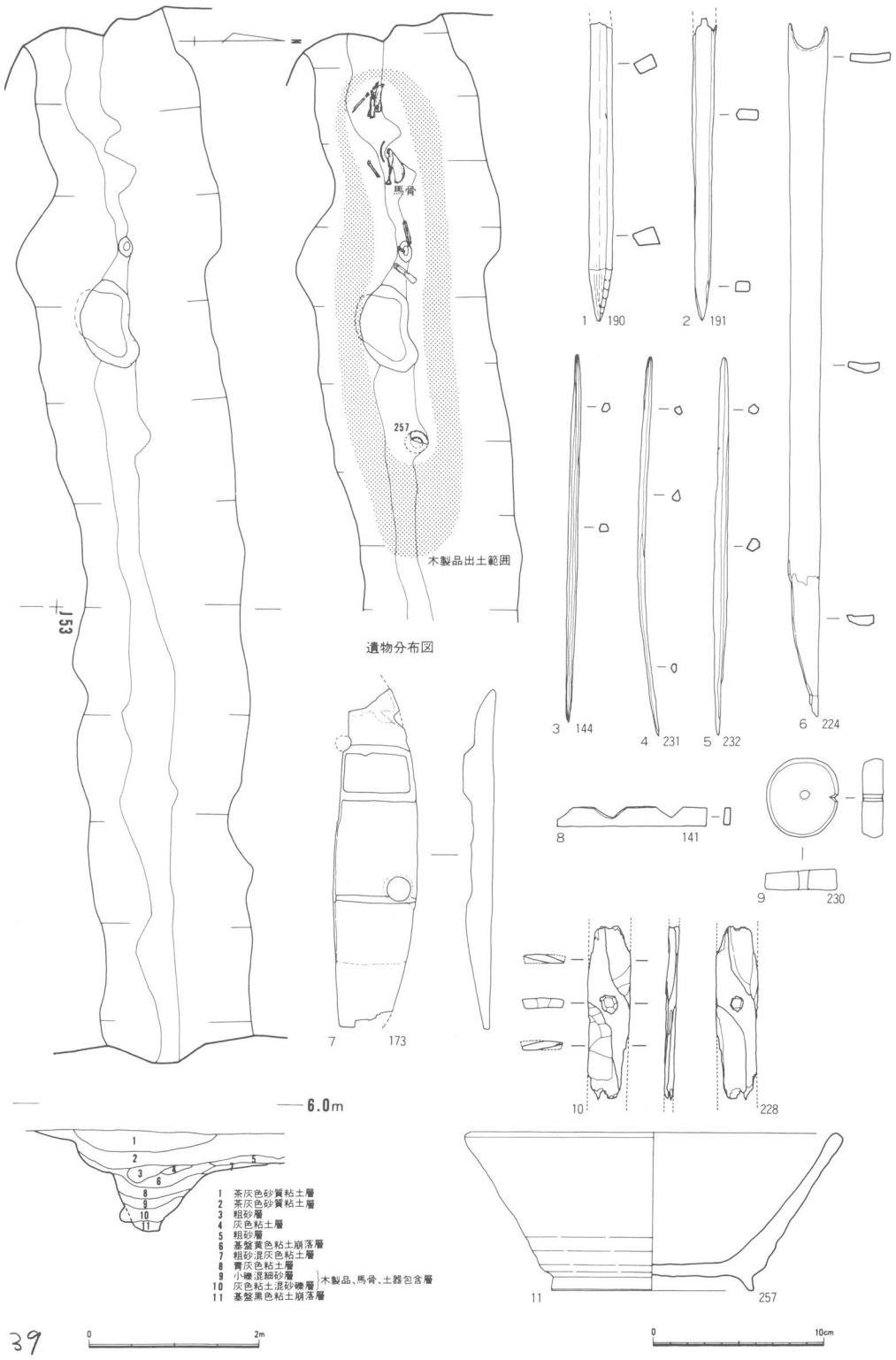
ＳＤ228（第39図）　Ｉ53・Ｊ53グリッドで検出された東西方向の溝状遺構である。幅２ｍ、深さ1.2ｍ、延長12ｍを測る。出土遺物から平安時代末から鎌倉時代の溝状遺構としておく。ＳＤ228は遺物に特徴があるため以下詳述する。

完形遺物はすべて覆土９・10層より出土した。両層とも砂・砂礫を主体とし年代的差違は認められない。大平鉢と馬骨は10層からの出土で２ｍほどの間隔をおいている。木製品は両層ともに出土しており、平面的な範囲は網かけ部によって示した。遺物の種類は、馬骨10点（下顎骨１点を含む）、箸状木製品43点、棒状木製品７点、木製羽根（竹とんぼ状木製品）１点、紡輪１点、下駄１点、加工木製品（片）42点、焼痕のある木片多数、大平鉢１点、青磁１点である。このうち箸状斎串としたものは本遺跡においては、呪符木簡、卒塔婆状の木簡、人形木製品、墨書土器などと共伴して溝、河道、井戸といった限定された地点でのみ検出され、年代も平安時代末から鎌倉・中世に限られている。ＳＤ228は宮川３区のＳＲ486の481点についで多い。

ＳＤ228の機能はその規模から給排水にあると思われるが、一括性をもつ遺物群から祭祀の場としても重要な地点であった。

粘土採掘跡　粘土採掘跡はＳＸ215・216・217・218・219・220・227の７個所が確認された。すべて水上６区である。これは水上５区の基盤層が砂層となってしまうためである。採掘は30㎝ほどの浅いものと80㎝におよぶ深いものとがみられる。ＳＸ215・216は浅く１－ｂ層の砂をさけて１－ａ層のみを採掘対象土としているのに対し、ＳＸ217は１－Ｃ層の白色粘土をも対象としているため深くまで

掘られている。また深い採掘跡（ＳＸ217・ＳＸ220・ＳＸ227）はすべて2層（黒色粘土層）の上面で採掘を中止している。覆土中からは国産陶磁器片が出土することから近世段階の採掘跡と考える。また、安永年間に駿府在勤の幕吏の手に成るとされる『駿府風土記』（『静岡市史』中世・近世史料＝1981）によれば、「大屋村　此村ニテ御城内御用瓦ヲ焼ナリ」とされることから駿府城の瓦を焼くための粘土採掘であったと思われる。



第39図　水上6区SD228実測図

第17表　水上5・6区小穴一覧表

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標高	特　記　事　項
SP201	I 57	0.73	0.66	0.27	0.90	5.99	
SP202	I 58	1.05	0.93	0.33	0.89	6.03	
SP203	I 58	1.00	0.96	0.21	0.96	5.94	平安時代末
SP204	H 57	0.28	0.25	0.21	0.89	6.00	
SP205	H 58	0.52	0.46	0.23	0.88	5.95	古墳時代（後期）
SP206	I 57	0.73	0.58	0.95	0.79	6.00	古墳時代（前期）
SP207	I 58	0.72	0.60	0.49	0.83	6.15	
SP209	I 58	0.80	0.70	0.23	0.88	6.05	古墳時代（前期）
SP210	I 57	0.56	0.54	0.04	0.96	6.02	
SP211	I 57	0.23	0.19	0.08	0.83	5.99	
SP213	I 56	0.89	0.63	0.50	0.71	5.97	
SP214	I 57	0.68	0.42	0.13	0.62	5.97	
SP223	H 58	1.25	1.08	0.34	0.86	5.80	
SP224	H 58	(0.95)	0.65	0.22	(0.68)	6.00	
SP225	H 58	(1.05)	(0.90)	0.30	(0.86)	6.00	
SP226	H 58	(0.80)	0.58	0.15	(0.73)	5.99	
SP233	I 56	0.38	0.33	0.10	0.87	5.92	
SP234	I 56	0.28	0.25	0.06	0.89	5.95	
SP235	I 56	0.53	0.42	0.08	0.79	5.90	
SP236	I 57	1.37	0.92	0.35	0.67	5.90	
SP237	I 57	1.44	1.13	0.36	0.78	5.92	
SP238	I 57	0.38	0.32	0.11	0.84	5.94	
SP239	I 57	0.63	0.55	0.25	0.87	5.99	
SP240	I 57	0.27	0.22	0.02	0.81	6.03	
SP241	I 58	1.07	0.93	0.16	0.87	6.02	
SP242	I 58	0.72	0.55	0.17	0.76	5.98	
SP243	H 55	0.70	0.58	0.25	0.83	5.98	礎板
SP244	I 56	0.59	0.39	0.05	0.66	5.98	
SP245	I 56	0.44	0.34	0.10	0.77	5.99	
SP246	I 56	0.62	0.50	0.15	0.81	5.96	
SP247	I 56	0.44	0.24	0.20	0.55	5.98	
SP248	I 56	0.51	0.49	0.40	0.96	5.97	
SP249	I 55	0.67	0.54	—	0.81	6.00	
SP250	I 55	0.57	0.35	0.08	0.61	6.01	
SP311	I 55	0.58	0.52	0.05	0.90	5.88	
SP312	I 55	0.43	0.35	0.06	0.81	5.86	
SP313	I 54	0.88	0.83	0.36	0.94	5.52	
SP314	J 54	1.24	1.00	0.74	0.81	5.51	
SP316	I 54	0.81	0.53	0.19	0.65	5.58	

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標高	特　記　事　項
SP320	I 55	0.33	0.27	0.08	0.82	5.93	
SP321	I 55	0.32	(0.19)	0.07	(0.59)	5.94	
SP322	I 55	0.20	0.18	0.13	0.90	5.99	
SP323	I 55	0.75	0.52	0.11	0.69	5.93	
SP324	I 55	0.56	0.42	0.09	0.75	5.92	
SP325	I 54	1.25	1.18	0.49	0.94	5.65	
SP326	I 55	0.52	0.26	0.16	0.50	5.93	
SP327	I 55	0.21	(0.20)	0.17	(0.95)	5.94	
SP328	I 54	0.41	0.39	0.20	0.95	5.87	

水上7区・10b区（第40・42図）

1. 概　　要

水上7区は河口起点より1025m上流に位置し現大谷川左岸部にあたる。水上10b区は河口起点より1075m上流に位置し現大谷川右岸部にあたる。本調査区において、流路としては①帯状低地内の溝状地形1個所②古墳時代後期から近世までの旧河道跡8本が検出できた。旧河道跡はいずれも旧大谷川の蛇行部分がしだいに外湾し順次河道が外側または南側に移動した状況を示していた。①・②の中で覆土中に遺存する遺物の伴出関係を明らかにすることができたのはSR807、SR808、SR810のI73グリッド部分、SR811のI72グリッド部分、SR812のI71グリッド部分、SR813のJ70グリッド部分の6個所であった。それ以外はいくつかの時期の河道が同一地点で重複して検出されたため、遺物の伴出関係についての詳細な検討は今後の課題としたい。

また本調査区では旧大谷川の河道変遷の跡とともに水辺の祭祀に関連すると考えられる遺構が6個所検出された。

なお水上7区の73列以南の上層部分からは近世の水田状遺構SX467と連続土坑SX461・SX462（図版46—3・4）の合計3面の遺構を検出した。

2. 遺構各説

SR807（第45図　図版47）　水上7区I72グリッドからJ75グリッドにかけて、調査区を南西から北東へ横切る幅13m前後の帯状の低地地形があり、この南東側に幅4mほどの溝状地形が形成されていた。これをSR807とした。SR807の延長は24.7m、溝底最深部の標高は4.20mである。溝底の傾斜から、北東方向への流れが推定できる。SR807の覆土は黒灰色粘土層である。内部から杭列と多量の棒状木片および刀形木製品1点と土師器の坏形土器・壺形土器・坩形土器・高坏形土器（第46図）などが検出された。土器の特徴から古墳時代中期から後期初め頃と考えられる。

なおSR807は水上10a区のSR673と連続すると考えられる。

SX806（第42図—1、第47図　図版48—1・2）　水上7区I75グリッドで検出された、土師器の高坏形土器3点（1654・1653・1651）、坏形土器1点（1652）の計4点の一括出土部分である。この一括土器は低地地形の斜面上におかれていた。高坏形土器は完形で使用や投棄後の二次的原因による摩滅がみられない。また周辺からはほとんど遺物が出土していないことを考慮すれば、意図的に置いた状態で遺存していたと考えてよいであろう。年代は古墳時代中期から後期初頭と考えられる。

SR808　水上7区のI78グリッドからI75グリッドまで西側に湾曲して南流する旧河道跡である。確認面で、延長は35.6mを測る。河道は攻撃斜面側の深く浸食された部分とその外側の微高地を浅く抉り

とった部分からなり階段状の断面形を呈する。SR808の年代は古墳時代後期と考えられる。この旧河道は低地地形の縁辺を大量の砂礫の押し出しを伴う浸食によって形成されたものであり、大谷川旧河道形成の初期のものと考えられる。

SX805（第48図　図版48－3・4）　水上7区のSR808内で検出された、土師器の甕形土器2点（1135ほか1点）が出土した遺構である。これはSR808内の、標高3.23～3.25mの平坦面（河床）におかれていた。2個の甕形土器の間には全長1.2m、直径6cmほどの棒状木製品も検出されている。2個体の甕形土器はいずれも完形品で、流れ込みとは考えにくく、砂礫層内に並置された可能性もみておきたい。年代は古墳時代後期と推定した。

古墳時代後期旧河道跡（SR809・SR810・SR811・SR812）（第42図－2・3）

ここではSR808を除いた古墳時代後期の旧河道跡4本について述べる。

SR809　水上7区I77グリッドから南流しI74グリッド付近から東にむかって蛇行する旧河道跡である。確認面での幅は4.2m、延長は42.7m、河床は平坦で標高4.27mを測る。覆土は褐灰白色砂礫層（33層）である。覆土中からの遺物により6世紀代と考えられる。

SR810（図版47－3、50－1・2）　水上7区I77グリッドからJ72グリッドまで、SR809の外側に蛇行して流れる旧河道跡である。確認面での幅は13.6m、延長は66.7m、河床は平坦で標高4.42mを測る。覆土は灰茶褐色砂礫層（32層）である。覆土中から大量の土師器・須恵器が検出された。これにより7世紀前半代と考えられる。

SR811（図版50－3、51－1）　水上7区I77グリッドからJ71グリッドまで、SR810の外側に蛇行して流れる旧河道跡である。確認面での幅4.10m、延長は撹乱をうけた中間部を含めると69.6m、河床は平坦で標高は4.47mを測る。覆土は茶褐色砂礫層（31層）である。覆土中から馬形土製品4点他と大量の土師器・須恵器が検出された。これにより7世紀後半代と考えられる。

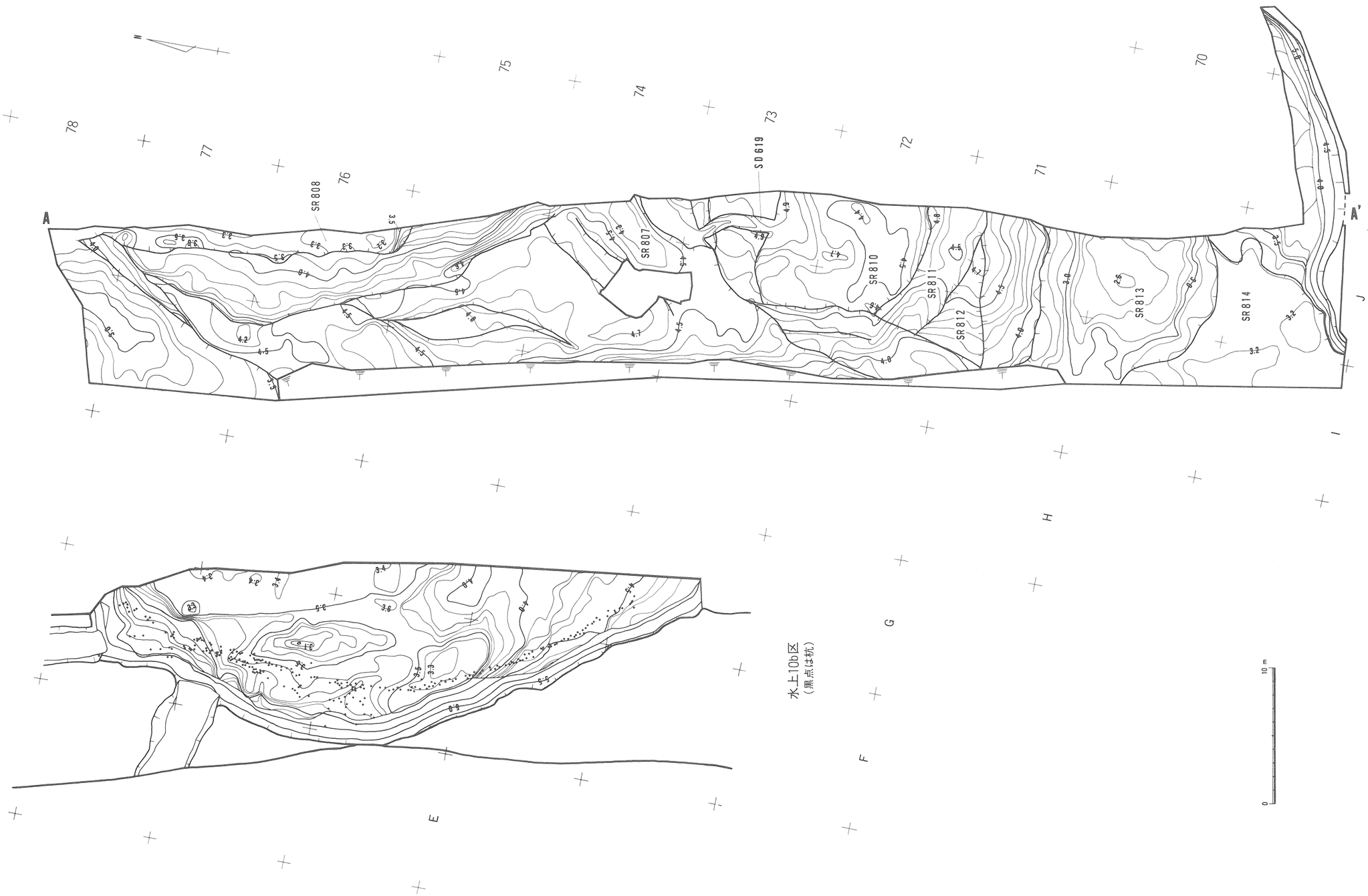
SR812　水上7区I77グリッドからJ77グリッドまで、SR812の外側を蛇行して流れる旧河道跡である。確認面での幅は38.4m、延長は撹乱をうけた中間部を含めると78.1m、河床は平坦で標高は4.50mを測る。覆土は暗茶褐色砂礫層（30層）である。覆土中から大量の土師器・須恵器と馬形土製品2点他が出土した。これにより7世紀後半代と考えられる。

古墳時代後期蛇行洲上遺構（SX803・SX804・SX801・SX802・SD618）

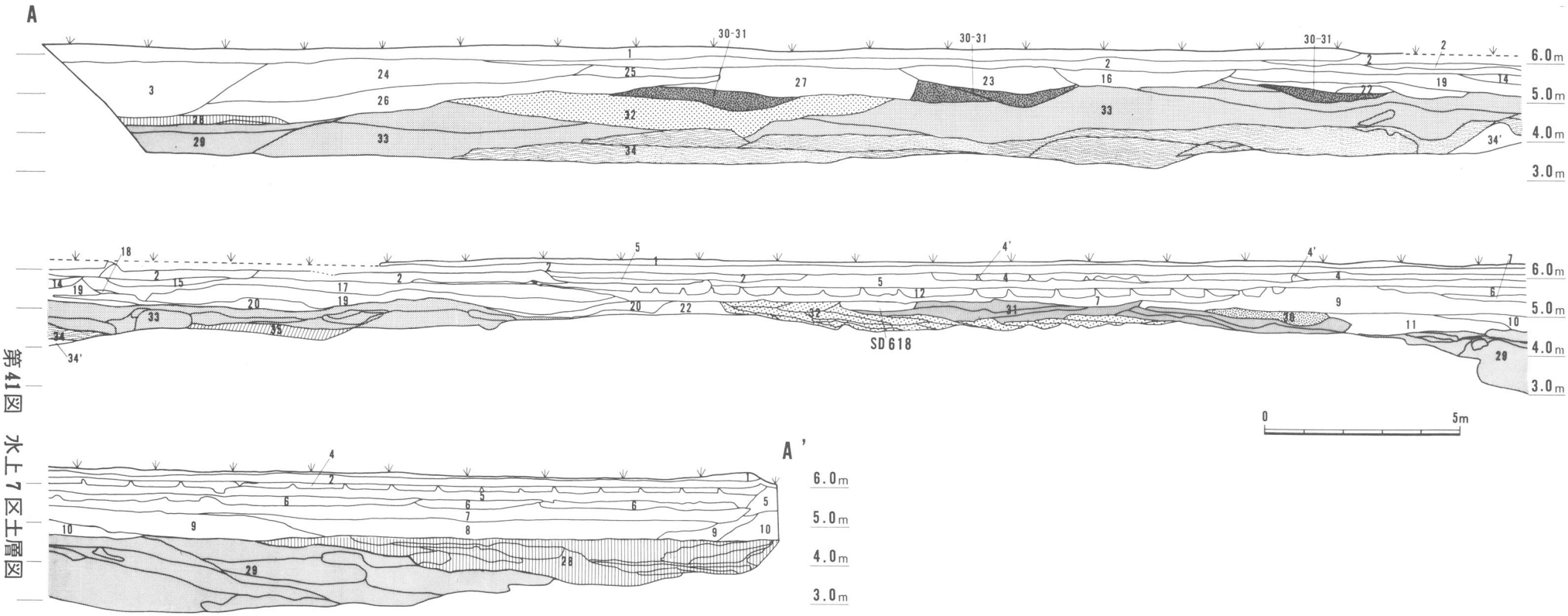
これらの遺構はいずれもSR809・SR810・SR811・SR812の4本の旧河道跡が順次、砂礫の堆積によって埋められて形成された蛇行洲上に立地している。

SX803（第50・53図　図版52－2）　水上7区J73グリッドで検出された遺物集中部である。検出面は赤灰褐色粘土層（19層）で、標高5.02mを測る平坦面である。基準杭J74より南東2.13mの地点に土師器甕形土器1点が出土し、その北側に隣接して土師器坏形土器1点（622）、北東15cmに土師器坏形土器1点（621）が検出された。甕形土器と坏形土器（621）はいずれも底部が正位で接地した状況で、そのうち坏形土器は破損もほとんどなく完形、甕形土器は口縁部・胴部が底部の周囲に原形のまま土圧で押しつぶされた状態で検出された。また周辺の同一面からは遺物が出土していないことを考慮すれば、意図的に置いた状態で遺存していたと考えてよいであろう。年代は、赤灰褐色粘土層がSR809の覆土の上に堆積していることから6世紀と考えられる。

SX804（第51・53図　図版52－3）　水上7区J73グリッドで検出された遺物集中部である。検出面は赤灰褐色粘土層（19層）で、標高5.29mを測る平坦面である。基準杭J74より南東4.65mの地点に土師器甕形土器1点が出土し、その周囲の1m×0.7mほどの範囲に土師器坏形土器18点（第53図3～18ほか2点）が検出された。甕形土器は底部が正位で接地し、甕形土器の中に坏形土器6点が正位で積み重なった状態で、甕形土器もろともに土圧で真上から押しつぶされた様相で検出された。またこの甕形土

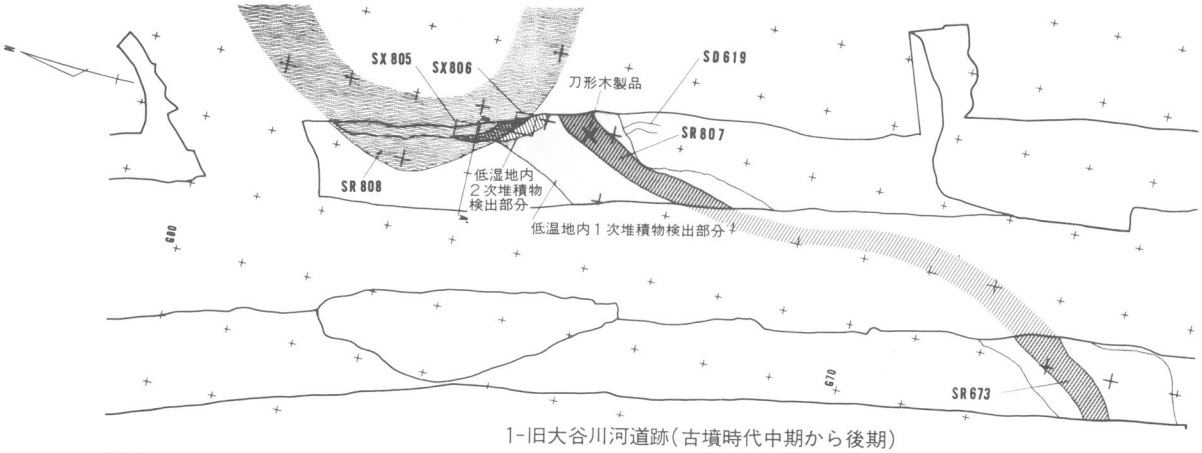


第40図　水上7区・水上10b区等高線図

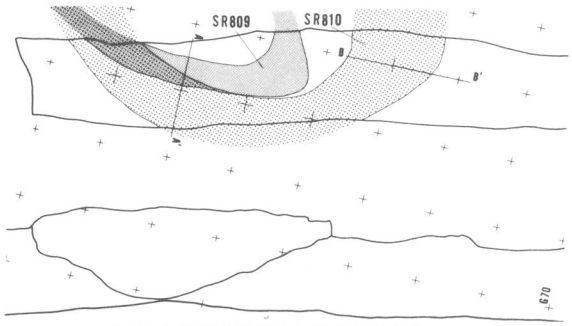


第41図　水上7区土層図

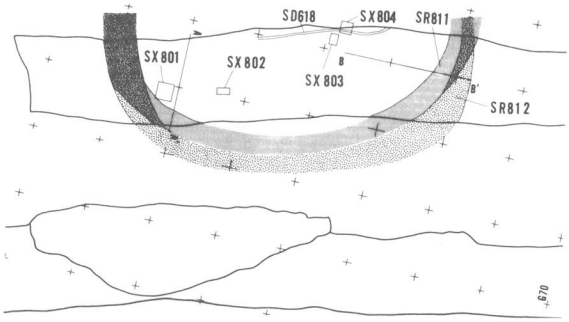
1. 褐色粘土層(客土)
2. 褐灰色粘層(旧耕作土、客土)
3. 昭和50年大谷地区土地改良に伴う異龍沢川改修時の攪乱層
4. 粘土混り茶褐色砂礫層
(土師器片多数を含む客土、連続土坑S×461の覆土)
4'. 褐灰色粘土層(旧耕作土)
5. 黄色粘土ブロック混り茶褐色砂礫層
6. 茶褐色粘土層(客土)
7. 灰色粘土層(水田遺構SX467の覆土)
8. 灰褐色粘土層 ┐
9. 茶褐色粘土層 ├ 中世流路SR814の堆積層
10. 黄褐色砂層 ├
11. 茶褐色砂混り粘土層 ┘
12. 粘土混り茶褐色砂礫層
(土師器片多数を含む客土、連続土坑SX462の覆土)
14. 茶褐色粘土層
15. 灰褐色粘土層
16. 礫混り茶色粘土層
17. 褐灰色粘土層
18. 灰褐色砂層
19. 赤灰褐色粘土層
20. 小礫混り茶褐色粘土層
21. 砂混り茶褐色粘土層
22. 青灰色砂層
23. 茶褐色粘土層
24. 淡茶褐色粘土層
25. 灰色粘土層
26. 青灰色粘土層
27. 赤褐色粘土層
28. 褐灰色粘土層(最下層は粘土混り砂礫層)(SR814中世流路)
29. 暗灰青色粘土層(最下層は粘土混り砂礫層)(SR813奈良平安流路)
30. 暗茶褐色砂礫層(SR812) ┐
31. 茶褐色砂礫層(SR811) ├ 古墳後期河道
32. 灰茶褐色砂礫層(SR810) ├
33. 褐灰白色砂礫層(SR809) ┘
34. 灰青色砂礫層
(SR808、古墳中期おわりから後期はじめにかけての河道)
34'. 灰色粘土層(低地内2次堆積粘土)
35. 黒灰色粘土層
(SR807、古墳中期おわりから後期はじめにかけての溝状地形)



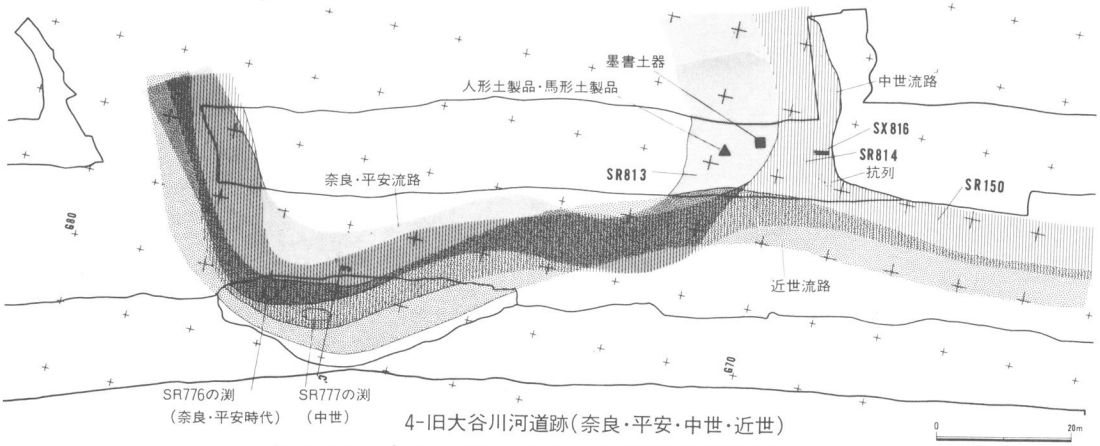
1-旧大谷川河道跡(古墳時代中期から後期)



2-旧大谷川河道跡(古墳時代後期)

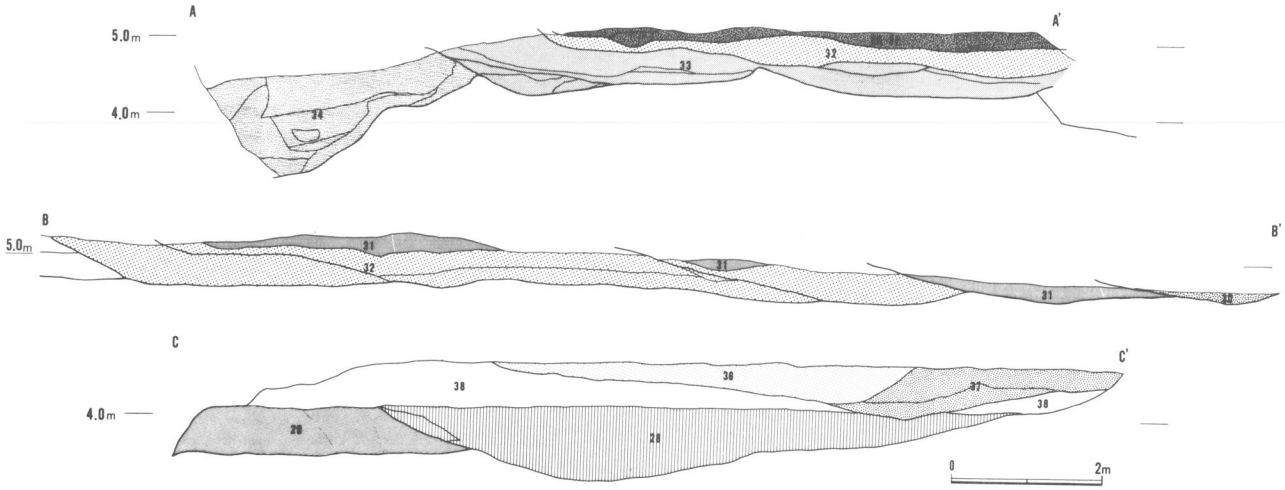


3-旧大谷川河道跡(古墳時代後期)



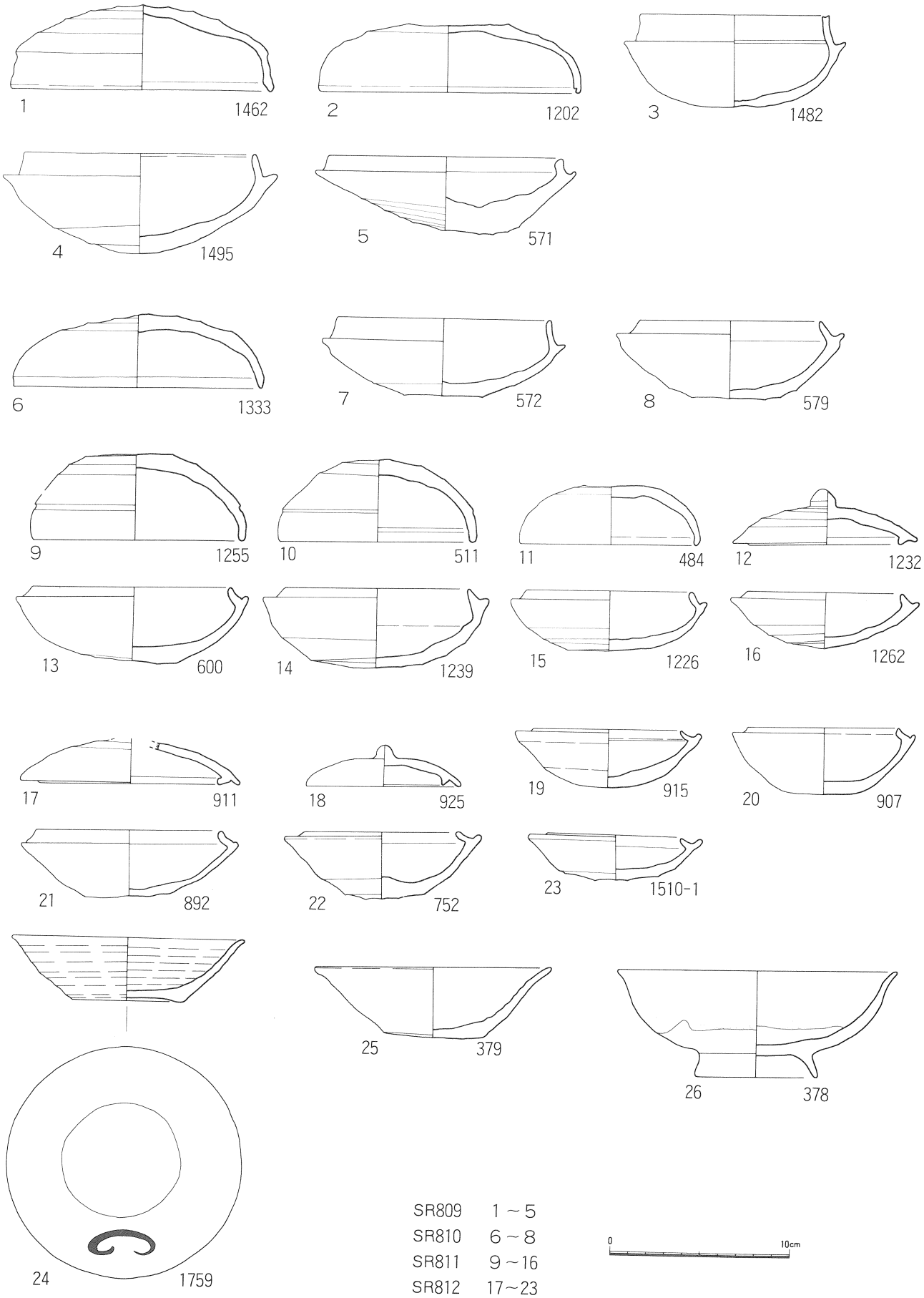
4-旧大谷川河道跡(奈良・平安・中世・近世)

第42図　水上7区・水上10b区流路変遷図

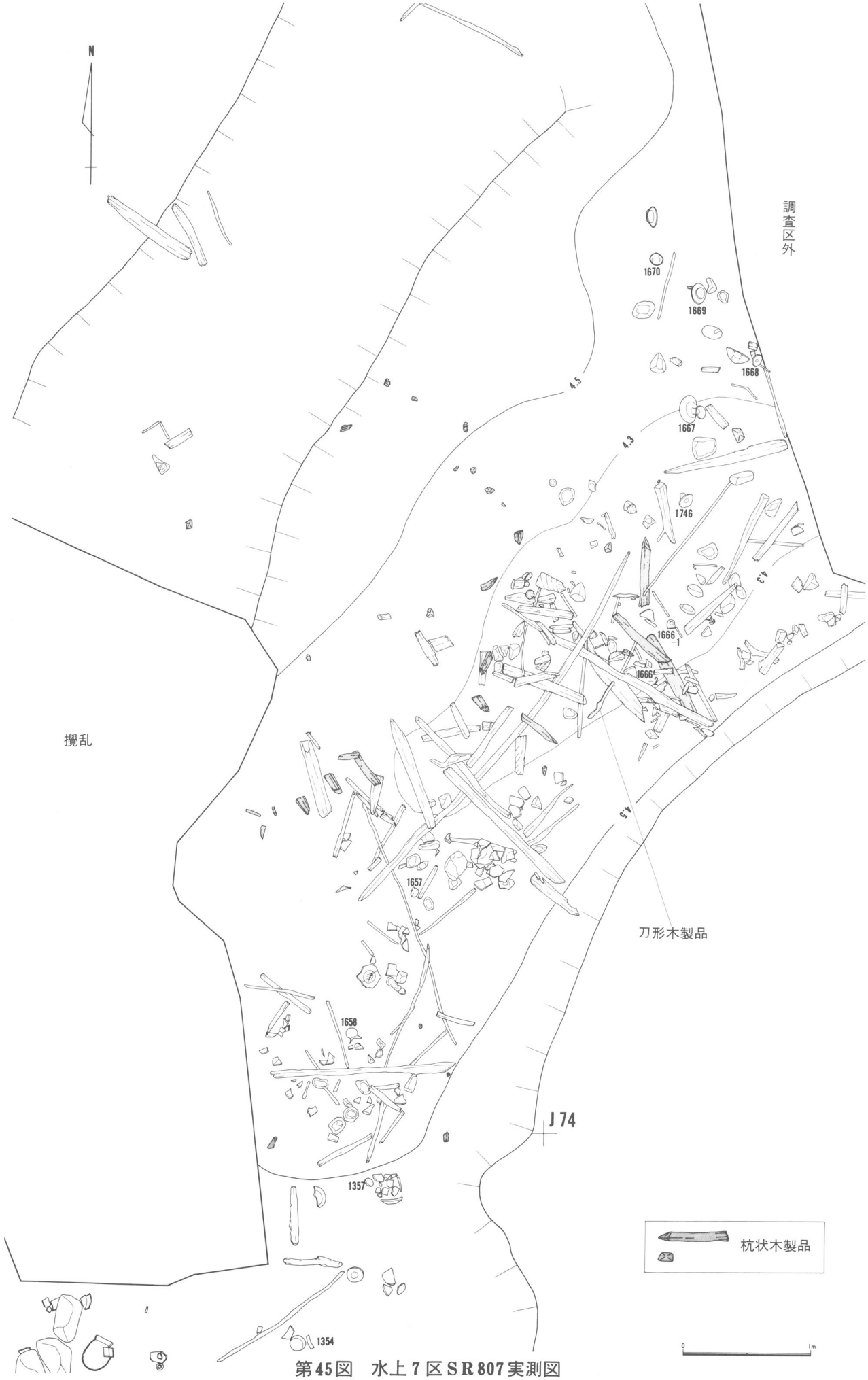


28. 暗灰色粘土層
29. 暗灰青色粘土層
30. 暗茶褐色砂礫層(SR812)
31. 茶褐色砂礫層(SR811)
32. 灰茶褐色砂礫層(SR810)
33. 褐灰白色砂礫層(SR809)
古墳後期流路
34. 灰青色砂礫層
34'. 暗茶灰色粘土層
SR808
35. 黒灰色粘土層(SR807)
36. 赤褐色砂礫層
37. 灰青色粘土層(下層は砂礫層)
38. 灰色粘土層(中世の堆積層)

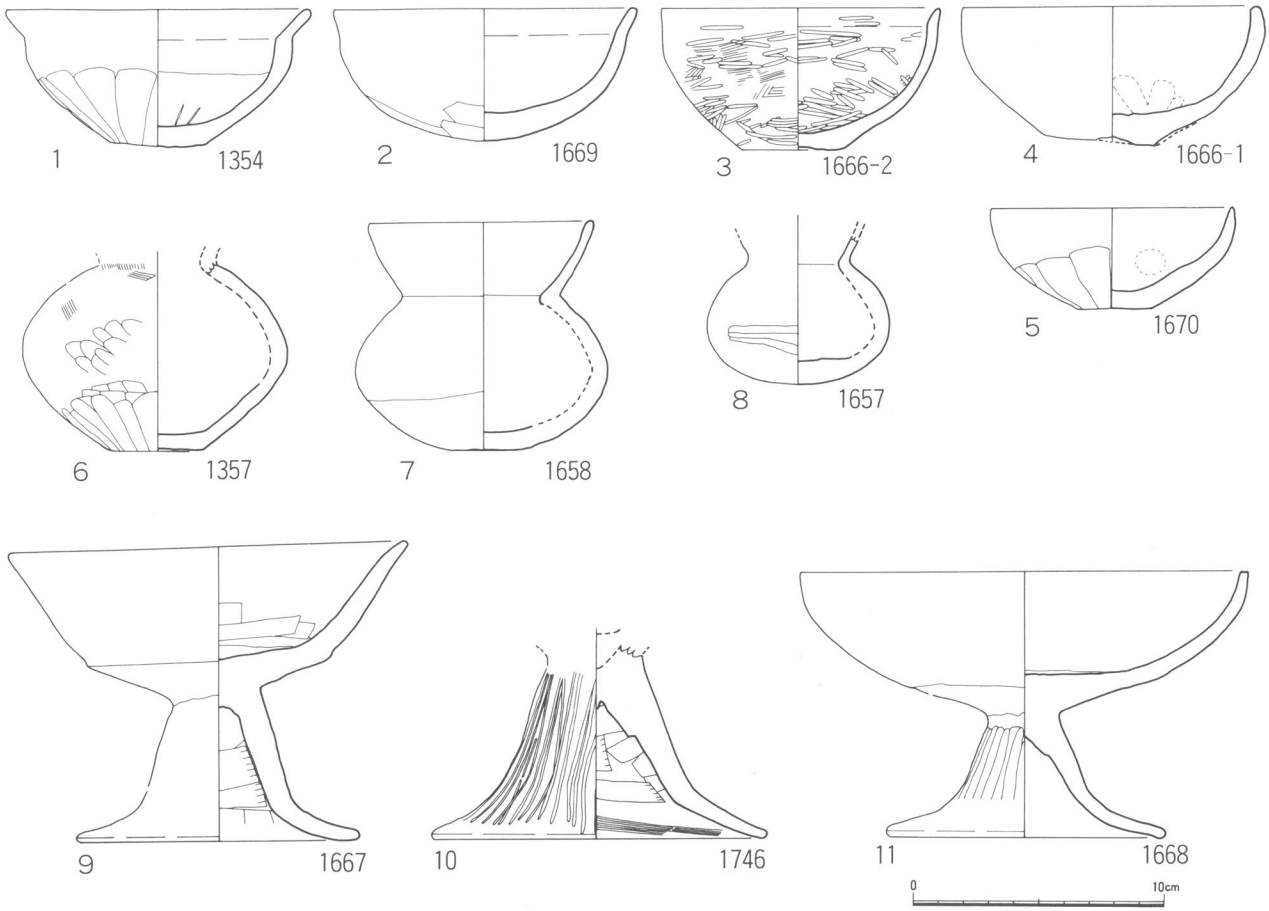
第43図　水上7区・水上10b区土層断面図



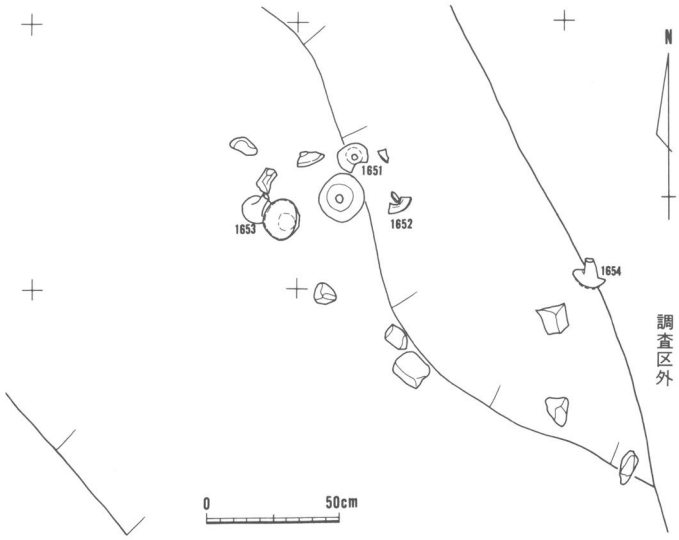
第44図　水上7区流路別出土土器実測図



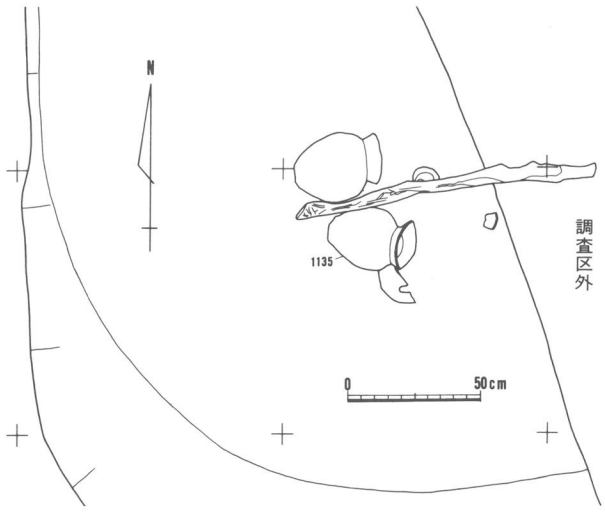
第45図　水上7区SR807実測図



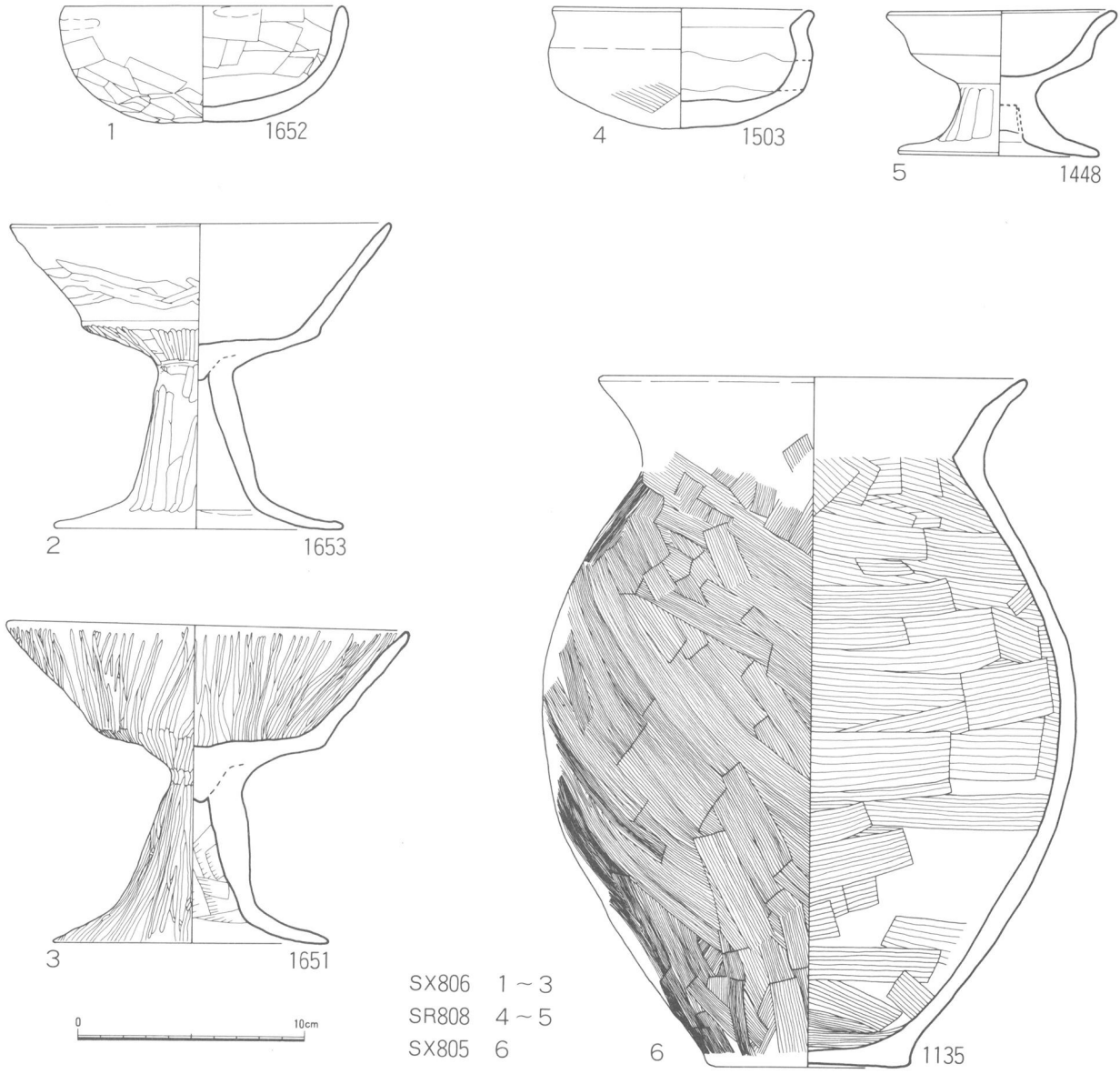
第46図　水上7区SR807出土土器実測図



第47図　水上7区SX806実測図



第48図　水上7区SX805実測図



第49図　水上7区SR808出土土器実測図

器に隣接した3個所で坏形土器が底を下にして2個が重なった状態で検出された。また周辺の同一面からは遺物が出土していないことを考慮すれば、意図的に置いた状態で遺存していたと考えてよいであろう。年代は、赤灰褐色粘土層がSR809の覆土の上に堆積していることから、6世紀代と考えられる。

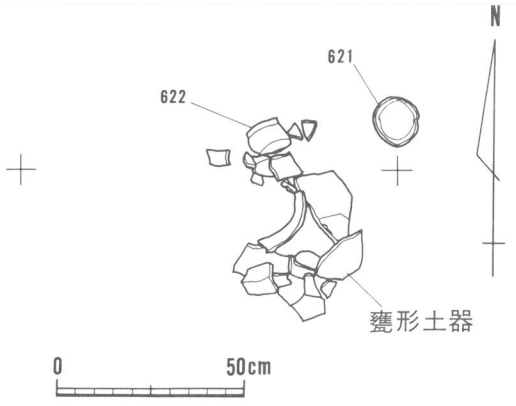
なお、SX803とSX804は同一層での検出であり、相互の間隔は2mたらずであったものの比高差は0.27mと大きい。河道の埋積過程での時間差を認めるべきかもしれないが現段階では同時期の投棄としておく。

SX801（第52・54図　図版53）　水上7区H76グリッドで検出された遺物集中部である。検出面は小礫混りの褐灰色粘土層（17層）で、標高5.21mを測る平坦面である。基準杭I76より北西2.40m地点付近を中心とした1.6m×1.1mほどの範囲から土師器の坏形土器31点（第54図1～30ほか3点）、甕形土器1点、手捏土器1点（第54図31）、馬形土製品4点（第54図32～34ほか1点）が検出された。出土土器の大部分は底部が正位で接地し、完形のまま検出されている。坏形土器は半径40cmほどの円弧状に配

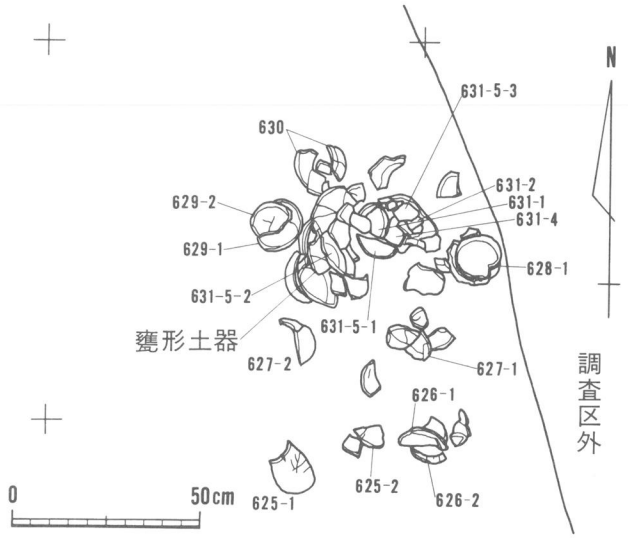
列されたものの11点とその内側に置かれているもの８点（甕形土器１点を含め合計９点）、さらに円弧の外側に位置するもの６点が認められた。土馬は坏形土器の北側に隣接して３点、南東側に１点が出土し、北側の土馬には手捏土器１点も伴出した。

出土した坏形土器33点のうち28点は口径・器高ともに均一で、他の５点はやや大型であった。

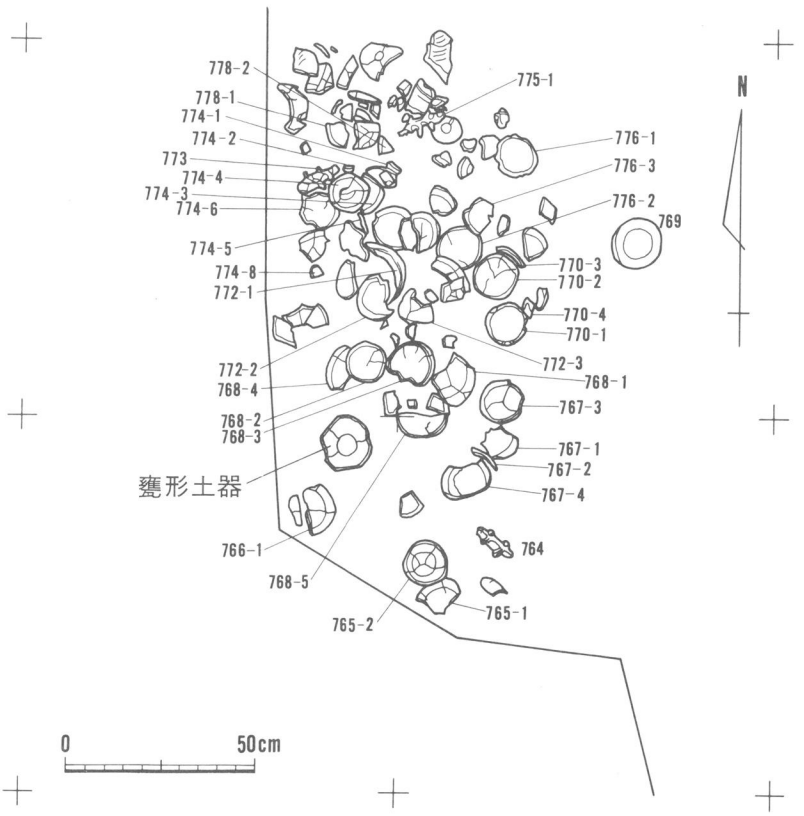
このように坏形土器を円弧を基調として配列し、その周囲に土馬と手捏土器を置くＳＸ801の形態は土馬を用いる祭祀跡と考えてよいであろう。なお年代は遺物の特徴と覆土から７世紀後半代と推定した。



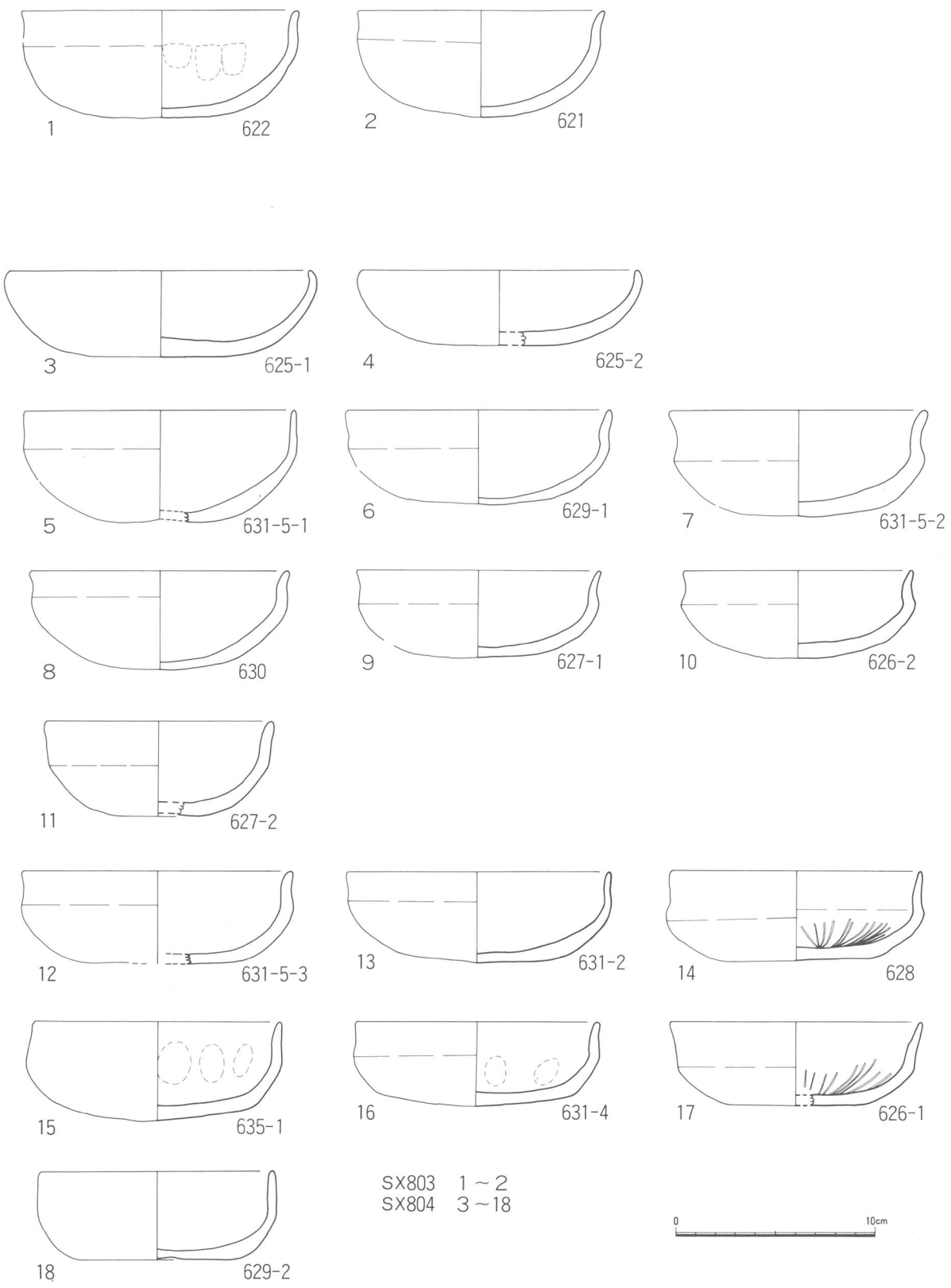
第50図　水上７区ＳＸ803実測図



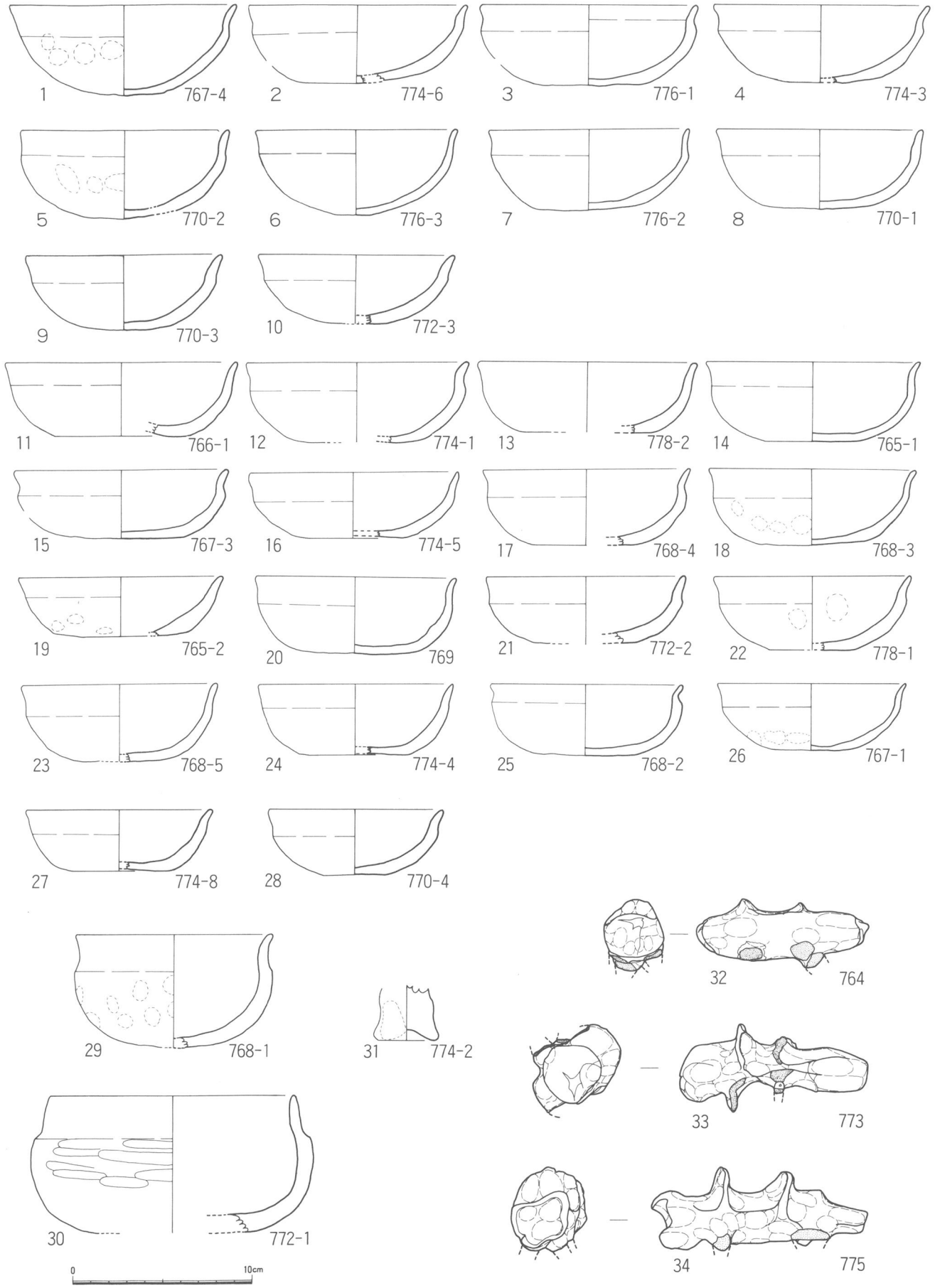
第51図　水上７区ＳＸ804実測図



第52図　水上７区ＳＸ801実測図



第53図　水上7区SX803・SX804出土土器実測図



第54図　水上7区SX801出土遺物実測図

ＳＸ802（図版51－2・3）　水上７区Ｉ75グリッドで検出された遺物集中部である。検出面は褐灰色粘土層（17層）で、標高は5.08ｍを測る平坦面である。基準杭Ｉ75より北3.40ｍ地点付近を中心とした1.1ｍ×0.6ｍほどの範囲に人形土製品３点、馬形土製品５点が検出された。人形土製品はほぼ完形で出土したものが１点（図版51－２）、下半身を欠損したものが２点であった。馬形土製品は頭部片が３点、胴部片が１点、尾部が１点であった。このほかに馬形土製品の胴部か人形土製品の胴部か判別の難しいものが11点出土した。以上の土製形代は散乱した状態で検出され配置性は認められなかった。また周辺の同一面からは土製形代類やＳＸ801のような一括性をもつ土器は検出されなかった。このことからＳＸ802は人形土製品・馬形土製品のみが一括して投棄されたものと考えられる。年代は覆土の状況から、７世紀後半代と考えられる。

ＳＤ618（第42図－1　図版52－4）　水上７区Ｊ73・Ｊ74グリッドで南北方向に検出された、南から北へ流れる溝状遺構である。確認面での延長は18.8ｍ、幅は0.61ｍ、長さは0.29ｍを測る。ＳＤ619の検出面は標高5.33ｍの平坦面であり、赤灰褐色粘土層（19層）の上面にあたる。覆土は褐灰色粘土(17層)であり、覆土中から土製形代と考えられる破片１点と土師器片が検出された。年代はＳＤ618がＳＲ811内に堆積した砂礫層をも掘り込んで開削されているため、７世紀後半代と考えられる。

奈良・平安時代河道跡（第42図－４）

ＳＲ813　水上７区Ｉ71・Ｊ70グリッドを中心に検出された旧河道である。確認面での幅は12.7ｍ、河床は平坦で標高は2.60ｍである。覆土は暗灰青色粘土層（最下層は粘土混り砂礫層）（29層）である。覆土中から墨書土器「 」１点（第44図―24)、人形土製品１点、馬形土製品５点他と灰釉陶器・須恵器・土師器が大量に出土した。年代は遺物の特徴から平安時代とした。

なお水上10ｂ区では75列～76列にかけて調査区東端に蛇行の屈曲部と思われる淵（最深部標高3.27ｍ）が検出され、底面より出土した土器より奈良時代～平安時代の河道と推定された。あるいは水上７区ＳＲ813と連続するのかもしれない。

中世河道跡（第42図－４）

ＳＲ814　水上７区Ｊ69グリッドを中心に検出された旧河道跡である。確認面での幅は13.4ｍ、河床は平坦で標高は3.20ｍである。覆土は褐灰色粘土層（最下層は粘土混り砂礫層・28層）である。覆土中から、しがらみ状遺構ＳＸ816（図版54－４)、杭列が検出され、漆器椀１点、キセル雁首１点が出土した。ＳＲ814は平安時代河道ＳＲ813がさらに外側に蛇行した河道であり、しかもＳＲ814の上層には近世水田跡ＳＸ467がある。また出土遺物からも中世から近世にかけての旧河道跡と考えられる。水上３区でも検討したように、このＳＲ814は「構井ノ坪」関連の中世居館の堀としての機能を果していた可能性もある。

水上10ｂ区ではＦ75グリッド北半部からＦ76グリッド南半部にかけて幅2.5ｍほどの淵が検出され、最深部は標高3.0ｍに達していた。底面からは山茶碗が出土し、平安時代末～鎌倉時代の河道の攻撃斜面側の屈曲部と判断された。

なお水上７区北端部の旧河道部分は、昭和50年の大谷土地改良区の工事の一環として異龍沢川の付替工事に伴い、大規模な撹乱を受けたこともあり奈良～近世の遺物が混在して検出された。

3. 小　　結

本調査区の最大の成果は、古墳時代中期から後期にかけての水辺の祭祀に関連する遺構を検出できたことである。以下にそれらの特徴を指摘したい。

①古墳時代中期から後期にかけての低湿地内溝状遺構ＳＲ807での刀形木製品の単独出土は本遺跡からの出土例としては最も古い刀形である。またこの時代の低地斜面上での土師器の高坏形土器3点と坏形土器1点が検出されたＳＸ806は同時代と推定される水上8区ＳＸ775とともに古墳時代中期から後期初頭にかけての水辺の祭祀を考える上で重要な遺構である。

②ＳＲ808は、水上8区のＳＲ778とともに旧大谷川河道形成の初源を考える上で重要な位置を占めている。またＳＲ808に堆積した大量の砂礫中から検出されたＳＸ805の土師器甕形土器2個は古墳時代後期の特異な河道内祭祀と考えられる。

③古墳時代後期の蛇行洲上での祭祀関連遺構は6世紀代の土師器の甕形土器と坏形土器のセットから7世紀後半代の土師器の甕形土器と坏形土器および馬形土製品が加わるセット関係の変化が注目されよう。とりわけＳＸ801では坏形土器の円弧状の配置などは祭祀の執行状況の一端をうかがわせるものといえよう。またＳＸ802は馬形土製品と人形土製品のみで土器類を伴わない検出例として重要である。

第18表　水上7区小穴・溝状遺構一覧表

（小　穴）

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標高	特　記　事　項
SP601	I 75	0.29	0.27	0.21	0.93	4.99	
SP602	I 75	0.32	0.25	0.35	0.78	5.26	
SP603	I 75	0.79	0.57	0.41	0.72	5.29	
SP604	I 75	0.57	0.42	0.25	0.71	5.18	
SP605	I 75	0.51	0.43	0.22	0.84	5.18	

（溝状遺構）

遺構番号	グリッド	延　長	幅	深　さ	遺構面標高	特　記　事　項
SD618	J 73・J 74	18.8	0.61	0.29	5.33	古墳時代後期
SD619	J 73	5.72	0.96	0.37	4.97	

水上４区・水上10ａ区低湿地（第56図）

1. 概　　要

現大谷川の右岸にあり、河口起点より933ｍ上流に位置する。旧大谷川右岸の微高地にあたるこの調査区は、砂層または砂混りの黄灰色粘土層が基盤をなしている。しかし64列～67列にかけては南西から北東に調査区を斜めに横切る幅25ｍほどの低地が存在し、低地全体が北東方向に傾斜している（第56図）。この低地内には上層に黄灰白色粘土（第57図６・７層）、下層に黒色粘土（10～13層）が堆積していた。このうち上層の黄灰白色粘土層は平安時代末から鎌倉時代初頭の遺構面であり溝状遺構・小穴が検出された。下層の黒色粘土は古墳時代の遺構面であり、G66・G67グリッドでは微高地から低地へ向かう緩斜面上に石製模造品を含む大量の土師器群が出土した（第56図）。一方63列以南は表土および客土直下が基盤層となり、古墳時代前期の井戸状遺構ＳＥ８、同じく古墳時代前期の溝状遺構ＳＤ12、古墳時代後期の土坑ＳＰ41、平安時代後期の土坑ＳＰ17などが検出され、年代推定困難な他の遺構も含めて古墳時代前期から鎌倉時代までの遺構が同一面で混在している。このうち溝状遺構は東西方向のものと南北方向のものが直交するように存在し、ほぼ同一の方向性を有するが、確認面が後世の撹乱を受けているため遺構底面のみが確認されたものが多くほとんどの年代推定が困難でその性格は不明である。このほか小穴が多数検出されたが、住居跡・建物跡と認められるものは存在しない。

2. 遺構各説

溝状遺構

ＳＤ４　G63グリッドからH64グリッドにかけて、調査区内を東西に横切る。確認された延長は12.4ｍ、幅は0.86～1.28ｍ、深さは最大で0.21ｍである。覆土中より祭祀用の小型高坏形土器の脚部が出土している（第60図10）。伴出遺物より古墳時代後期と推定される。

ＳＤ29　H59グリッドからＩ59グリッドにかけて、調査区内を東西に横切る。確認された延長は8.0ｍ、幅は1.30～1.41ｍ、深さは最大で0.14ｍである。覆土中より土師器の祭祀用小型甕形土器（第60図11）が出土している。小型甕形土器の形状から古墳時代後期と推定される。ＳＤ４・ＳＤ29ともほぼ同方向であること、底面の標高が6.0ｍ前後とほぼ同一であること、幅が1.28ｍ、1.41ｍと近似していること、わずかな出土遺物の中に祭祀用小型土器１点が含まれていることなど共通点を有している。

ＳＤ12　H60・H61・H62グリッドの東端に延長20.70ｍ、幅1.00ｍで円弧をえがくように存在する溝状遺構で、南側・北側ともに屈曲部より先を現大谷川により破壊されている。出土遺物より古墳時代前期であると推定される。

土　　坑

ＳＰ２　確認面で長径1.88ｍ、短径1.58ｍ、深さ0.43ｍの長円形の掘り方を持つ土坑である。盃形の手捏土器１点が検出され、伴出した土師器坏から古墳時代後期と推定される。

ＳＰ17　確認面で長径1.32ｍ、短径1.05ｍの長円形プランをもち、深さ0.41ｍを測る。出土した灰釉陶器より平安時代後期と推定される。

ＳＰ41　確認面で長径1.20ｍ、短径1.06ｍのほぼ円形のプランをもち、深さ0.59ｍを測る。底面で土師器坏と曲物の一部が検出され、古墳時代後期と確認された。

井戸状遺構

ＳＥ８（第118図）調査区の東端で検出されたため５分の２程度を現大谷川により破壊されていた。確認できる範囲で径2.72ｍの半円形で、深さ1.27ｍを測る。３段階の掘り方をもち素掘りである。出土した土師器より古墳時代前期と推定される。

ＳＥ13（第119図）調査区の西端で検出されたため東西方向が長軸となる円形プランの東側５分の３のみ

が確認された。推定長径3.30ｍ、短径2.42ｍ、深さ0.27ｍである。長さ0.65ｍの方形と推定される井戸枠の東辺のみが残存していた。10.0㎝×6.0㎝の2本の角材を隅に置き、その間に幅8.0㎝～14.0㎝ほどの縦板4枚をならべて井戸側としている。南辺では長0.42ｍの横機のみが検出された。井戸側内部は径0.62ｍの曲物をはめ込み水溜としている。また水溜の中央部からは径0.20ｍの手桶状の曲物が検出されている。上層より出土した須恵器坏より埋没年代は奈良時代と推定される。

ＳＸ624（第56図・第58図）　64列～67列にかけての低地内には、66列～67列に南西から北東方向に調査区を横切る幅2.8～4.0ｍほどの溝状地形ＳＲ673があり、グライ化した粘土が20㎝ほど堆積していた（第57図8・9層）。この層の下部からは土師器片と古墳時代中期末～後期初頭に比定される須恵器蹴1点と木片が出土した。この溝状地形ＳＲ673は南西から北東方向に緩やかな傾斜があり、増水時には排水路的な役割をしていたと考えられる。溝状地形ＳＲ673に向かう南東向の緩斜面から石製模造品を含む多量の土師器群が検出され、ＳＸ624と呼称した。

出土遺物と状況　遺物群のうち標高6.1ｍほどまでにあるものは上に黄灰白色粘土が堆積しているが、G67グリッドの6.2ｍ以上のものは表土あるいは客土直下に存在するため若干の撹乱を受けていた。コンテナ30箱以上におよぶ土師器は、破片がほとんどで、集中部では折り重なるように出土している。復元は困難なものが多く土器全体の形状が確認されたものは45点のみであったが、器種が判別できるものを一個体として扱うと168点を数える。

出土状況から土師器群をａ～ｄの4群に分割した（第58図）。このうちａ群とｄ群は集中が著しい所である。ａ群は微高地末端部に位置し、土器群の内で最も標高の高い部分にあたる。土器は破損が激しく各器種器型の破片が混在していた。ａ群の特徴は有孔円板4点、剣形模造品2点を含むことである。土器はａ～ｄ群で最も多数の57個体を確認したが、一個体として認識できないものが多く実際にはより多数であると考えられる。器種構成をみると高坏形土器38.6％、坩形土器33.1％と二器種でその大半を占め、壺形土器21.1％と続き、台付甕形土器2点と手捏ね土器1点も含まれている。他群にくらべ坩形土器が高い比率を示している。

ｂ群はａ群に隣接して南に位置する。ａ群が小破片の混在であるのにくらべ完形品が多い。特に中心部（1.1ｍ×1.2ｍの範囲）では高坏形土器3点、坩形土器3点、壺形土器3点、甕形土器4点、台付甕形土器1点、台付盌形土器1点の計15点が置かれ、このうち高坏形土器1点、坩形土器1点、壺形土器1点、甕形土器1点、台付盌形土器1点はほぼ完形で出土している。器種構成では壺形土器・甕形土器・台付甕形土器で総個体数の半数を占めている。個体数が少ないので一概には言えないが、他群にくらべ際立った特徴である。中心部を除く周辺は破片の散乱と考えられ、中心部のみは原位置をほとんど動いていないと考えてもよいだろう。

Ｃ群は土器の分布が他の群にくらべ希薄で破片が多く復元された個体も少数である。他の群の土器が散乱したものと想定してよいだろう。

ｄ群はａ群とともに土器の集中が著しいが、位置的にはａ群が微高地末端部であるのに対し、微高地から溝状地形ＳＲ673にいたる緩斜面上にあり溝状地形に沿うように存在している。溝状地形および低地全体を意識した分布とみてよいだろう。ａ群同様小破片が混在している。器種構成では高坏形土器が42.1％と高いが、これは高坏形土器が比較的個体として認識しやすいという条件によるところが大きく実際には多量の破片の大半を甕形土器・台付甕形土器が占めている。特に台付甕形土器が他群にくらべて多い。滑石製模造品では勾玉1点、管玉1点が出土している。なお臼玉はａ群とｂ群で72点、ｃ群とｄ群で212点出土している。

ともに集中出土したａ群とｄ群では器種構成において大きな差異がみられる。ａ群は壺形土器が多く甕形土器では台付のものが2点のみで平底のものはみられない。これに対しｄ群では壺形土器は1点の

みで、甕形土器、台付甕形土器が多い。b群は壺形土器、甕形土器は同数である。a群の壺形土器には古い要素をもつものが多く、①a群②b群③d群の推移が考えられる。

まとめ

(1) 土師器群は祭祀の後廃棄した跡と考えられる。その根拠として次のことがあげられる。

①有孔円板6点・剣形2点・勾玉1点・管玉1点の滑石製模造品が出土している。

②高坏・坩形土器で全体の60%以上を占め、手捏ね土器も含め祭祀的性格の強い土器構成になっている。

③微高地の末端部と低地にいたる緩斜面に位置し、緩斜面の土器群は南東の溝状地形に沿うように分布している。

④土師器群は破片が散乱しているが、ある程度のまとまりをもっている。また溝状地形内には微高地にみられるような土器の集中はない。

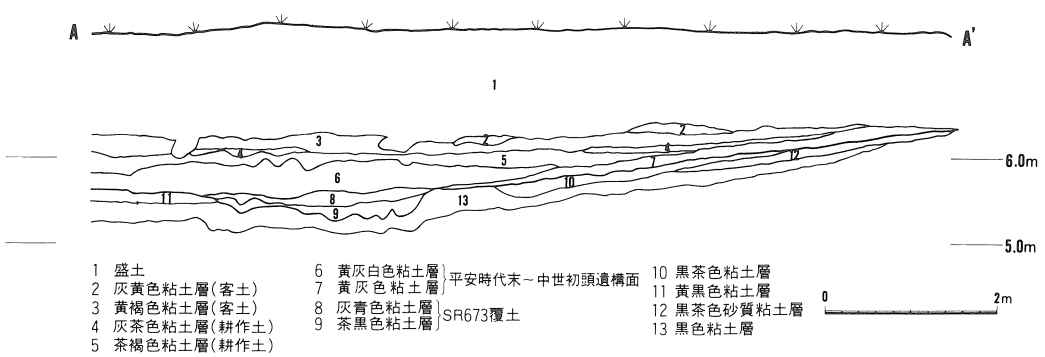
(2) 出土遺物はa～d4群に分けられ、c群を除き①a群②b群③d群の推移がみられ、古墳時代前期末葉～中期と考えられる。

3. 小　　結

本調査区64列から67列にかけて検出された低湿地は現大谷川をはさんでさらに北東側へと続いている。水上7区72列から75列にかけて調査区を南西から北東方向に斜めに横切る幅20mほどの帯状の低湿地が認められ、この低地の南東側の端には幅3mほどの溝状地形（SR807）が存在する。この状況は本調査区の低湿地および溝状地形（SR673）とほぼ同じであり、いずれも南西～北東方向の傾斜を有していることから2つの低湿地および溝状地形は連続するものと考える。出土遺物より古墳時代中期から後期初頭まで機能していたものと推定され、旧大谷川未発達段階の低湿地に沿った流れの一つと考えられる。

第19表　水上4区溝状遺構一覧表

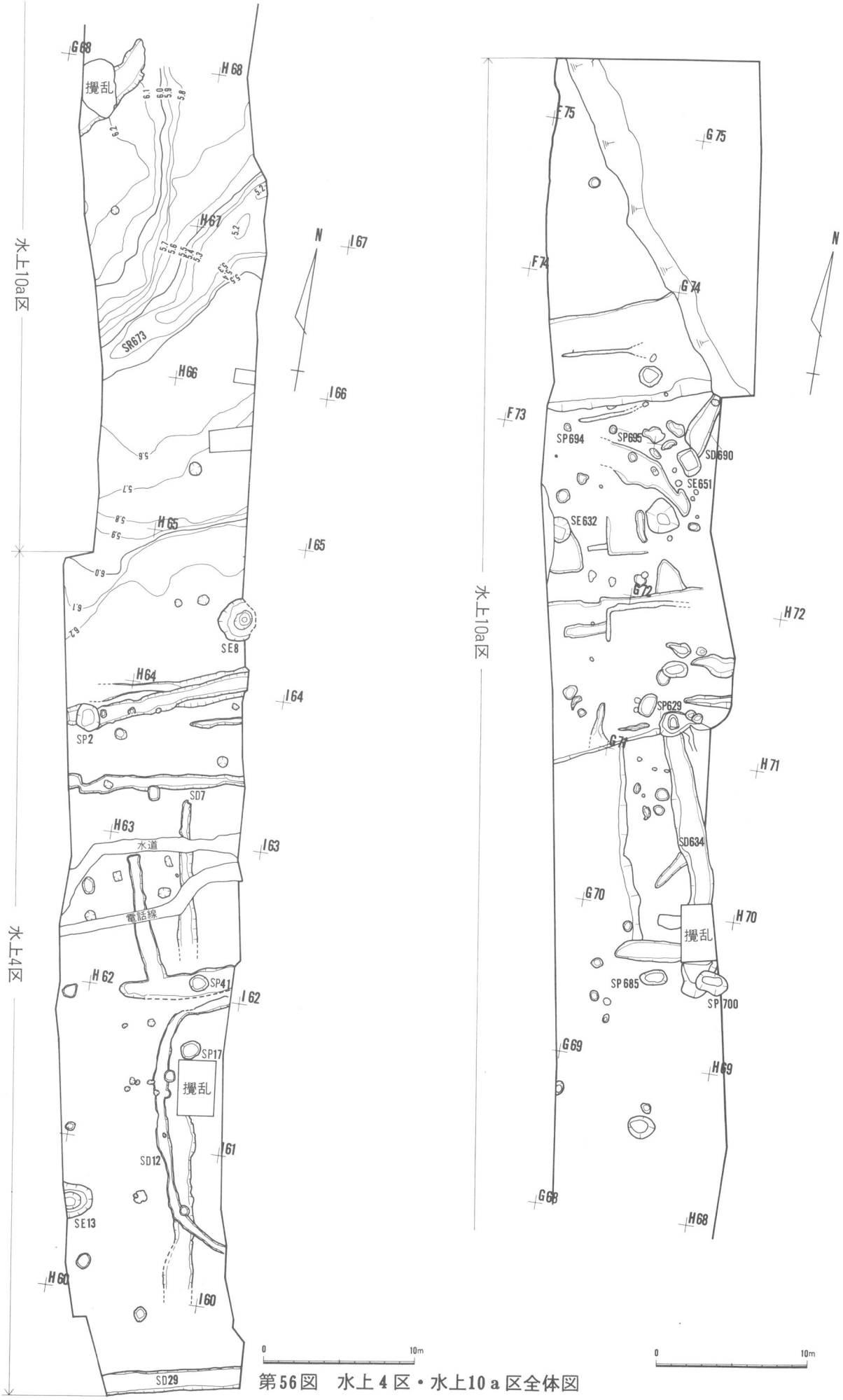
遺構番号	グリッド	延　長	幅	深　さ	遺構面標高	特　記　事　項
SD4	G63	12.40	1.28	0.21	6.16	古墳時代（後期）
SD6	G63	9.20	0.96	0.05	6.25	
SD7	H63	11.90	1.14	0.15	6.16	
SD10	H63	3.50	0.54	0.08	6.23	
SD11	H61	8.30	1.27	0.14	6.23	
SD12	H60	20.70	1.00	0.11	6.18	古墳時代（前期）
SD14	H62	6.00	1.28	0.04	6.19	
SD20	H62	7.50	1.62	0.29	6.21	
SD25	G64	10.10	0.32	0.03	6.29	
SD29	H59	8.00	(1.41)	0.14	6.05	古墳時代（後期）
SD21	H60	4.30	2.02	0.14	6.06	



第55図　水上10a区低湿地土層断面図

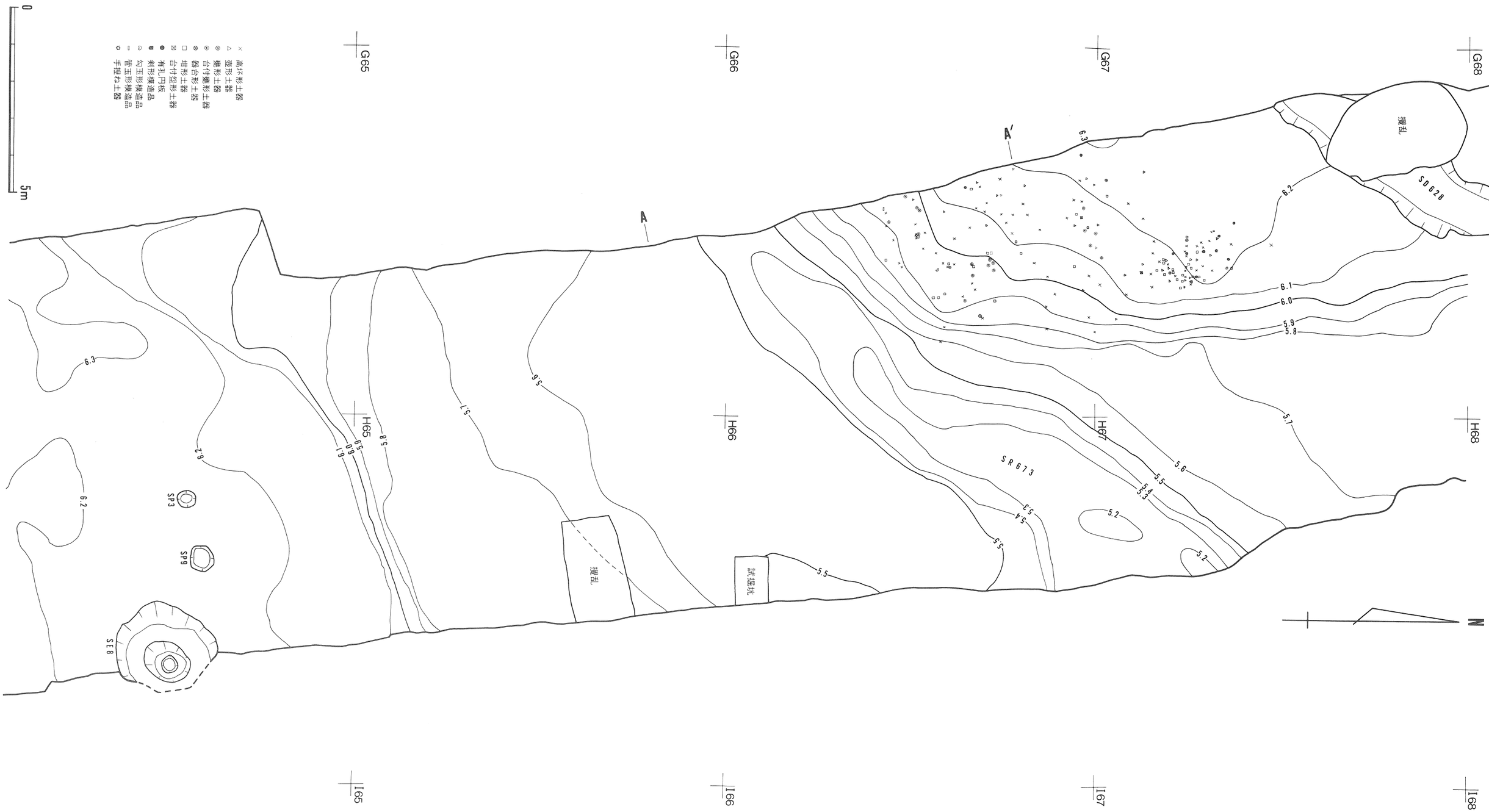
第20表　水上4区小穴土坑状遺構一覧表

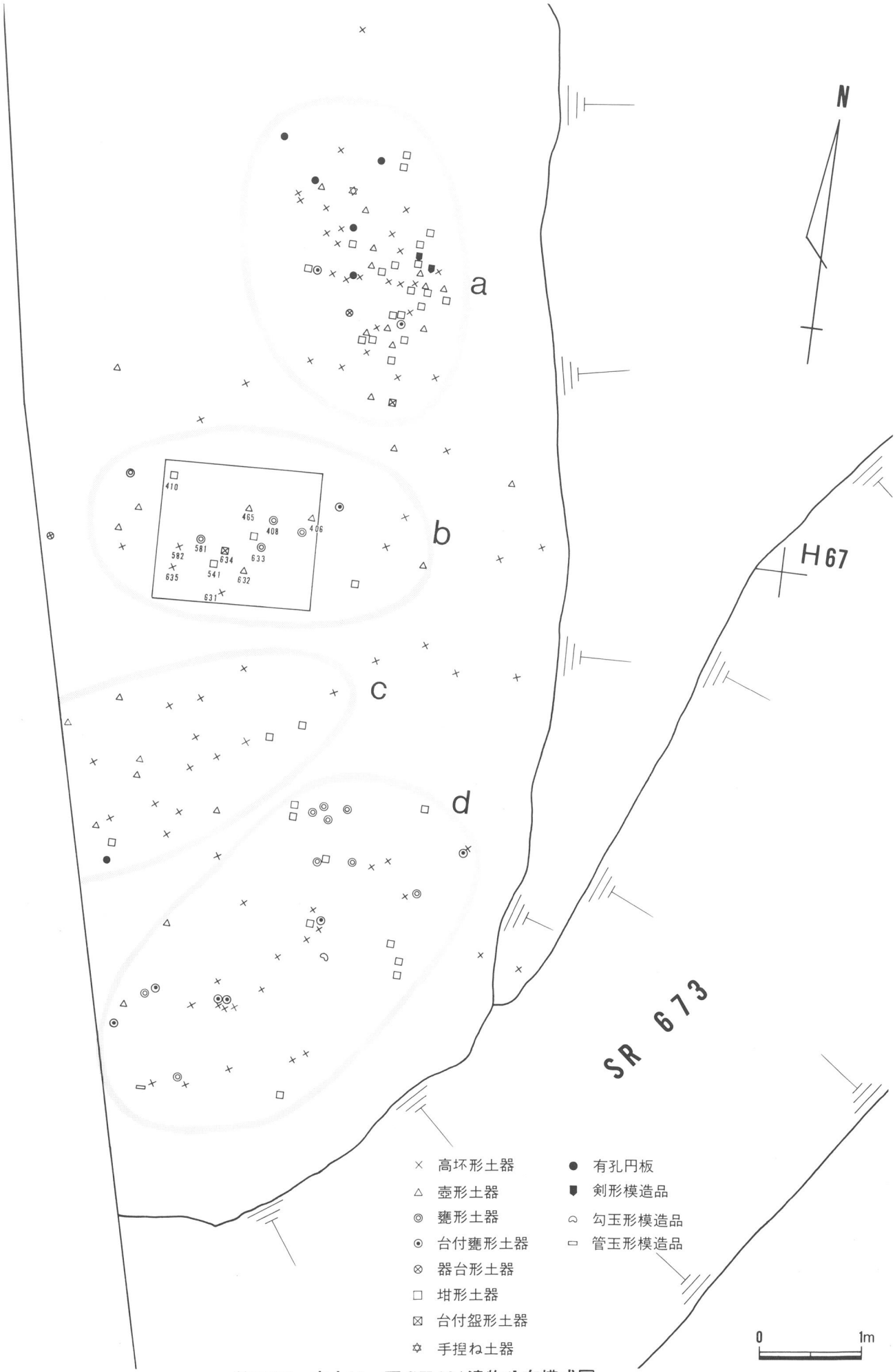
遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標高	特　記　事　項
SP1	G63	1.77	1.70	0.24	0.91	6.26	
SP2	G63	1.88	1.58	0.43	0.84	6.21	古墳時代（後期）
SP3	H64	0.51	0.46	0.12	0.90	6.25	
SP9	H64	0.72	0.68	0.16	0.94	6.29	
SP15	G61	0.68	0.56	0.07	0.82	6.23	
SP16	H59	1.00	0.83	0.55	0.83	6.10	
SP17	H61	1.32	1.05	0.41	0.80	6.18	平安時代
SP19	H63	0.99	0.67	0.09	0.68	6.17	
SP21	H60	1.04	0.86	0.21	0.83	6.33	
SP22	G64	0.21	0.20	0.18	0.95	6.17	
SP23	H62	0.90	0.65	0.15	0.72	6.29	
SP24	H62	0.72	0.58	0.19	0.81	6.22	
SP26	H64	0.26	0.24	0.11	0.92	6.16	
SP27	G62	1.10	0.80	0.27	0.73	6.16	
SP28	G61	1.10	0.82	0.68	0.75	6.17	
SP30	H60	0.71	0.64	0.22	0.90	6.10	
SP34	H60	0.84	0.74	0.06	0.88	6.31	
SP35	H60	0.53	0.50	0.12	0.94	6.14	
SP36	H63	0.74	0.69	0.02	0.93	6.25	
SP37	H61	0.50	0.50	0.22	1.00	6.17	
SP38	G63	0.58	0.50	0.11	0.86	6.17	
SP39	G62	0.74	0.66	0.11	0.89	6.16	
SP41	H62	1.20	1.06	0.70	0.88	5.95	古墳時代（後期）
SP42	H63	0.38	0.32	0.23	0.84	6.25	
SP43	H61	0.76	0.68	0.36	0.89	6.20	
SP44	H63	0.50	0.42	0.14	0.84	6.14	
SP45	G63	0.54	0.37	0.14	0.69	6.18	
SP46	H61	0.60	0.60	0.07	1.00	5.48	
SP47	H60	0.31	0.28	0.24	0.90	6.32	
SP48	H62	0.73	0.41	0.03	0.56	6.29	
SP49	H61	0.40	0.24	0.15	0.60	6.19	
SP151	H61	0.34	0.30	0.06	0.88	6.26	
SP152	H61	0.50	0.38	0.28	0.76	6.26	
SP153	H61	0.32	0.28	0.04	0.88	6.28	
SP154	H61	0.48	0.27	0.18	0.56	6.18	
SP155	H61	0.38	0.38	0.13	1.00	6.18	



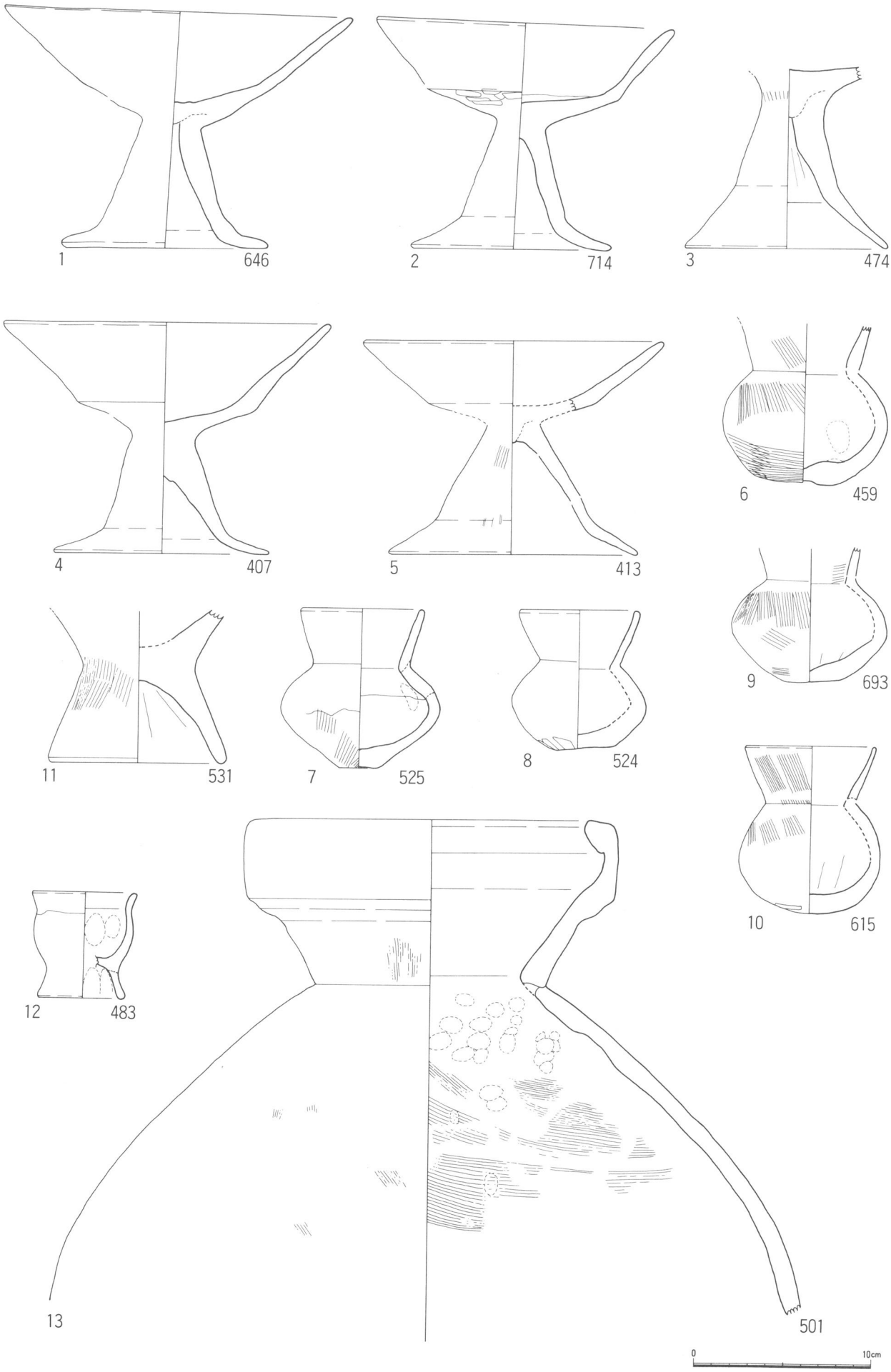
第56図　水上4区・水上10a区全体図

第57図　水上10a区SX624・SX624出土状況図

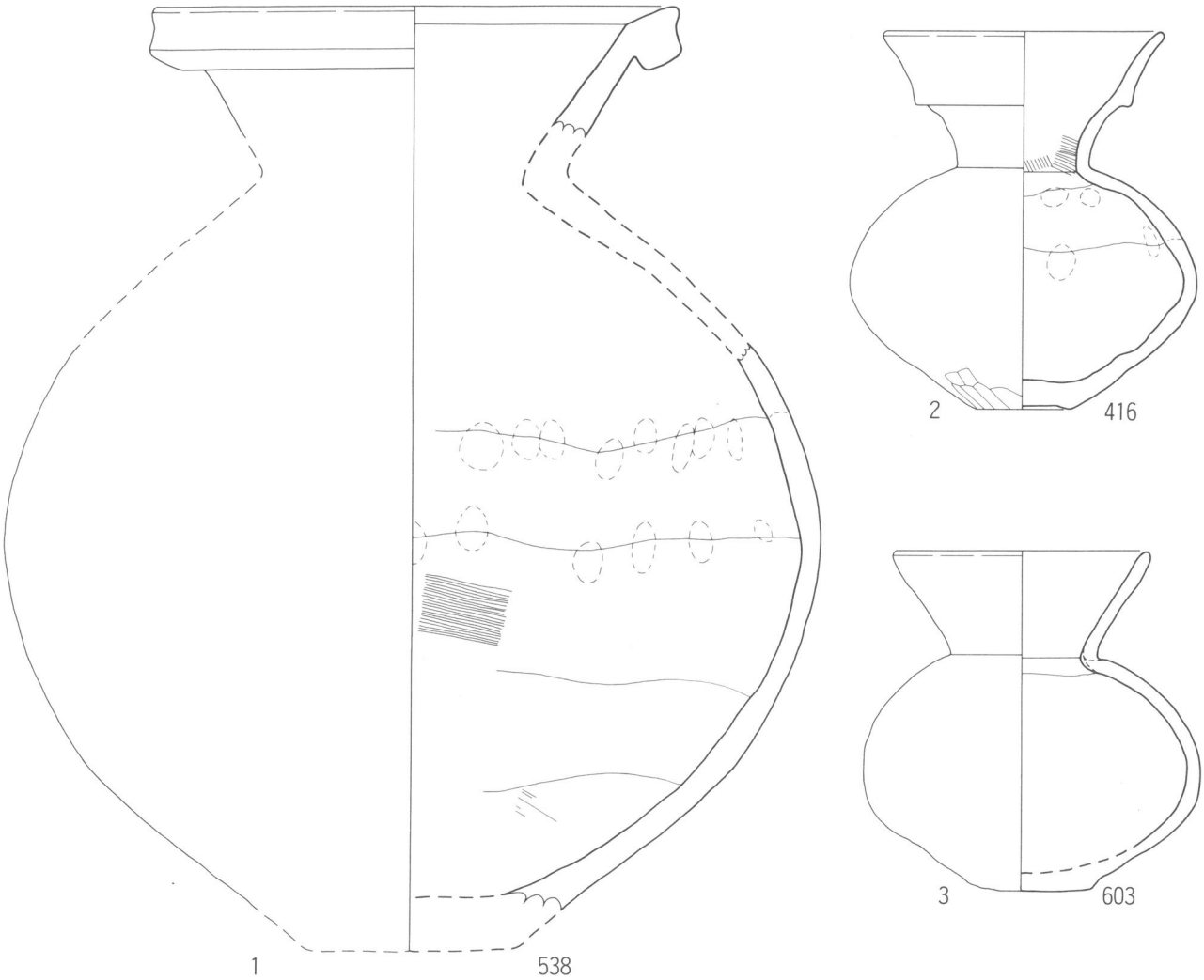




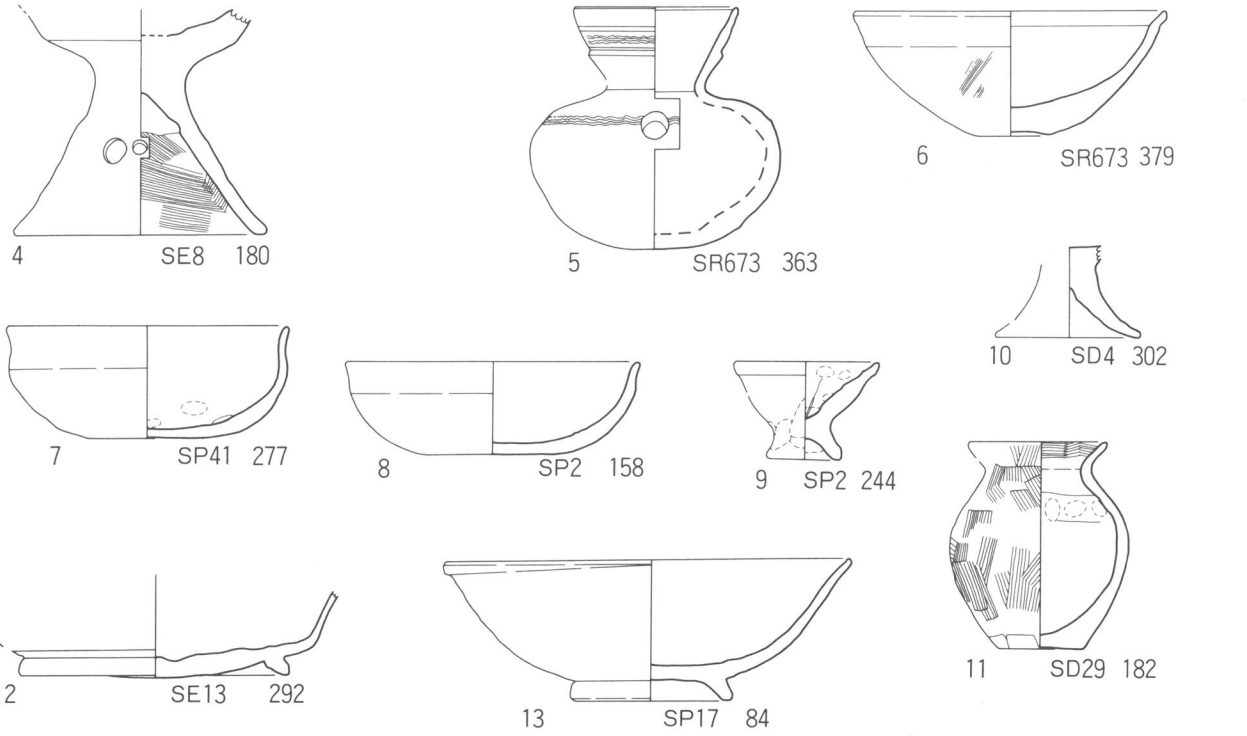
第58図　水上10a区SX624遺物分布模式図



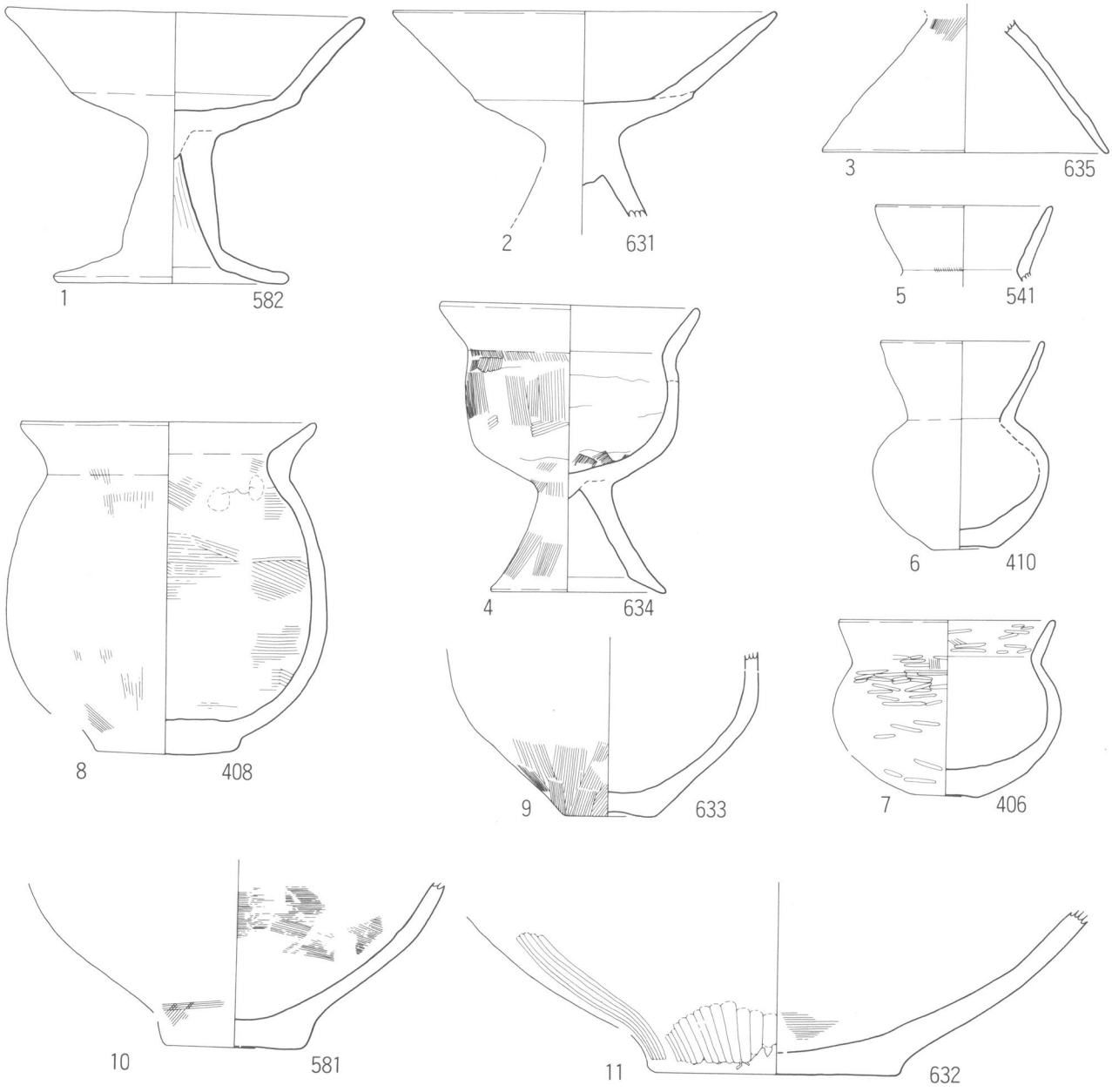
第59図　水上10a区SX624a群出土土器実測図



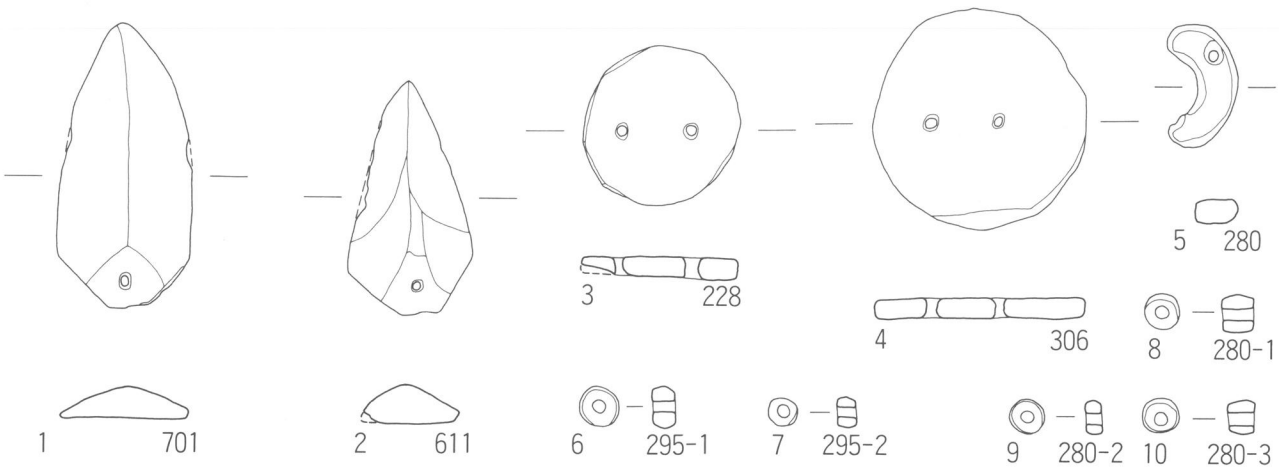
水上10区SX624 a群出土土器(1～3)



第60図　水上4区・水上10a区遺構出土土器実測図

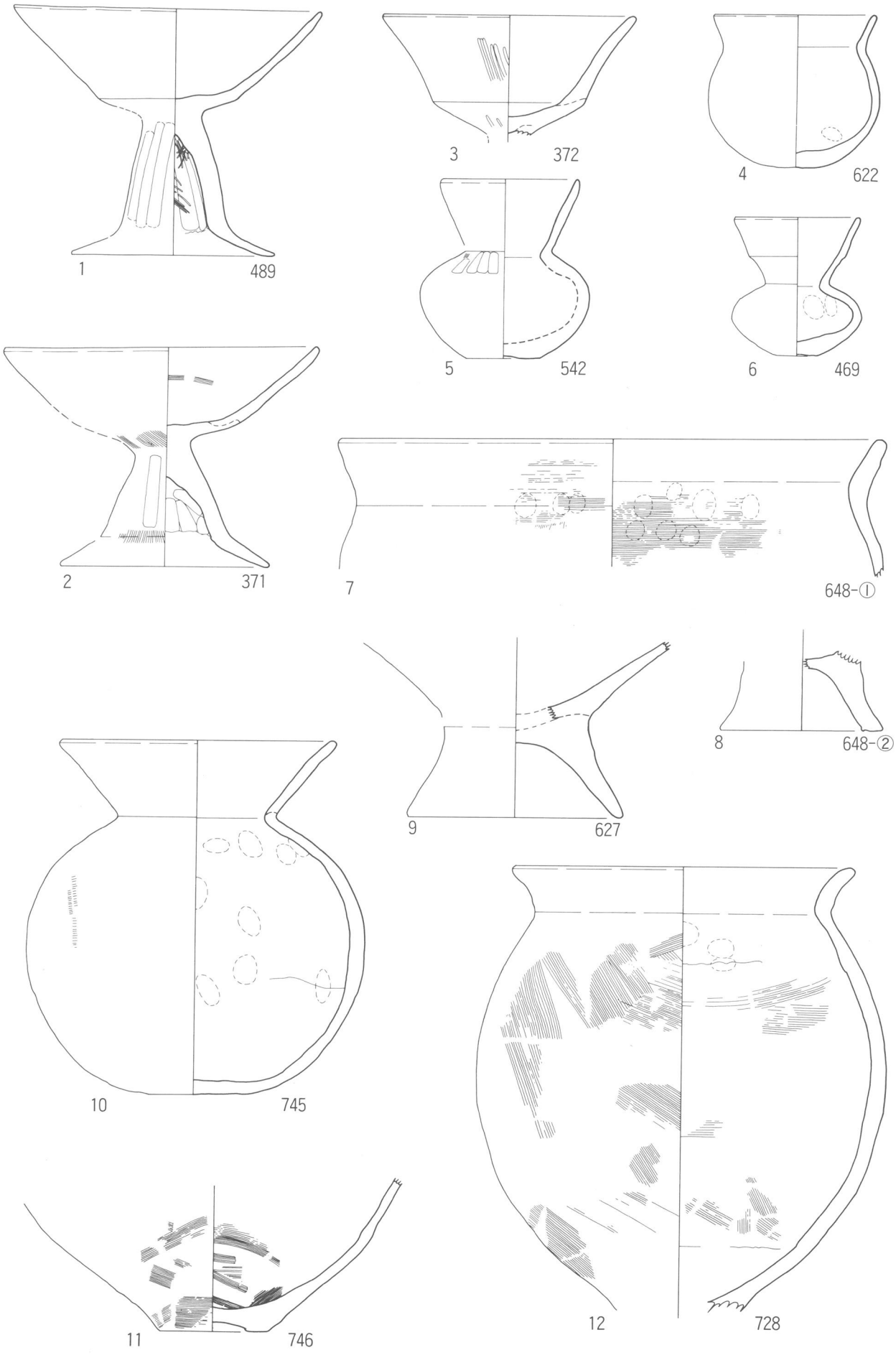


SX624 b群出土土器実測図



SX624石製模造品実測図

第61図　水上10 a 区 S X 624出土遺物実測図



第62図　水上10ａ区ＳＸ 624 ｄ群出土土器実測図

第21表　水上10ａ区ＳＸ624主要遺物一覧表

	a　群		b　群		c　群		d　群		その他個体数	合　計	
	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%		個体数	%
高坏形土器	22	38.5	6	27.3	12	57.1	16	41.0	20	76	45.2
壷形土器	12	21.1	5	22.7	6	28.6	1	2.6	5	29	17.3
甕形土器			5	22.7			9	23.1		14	8.3
台付甕形土器	2	3.5	1	4.5			5	12.8	1	9	5.4
坩形土器	19	33.3	4	18.2	3	14.3	8	20.5	1	35	20.8
台付盌形土器	1	1.8	1	4.5						2	1.2
手捏ね土器	1	1.8								1	0.6
器台形土器									2	2	2
合　計	57		22		21		39		29	168	
有孔円板	4				1				1	6	
剣形模造品	2									2	
勾玉形模造品							1			1	
管玉形模造品							1			1	
臼玉	a群b群合わせて　72				c群d群合わせて　212					284	

水上10ａ区（第56図）

1　概　要

現大谷川の右岸で河口起点より988ｍ上流に位置する調査区である。旧大谷川は73列～77列で検出されており、北東から南西方向の流れが北西から南東方向へと大きく蛇行する攻撃斜面となっている。水上10ａ区はこの蛇行の外側の微高地にあたる。前述の67列より続く砂層が基盤をなしているが、場所によっては上層に黄灰色粘土が堆積し基盤となっている。72列から74列にかけてはこの黄灰色粘土を採掘した跡が見られ、近世以降のものと推定される。またこの粘土採掘跡底面の砂層では採掘により破壊された井戸状遺構、溝状遺構、小穴が検出された。水上４区・水上10ａ区67列以南と同様に表土および客土直下が基盤層であるため、同一面で古墳時代前期から中世初頭までの遺構が混在する。

2　遺構各説

溝状遺構

ＳＤ634　G69・G70グリッドで検出された南北方向の溝状遺構である。北端は近世以降の粘土採掘によって切られ、中間部は撹乱を受けている。確認面で延長17.70ｍ、幅1.22ｍ～2.34ｍ、探さ0.24ｍを測る。出土した土師器より古墳時代前期と推定される。

ＳＤ690　G73グリッドで検出され、北端を旧大谷川、南端を近世以降の粘土採掘およびＳＥ651により切られている。確認面で延長3.82ｍ、幅1.12ｍ～1.57ｍ、深さ0.24ｍを測る。覆土中より手捏ね土器３点が出土した。出土した土師器より古墳時代中期と推定される。

土坑状遺構

ＳＰ700　G69・H69で検出された。確認面で長径2.16ｍ短径1.30ｍの長円形のプランを有する土坑で深さは0.89ｍである。覆土中より石製紡錘車が１点出土している。伴出した須恵器より奈良時代と推定される。

ＳＰ629　G71グリッドで検出され、確認面で長径2.02ｍ、短径1.60ｍの長円形のプランをもち、深さ0.33ｍを測る。底面には多数の小礫が置かれていた。上部は近世以降の粘土採掘により破壊されていた。

第22表　水上10a区小穴・土坑一覧表

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標　高	特　記　事　項
S P 597	G 65	0.70	0.38	0.02	0.54	5.79	
S P 598	H 65	0.90	0.90	0.62	1.00	5.75	
S P 620	G 66	0.14	0.13	0.12	0.93	5.94	
S P 621	G 66	0.21	0.15	0.09	0.71	6.07	
S P 622	G 66	(0.60)	0.44	0.14	(0.73)	5.64	
S P 629	G 71	2.02	1.60	0.33	0.79	5.87	古墳時代（後期）
S P 630	G 67	0.85	0.72	0.10	0.85	6.09	
S P 635	G 72	0.45	0.36	0.33	0.80	6.12	
S P 636	G 72	0.84	0.72	0.16	0.86	6.13	
S P 638	F 72	0.82	0.54	0.02	0.66	6.14	
S P 639	F 72	0.66	0.40	0.21	0.61	6.13	
S P 640	G 72	0.32	0.29	0.15	0.91	5.94	
S P 641	G 72	0.30	0.28	0.18	0.93	5.92	
S P 642	G 72	2.16	2.03	0.55	0.94	5.96	
S P 643	G 72	0.48	0.46	0.13	0.96	5.90	
S P 645	G 72	0.38	0.28	0.16	0.74	5.91	
S P 646	G 72	0.84	0.46	0.20	0.55	6.04	
S P 649	G 72	0.28	0.26	0.21	0.93	5.97	
S P 650	G 72	0.34	0.32	0.19	0.94	5.94	
S P 652	G 70	0.41	0.20	0.07	0.49	6.05	
S P 653	G 70	0.28	0.26	0.04	0.93	6.10	
S P 654	G 70	0.35	0.22	0.03	0.63	6.09	
S P 655	G 70	0.74	0.47	0.04	0.64	6.12	
S P 656	G 70	0.21	0.20	0.04	0.95	6.12	
S P 658	G 70	0.74	0.45	0.12	0.61	6.08	
S P 659	G 70	0.72	0.62	0.04	0.86	6.10	
S P 660	G 71	1.54	1.06	0.18	0.69	5.69	
S P 661	G 71	1.74	1.06	0.40	0.61	5.65	
S P 662	G 71	1.71	0.66	0.48	0.39	5.63	
S P 664	G 71	0.64	0.62	0.15	0.97	5.63	
S P 666	F 71	0.51	0.49	0.22	0.96	5.93	
S P 667	F 71	1.02	0.76	0.09	0.75	5.82	
S P 668	F 71	0.22	0.21	0.07	0.95	5.93	
S P 671	F 71	0.30	0.24	0.03	0.80	5.88	
S P 675	G 69	1.41	0.88	0.36	0.62	6.04	
S P 676	G 69	0.66	0.55	0.07	0.83	5.90	
S P 677	G 69	0.74	0.65	0.14	0.88	5.99	
S P 678	G 71	0.38	(0.32)	0.25	(0.84)	6.05	
S P 680	G 69	(0.72)	0.70	0.33	0.97	5.92	

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標高	特　記　事　項
S P 681	G 69	0.52	0.42	0.12	0.81	5.81	
S P 682	G 69	0.58	0.42	0.21	0.72	5.76	
S P 683	G 68	1.84	1.48	0.29	0.80	5.57	
S P 684	G 68	0.80	0.61	0.19	0.76	5.55	
S P 685	G 69	1.71	0.98	0.37	0.57	5.93	古墳時代（中期）
S P 687	G 71	0.90	0.78	0.06	0.86	6.07	
S P 688	G 72	0.70	0.48	0.27	0.69	5.91	
S P 689	G 69	0.96	（0.67）	0.15	（0.70）	5.91	
S P 691	F 72	0.94	0.90	0.39	0.96	6.06	
S P 692	F 72	0.82	0.55	0.15	0.67	6.07	
S P 693	F 72	0.22	0.20	—	0.91	6.11	
S P 694	F 73	0.48	0.45	0.24	0.94	6.05	
S P 695	F 73	0.52	0.45	0.24	0.87	6.09	
S P 696	F 72	0.65	0.58	0.28	0.89	6.03	
S P 697	F 72	0.60	0.42	0.21	0.70	5.91	
S P 698	F 73	1.56	1.42	0.44	0.91	5.67	
S P 699	F 73	0.42	0.30	0.13	0.71	5.98	
S P 700	G 69	2.16	1.30	0.89	0.60	5.69	奈良時代
S P 701	F 74	0.75	0.66	0.16	0.88	5.98	
S P 703	G 71	（1.07）	0.90	0.10	（0.84）	5.68	
S P 704	G 71	0.68	0.59	0.12	0.87	5.58	
S P 705	F 71	1.04	0.34	0.43	0.33	5.88	
S P 706	F 71	（0.64）	0.54	0.27	（0.84）	5.75	
S P 707	G 71	（0.34）	0.32	0.17	（0.94）	5.78	
S P 708	G 71	0.42	0.34	0.12	0.81	5.66	
S P 709	G 71	0.72	0.62	0.15	0.86	5.72	
S P 710	F 73	0.61	0.36	0.13	0.59	5.98	
S P 711	F 73	0.59	0.32	0.09	0.54	5.50	
S P 713	F 72	0.16	0.16	0.08	1.00	6.07	
S P 715	G 72	1.06	0.40	0.20	0.38	6.09	
S P 716	G 73	0.56	0.48	0.17	0.86	5.87	
S P 717	F 73	1.06	0.90	0.11	0.85	6.11	
S P 718	G 73	0.30	0.28	0.05	0.93	5.81	
S P 719	G 73	1.36	0.62	0.14	0.46	6.09	

第23表　水上10ｃ区小穴・土坑一覧表

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標　高	特　記　事　項
ＳＰ545	Ｃ82	0.68	0.60	0.17	0.88	6.06	
ＳＰ556	Ｃ83	0.76	0.26	0.12	0.34	6.03	
ＳＰ557	Ｃ83	0.50	0.42	0.20	0.84	6.15	
ＳＰ566	Ｃ83	1.06	0.72	0.12	0.68	5.96	
ＳＰ567	Ｃ82	0.66	0.52	0.12	0.79	6.07	
ＳＰ722	Ｅ81	0.48	0.40	0.03	0.83	5.58	
ＳＰ725	Ｄ79	0.71	0.68	0.23	0.96	5.99	
ＳＰ726	Ｄ79	0.48	0.32	0.08	0.67	6.00	
ＳＰ727	Ｄ79	1.38	1.14	0.85	0.83	5.98	古墳時代（前期）
ＳＰ728	Ｄ79	0.94	0.88	0.56	0.94	5.99	
ＳＰ729	Ｄ79	1.14	1.02	0.24	0.89	6.03	
ＳＰ730	Ｄ81	0.22	0.18	0.04	0.82	5.82	
ＳＰ732	Ｄ82	0.56	0.48	0.21	0.86	6.14	
ＳＰ733	Ｄ82	0.22	0.20	0.10	0.91	5.96	
ＳＰ734	Ｄ82	0.20	0.20	0.13	1.00	6.14	
ＳＰ735	Ｄ82	0.25	0.24	0.25	0.96	6.00	
ＳＰ736	Ｄ82	0.40	0.33	0.12	0.83	6.06	
ＳＰ737	Ｄ80	0.34	0.31	0.09	0.91	6.01	
ＳＰ738	Ｄ80	0.14	0.12	0.13	0.86	5.94	
ＳＰ739	Ｄ81	0.46	0.22	0.13	0.48	5.98	
ＳＰ740	Ｄ81	0.25	0.23	0.12	0.92	5.85	
ＳＰ741	Ｄ79	0.47	0.36	0.10	0.77	6.02	
ＳＰ742	Ｅ80	0.18	0.18	0.09	1.00	6.12	
ＳＰ743	Ｅ80	1.25	0.96	0.20	0.77	5.92	
ＳＰ744	Ｅ80	0.18	0.16	0.03	0.89	5.80	
ＳＰ745	Ｄ80	0.32	0.24	0.15	0.75	6.00	
ＳＰ746	Ｄ81	0.22	0.20	0.07	0.91	5.97	
ＳＰ747	Ｄ80	0.10	0.10	0.12	1.00	5.86	
ＳＰ748	Ｄ80	0.20	0.18	0.06	0.90	5.86	
ＳＰ749	Ｄ80	0.22	0.22	0.06	1.00	5.90	
ＳＰ750	Ｄ80	0.14	0.14	0.04	1.00	5.86	
ＳＰ751	Ｄ80	0.11	0.11	0.05	1.00	5.85	
ＳＰ752	Ｄ80	0.26	0.20	0.14	0.77	5.84	
ＳＰ753	Ｄ80	0.18	0.11	0.06	0.61	5.83	
ＳＰ754	Ｄ80	0.21	0.20	0.06	0.95	5.84	
ＳＰ755	Ｄ80	0.15	0.14	0.05	0.93	5.83	
ＳＰ756	Ｄ80	0.23	0.19	0.06	0.83	5.94	
ＳＰ757	Ｄ81	0.23	0.17	0.05	0.74	5.86	
ＳＰ758	Ｄ81	（0.42）	0.37	0.06	（0.88）	6.11	

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標　高	特　記　事　項
SP 759	E 77	1.52	1.34	0.38	0.88	5.83	
SP 760	E 77	0.76	0.74	0.20	0.97	5.87	
SP 764	E 77	（1.80）	1.68	0.37	0.93	5.74	平安時代末
SP 767	E 78	0.84	0.78	0.71	0.93	5.68	
SP 768	E 80	0.80	0.64	0.15	0.80	5.68	古墳時代（後期）
SP 769	E 80	0.88	0.41	0.21	0.47	5.60	
SP 772	D 82	0.35	0.24	0.08	0.69	6.01	
SP 773	D 82	0.23	0.20	0.09	0.87	6.15	

第24表　水上10a区溝状遺構一覧表

遺構番号	グリッド	延　長	幅	深　さ	遺構面標　高	特　記　事　項
SD 589	G 65	10.30	1.02	0.31	5.70	平安時代末
SD 590	G 65	4.90	0.45	0.03	5.78	
SD 591	G 65	4.40	0.43	0.03	5.75	
SD 593	G 65	0.73	0.66	0.05	5.73	平安時代末
SD 594	G 65	11.00	1.06	0.04	5.59	平安時代末
SD 595	G 66	5.20	1.34	0.26	5.87	
SD 596	G 65	3.71	0.78	0.30	5.58	
SD 599	G 65	2.40	0.31	0.04	5.74	
SD 600	G 65	3.71	1.08	0.16	5.85	
SD 623	G 66	1.50	0.24	0.04	5.98	
SD 628	G 67	3.60	1.92	0.05	6.13	
SD 634	G 70	17.70	2.34	0.24	5.99	古墳時代（前期）
SD 637	G 72	1.30	0.35	0.04	6.19	
SD 647	G 72	2.26	0.54	0.10	5.99	
SD 648	F 72	6.00	2.30	0.22	6.00	
SD 657	G 70	2.80	0.90	0.07	6.07	
SD 665	G 71	3.14	0.86	0.16	5.62	
SD 669	F 71	6.30	0.48	0.10	5.90	
SD 670	F 71	2.80	0.94	0.08	5.91	
SD 672	F 71	2.30	1.12	0.08	5,90	
SD 674	G 69	4.30	1.40	0.21	5.99	
SD 679	G 71	1.70	0.61	0.10	6.01	
SD 686	G 71	2.10	0.38	0.10	5.81	
SD 690	G 73	3.82	1.57	0.24	6.00	古墳時代（中期）
SD 702	G 68	11.90	1.98	0.12	6.01	
SD 714	F 72	3.40	0.28	0.05	6.03	
SD 721	F 73	4.80	0.24	0.07	5.73	

出土した土師器坏より古墳時代後期と推定される。

ＳＰ685　Ｇ69グリットで検出された。平面長円形であり、確認面で長径1.71ｍ、短径0.98ｍ、深さ0.37ｍを測る。出土した坩形土器より古墳時代中期と推定される。

小　　穴

ＳＰ694・ＳＰ695　Ｆ73グリッドで検出され、ともに隅丸の方形プランであり、ＳＰ694は0.48ｍ×0.45ｍ、ＳＰ695は0.52ｍ×0.45ｍである。深さはともに0.24ｍであり覆土も同じ暗茶褐色であった。２つの小穴は東西方向に2.5ｍ離れて存在するが、これらの２ｍ北側には幅6.0ｍ～6.5ｍの近世以降の粘土採掘跡がある。２つの小穴はこの粘土採掘跡により破壊された掘立柱建物跡の一部とも考えられる。

井戸状遺構

ＳＥ632(第118図) Ｆ72グリッドの調査区西端で検出されたため、東側４分の３の調査となった。確認された範囲で平面は径1.50ｍの半円形を呈し、底面は0.68ｍ×0.84ｍの長方形に近い形状をなす。上面のうち南側半分は隣接する粘土採掘跡により上部を0.1ｍほど掘削されている。また底面の西側は隣接する現在の土堤により若干の撹乱を受けていた。掘り方の北側は比較的ゆるやかな傾斜をもつが、南側では井戸枠に沿うように急傾斜の掘り込みがなされていた。確認面は黄灰色粘土上面で、この下層の砂層の中間が底面となっている。井戸枠内および裏込め土内には３㎝前後から拳大の礫の堆積が底面より0.2ｍほどまで見られた。井戸枠は幅8.0㎝～34.0㎝、長さ7.0㎝～18.0㎝の板を縦に埋め込み方形にならべてある。西辺の全部と北辺・南北の一部は撹乱を受けていたため東辺のみ全容が確認された。東辺は0.78ｍで７枚の板を配してあり二重になっている部分も見られた。北辺は確認された長さ0.82ｍで、７枚の板を配し西端に角材が見られるが支柱とも考えられる。南辺は確認された長さ0.49ｍで、幅34.0㎝と幅13.0㎝の２枚の板を配している。底面の礫の直上から出土した須恵器坏身より奈良時代と推定される。

ＳＥ651(第118図) Ｇ72グリッドで検出された。確認面で1.55ｍ×1.08ｍの隅丸の方形プランをもつ。底面は1.18ｍ×0.85ｍである。深さは0.90ｍを測る。掘込み面は黄灰色粘土であり、急傾斜に掘られ砂層の中間にまで達している。井戸枠は四隅に柄を有する約10㎝×20㎝角、長さ50㎝の角材を置き、その間に幅6.0㎝～27.0㎝、長さ22.0～42㎝の縦板を23枚ならべ、1.10ｍ×0.85ｍの長方形をなしている。井戸内中央では底面から0.18ｍに長径15.8㎝、短径14.1㎝の円板が検出され、桶状の容器の底と推定される。井戸枠内よりの土器の出土は土師器の小片だけにとどまったが、井戸の構造がＳＥ632と類似しておりＳＥ632と同時期である可能性が高い。

第25表　水上10ｃ区溝状遺構一覧表

遺構番号	グリッド	延　長	幅	深　さ	遺構面標高	特記事項
ＳＤ550	Ｃ82	6.54	1.16	0.17	6.03	古墳時代（前期）
ＳＤ712	Ｄ81	2.80	0.92	0.21	5.97	
ＳＤ720	Ｄ81	8.20	1.36	0.32	6.02	
ＳＤ731	Ｄ81	3.70	0.64	0.10	6.01	
ＳＤ761	Ｄ81	7.40	1.52	0.18	5.93	
ＳＤ762	Ｄ82	0.82	0.92	0.34	5.36	
ＳＤ763	Ｈ66	2.90	0.68	0.08	5.91	
ＳＤ765	Ｅ76	6.30	4.16	0.47	5.58	奈良時代～平安時代
ＳＤ766	Ｅ77	8.70	3.50	0.35	5.69	
ＳＤ770	Ｅ81	4.70	0.52	0.19	5.55	奈良時代
ＳＤ774	Ｅ79	9.00	0.98	0.04	5.64	

水上10ｃ区（第64図）

1　概　　要

現大谷川の右岸で河口起点より約1100ｍ上流に位置する調査区である。旧大谷川が大きく蛇行する外側の微高地であるが、現大谷川対岸の水上８区が低湿地である状況から微高地末端部と推定される。76～77列は砂混りの黄灰色粘土が基盤層となり、78列以北は灰色の砂層が基盤層である。溝状遺構・土坑・小穴が検出されているが、水上10ａ区同様遺構面は一面のみで古墳時代前期～中世初頭の遺構が混在している。調査区東端に昭和17年まで使用されていた旧大谷川のバイパスである石橋川が検出された。なお調査区全域で中央部分に落差があり、東側半分が傾斜して客土が見られたが、この石橋川の工事による撹乱と考えられる。

2　遺構各説

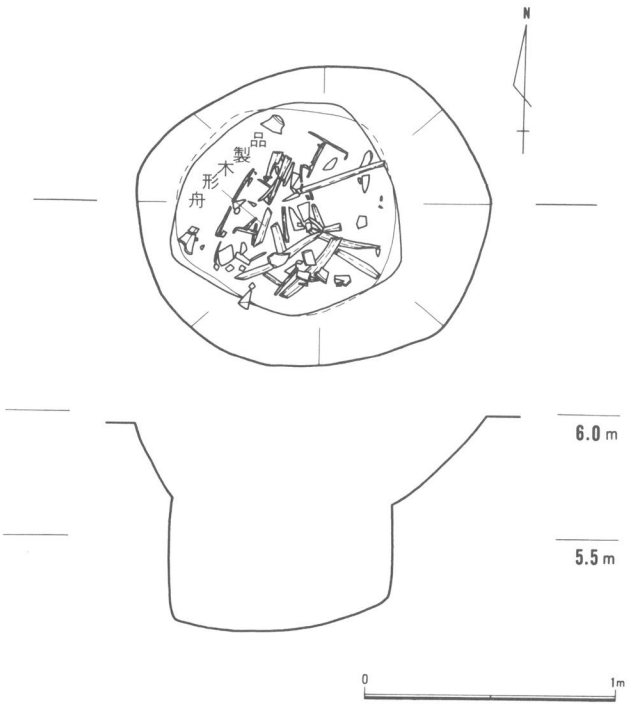
溝状遺構

ＳＤ765　Ｅ76・Ｆ76グリッド北側からＥ77・Ｆ77グリッド南端にかけて検出された東西方向の溝で、西から旧大谷川に流れ込む。確認面で幅3.18～4.16ｍ、深さ0.47ｍを測る。延長6.30ｍが確認されたが西端は調査区外へと続いている。覆土中より馬形土製品１点と動物の形代と考えられる土製品２点が出土した。いずれも欠損部分が多くかなり摩耗していた。伴出土器は須恵器、灰釉陶器、土師器であり小破片が多く溝に流れ込んだものと考えられる。須恵器は奈良時代と推定されるものが大半でこの溝の掘削年代は奈良時代であり、灰釉陶器の時期である平安時代中頃に埋没したものと考えられる。

ＳＤ550　Ｃ82・Ｄ82グリッドで検出された東西方向の溝状遺構で、西端は撹乱により東端はＳＤ720により切られている。確認面で延長6.54ｍ、幅1.16～0.74ｍ、深さ0.17ｍを測る。出土した土師器から古墳時代前期と考えられる。

土坑状遺構

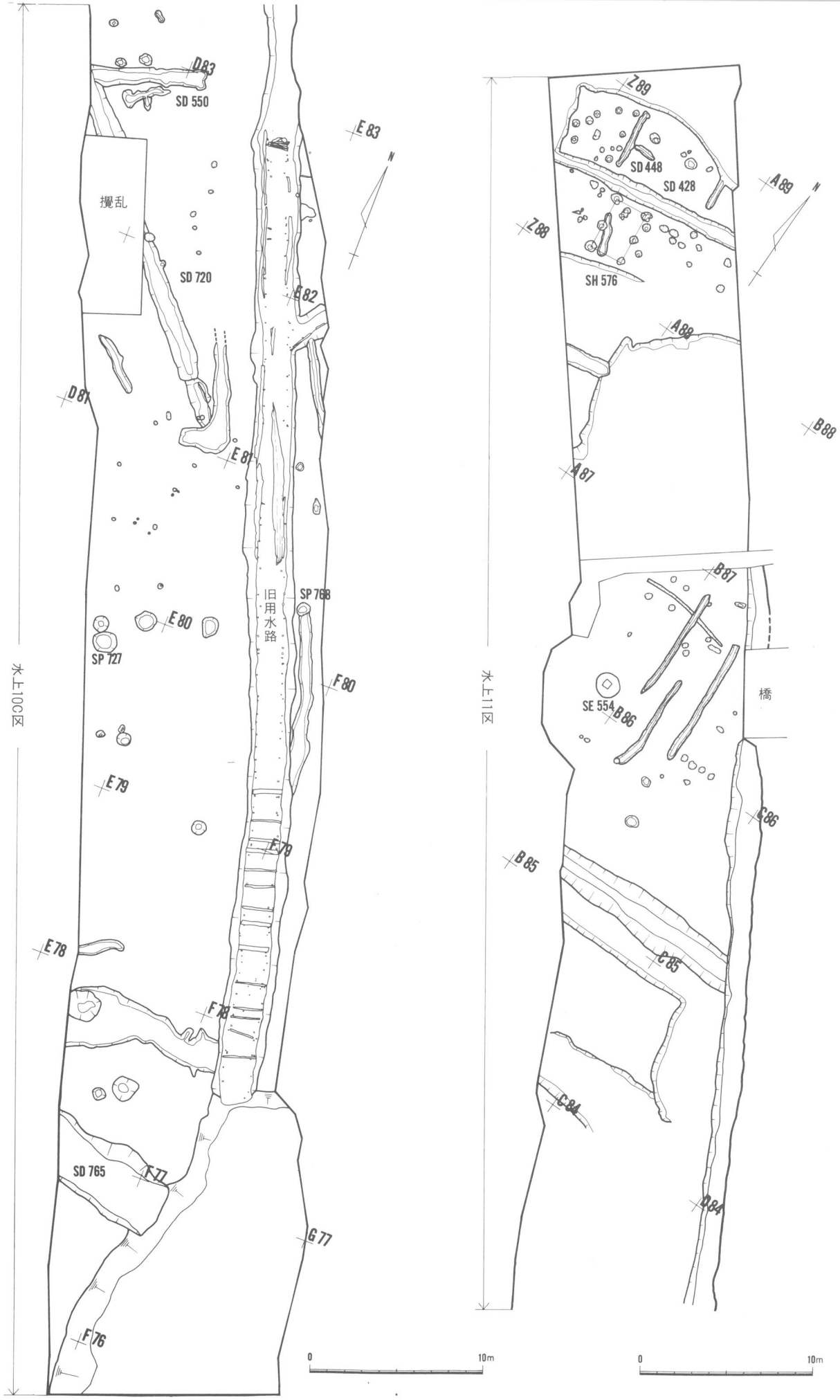
ＳＰ727　（第63図）Ｄ79グリッドで検出された。掘り方の形状は上半部がすり鉢状で、下半部は垂直の掘り込みである。上半部は長径1.41ｍ、短径1.18ｍの長円形で深さは0.35ｍである。下半部は長径0.88ｍ、短径0.85ｍの円形で深さ0.50ｍである。上半部上層からは台付甕・壷などの土師器片が出土し、上半部下層から下半部上層にかけては多数の木片が折り重なるように出土した。これらの木片からは舟形木製品も検出された。出土した土師器片より埋没年代は古墳時代前期と考えられる。奈良県桜井市纒向遺跡辻地区の古墳時代前期の土壙４から黒漆塗木製皿、舟形木製品、水鳥形木製品、大型木製高坏などが出土しており、その祭祀性が指摘されている（『纒向』「奈良県立橿原考古学研究所編1976）。本遺跡の舟形木製品および土坑が同じ性格であるかどうかは今後の検討課題としたい。



第63図　水上10ｃ区ＳＰ727実測図

小　　穴

ＳＰ768　Ｅ80グリッドで検出され、長径0.80ｍ・短径0.64ｍの長円形のプランで、深さ0.15ｍを測る。径２～４㎝ほどの小礫が底部に敷きつめられていた。出土した須恵器坏より古墳時代後期と推定される。



第64図　水上10ｃ区、水上11区全体図

水上11区（第64図）

1　概　　要

現大谷川の右岸で河口起点より約1190ｍ上流に位置する調査区である。北側の宮川３区で旧大谷川が大きく蛇行するが、この外側の微高地にあたる。水上10区で基盤を形成していた砂層は83列まででみられなくなり、84列以北は白色粘土が基盤となる。85列北半部と86列、88列では茶褐色粘土が堆積し、奈良時代～平安時代の遺構面となり溝状遺構、掘立柱建物跡、井戸状遺構、小穴群が検出された。84列と85列南半部、87列は、近世以降の水田により撹乱を受けていた。

2　遺構各説

掘立柱建物跡

ＳＨ576（第65図）Ｚ88グリッドで検出された。２間×１間の南北棟建物で、桁行3.02ｍ、梁間1.96ｍを測る。柱掘り方はほぼ円形のプランで、径0.46ｍ～0.68ｍ、深さ0.04ｍ～0.17ｍを測る。覆土は灰色粘土である。

溝状遺構

ＳＤ428（第65図）Ｙ88・Ｚ88グリッドで検出され、調査区を東西に横切って西端は調査区外へ続き、東端は現大谷川により切られている。延長12.98ｍ、幅0.84ｍ～1.04ｍ、深さ0.46ｍを測る。Ｙ88・Ｚ88で確認された小穴群のほぼ中央にあり、南にＳＨ576が隣接することから排水路として機能していたものと考えられる。出土した灰釉陶器から平安時代前期後半と考えられる。

ＳＤ448（第65図）Ｚ88グリッドにあり、延長3.54ｍの南北方向の溝状遺構で、幅0.26ｍ～0.44ｍ、深さ0.07ｍと測る。出土した須恵器長頸壷より平安時代前期後半と考えられる。西側に隣接して小穴群があるが、このうちＳＰ509、ＳＰ511、ＳＰ449は約0.3ｍ西に1.5ｍ間隔でこの溝状遺構と同方向にならんでいる。掘立柱建物の想定が可能ならば、周溝として機能していたのかもしれない。

井戸状遺構構

ＳＥ554(第119図）Ａ86グリッドで検出された木組みの井戸状遺構である。長径1.51ｍ、短径1.37ｍの東西にやや長い円形プランで、深さ1.27ｍを測る。掘り込み面は茶褐色粘土層で、基盤層である白黒互層粘土の三層目の白色粘土が底面となっている。井戸枠は幅49㎝～52㎝、長さ118㎝～125㎝の縦板４枚を方形に組んでいる。東西の両辺には、上面から0.14ｍにそれぞれ長さ44㎝、48㎝の横桟が残存していた。底面からは５㎝ほどは黄灰色粘土が埋められ、この上10㎝ほどに径１㎝～５㎝ほどの多数の小礫が水を濾過する目的で置かれている。さらにこの小礫の直上には須恵器甕の肩部から口縁部にかけての破片が口縁を下にする状況で検出された。あるいは水溜の代用として置かれたものかもしれない。底面より0.2ｍ～0.3ｍ上には須恵器壷１点と土師質の小皿４点、手捏ね工器１点が検出され、ヒョウタンも伴出することから井戸廃棄に伴う祭祀に用いられたものとも考えられる。出土した須恵器より古墳時代後期末～奈良時代前期と考えられる。

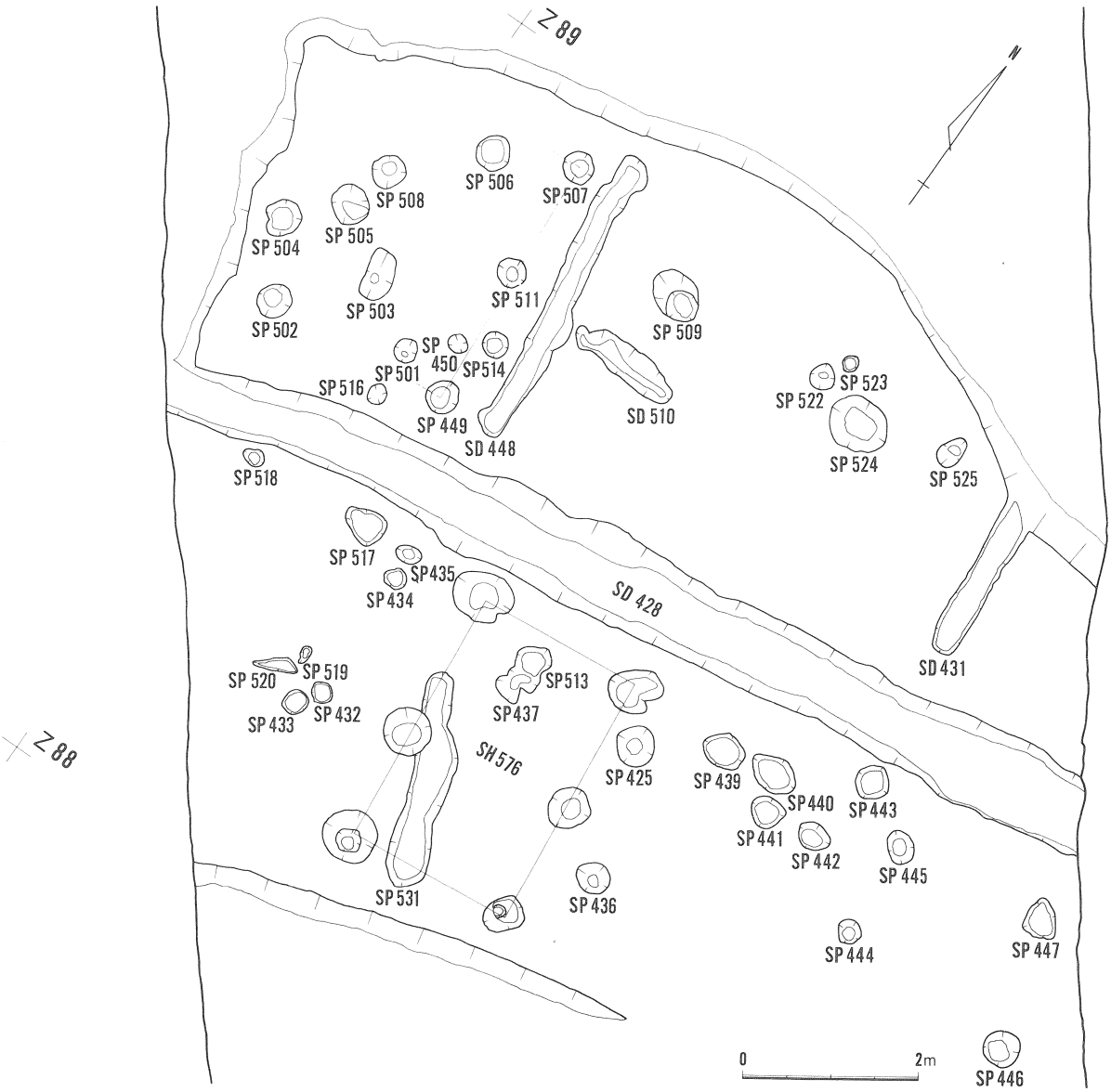
第26表　水上11区小穴・土坑一覧表

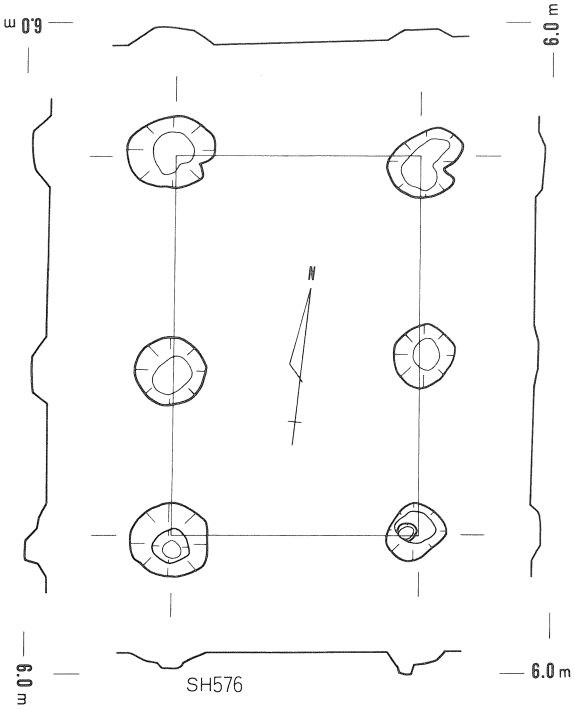
遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標　高	特　記　事　項
S P 425	Z 88	0.48	0.46	0.19	0.96	6.13	
S P 432	Z 88	0.26	0.22	0.12	0.85	6.16	
S P 433	Z 88	0.30	0.24	0.08	0.80	6.16	
S P 434	Z 88	0.24	0.22	0.05	0.92	6.18	
S P 435	Z 88	0.30	0.22	0.09	0.73	6.18	
S P 436	Z 88	0.38	0.36	0.13	0.95	6.12	
S P 437	Z 88	0.74	0.22	0.12	0.30	6.17	
S P 439	Z 88	0.54	0.38	0.23	0.70	6.06	
S P 440	Z 88	0.60	0.42	0.06	0.70	6.10	
S P 441	Z 88	0.38	0.35	0.06	0.92	6.12	
S P 442	Z 88	0.36	0.32	0.06	0.88	6.10	
S P 443	Z 88	0.46	0.42	0.07	0.91	6.10	
S P 444	Z 88	0.28	0.26	0.07	0.92	6.11	
S P 445	Z 88	0.40	0.30	0.09	0.75	6.10	
S P 446	A 88	0.44	0.40	0.09	0.91	6.04	
S P 447	A 88	0.42	0.36	0.38	0.86	6.05	
S P 449	Z 88	0.40	0.38	0.08	0.95	6.18	
S P 450	Z 88	0.24	0.18	0.12	0.75	6.19	
S P 501	Z 88	0.30	0.27	0.18	0.90	6.18	
S P 502	Y 88	0.42	0.38	0.13	0.90	6.13	
S P 503	Z 88	0.58	0.34	0.21	0.59	6.17	
S P 504	Y 88	0.42	0.36	0.10	0.86	6.12	
S P 505	Y 88	0.46	0.44	0.16	0.96	6.16	
S P 506	Z 88	0.42	0.40	0.14	0.95	6.18	
S P 507	Z 88	0.40	0.38	0.10	0.95	6.17	
S P 508	Y 88	0.38	0.36	0.17	0.95	0.18	
S P 509	Z 88	0.66	0.48	0.24	0.73	6.18	平安時代
S P 511	Z 88	0.36	0.34	0.12	0.94	6.18	
S P 514	Z 88	0.32	0.30	0.06	0.94	6.19	
S P 516	Z 88	0.24	0.22	0.05	0.92	6.16	
S P 517	Z 88	0.52	0.24	0.15	0.46	6.16	
S P 518	Z 88	0.26	0.18	0.13	0.69	6.13	
S P 519	Z 88	0.26	0.12	0.15	0.46	6.16	
S P 520	Z 88	0.50	0.12	0.16	0.24	6.13	
S P 522	Z 88	0.32	0.30	0.10	0.94	5.99	
S P 523	Z 88	0.22	0.18	0.06	0.82	5.99	
S P 524	Z 88	0.74	0.56	0.31	0.76	6.06	
S P 525	Z 88	0.38	0.22	0.13	0.57	6.03	平安時代
S P 528	A 86	0.40	0.38	0.21	0.95	5.99	平安時代

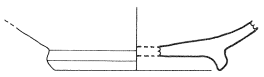
遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標　高	特　記　事　項
S P 529	A 86	0.42	0.38	0.08	0.90	6.02	
S P 530	A 86	0.34	0.28	0.13	0.82	5.98	
S P 531	A 86	0.34	0.28	0.10	0.82	5.97	
S P 532	B 86	0.22	0.20	0.55	0.91	5.88	
S P 533	B 86	0.64	0.26	0.05	0.41	5.96	
S P 534	B 86	0.36	0.34	0.17	0.94	6.00	
S P 535	B 86	0.38	0.34	0.31	0.89	6.29	
S P 537	B 86	0.30	0.22	0.13	0.73	6.00	
S P 539	B 86	0.84	0.22	0.02	0.26	6.00	
S P 540	A 86	0.28	0.18	0.03	0.64	6.00	
S P 541	B 86	0.26	0.22	0.17	0.85	5.88	
S P 542	B 86	0.54	0.28	0.12	0.52	5.91	
S P 543	B 86	0.48	0.46	0.11	0.96	6.02	
S P 544	B 86	0.46	0.36	0.03	0.78	5.98	
S P 546	B 85	0.40	0.26	0.14	0.65	5.98	
S P 547	B 85	0.68	0.36	0.13	0.53	6.04	
S P 548	B 85	0.40	0.28	0.17	0.70	6.00	
S P 558	B 85	0.78	0.66	0.08	0.85	5.92	平安時代
S P 561	A 85	0.36	0.26	0.13	0.72	5.96	
S P 562	A 85	0.22	0.20	0.08	0.91	5.96	
S P 563	B 86	0.36	0.32	0.11	0.89	5.92	
S P 564	B 86	0.42	0.34	0.08	0.81	5.86	
S P 565	B 85	0.24	0.20	0.02	0.83	5.89	

第27表　水上11区溝状遺構一覧表

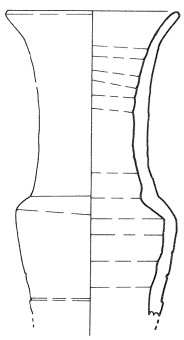
遺構番号	グリッド	延　長	幅	深　さ	遺構面標　高	特　記　事　項
S D 420	Z 87	2.64	1.02	0.14	6.01	
S D 428	Z 88	12.98	1.04	1.40	6.18	平安時代
S D 431	Z 88	1.96	0.38	0.08	6.13	
S D 448	Z 88	3.54	0.44	0.07	6.18	平安時代
S D 510	Z 88	1.30	0.38	0.09	6.18	
S D 515	C 83	8.24	0.84	0.15	6.05	
S D 526	B 86	7.48	0.44	0.10	6.00	
S D 527	B 86	6.90	0.52	0.09	5.99	
S D 538	A 86	5.72	0.26	0.06	5.99	
S D 549	D 82	9.92	2.10	0.06	5.92	
S D 551	B 86	5.94	0.55	0.07	5.99	
S D 555	C 83	9.04	2.22	0.15	5.93	
S D 568	B 85	11.14	2.60	0.08	5.75	





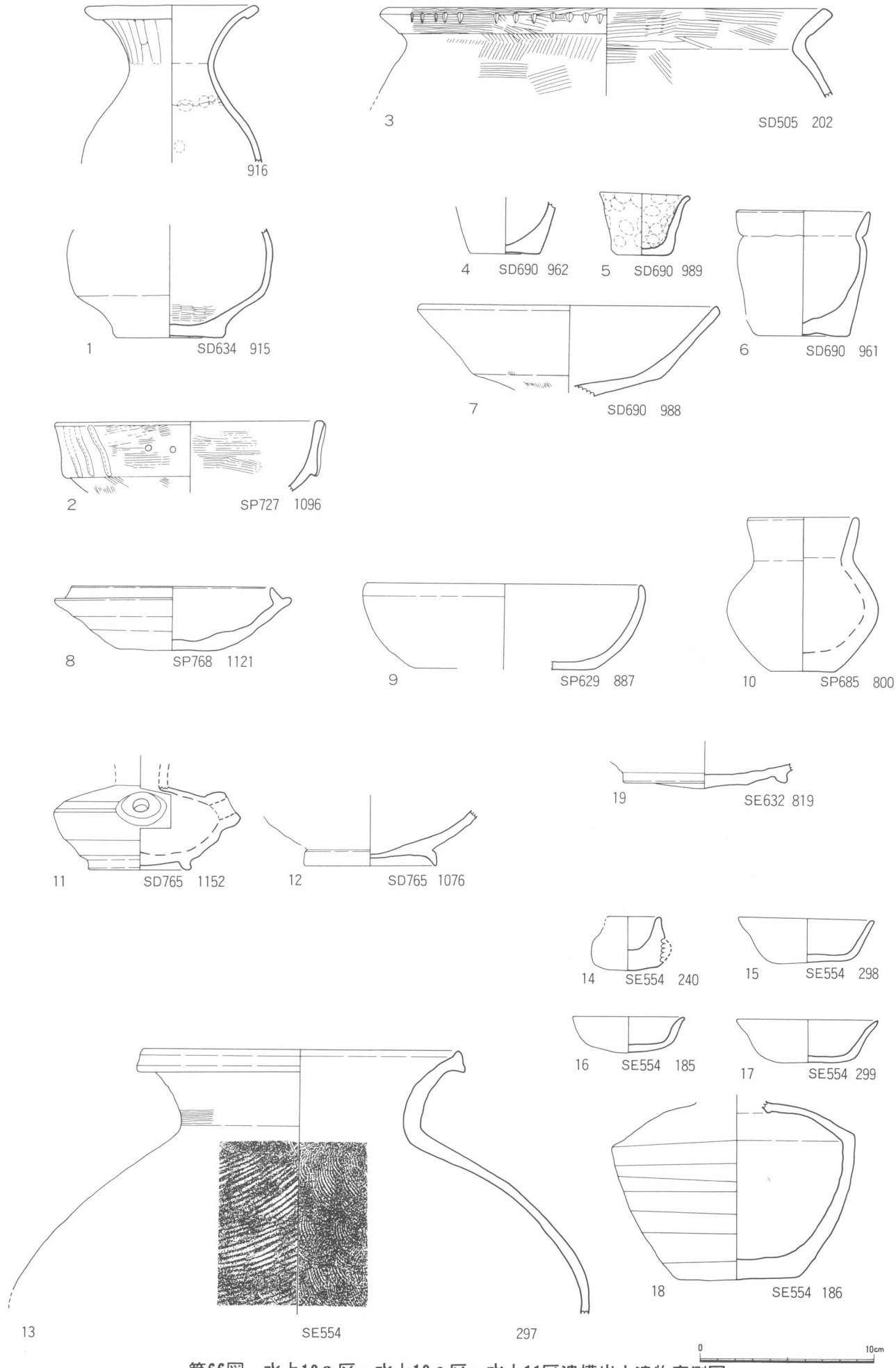


1　灰釉陶器32SD428



2　須恵器203SD448

第65図　水上11区ＳＨ 576 平安時代遺構図



第66図　水上10a区・水上10c区・水上11区遺構出土遺物実測図

水上８区（第67図）

1　概　　要

現大谷川の左岸で河口起点より約1130ｍ上流に位置する調査区である。北側の水上９区から８区にかけてはほぼ全域で底地地形が確認されている。水上９区の北端にあたる90列・91列には微高地の堆積がみられ、本遺跡の基盤層である海成シルト層（第68図Ｇ層）と白色粘土・黒色粘土の互層（第68図Ａ～Ｆ層）はほぼ水平に堆積している。これらの基盤層は89列ではやや傾斜しながら河口起点より1236ｍ上流地点（以下□ｍ地点と略す）付近で切れ、東方向に傾斜する低地地形を形成し水上８区および調査区外へと続いている。この低地内には腐植を含んだ粘土層（第68図ｄ～ｋ）があり、ほぼ水平の堆積がみられる。これらの土層は低地内に微高地状の形状を呈している。この微高地状の堆積は水上８区1178ｍ地点で切断され、旧大谷川河道となり厚い砂の堆積がみられる（第68図Ｂ－Ｂ′）。この砂の堆積は水上８区南端まで続くが、1142ｍ～1134ｍ地点では基盤層および低地内の堆積粘土が調査区西端で検出され（第68図Ｃ－Ｃ′）、東向きに傾斜しながら砂により切断されていた。これは1178ｍ地点で蛇行した河道の右岸と考えられる。低地内には８層の堆積がみられたが、このうち遺物が認められたのは灰白色粘土層（ｄ層）、黒茶色粘土層（ｅ層）、緑茶色腐植土層（ｈ層）である。灰白色粘土層上面ではＦ84・Ｆ85グリッドで土師器の高坏形土器・壺形土器・坏形土器が器種別に置かれた状況で検出され、古墳時代中期末～後期初頭の遺構面となっている。この下の黒茶色粘土層（ｅ層）からは古墳時代中期の土器片が出土した。またさらに下層の緑茶色腐植土層（ｈ層）からは縄文時代晩期の土器片が出土し、南側に隣接する水上７区の同じ層から縄文時代後期の土器片が出土している。この緑茶色粘土層直上の暗灰白色粘土層（ｇ層）には黄白色の微粒子が含まれ大沢スユリアであると思われた。旧河道の砂層からは遺物は検出されず、わずかにＦ83・Ｆ84グリッドで岸の緩斜面の黄緑色混砂粘土層（ｏ層）から土師器片と木片が出土したにすぎない。これら低地の堆積土層および旧河道に伴う堆積砂層の上に淡青灰色砂層あるいは黄灰白色粘土層が水上８区・水上９区ともに全面に堆積し、平安時代～近世の遺構面となっており溝状遺構、小穴、土坑が検出されている。

2　遺構各説

ＳＲ778（第69図）Ｆ84グリッド中央部を北東から南西へ横切る旧大谷川右岸が検出された。岸に沿ったテラス状の緩斜面があり、標高4.3ｍ～4.5ｍほどに黄緑色砂混り粘土層が堆積し古墳時代中期の土師器片と木片が出土した。上層には厚い砂の堆積がみられ83列以南は無遺物の砂層が２ｍ以上にもおよび河床は確認できなかった。これらは氾濫による堆積と考えられ、本流は調査区東側に推定される。旧大谷川の初期の河道の一つと判断された。

ＳＸ775（第69図・第70図）Ｅ85・Ｆ85グリッドで検出された土師器群である。検出面は低地内堆積層の最上層にあたる灰白色粘土層であり、低地内に形成された微高地状の地形の末端部に位置し、南側はＳＲ778となっている。基準杭Ｆ85より北2.0ｍ地点に土師器高坏形土器５点が出土した。これらは50㎝×70㎝ほどの範囲にあって、いずれも原形をとどめた状態であった。うち３点は底部が接地しており、坏部はその周囲に落下した状態で検出された。要するに人為的に置かれた状態がそのまま土圧で押しつぶされたものと判断された。さらに東へ1.5ｍほど離れて壺形土器２点が検出された。それらは0.5ｍほどの間隔で東西に存在するが、高坏形土器にくらべると破損がすすんでおりとくに東側のものは底部と口辺部がやや離れて存在していた。西側のものは肩部から口辺部のみが復元できた。さらに東へ3.0ｍほど離れて坏形土器２点が出土した。高坏形土器・壺形土器が東西方向に並んでいるのに対し、坏形土器は南北方向に並んだ状態にあった。

これらの土師器群はほぼ東西方向の直線上に存在し、それぞれの器種には他の器種は含まれていない。

このことから土師器群は器種別に置かれ、原位置をあまり動いていない状況とみてよい。また土師器群南側には2つの小穴と土坑1基が検出されている(第69図)。

ＳＰ584（第71図）Ｆ84グリッドの中央北端部のＳＸ775の坏形土器より0.4ｍほど南で検出された。長径0.40ｍ、短径0.37ｍのほぼ円形のプランをもち深さ0.17ｍを測る。底面には径1㎝～7㎝ほどの小礫が敷きつめられていた。

ＳＰ585（第71図）ＳＰ584から西へ2.8ｍの地点にある。確認面で長径0.28ｍ・短径0.24ｍの円形プランで、深さはわずか0.06ｍで底面のみの検出となった。ＳＰ584と同様に径1㎝～5㎝ほどの小礫が敷きつめられていた。

これら2つの小穴とも確認面は黒茶色粘土層であるが、覆土が黄灰色粘土層でありＳＸ775の遺構面である灰白色粘土層と酷似していることから掘り込み面は灰白色粘土層であったと推定される。また土器の配置方向とＳＰ584・ＳＰ585の方向は東西でほぼ一致している。

ＳＰ580（第71図）Ｆ84グリッド中央やや西よりで検出された。ＳＰ584・ＳＰ585との距離は約3.75ｍとほぼ同じで南に位置している。直径0.80ｍの円形プランで深さ0.56ｍを測る。検出面はＳＸ775と同じ灰白色粘土層である。底面より0.15ｍほどより上は拳大から人頭大の割石がみられ、板状のものや二分割したものが目立った。またそのほとんどが燃焼を受けた石であったことにも注目しておきたい。

ま　と　め

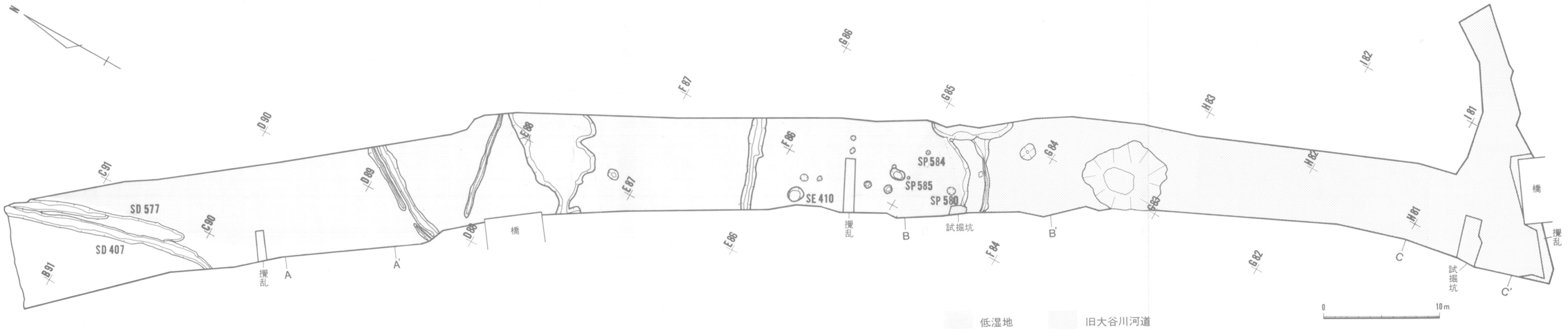
(1)ＳＸ775土師器群は南に旧大谷川を臨む低湿地内に形成された微高状地形の末端部に位置し、器種別に置かれた状態で検出された。

またＳＰ584・ＳＰ585の底面の小礫が柱を固定する目的で置かれたとすれば、ＳＸ775土器群の配置方向と2つの小穴の方向がほぼ同じであり土器群に関連した柱穴と想定してもよいかもしれない。さらにこれらの南側の旧大谷川の岸近くで検出されたＳＰ580も土師器群と同一面であり、この面での遺構は他にないことから関連する遺構である可能性もあり、燃焼を受けた割石は土器群に伴う祭祀に関連するとも考えられる。

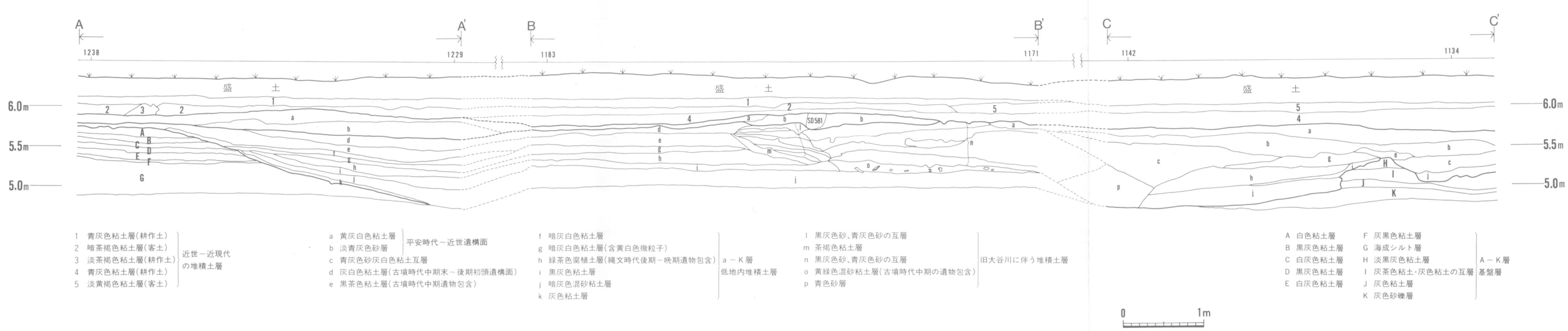
(2)水上9区から水上8区にかけて確認された低地はさらに他調査区への広がりが考えられる。南側に隣接する水上7区は古墳時代後期から現代にいたる旧河道が確認されたが、72列から75列にかけて調査区を南西から北東方向に横切る幅14ｍ～17ｍほどの帯状の低湿地が検出され、調査区外に続き北東方向へ広がっていた。これらは水上8区南端のＧ80グリッドで確認された低湿地が連続するものと思われる。また北側の宮川3区ＳＲ485でも低湿地が検出され対岸の宮川4区ＳＲ56河床で検出された低地内堆積粘土に連続している。この帯状の低湿地は水上8区・水上9区の東側に広がる低湿地へと続く可能性が強い。水上8区83列・84列で検出された旧河道はこの広大な低地内に形成され、厚い砂層はかなり大きな氾濫による短期間の堆積を示している。出土した遺物より古墳時代中期後半と考えられ、旧大谷川の初期の河道の一つと考えられる。

第28表　水上8区・9区溝状遺構一覧表

遺構番号	グリッド	延長	幅	深さ	遺構面標高	特記事項
〈水上8区〉						
ＳＤ581	Ｆ84	6.40	1.43	0.30	5.51	
〈水上9区〉						
ＳＤ405	Ｃ88	9.10	1.08	0.26	5.47	
ＳＤ406	Ｄ88	9.80	0.72	0.15	5.53	
ＳＤ407	Ｂ90	17.80	1.16	0.35	5.78	
ＳＤ552	Ｄ88	9.50	0.51	0.07	5.54	
ＳＤ553	Ｅ86	7.90	2.02	0.08	5.66	
ＳＤ577	Ｂ90	14.80	0.94	0.34	5.78	



第67図　水上 8 区・水上 9 区全体図



1　青灰色粘土層(耕作土)
2　暗茶褐色粘土層(客土)
3　淡茶褐色粘土層(耕作土)
4　青灰色粘土層(耕作土)
5　淡黄褐色粘土層(客土)
　近世～近現代の堆積土層

a　黄灰白色粘土層
b　淡青灰色砂層
c　青灰色砂灰白色粘土互層
d　灰白色粘土層(古墳時代中期末～後期初頭遺構面)
e　黒茶色粘土層(古墳時代中期遺物包含)
　平安時代～近世遺構面

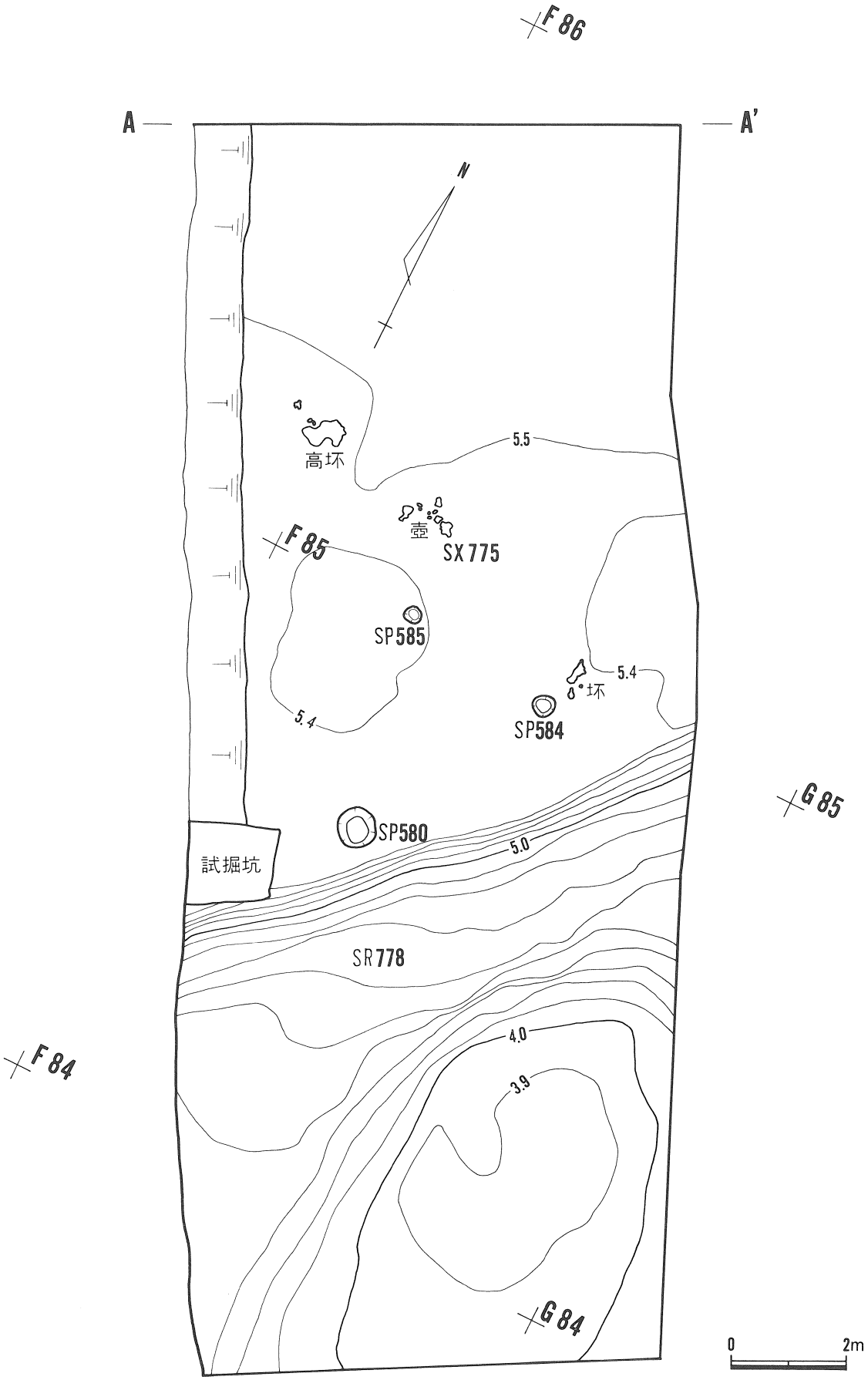
f　暗灰白色粘土層
g　暗灰白色粘土層(含黄白色微粒子)
h　緑茶色腐植土層(縄文時代後期～晩期遺物包含)
i　黒灰色粘土層
j　暗灰色混砂粘土層
k　灰色粘土層
　a～K層 低地内堆積土層

l　黒灰色砂、青灰色砂の互層
m　茶褐色粘土層
n　黒灰色砂、青灰色砂の互層
o　黄緑色混砂粘土層(古墳時代中期の遺物包含)
p　青色砂層
　旧大谷川に伴う堆積土層

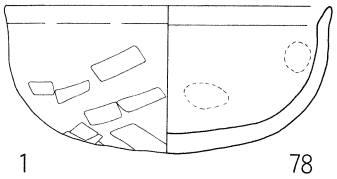
A　白色粘土層
B　黒灰色粘土層
C　白灰色粘土層
D　黒灰色粘土層
E　白灰色粘土層
F　灰黒色粘土層
G　海成シルト層
H　淡黒灰色粘土層
I　灰茶色粘土・灰色粘土の互層
J　灰色粘土層
K　灰色砂礫層
　A～K層 基盤層

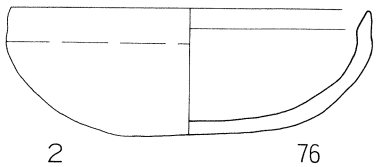
0　1m

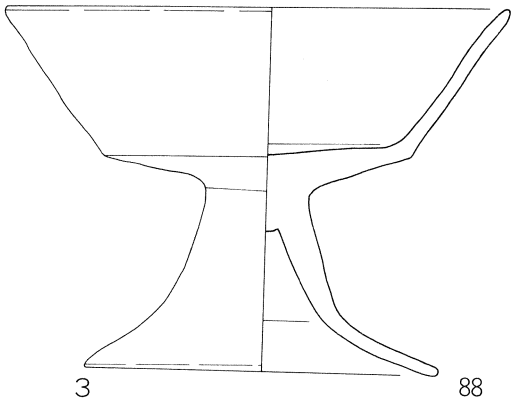
第68図　水上 8 区・水上 9 区低湿地土層断面図

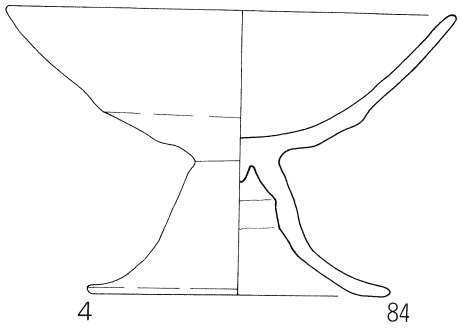


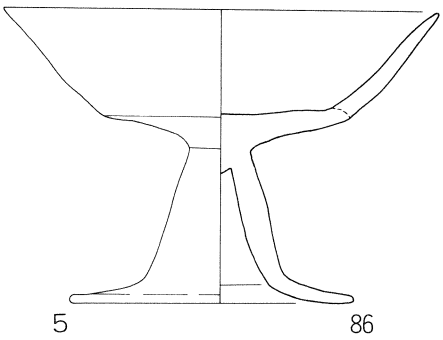
第69図　水上8区古墳時代遺構平面図

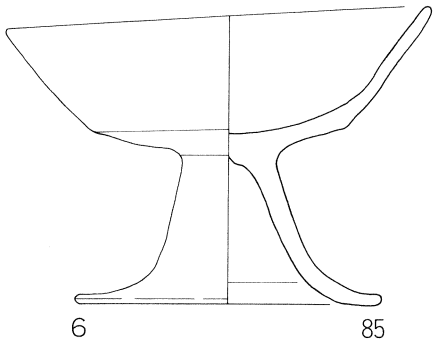


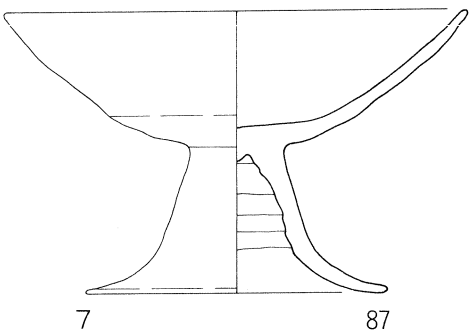


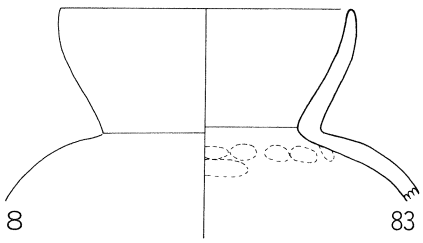


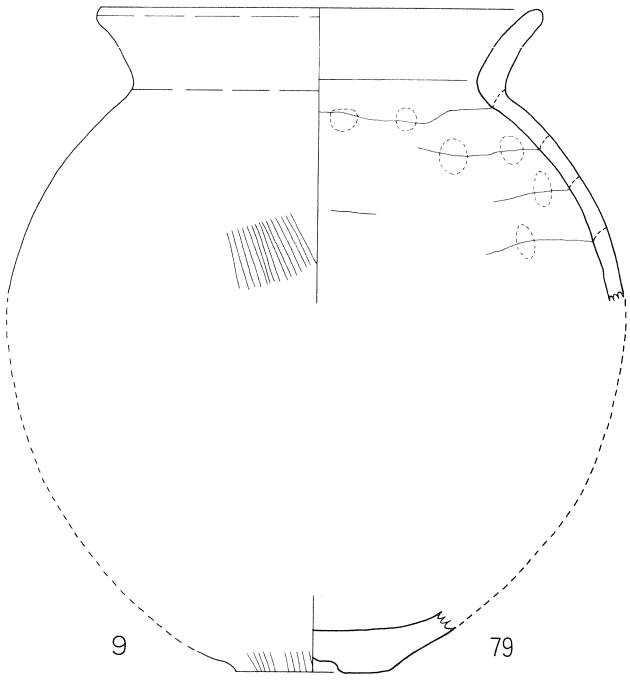




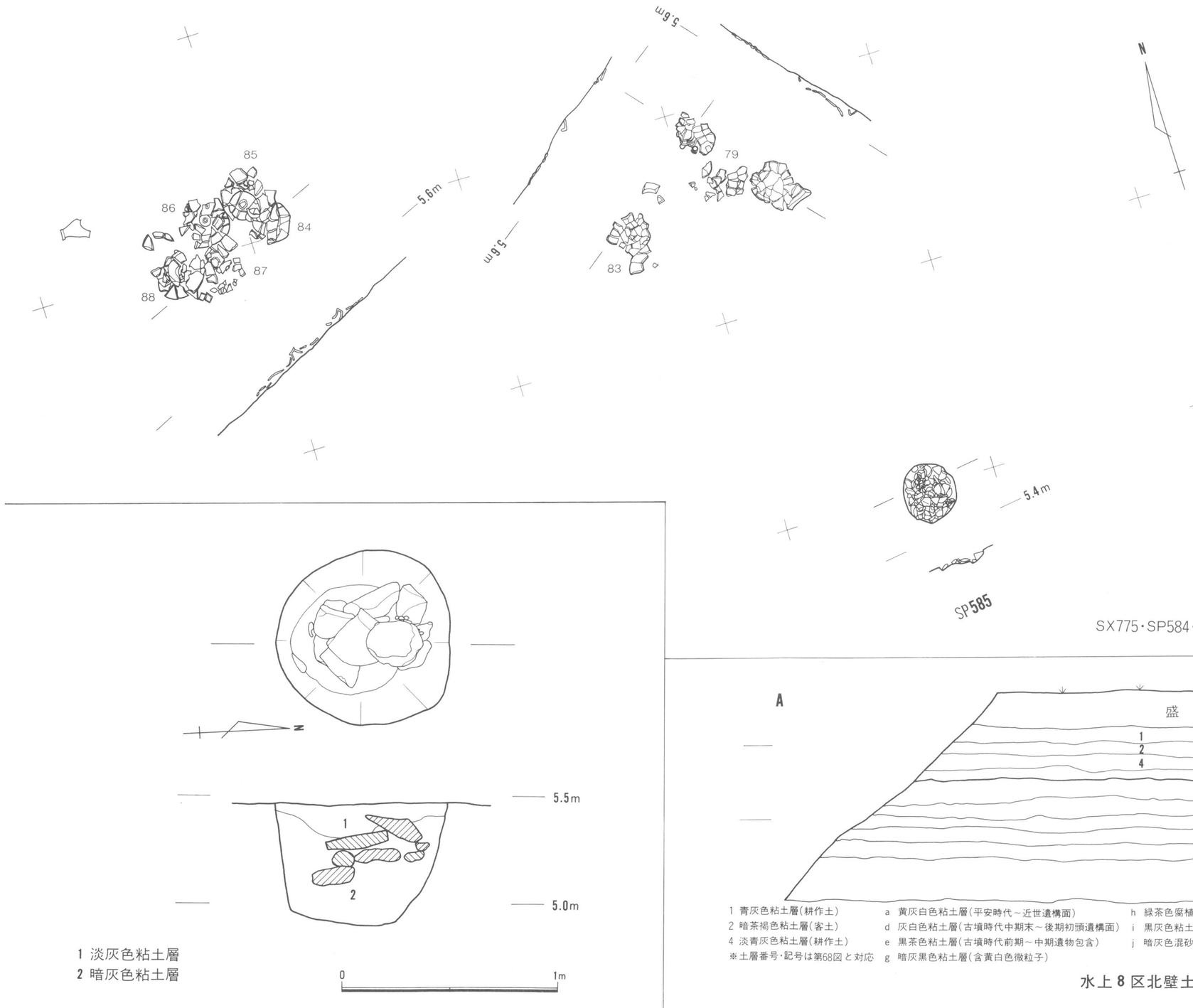








第70図　水上８区ＳＸ775出土土器実測図

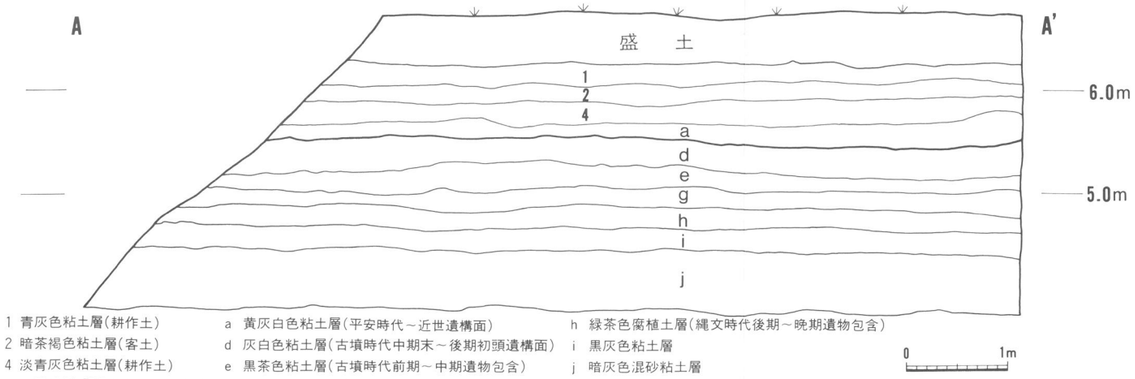


SX775・SP584・SP585実測図

1 淡灰色粘土層
2 暗灰色粘土層

SP580実測図

第71図　水上 8 区古墳時代遺構実測図



1 青灰色粘土層(耕作土)
2 暗茶褐色粘土層(客土)
4 淡青灰色粘土層(耕作土)
※土層番号・記号は第68図と対応

a 黄灰白色粘土層(平安時代～近世遺構面)
d 灰白色粘土層(古墳時代中期末～後期初頭遺構面)
e 黒茶色粘土層(古墳時代前期～中期遺物包含)
g 暗灰黒色粘土層(含黄白色微粒子)
h 緑茶色腐植土層(縄文時代後期～晩期遺物包含)
i 黒灰色粘土層
j 暗灰色混砂粘土層

水上 8 区北壁土層断面図

水上９区（第67図）

1　概　　要

現大谷川の左岸で河口起点より約1193ｍ上流に位置する調査区である。北端は旧大谷川に接し右岸を形成している。90列以南では水上８区まで続く南東方向に傾斜する低湿地が検出された。本遺跡の基盤層である白色粘土と黒色粘土の互層（第69図Ａ～Ｆ）はＢ90・Ｂ91グリッドで南東方向の緩傾斜が見られ、Ｃ89グリッド以南ではこれら基盤粘土層と下層の海成シルト層を切断するように腐植を含んだ粘土層（第69図ｃ～ｋ）が堆積している。これらの上層には全域にわたって黄灰白色粘土層（第69図ａ層）が堆積している。この黄灰白色粘土層では溝状遺構・土坑・小穴・井戸状遺構が検出され、平安時代から近世の遺構面となっている。また下層の黒茶色粘土層（第69図ｃ層）ではＢ91グリッドで掘立柱建物跡が１棟検出されている。

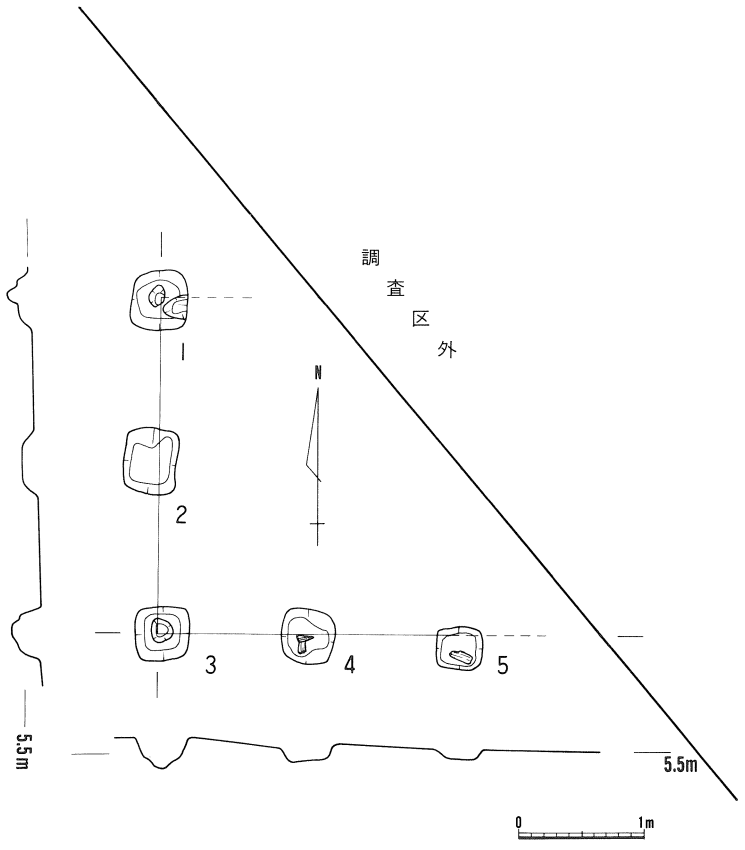
2　遺構各説

掘立柱建物跡

ＳＨ570（第72図）Ｂ91グリッドにある。調査区東端で検出されたため、梁間２間、桁行３間以上と推定される東西棟建物の一部のみの調査となった。梁間は2.68ｍ、柱間寸法は1.3ｍを測る。桁行は不明であるが、柱穴３・４、柱穴４・５とも柱間寸法は1.2ｍである。柱穴４・５では礎板が検出された。確認面は低湿地内堆積土層であり南東に傾斜しているため、掘り込み面はより上層であると判断された。

井戸状遺構

ＳＥ410（第119図）Ｅ85グリッドで検出された。長径1.30ｍ、短径1.15ｍの長円形のプランをもち、深さ0.90ｍを測る。素掘りである。



第72図　水上９区ＳＨ570実測図

第29表　水上8区・水上9区小穴・土坑一覧表

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標高	特　記　事　項
〈水上8区〉							
SP 580	F 84	0.73	0.71	0.37	0.97	5.29	
SP 583	F 84	1.38	1.20	0.30	0.87	5.55	古墳時代（後期）
SP 584	F 84	0.40	0.37	0.17	0.93	5.22	
SP 585	F 84	0.28	0.24	0.06	0.85	5.24	
〈水上9区〉							
SP 411	E 85	0.69	0.63	0.10	0.91	5.78	
SP 412	E 85	0.49	0.42	0.06	0.86	5.83	
SP 414	F 85	0.63	0.44	0.04	0.70	5.81	
SP 415	F 85	0.47	0.43	0.05	0.91	5.85	
SP 416	F 85	0.62	0.60	0.23	0.97	5.74	
SP 417	F 85	0.72	0.68	0.25	0.94	5.62	
SP 418	F 85	0.36	0.31	0.07	0.86	5.67	
SP 569	F 85	1.32	0.76	0.23	0.58	5.58	
SP 571	B 90	0.42	0.33	0.10	0.79	5.65	
SP 572	B 90	0.49	0.42	0.04	0.86	5.66	
SP 573	B 90	0.43	0.30	0.10	0.70	5.69	
SP 574	B 90	0.34	0.21	0.11	0.62	5.58	
SP 578	B 90	0.31	0.24	0.13	0.77	5.58	

第３節　宮川地区

宮川３区（第74図）

1. 概　　要

宮川３区は河口起点より1,250 m 上流に位置し、現大谷川の右岸にあたる。南北に133 mと長い調査区のうち95列以北には低湿地地形（ＳＲ485）が弧状に広がり、中央部には明瞭な旧河道（ＳＲ486・ＳＲ487）が検出され、その他の部分は微高地になっていた。面積的には微高地部分が全体の約６割を占める。微高地上の遺構の主体は溝状遺構と井戸状遺構で、遺存状態も良く居住域の中心が近いことを予想させるに十分であった。出土遺物も古墳時代中期の一括土器（ＳＸ484）から古墳時代後期、奈良時代、平安時代、平安時代末から鎌倉時代の遺物が良好な状態で検出された。しかし一方で、近世以降になると耕作の対象地として開墾され、各所で遺構が破壊されていた。浅い溝状遺構が寸断されているのはこのためである。

2. 遺構各説

溝状遺構

ＳＤ181（第75図）　Ｙ89グリッドを中心に南西から北東にむけて掘り込まれた溝状遺構である。確認面で最大幅1.95 m、深さ0.9 m、延長12.3 mを測る。掘り方底面には４個所の土坑状部分を設けている。中央の２個所の規模は、東側で長軸2.0 m、短軸1.4 m、西側で長軸2.4 m、短軸1.35m を測る。最深部標高は5.15 mと5.10 mである。

ＳＤ181は砂層を基盤とする面に掘り込まれている。土坑状部分以外ではこの砂層下面で掘削を終了しているのに対して、土坑状部分は砂層下位の不透水粘土層にまで掘り込みが進んでいる。このことから４個所の土坑状部分は集水と貯水を目的としている施設と考えられる。

土器は東端の土坑状部分の底面に密着して須恵器碗（2667）が出土し、中央東側の土坑状部分では、土坑状部分が埋没した段階で土師器が一括投棄されていた。これらの土器は古墳時代中期後半から後期初頭に比定されＳＤ181の年代を示すものと考える。

須恵器と土師器に大きな年代差がみられないことと、須恵器が溝床への投棄、土師器が埋没した後の投棄であることから土坑状部分は段階的に掘削されていった可能性がある。

碗が単独で遺構中より出土した例は水上10区ＳＲ673で認められた。また宮川４区のＳＲ56（古墳時代後期）では形代類に伴出する土器の中で坏類以外では碗が多い。これらのことから、碗は祭祀性が認められ、ＳＤ181での投棄は水にかかわる祭祀と関連があると思われる。

ＳＤ145（第76図）　Ｉ95グリッドで検出された溝状遺構である。西から東にむかって傾斜をもち旧河道（ＳＲ486）に流入している。確認面での幅は最大1.9 m、最小0.9 m、深さは1.0 m、延長は16m を測る。溝床標高は西端で4.83 m、東端で4.21 mであり比高差0.62 mの傾斜をもっている。

検出地点は、低湿地（ＳＲ485）と微高地の境界線上にあたり、ＳＤ182とともに居住域を区画している周溝的機能をもつ溝状遺構としてよいであろう。出土遺物としては２点の土器と３点の箸状木製品がみられた。遺物の特徴から平安時代末の遺構と考える。

ＳＤ182（第77図）　Ｍ90・91グリッドに位置するＬ字形の溝状遺構である。確認面での幅は最大で2.25 m、最小で1.16 m、深さは1.08 m、延長は21 mを測る。溝床標高は西端部で5.08 m、北端部で4.88 mを測り0.2 mの比高差をもって西から屈曲を経て北に流れる。延長線上には旧河道（ＳＲ486）があり、ＳＤ145と同様に河川に流入していた溝状遺構と考えられる。溝床の形状は４個所に土手状の高まりを残している。

出土遺物の特徴から平安時代末から鎌倉時代の溝状遺構とする。この年代はＳＤ145と一致している。ＳＤ145が居住域の北辺に相当する周溝的溝状遺構でありＳＤ182が南辺に掘削された溝となる。東辺はＳＲ486によって規定されることから、宮川３区における平安時代末から鎌倉時代の居住域の南北幅は約65ｍとなる。

井戸状遺構

ＳＥ103（第120図）Ｉ98グリッドに位置する井戸状遺構である。確認面で東西2.58ｍ、南北2.88ｍを測る長方形プランをもつ。掘り方底面は上面プランの中心よりやや南側にずらして0.86ｍほどの深さで方形に掘り込まれている。底面の標高は4.9ｍにおよび不透水の粘土層にまで達していることから、側面の砂層から伏流水を得て取水する形式をとる。

井戸枠は四隅に角柱をもつ縦板組で二段の横桟をもつ。井戸枠の北半部は原状を完全にとどめるが、南半部は破壊され主要な部材は抜かれていた。北辺では上下二段の枘穴を設けた角柱を両側に立て、柱間に幅20㎝～25㎝の縦板５枚を横口面を密着させてならべている。横桟は幅７㎝、厚さ３㎝程度の角材を上下二段に用いている。前面の縦板の外周には、さらに10枚の縦板が互いの一部を重ねて立てられ砂泥の流入を防いでいた。北半部の内法寸法は角柱の外面間の距離により121㎝となるが、121㎝は曲尺の４尺となる点が注目される。

井戸廃棄は半分のみを取り壊すことによって行なわれていた。残存する北辺部から推測するとＳＥ103には角柱４本、桟木８本、縦板材60枚程度が使用されていたはずであるが角柱２本と桟木６本および15枚ほどの縦板は抜き取られたことになる。残った廃材は井戸枠内に放置されているが掘り方底面より数センチメートル上位に折り重なっていた。廃材の上にはヒョウタンが１点置かれていた。廃棄後も埋めもどすことはしなかったようで覆土は自然堆積の状況を示している。

出土遺物はヒョウタンのほか須恵器の坏片、土師器の坏片がほとんどであるが、その特徴は奈良時代後半期を示している。また須恵器には藤枝市助宗古窯跡で生産されたと思われる削り出し高台をもつ坏身が２点含まれている。

ＳＥ170（第120図）Ｉ94グリッドで検出された木組の井戸状遺構である。長径2.26ｍ、短径2.05ｍのほぼ円形を呈するプランをもつ。掘り方は南側を除く三方向に三日月状のテラスを残し、井戸枠の中心が南側に片寄るように掘られている。底面の標高は5.41ｍを測り、検出面との比高差は0.94ｍである。

井戸枠の遺存状態は良好で廃棄に伴う部材の抜き取りはみられない。井戸枠の構造は四隅の角柱と縦板で内側を構成し、縦板の外周に井桁に組んだ横板をもつ複合構造をとっている。井戸枠内の内法は0.6ｍ×0.6ｍの正方形である。四辺の縦板はそれぞれ２枚（合計８枚）で構成され角柱を支えとしている。横桟は用いられず外周の井桁の横板によって土圧を分散させている。井戸枠は三日月状のテラス部分の高さまでしかなく、取水はテラス部分に降りて行なっていたと考えられる。

遺物は須恵器、土師器の小片にまじって、手捏ねの皿状土器が覆土中層から２点出土した。ＳＥ170の年代は奈良時代と推定される。

ＳＥ147（第120図）M91グリッドの北隅で検出された井戸状遺構である。長径1.65ｍ、短径1.55ｍのほぼ円形プランからすり鉢状に掘り窪めている。中央には直径0.7ｍの円形掘り方を設け二段掘とする。深さは0.64ｍで底面の標高は5.18ｍを測る。水溜には直径54㎝の曲物を使用している。掘り込み面から20㎝の深さまで砂層があり、この砂層からしみ出る水を曲物内にためる形式である。

年代は覆土中から出土した山茶碗から平安時代末頃の井戸状遺構と考えられる。

ＳＥ424（第120図）K92グリッドで検出された木組の枠をもつ井戸状遺構である。調査区の西端であるため半分しか検出できなかった。掘り方は推定1.45ｍを一辺とする不整形な方形と思われる。深さ1.1ｍまで垂直に近い角度で掘り込んで井戸枠を構築したと考えられる。現状では掘り方底面が検出面より

2.08m（標高4.1 m）の深さにまでおよんでいるが、これは使用中に湧水が枯れ、再掘削した結果であろう。再掘削の掘り方形状をみると標高4.5 mの位置に肩をつくり出している。井戸枠をのせる部分であるが実際には井戸枠は設置されず素掘りの状態で使用されていた。

井戸枠は縦板と横桟で構成されている。東辺の縦板は幅33㎝、長さ80㎝、厚さ4㎝程の板材3枚を横口面を合わせて用ている。外周にも幅のせまい縦板が用いられ板の隙間に当てている。横桟は幅8㎝、厚さ4㎝、長さ95㎝程度の桟木を小口面と広口面を枘穴で組み合わせて上下2段に設置している。

出土遺物は山茶碗・青磁片のほか箸状木製品が6点検出された。このことから平安時代末頃から鎌倉時代とする。

ＳＥ429（第121図）Ｌ92基準杭の北側に位置する素掘りの井戸状遺構である。長軸1.4 m、短軸1.38 mで隅丸方形の平面プランをもつ。掘り方は1.1 mほど垂直に掘り下げたのち平担面をつくり、さらに底面のほぼ中央に直径約0.6 mの不整円形の深掘り部をつくりだして水溜としている。井底の標高は4.89 mである。

出土遺物は山茶碗のほか木製椀1点、箸状木製品2点が検出されている。年代は平安時代末から鎌倉時代とする。

ＳＥ437（第121図）M91グリッドにある素掘りの井戸状遺構である。長軸1.25m、短軸1.23mを測る不整形の平面プランを有する。掘り方は45度～60度の角度で0.4 mほど掘り下げて平担面をつくりだし、底面のほぼ中央に直径30㎝の円形深掘り部を設け水溜としている。出土した山茶碗の特徴から平安時代末から鎌倉時代とする。

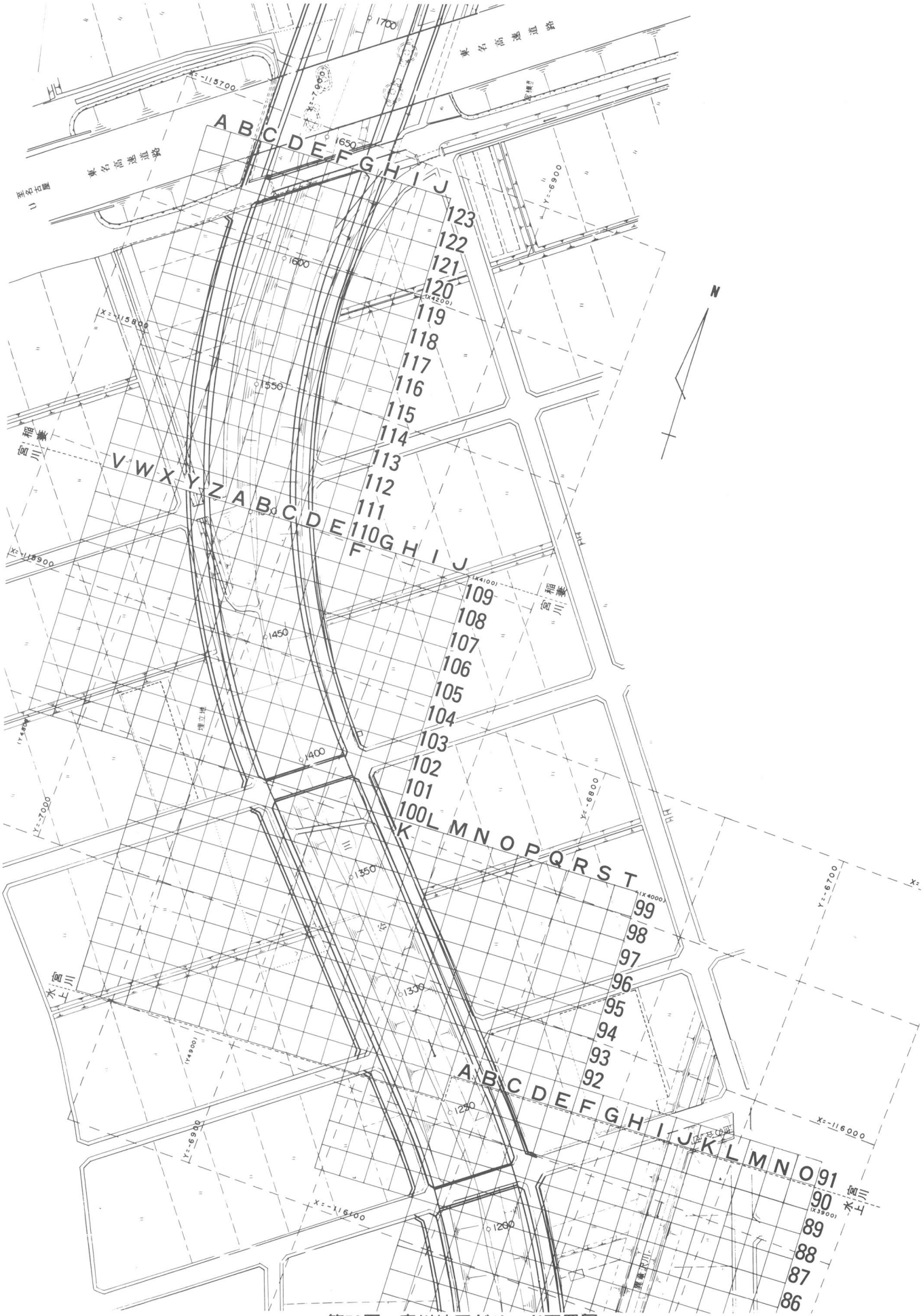
旧河道跡

ＳＲ485（第74図）　宮川3区の北部で95列から98列に弧状に広がる低湿地地形であるが中世に河道となった。縄文時代にさかのぼるＳＲ485は粘土層の静穏な堆積により埋没していくが古墳時代中期以降の堆積粘土層には水辺に投棄された遺物が包含されていた。一括性が認められる遺物集中部が8個所確認されＳＸ484・ＳＸ483・ＳＸ482・ＳＸ481・ＳＸ480・ＳＸ479・ＳＸ478・ＳＸ477(第78図)とした。以下でＳＲ485内の土層および遺物集中部について詳述する。

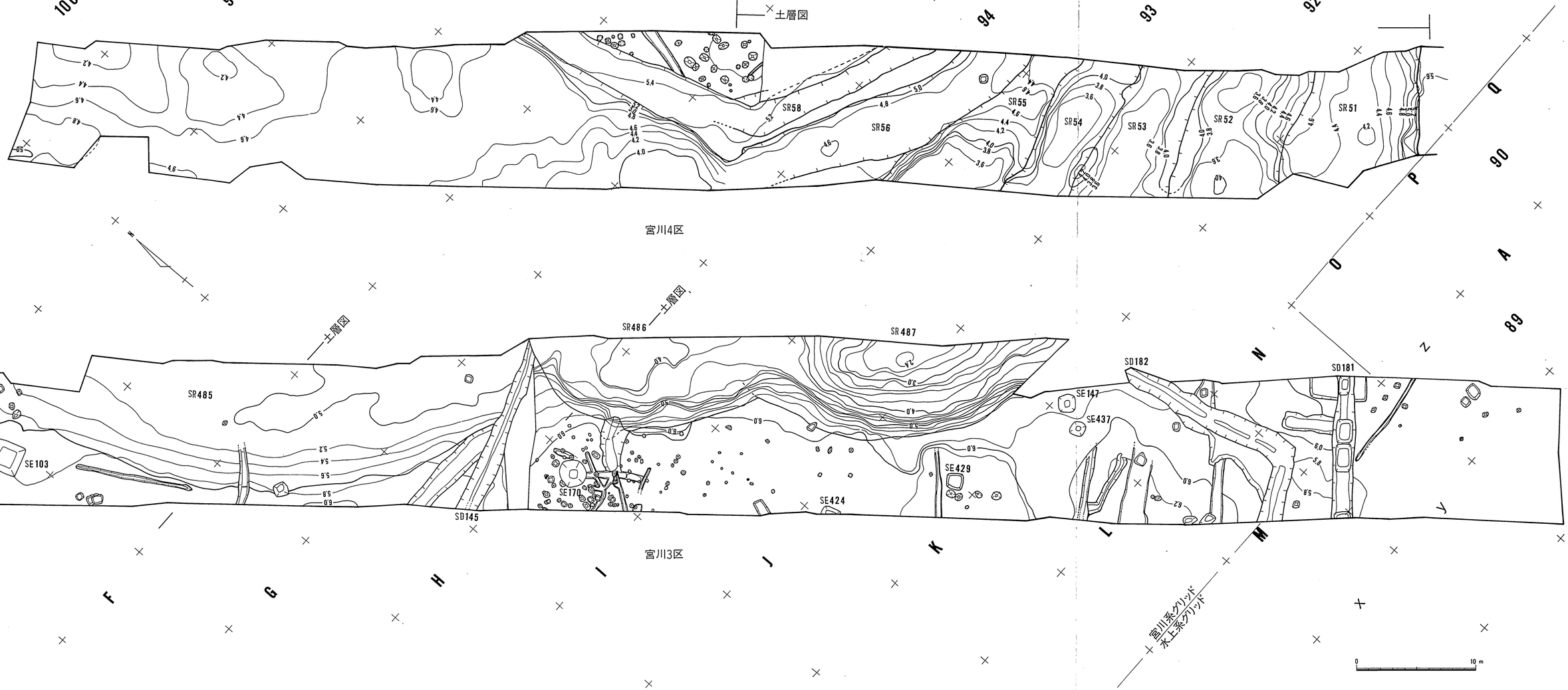
土層（第99図）　1層から8層は低湿地の岸に堆積した土層であるが中世以降の撹乱を受けている。9層は茶灰色粘土層、10層は灰褐色粘土層である。9層は平安時代、10層は奈良時代の包含層と考えて調査したが9・10層ともに両時代の遺物が混在していた。遺構は認められず、遺物の量も少ない。11層は茶色粘土層で古墳時代後期の遺物を大量に包含しており、ＳＸ481・ＳＸ480・ＳＸ479・ＳＸ478・ＳＸ477が検出された。12層は灰黄色粘土層で古墳時代後期の遺物が若干検出された。13層は灰白色粘土層で古墳時代中期から後期初め頃の包含層である。14層・15層は無遺物層である。16層は微高地の基盤層を構成する黒色粘土層の末端部分である。

ＳＸ484（第79図）　H95グリッドで検出された遺物集中部である。低湿地の岸部近くの斜面上に集中していた。1.5 m×1 mほどの狭い範囲に坩形土器、高坏形土器、壷形土器とともに滑石製の勾玉と臼玉がそれぞれ1点出土している。遺物の特徴から古墳時代中期とした。また土器集中部のうちでもっとも古い段階の投棄と考えている。

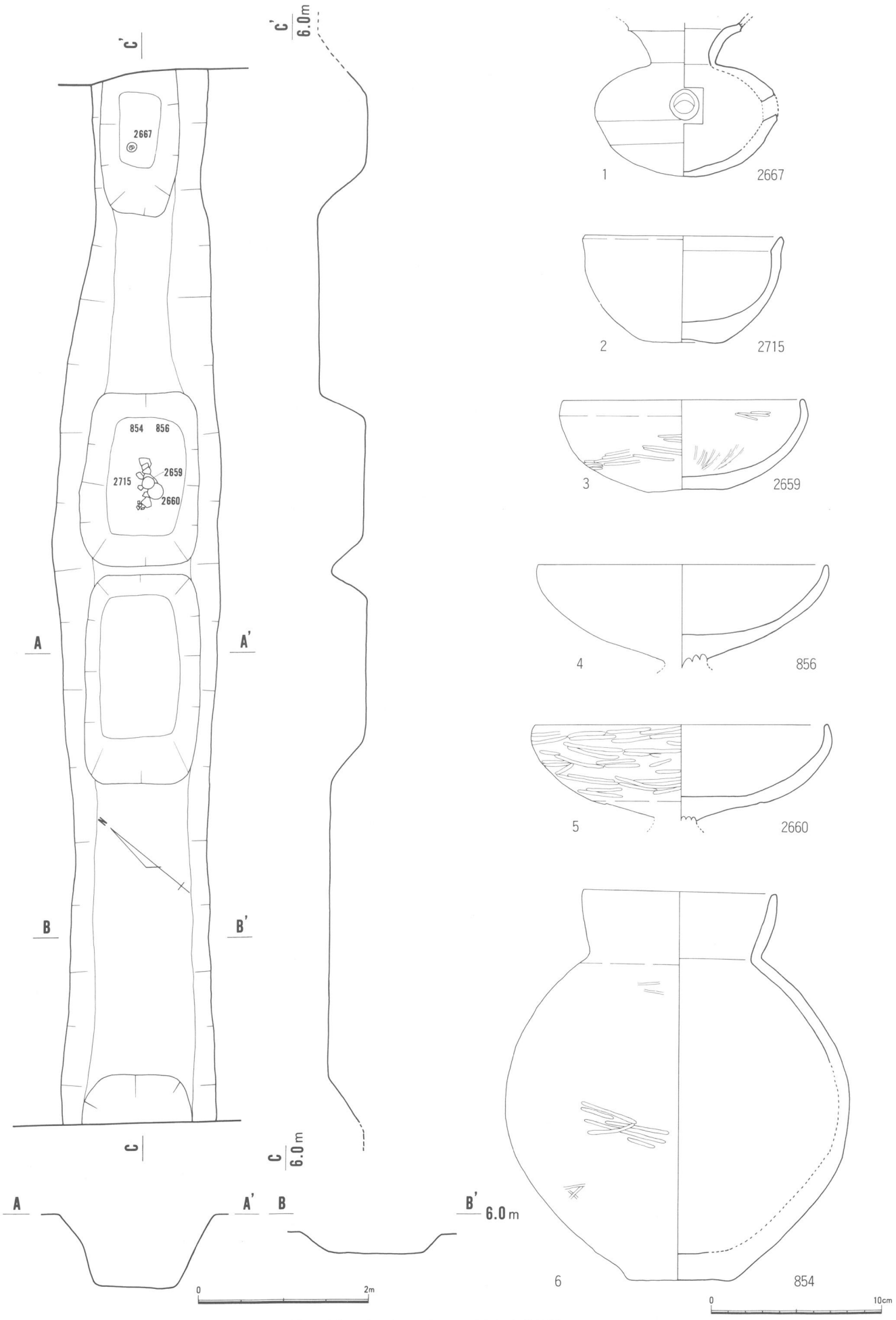
ＳＸ483（第80図）　H96グリッドで検出された遺物集中部である。ＳＸ484と同様に低湿地の岸部近くの斜面上に存在した。3 m×2 mほどの範囲に土師器高坏形土器を中心に投棄されていた。高坏形土器は約50点にのぼる。他器種では壷形土器・甕形土器・坏形土器が合計で10点ほど数えた。滑石製模造品は含まれず、須恵器の壷形土器（第87図）が1点出土した。遺物の特徴から古墳時代中期と考えるがＳＸ483にみられた滑石製模造品と坩形土器が含まれず高坏形土器が主体となることからＳＸ483はＳ



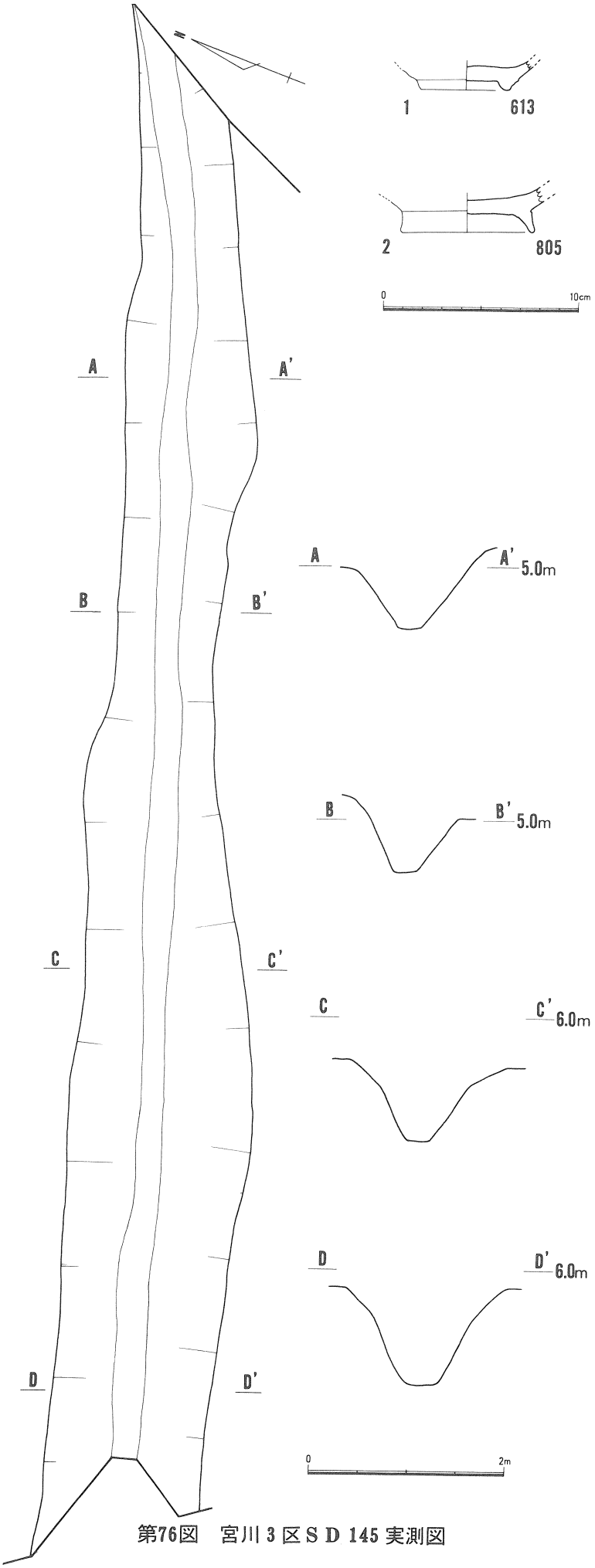
第73図　宮川地区グリッド配置図



第74図　宮川３・４区全体図



第75図　宮川3区SD 181 実測図



第76図　宮川3区ＳＤ145実測図

Ｘ484よりも新しい段階での投棄と考えたい。なお、ＳＸ484と類似する遺構は水上10区のＳＸ624にみられ、ＳＸ483の類似例は水上８区ＳＸ775にある。いずれも低湿地の縁辺である。

ＳＸ482（第81図）　Ｈ96グリッドで検出された遺物集中部である。1.5ｍ×１ｍほどの範囲に土師器の坏形土器が集中している。須恵器坏身（1785）も１点検出された。土器の特徴から古墳時代後期の前半と考える。

ＳＸ477（第83図）　Ｉ95グリッドで検出された土器集中部である。５ｍ×３ｍほどの範囲に土師器の坏形土器を主体に投棄されている。須恵器も８点出土しているが坏形土器が多く甕形土器と壷形土器の破片がわずかにみられるにすぎない。20㎝～40㎝大の礫が土器とともに投棄されている。出土遺物は破片が大半をしめる点が特徴的である。土器の特徴から６世紀末頃から７世紀初め頃と推定した。

ＳＸ478（第84図）　Ｉ96グリッドで検出された遺物集中部である。3.5ｍ×2.5ｍの範囲に土師器を主体に投棄されている。中心部には９個所の土師器甕形土器と２個所の甑形土器が集中し、周辺部には礫および須恵器・土師器の坏形土器が投棄されている。また、馬形土製品１点と手捏土器１点が共伴している。遺物の特徴から６世紀末から７世紀初め頃の投棄と推定した。

ＳＸ480（第82図）　Ｈ97グリッドで検出された遺物集中部である。土師器の坏形土器を主体に投棄されているが須恵器では坏形土器のほか短頸壷も１点出土した。手捏土器１点と石製丸玉１点が共伴する。遺物は２ｍ×２ｍほどの範囲に広がり礫の伴出は少ない。遺物の特徴から７世紀前半代の投棄と推定する。

1　2716

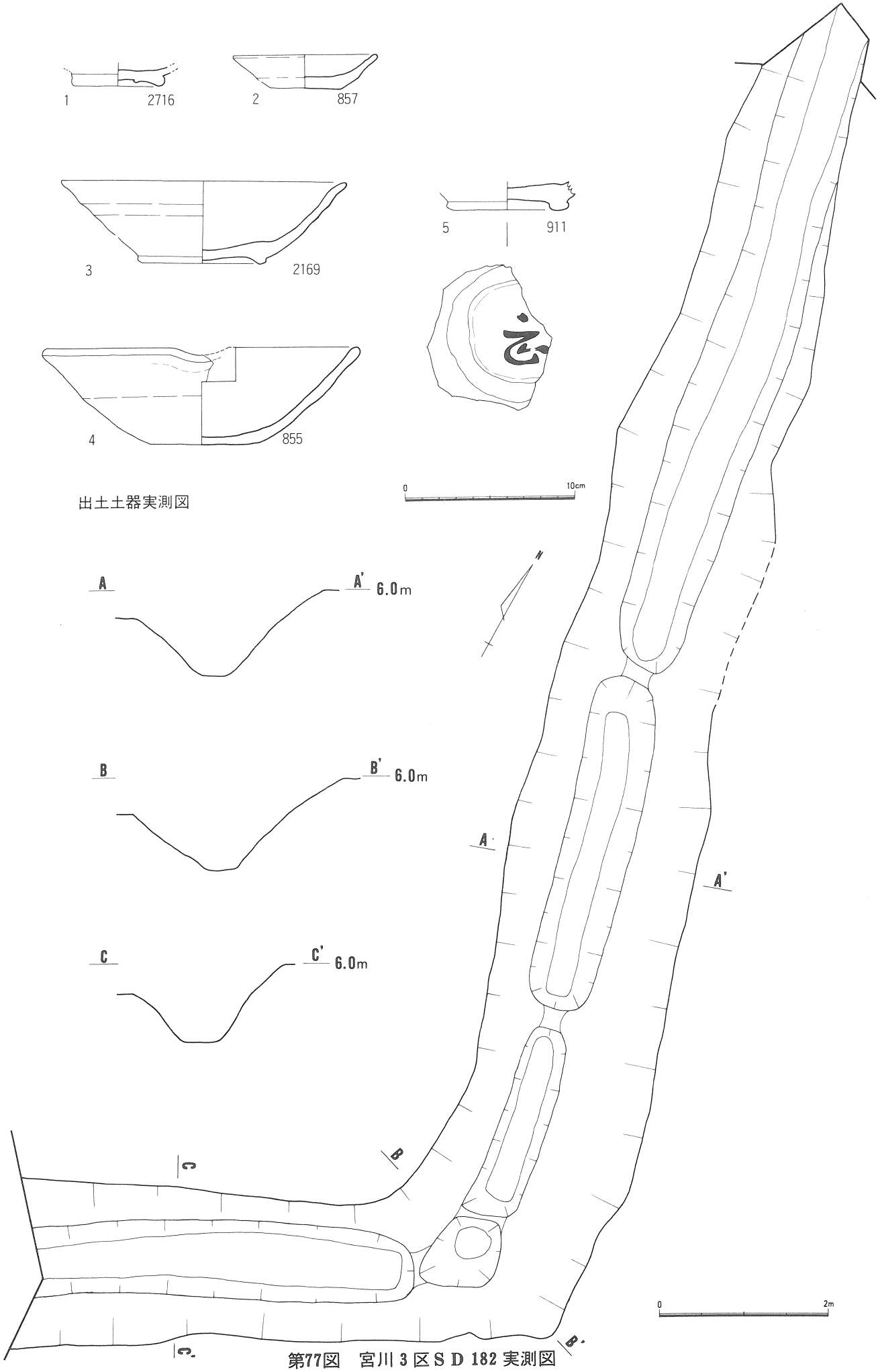
2　857

3　2169

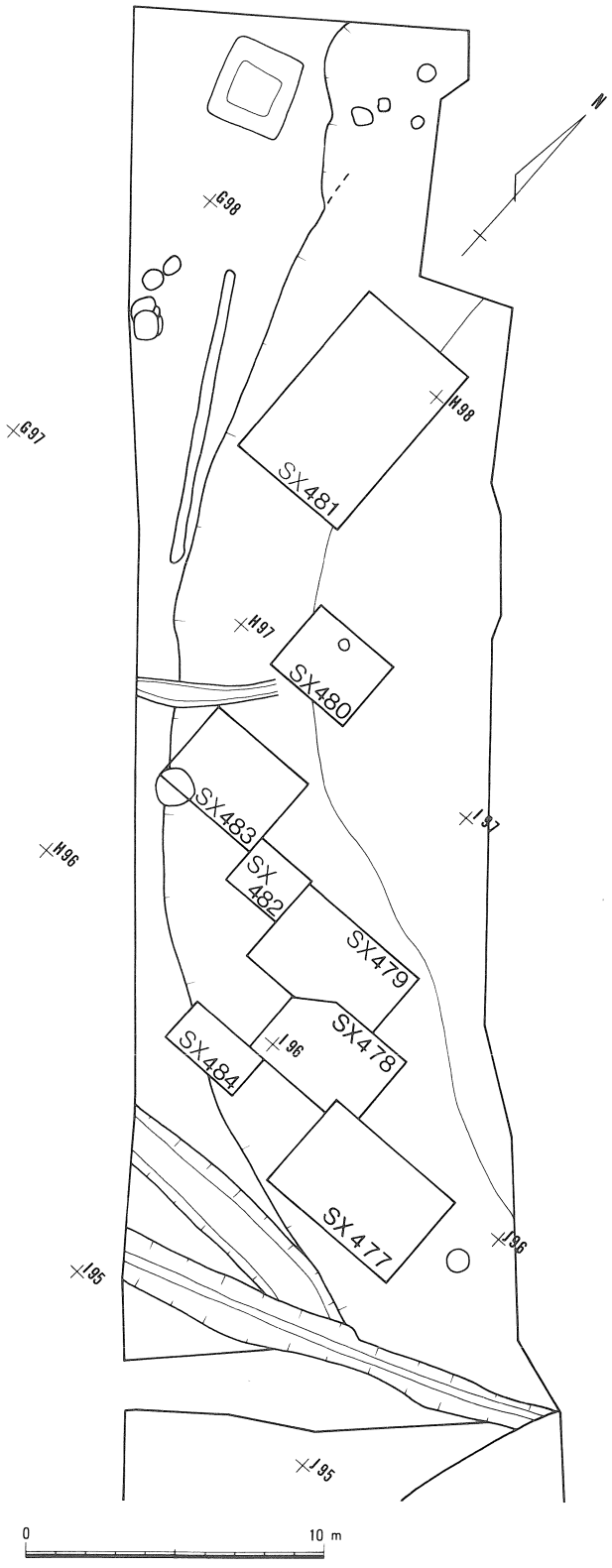
5　911

4　855

出土土器実測図



第77図　宮川3区SD 182 実測図



第78図　ＳＸ 477 ～ＳＸ 484 位置図

ＳＸ 481（第85図）　Ｇ97グリッドで検出された遺物集中部である。遺物の出土範囲は南北６ｍほどに広がり低湿地埋没段階での岸線に沿って投棄された状況を示している。土師器の投棄が主体であるが器種によって投棄地点が異なる点に特徴をもっている。北半部は大型の礫と並ぶように土師器の甕形土器と甑形土器があり、須恵器の横瓮とともに良好な遺存状態を示して検出された。南半部は土師器の坏形土器が主体をなしている。礫は小型のものがわずかにみられるにすぎない。遺物の特徴から７世紀前半代の投棄と推定した。

ＳＸ 479（第86図）　Ｈ96・Ｉ96グリッドで検出された遺物集中部である。4.5ｍ×2.5ｍほどの範囲にわたるが中央部には顕著な集中部分がみられた。この中央部にみられた集中は土師器の坏形土器が主体をなしていた。土器は完形品が多く口径の異なるものを２点あるいは３点重ねて投棄されている。土器以外では動物形土製品（土馬）８点と石製丸玉４点が共伴する点が注目される。土器の特徴から７世紀後半代での投棄と考える。

ＳＲ 486（第88図）　Ｊ94・Ｊ95・Ｋ94グリッドを中心に検出された旧河道である。蛇行の攻撃斜面側の頂点にあたり、北東から流れ込む水流が屈曲して南東に流れる。古墳時代後期から除々に浸食が始まり、鎌倉時代まで河道として水を保っていたと考えられる。宮川４区のＳＲ53・ＳＲ54に連続する旧河道である。

遺物は２層の灰黒色粘土層から平安時代末から鎌倉時代の木簡、墨書土器、箸状木製品などが一括して出土した。４層から６層までは古墳時代後期から平安時代の遺物が混在するが平安時代が主体をなす。層位にしたがって調査を進めたが旧河道の変遷を正確に把握することは困難な状況であった。以下は２層から出土した平安時代末～鎌倉時代の遺物を中心に詳述する。

木簡が５点出土している。卒塔婆を形どった薄板には「南無大日」・「仁王」といった仏教的文字が記されている。出土地点は河道跡の中心付近に集中する。文字がうき出ている部分もみられある期間地面に立てられていたことがうかがわれる。

墨書土器は灰釉陶器以前の段階の墨書文字とは内容が一変する。山茶碗にみられる墨書は、内容から

「大」・「も」・「小」・「みやいめ」または「み虫め」の4種に分けることができる（第89図)。「大」は8点でもっとも多い。ついで「も」が7点、「小」・「みやいめ」はそれぞれ3点が検出された。墨書位置はすべて底部外面である。出土地点は河道内全面にわたるが、層位は大半が2層におさまる。

箸状木製品は481点を数える。岸部付近に2個所の集中部が検出された。完形品は少なく大半が先端から3㎝ほどのところで折れている。また先端がつぶれている場合が多く刺して用いたのち投棄されたと思われる。呪符木簡、獣骨などに伴出する傾向があり、井戸、溝、河道など水にかかわる地点で、しかも平安時代末から中世の遺構でのみ出土している。また、焼痕のある木片を伴う場合が多いことも注目される。これらのことからこの箸状木製品を斎串と認定してよいと考える。

このほかミニチュアの膳と杵が出土している。

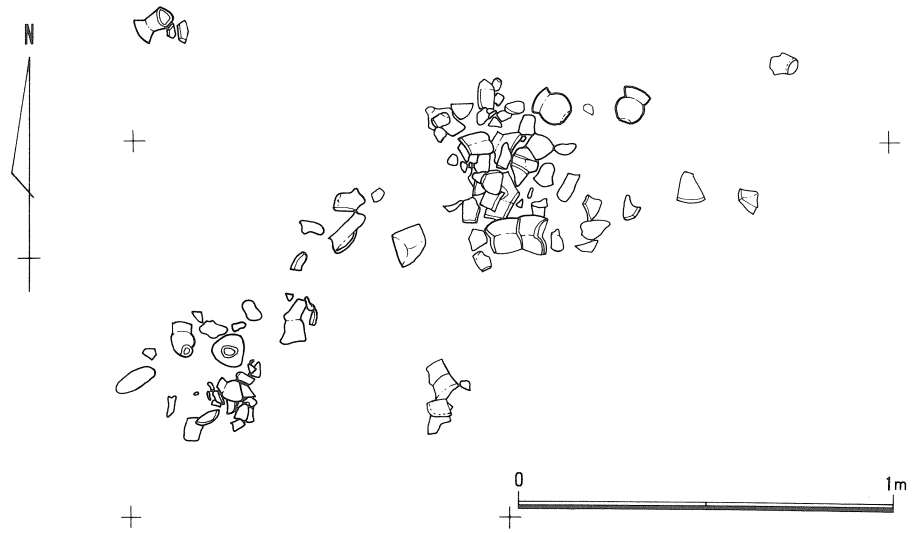
ＳＲ486はＳＤ145、ＳＤ182とともに平安時代末から鎌倉時代の居住域を区画する役割も果していた。墨書土器と木簡は他の調査区でもみられるが、内容的に共通するものは宮川4区の墨書土器のみである。宮川4区は宮川3区の連続部分であることから、ＳＲ486で検出された遺物は宮川3区を中心とした居住域内で行われた仏教的儀礼で用いた料であったことは確かである。

ＳＲ487　Ｌ92・93グリッドを中心に検出された旧河道跡である。ＳＲ486が中世段階に南側に移動したことにより形成された蛇行の攻撃斜面側の頂点にあたる。最深部標高は2.4ｍで深さは2.2ｍにもおよぶ。暗青灰色の粘土によって被覆されている。ＳＲ487は宮川4区のＳＲ52に連続する河道跡である。

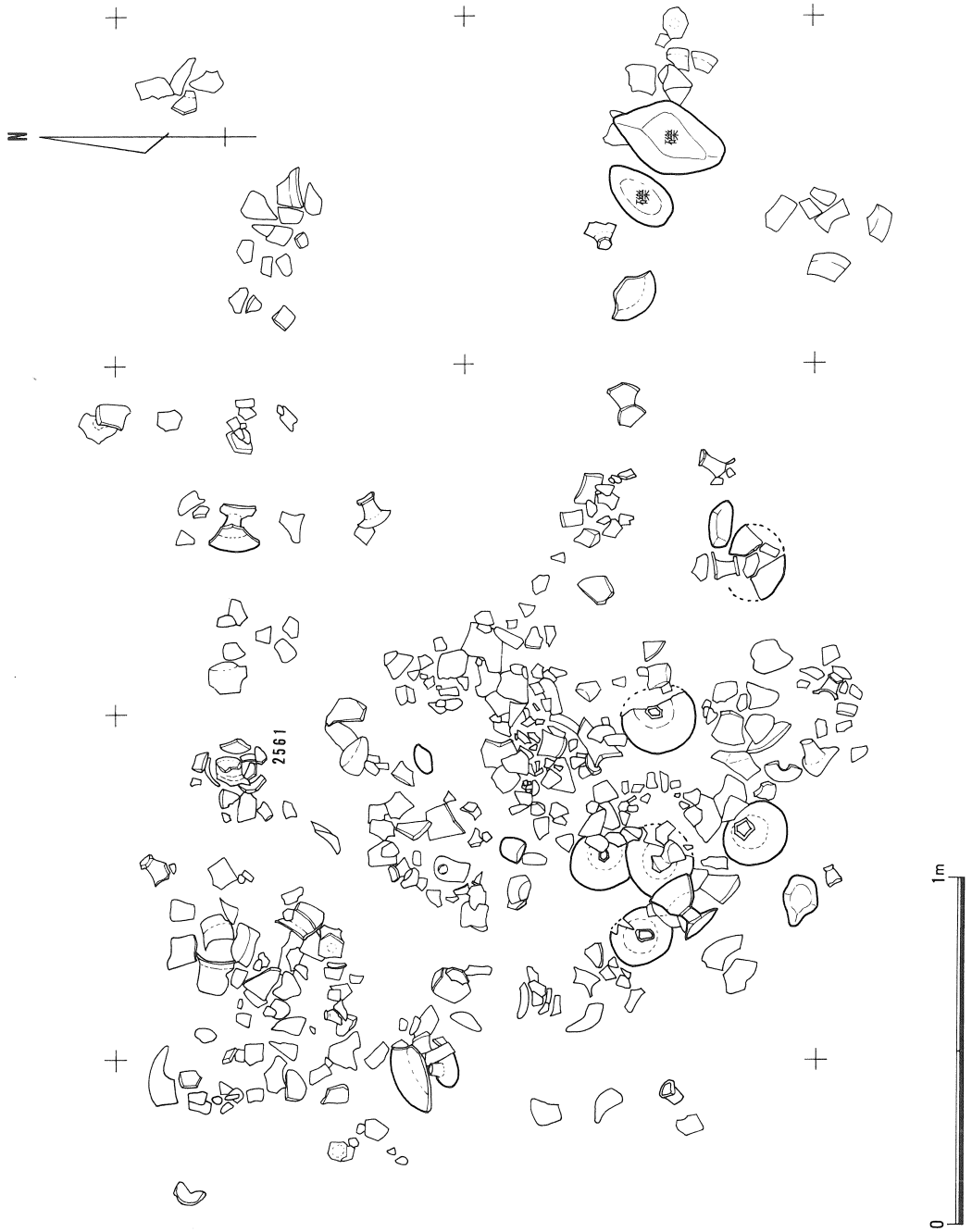
3. まとめ

⑴　宮川3区の北半部は奈良時代の遺構・遺物が比較的多く検出された。これは宮川2区および宮川5区の遺構とともに奈良時代の居住域を想定する根拠となろう。これに対し南半部は平安時代末から鎌倉時代の居住域と想定し得る。いずれも旧大谷川の右岸に相当する。低湿地と旧河道は祭祀遺物の可能性をもつ遺物の投棄場所として古墳時代中期から鎌倉時代まで活用され続けている。特にＳＲ485では①坩形土器と滑石製模造品の祭祀、②高坏を用いる祭祀、③甕形土器・甑形土器を主体とする祭祀、④馬形土製品を用いる祭祀というような段階的変化を示していた。これは本遺跡での祭祀の変遷を明らかにする上で重要な資料となった。

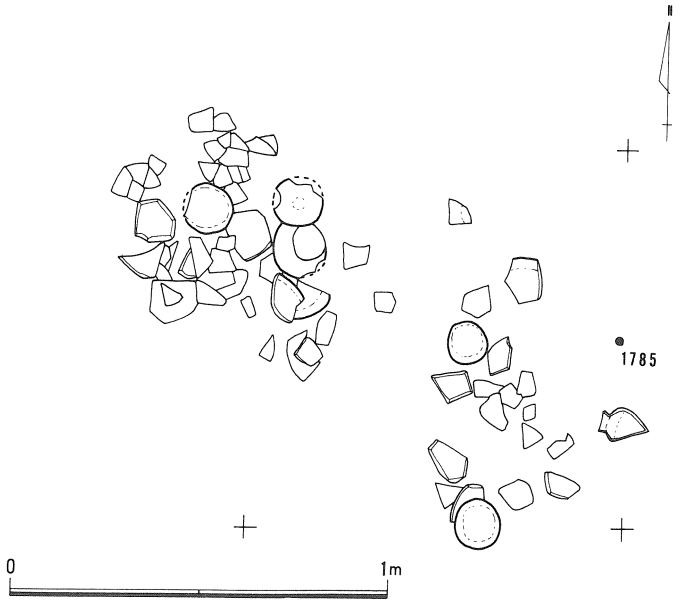
⑵　宮川3区ＳＲ486で大量に出土した箸状木製品は出土状況・伴出遺物から斎串と考えられ、同種のものは大谷1区・西大谷4区・水上6区ＳＤ228・宮川4区ＳＲ53・宮川6区ＳＲ316などでもみられる。また同種の機能を果たしていたと考えられる断面方形でやや太い棒状木製品も出土しており、それぞれ箸状の斎串・棒状の斎串と認定する。



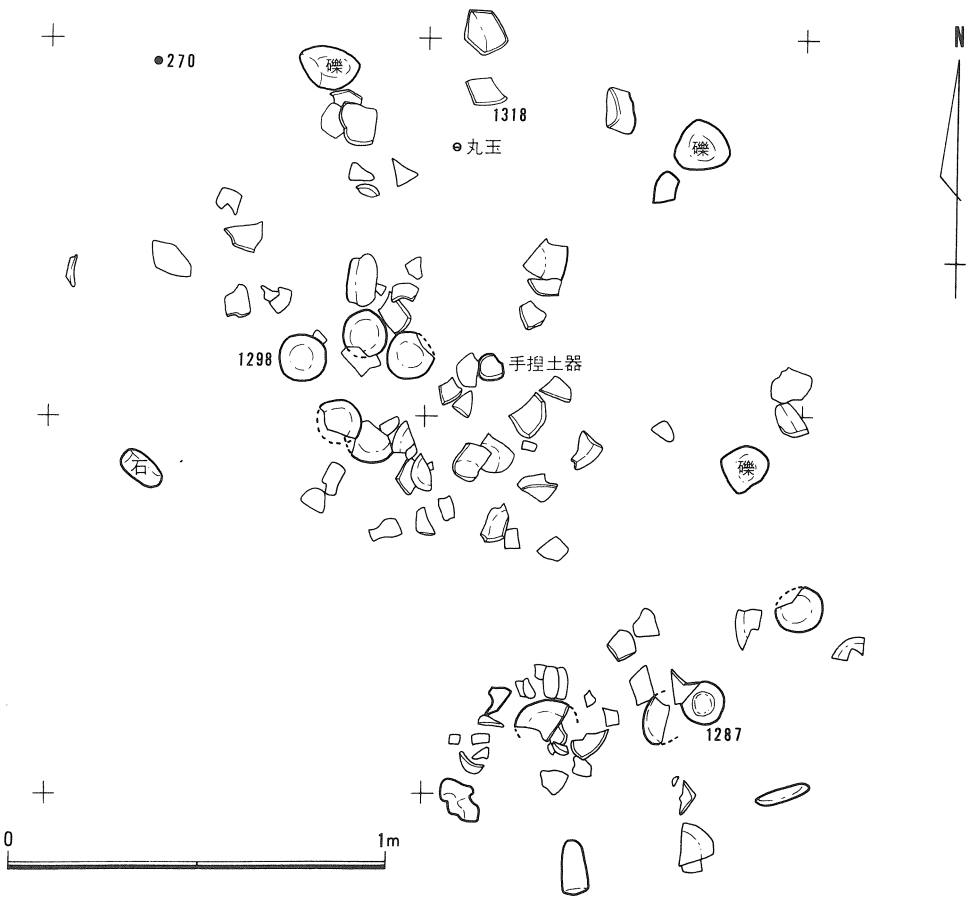
第79図　宮川3区ＳＸ484遺物分布図



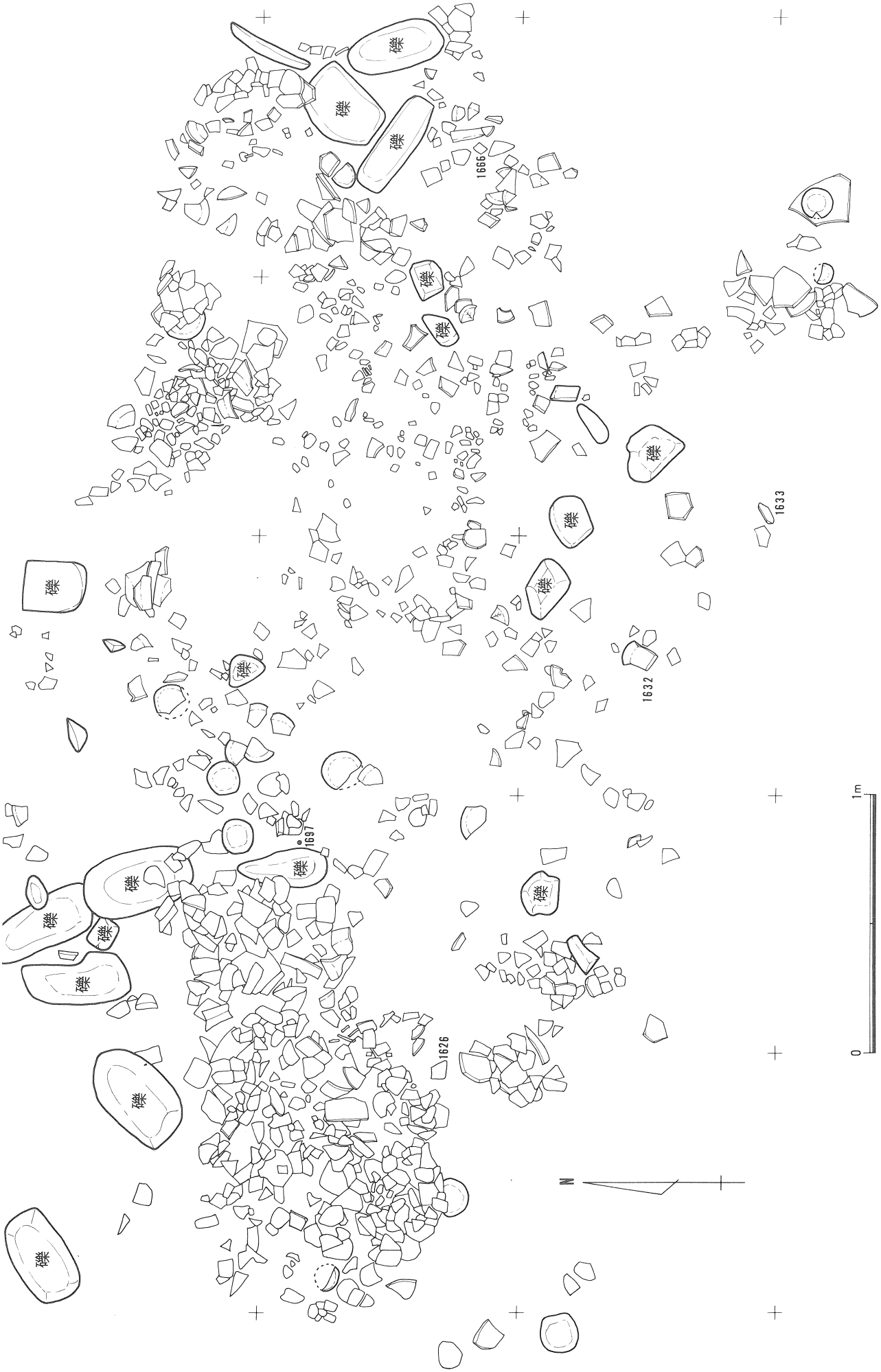
第80図　宮川3区ＳＸ483遺物分布図



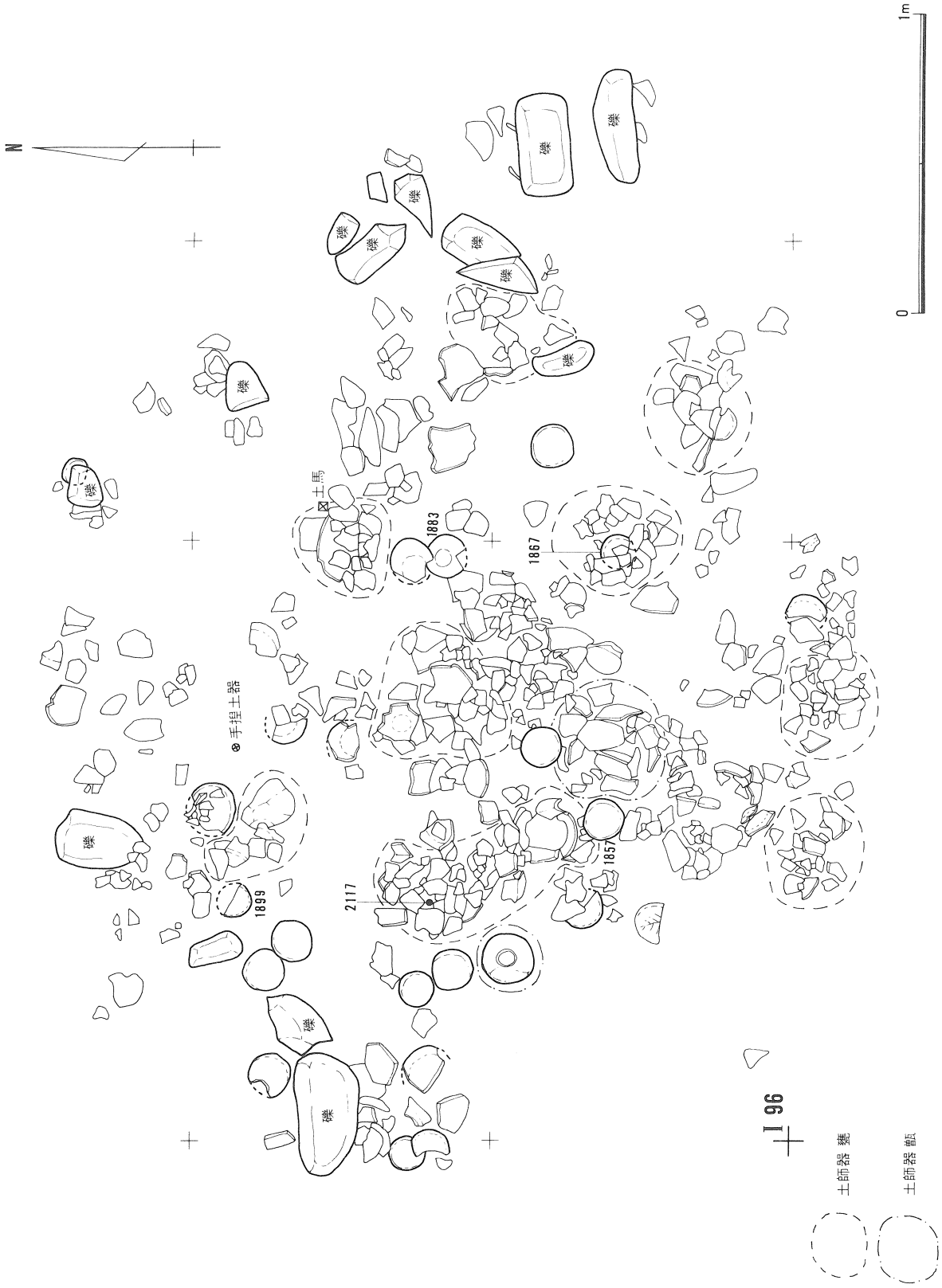
第81図　宮川3区ＳＸ482遺物分布図



第82図　宮川3区ＳＸ480遺物分布図

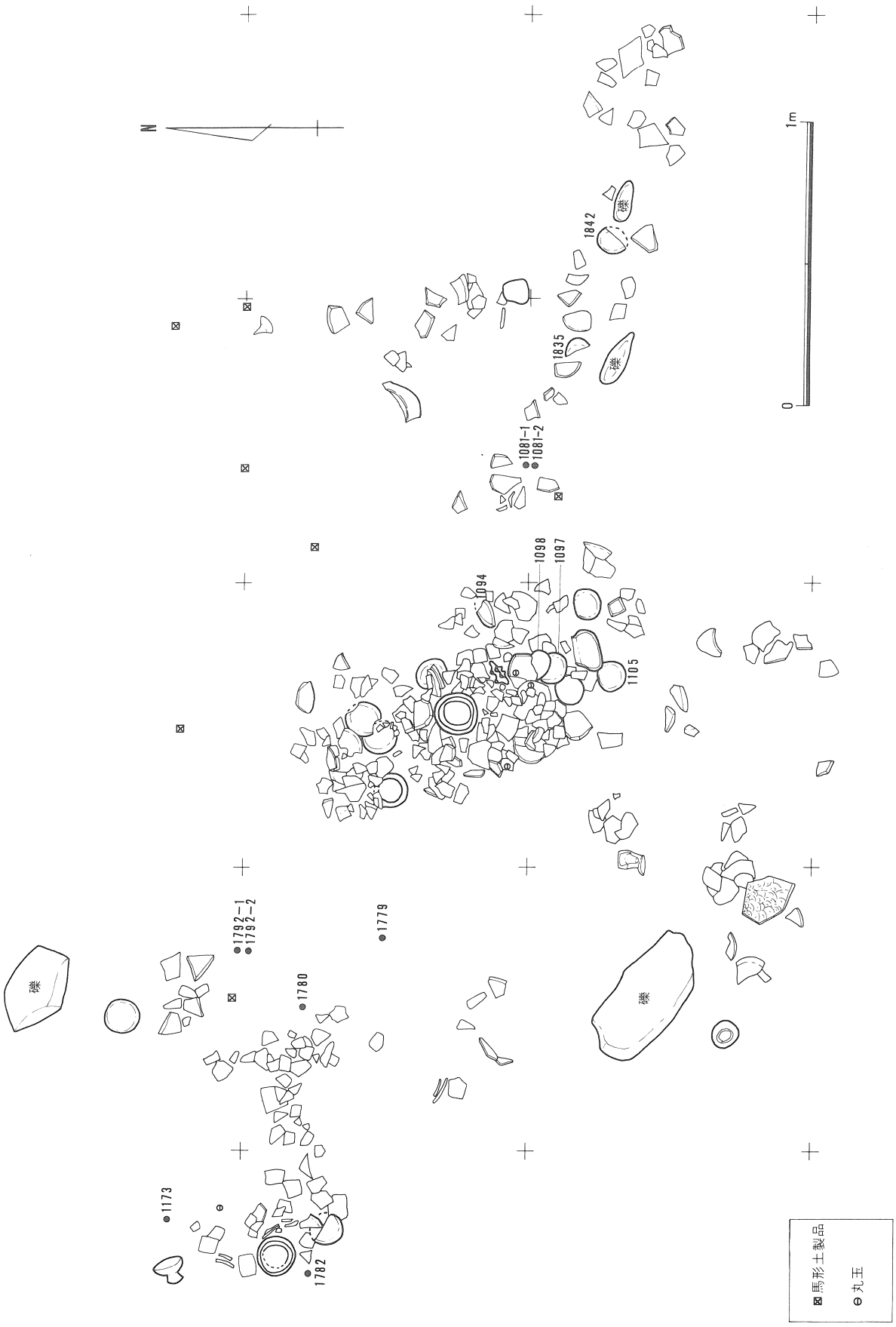


第83図　宮川3区SX 477遺物分布図

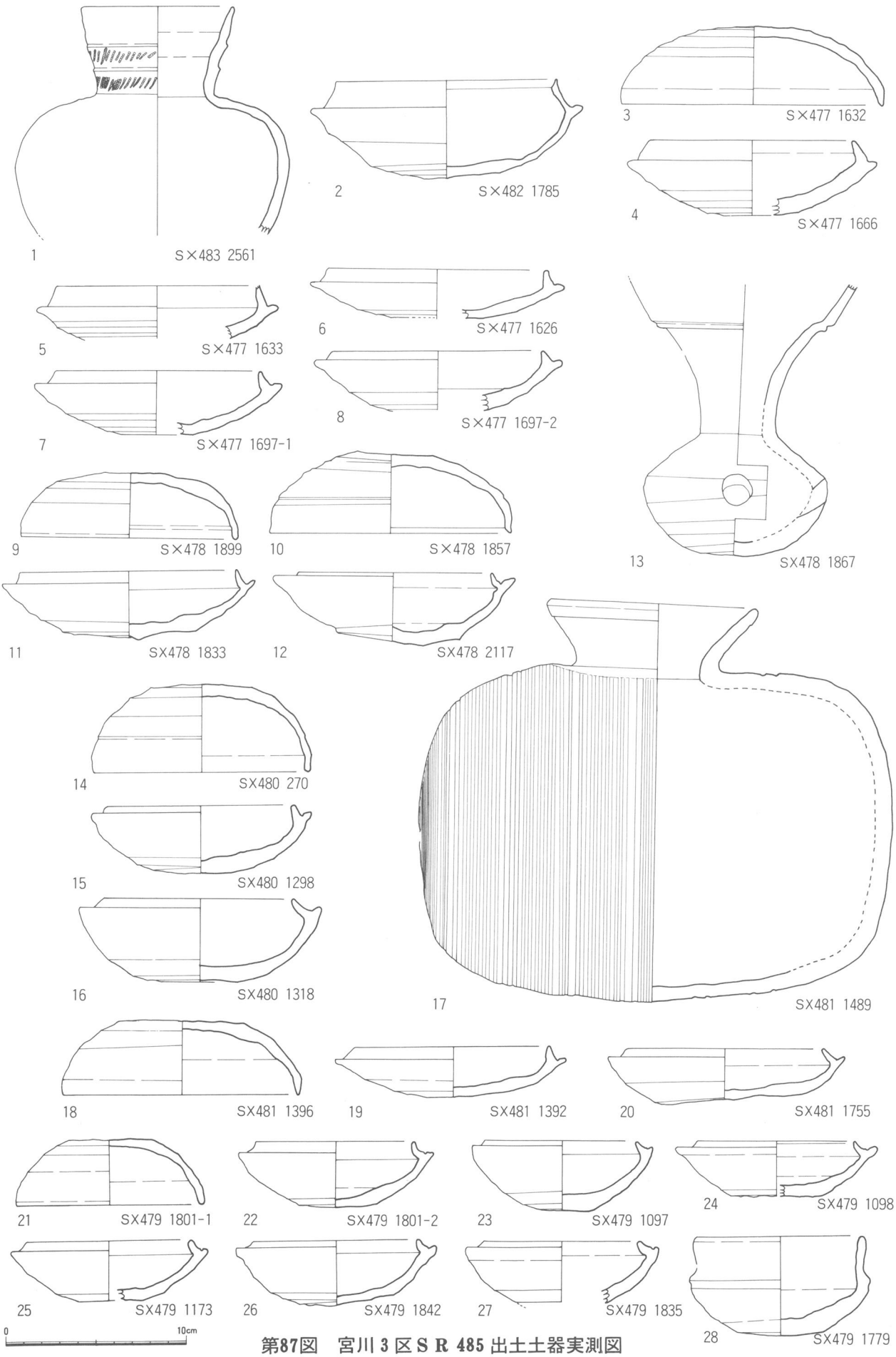


第84図　宮川3区ＳＸ478遺物分布図

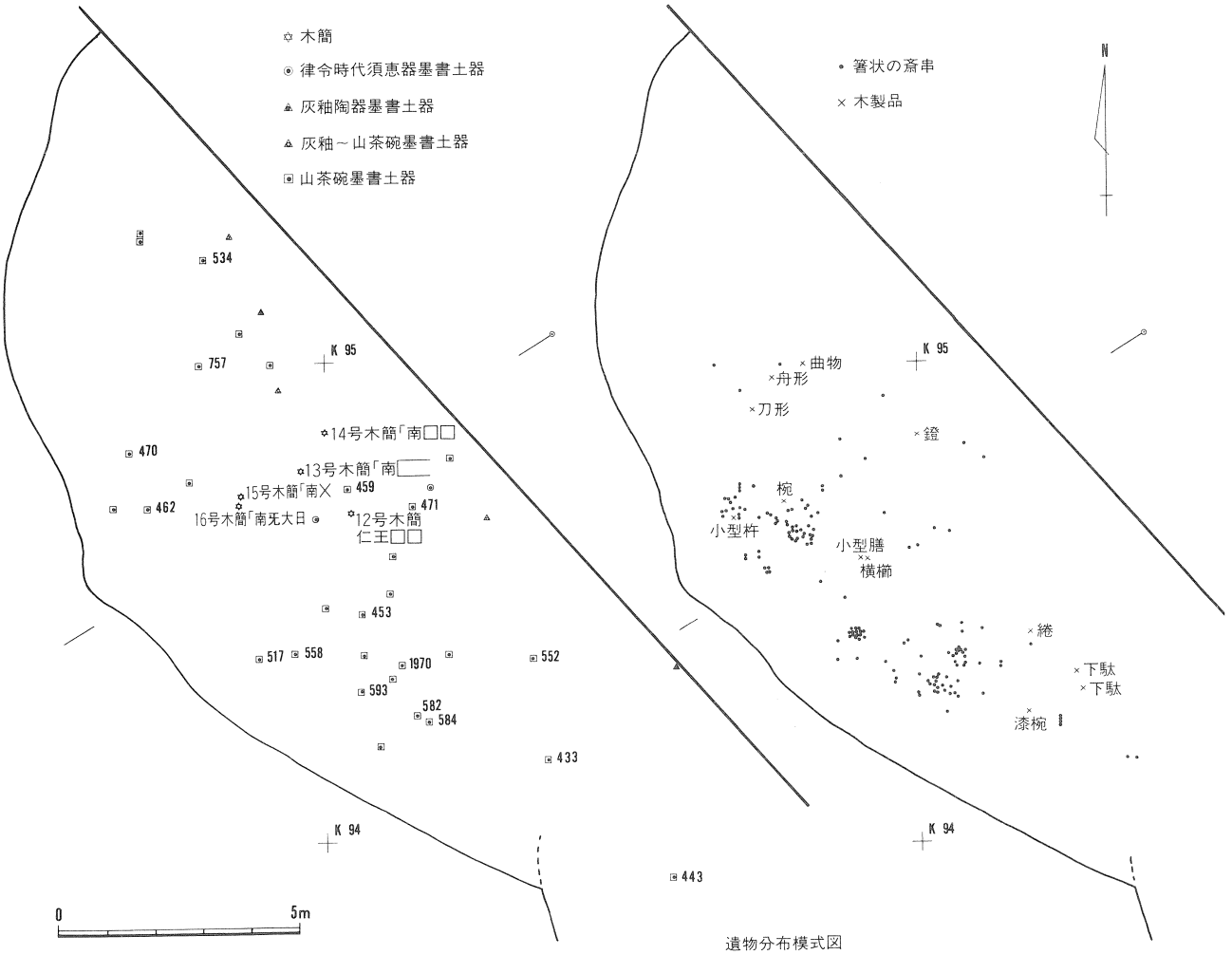
第85図　宮川3区ＳＸ481遺物分布図



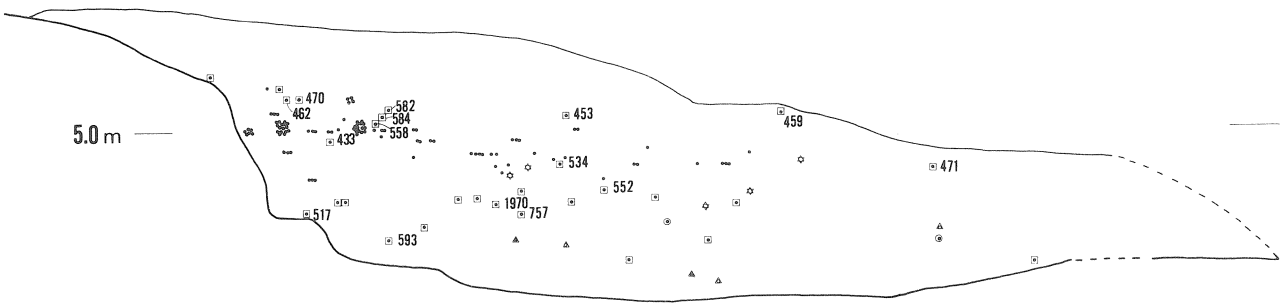
第86図　宮川3区ＳＸ479遺物分布図



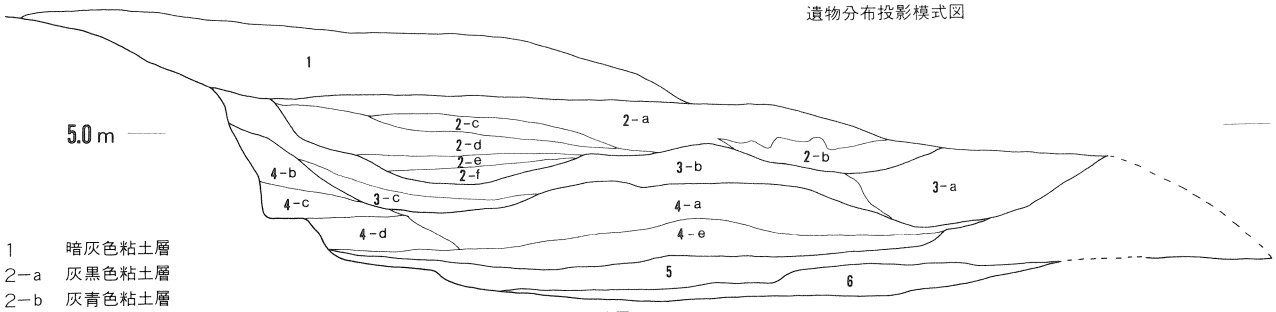
第87図　宮川3区ＳＲ485出土土器実測図



遺物分布模式図

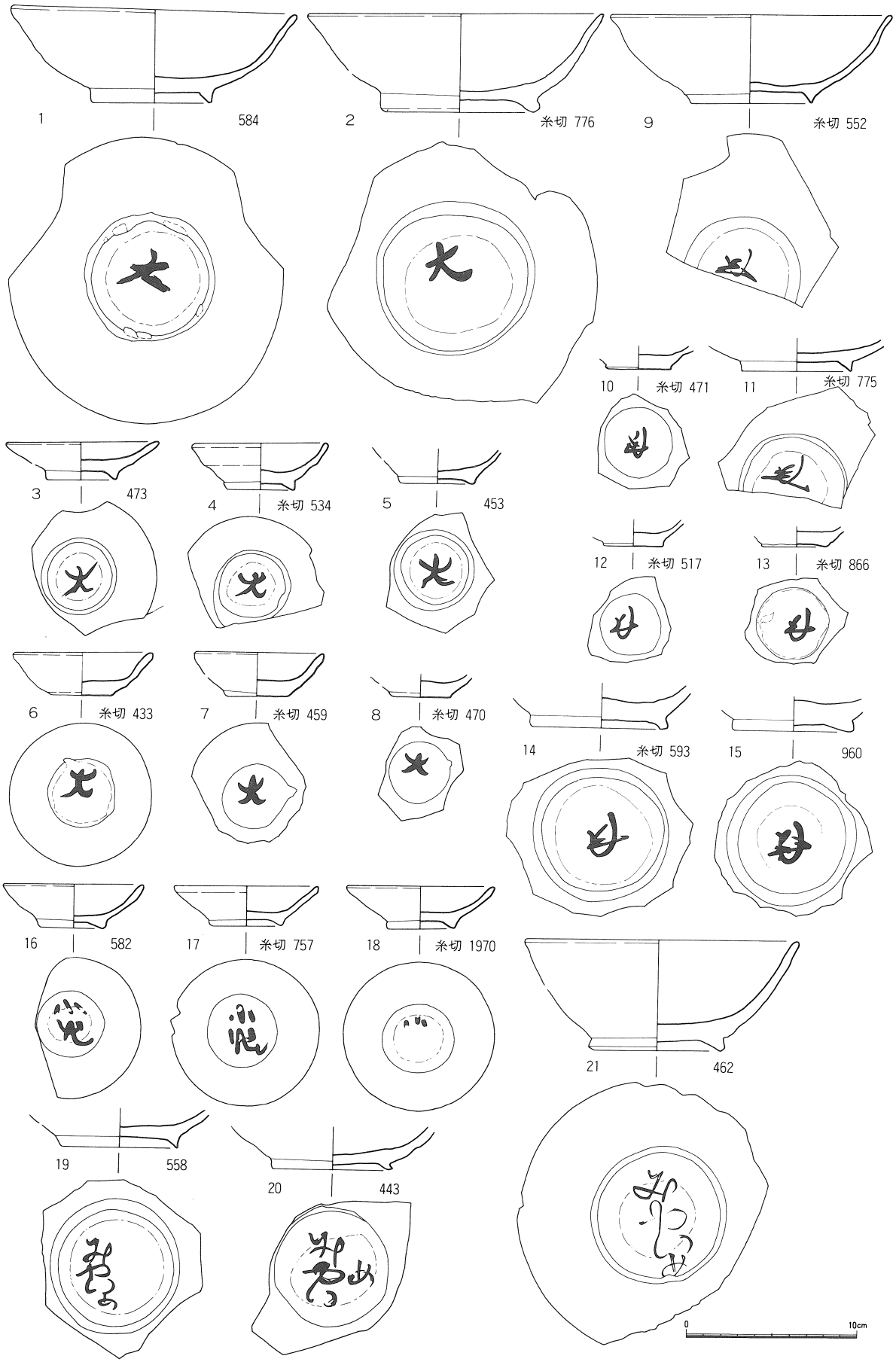


遺物分布投影模式図



1　暗灰色粘土層
2－a　灰黒色粘土層
2－b　灰青色粘土層
2－c　暗灰色粘土層
2－d　灰黒色粘土層
2－e　暗灰色砂質粘土層
2－f　灰黒色粘土層
3－a　暗灰色粘土層
3－b　暗灰色粘土層
3－c　灰青色粘土層
4－a　暗灰色粘土混砂層
4－b　暗灰色砂質粘土層
4－c　暗灰色砂質粘土層
4－d　暗灰色砂質粘土層
4－e　暗灰色粘土混砂(礫)層
5　暗灰色粘土層
6　粘土混砂礫層

第88図　宮川3区SR 486遺物分布模式図・土層断面図



第89図　宮川3区SR 486出土墨書土器実測図

第30表　宮川3区SR 486主要遺物一覧表

古墳時代　須恵器	14	刀形木製品	1	木製鐙	1
律令時代　須恵器	10	舟形木製品	1	曲物	3
灰釉陶器	6	斎串（板状）	8	木製椀	1
緑釉陶器	1	棒状木製品(斎串)	4	下駄	2
山茶碗	60	箸状木製品(斎串)	481	箆状木製品	2
青・白磁	9	卒塔婆状木製品	1	動物形土製品(土馬)	2
墨書土器	39	ミニチュア膳	1	瓦	2
ヘラ書土器	1	ミニチュア杵	1	鉄鏃	1
木簡	5	糸巻	1	砥石	2
		横櫛	1	動物遺存体	25

第31表　宮川3区小穴一覧表

遺構番号	グリッド	長径	短径	深さ	長短比（長径＝1）	遺構面標高	特記事項
SP 101	G97	1.00	0.90	0.37	0.90	5.93	
SP 102	G97	0.65	0.65	0.09	1.00	5.93	
SP 104	G97	0.84	(0.64)	0.17	(0.76)	5.93	
SP 105	G97	(0.23)	(0.22)	0.12	(0.96)	5.93	
SP 106	G97	(0.43)	(0.43)	0.02	(1.00)	5.93	
SP 107	G97	—	—	—	—	5.93	
SP 108	G98	0.75	0.65	0.40	0.87	5.74	
SP 109	G98	0.40	0.35	0.26	0.88	5.66	
SP 110	G98	0.34	0.32	0.30	0.94	5.40	
SP 111	G98	0.66	0.51	0.15	0.77	5.51	
SP 112	I 94	0.28	0.27	0.18	0.96	6.37	平安時代
SP 113	I 94	0.23	0.22	0.17	0.96	6.40	
SP 114	I 94	0.40	0.29	0.39	0.73	6.42	
SP 115	I 94	0.47	0.46	0.15	0.98	6.41	
SP 116	I 94	0.28	0.25	0.16	0.89	6.37	
SP 117	I 94	0.36	0.32	0.44	0.89	6.40	
SP 118	J 94	0.28	0.25	0.16	0.89	6.37	
SP 119	I 94	0.24	0.20	0.05	0.83	6.38	
SP 120	I 94	0.50	0.40	0.13	0.80	6.41	
SP 121	I 94	0.18	0.18	—	1.00	6.41	
SP 122	I 94	0.28	0.25	0.24	0.89	6.42	
SP 123	I 94	0.67	0.45	0.33	0.67	6.42	
SP 124	I 94	0.53	0.49	0.25	0.92	6.40	
SP 127	I 94	0.36	0.26	0.09	0.72	6.38	
SP 128	I 94	0.52	0.45	0.12	0.87	6.38	
SP 129	I 94	0.37	0.34	0.19	0.92	6.35	
SP 130	I 94	0.49	0.45	0.21	0.92	6.31	

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比 (長径＝1)	遺構面 標　高	特記事項
S P 131	I 94	0.28	0.27	0.31	0.96	6.31	
S P 132	I 94	(0.50)	0.43	0.24	0.86	6.31	
S P 133	I 94	0.30	0.29	0.24	0.97	6.34	
S P 134	I 94	0.51	0.49	0.27	0.96	6.34	
S P 135	I 94	0.35	—	—	—	6.38	
S P 136	I 94	0.29	0.25	0.18	0.86	6.31	
S P 137	I 94	0.33	(0.30)	0.16	(0.91)	6.31	
S P 138	I 94	0.34	0.31	0.23	0.91	6.37	
S P 139	I 94	0.52	(0.44)	0.21	(0.85)	6.36	
S P 140	J 94	0.34	0.32	0.18	0.94	6.33	
S P 141	J 94	0.28	0.26	0.24	0.93	6.34	古墳時代
S P 142	J 94	0.26	0.25	0.21	0.96	6.32	
S P 143	I 94	0.59	0.57	0.23	0.97	6.33	
S P 144	J 94	0.29	0.27	0.18	0.93	6.30	
S P 148	J 94	0.24	0.23	0.21	0.96	6.30	
S P 149	J 94	0.18	0.16	0.11	0.89	6.28	
S P 150	J 94	0.33	0.28	0.10	0.85	6.20	
S P 151	J 94	0.33	0.32	0.16	0.97	6.21	
S P 152	J 94	0.38	0.22	0.20	0.58	6.20	
S P 153	J 94	0.26	0.25	0.15	0.96	6.21	
S P 154	J 94	0.22	0.21	0.11	0.95	6.15	
S P 155	J 94	0.30	0.30	0.18	1.00	6.15	
S P 156	J 94	0.34	0.22	0.18	0.65	6.21	
S P 157	J 94	0.31	0.30	0.25	0.97	6.17	
S P 158	I 94	0.48	0.45	0.30	0.94	6.40	平安時代
S P 159	J 94	0.19	0.15	0.07	0.79	6.13	
S P 160	J 94	0.42	0.41	0.17	0.98	6.34	
S P 163	J 94	0.24	0.21	0.10	0.88	6.31	
S P 164	J 94	0.27	0.26	0.15	0.96	6.11	
S P 165	J 94	0.31	0.26	0.36	0.84	6.18	
S P 166	J 94	0.27	0.20	0.05	0.74	6.13	
S P 167	J 94	0.24	0.21	0.09	0.88	6.14	
S P 168	J 94	0.27	0.24	0.17	0.89	6.09	
S P 169	J 94	0.26	0.24	0.12	0.92	6.35	
S P 171	I 94	0.62	0.59	0.19	0.95	6.33	
S P 172	J 94	0.28	0.25	0.11	0.89	6.02	
S P 173	J 94	0.25	(0.24)	0.28	(0.96)	6.28	
S P 178	J 94	0.27	0.21	0.14	0.78	6.12	
S P 179	J 94	0.18	0.17	0.07	0.94	6.10	
S P 180	J 94	0.39	0.30	0.26	0.77	6.35	
S P 184	J 94	0.71	0.45	0.19	0.63	6.27	

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標　高	特記事項
S P 185	I 94	0.28	0.27	0.09	0.96	6.38	
S P 186	J 94	0.35	0.32	0.12	0.91	6.24	
S P 190	J 94	0.45	0.30	0.30	0.67	6.18	古墳時代（後期）
S P 191	J 94	0.25	0.24	0.08	0.96	6.26	
S P 195	J 93	0.26	0.24	0.19	0.92	6.28	
S P 196	J 93	0.20	0.19	0.10	0.95	6.27	
S P 197	J 93	0.29	0.27	0.19	0.93	6.26	
S P 198	J 93	0.33	0.28	0.14	0.85	6.21	
S P 199	J 94	0.35	0.32	0.15	0.91	6.21	
S P 200	J 94	0.30	0.27	0.70	0.90	6.47	
S P 401	J 93	0.32	0.25	0.16	0.78	6.17	
S P 402	J 93	0.38	0.30	0.17	0.79	6.21	
S P 403	J 93	0.30	0.28	0.06	0.93	6.21	
S P 404	J 93	0.28	0.26	0.23	0.93	6.20	
S P 405	J 93	0.28	0.24	0.07	0.86	6.21	
S P 406	J 93	0.23	0.21	0.10	0.91	6.21	
S P 407	J 93	0.17	0.16	0.05	0.94	6.19	
S P 408	J 93	0.20	0.17	0.08	0.85	6.19	
S P 409	J 93	0.24	0.22	0.10	0.92	6.15	
S P 410	J 93	0.20	0.19	0.04	0.95	6.21	
S P 411	J 93	0.23	0.19	—	0.83	6.22	
S P 412	J 93	0.30	0.25	0.08	0.83	6.17	
S P 413	J 93	0.33	0.32	0.06	0.97	6.18	
S P 414	J 93	—	0.80	0.21	—	6.21	
S P 415	K 93	0.32	0.28	0.12	0.88	6.25	
S P 416	K 93	0.34	0.24	—	0.71	6.17	
S P 417	K 93	0.49	0.30	0.20	0.61	6.14	
S P 418	K 93	0.82	0.48	0.62	0.59	5.92	
S P 419	K 93	0.47	0.27	0.18	0.57	6.17	
S P 420	K 93	0.50	0.28	0.11	0.56	6.20	
S P 421	K 93	0.34	0.30	0.13	0.88	6.22	
S P 422	K 92	0.32	0.28	0.20	0.88	6.16	
S P 423	K 92	0.38	0.34	0.12	0.89	6.17	
S P 425	K 92	0.33	0.29	0.06	0.88	6.37	
S P 426	K 92	0.66	0.52	0.40	0.79	6.40	
S P 427	K 92	0.78	0.59	0.26	0.76	6.39	
S P 430	K 91	0.35	0.28	0.09	0.80	6.40	
S P 431	L 91	0.63	0.48	0.26	0.76	6.37	
S P 432	L 91	0.76	0.69	0.08	0.91	6.26	
S P 433	L 91	0.24	0.18	0.04	0.75	6.35	
S P 436	M 91	0.96	0.90	0.30	0.94	6.09	

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比 (長径＝1)	遺構面 標　高	特記事項
SP 438	M91	0.69	0.63	0.40	0.91	5.82	
SP 439	L90	0.28	0.21	0.04	0.75	6.21	
SP 440	M90	0.52	0.38	0.08	0.73	6.20	
SP 441	M91	0.76	0.59	0.27	0.78	5.91	
SP 442	M90	0.32	0.25	0.19	0.78	6.18	
SP 443	M90	1.12	0.76	0.31	0.68	6.20	古墳時代
SP 444	M90	1.12	(0.78)	0.32	(0.70)	6.18	
SP 445	M89	0.62	0.54	0.26	0.87	5.87	
SP 447	N89	0.51	0.40	0.12	0.78	5.91	
SP 448	N89	0.44	0.36	0.06	0.82	5.90	
SP 449	O89	0.56	0.45	0.14	0.80	5.94	
SP 451	N89	0.43	0.38	0.06	0.88	5.93	
SP 452	N89	0.24	0.22	0.14	0.92	5.91	
SP 453	O89	0.82	0.69	0.12	0.84	5.82	
SP 454	O89	1.34	0.92	0.14	0.69	5.82	
SP 455	O89	0.29	0.28	0.34	0.97	5.84	
SP 456	O89	0.41	0.32	0.11	0.78	5.82	古墳時代
SP 457	H96	1.34	1.12	0.23	0.84	5.65	古墳時代
SP 459	I 95	0.74	0.70	0.53	0.95	4.94	
SP 461	I 94	0.20	—	—	—	5.93	
SP 462	I 94	0.19	0.17	0.06	0.89	6.07	
SP 464	I 94	0.22	0.21	0.12	0.95	6.15	
SP 465	I 94	(0.18)	(0.17)	0.05	0.94	6.15	
SP 466	I 94	0.37	—	0.08	—	6.15	
SP 467	I 94	0.46	0.44	0.24	0.96	6.23	
SP 468	J 94	0.44	0.42	0.12	0.95	6.14	
SP 470	J 94	0.34	(0.32)	0.18	(0.94)	6.14	
SP 471	J 94	0.35	(0.34)	0.21	(0.97)	6.15	
SP 472	J 94	0.23	0.18	0.14	0.78	6.14	
SP 473	J 94	0.37	0.21	0.18	0.57	6.19	
SP 474	J 94	(0.80)	0.70	0.39	(0.88)	6.26	
SP 475	H97						

宮川４区（第74図）

1. 概　要

宮川４区は現大谷川の左岸で河口起点より1,250ｍ上流に位置する。南半部では旧大谷川が自由蛇行の過程で順次河道を南側に移動した痕跡が７本の明瞭な旧河道跡（ＳＲ58・56・55・64・53・52・51）となって検出された。その結果、覆土中や河床に遺存する遺物も年代ごとの区分が可能となった。これに対し北半部は各時代の河道が同一地点に重複していたため遺物の伴出関係については今後の検討を待ちたい。

南半部で検出されたＳＲ58は旧大谷川の成立時期について考えるにあたり重要な地点でもあった。大谷川成立以前は各所に低湿地が広がっていたが、その痕跡がＳＲ56・58の基盤となっている茶褐色の腐植質粘土層によっても確認できる。ＳＲ56・58周辺は宮川３区の低湿地ＳＲ485における岸線の延長上にあたり、帯状の低湿地地形の存在が明らかとなる。つまり、ＳＲ485の岸が帯状低湿地の右岸を形成し、宮川４区のM95・96グリッドの微高地が左岸となっているのである。初期の大谷川は水位の下降にともない、この低湿地が帯状の窪地となり、降雨時には水路となり、やがて１本の河川に成長した状況がうかがえる。この初期の大谷川がＳＲ58である。

2. 遺構各説

旧河道跡

ＳＲ58　Ｌ95・M95・Ｎ95グリッドをほぼ西から東に流れる旧河道である。確認面での幅は２ｍ前後と狭い。延長は15ｍ、河床最深部の標高は5.2ｍである。Ｌ95グリッドの北東部分で屈曲の痕跡がみられるがＳＲ51と連続する近世から昭和17年の旧河道によって撹乱をうけ、屈曲の方向は不明である。M95・Ｎ95グリッド内ではＳＲ56との交差もなく、左岸の一部に杭と横板による土止めも施されていた。河道内からは須恵器の坏身のほか、土師器坏・壷・甕形土器などが検出された。土器の特徴から古墳時代中期から後期初め頃と推定する。

ＳＲ56　M94・Ｎ94グリッドを中心に西から東に流れる旧河道である。確認面での幅は5.3ｍ、延長23ｍを測る。河床は平担で標高は4.7ｍである。覆土は小豆大の小礫を主体とする粘土混りの砂礫層である。出土した遺物は土器・木製品・石製品・土製品など膨大な量であったが、以下主要な遺物について簡単にふれる。

古墳時代土師器　第33表に示したとおり点数では圧倒的多数を占める。総数302点は現地作成の実測図に記録され、しかも準完形品以上の点数である。またＳＲ55に流出した25点も本来ＳＲ56に帰属すべきものと考えられる。総数302点のうち92％（278点）を坏・埦類が占めている。出土地点は第94図に示した。分布上の特色は、①坏・埦形土器は広範に分布するがM94グリッドの北東部分に濃密傾向がある。②坏・埦形土器以外の器種はＮ94グリッドに多くみられる。③河道中心軸より北側（左岸側）に集中して出土するなどである。

古墳時代須恵器（第95図）　24点が出土しているが須恵器と土師器との数量比は１対12.6となり量的には少ない。器種は坏が主体であり約80％（19点）を占める。つぎに碗が続く。甕は表では１点となっているが各所に破片が散乱しており個体数が増す可能性もある。須恵器の分布の中心はＮ94グリッドにある。須恵器は編年上、６世紀から７世紀第３四半期に位置づけられ、これをもってＳＲ56の年代とする。

人形木製品（第96図）10点が出土した。このうち出土地点の確実な７点を分布図（第94図）に示した。形態は短冊状の薄板の一端を削って圭頭に頭部をつくり、頸・肩部は三角形に切り欠き撫で肩とする。共通して手の表現はみられない。腰部は三角形に切り欠くものと表現されないものとがある。脚部は三

角形に切り欠くがその深さは一様ではない。全長は30cm前後が主体をなすが10cm代後半のものも3点含まれる。小型の人形は大型のそれと比較して形態がやや異なる。1点は頭頂部を水平につくり、他1点は脚を三角形に尖らせている。出土地点は、河道の中央付近と東側の2個所に分かれる。

馬形木製品（第96図）6点出土している。すべて鞍などの表現のない裸馬である。横長の薄板を菱形または等脚台形につくり、上辺は三角形または弧状に切り欠き背を表現する。下辺は1個所を三角形に切り欠き頭部のみを表現する例と2個所を切り欠き頭と尾を表現するものがある。長さは13cm～18cmの範囲におさまる。出土地点は河道の中央付近と西側に分かれる。

刀形木製品（第96図）4点出土している。このうち3点が完形品であり分布図に示した。柄頭の形状は山形に削り出すものと長方形に削り出すものとがある。長さは22cm、29cm、57cmと不揃いである。出土地点は西側部、中央部、東側部にそれぞれ1点がみられた。

斎串（第96図）　10点が出土している。大きさも形態もバラエティーがあるが、共通して切り込みや切り欠きをもたない。出土地点は河道の西側部分と中央部分にみられた。

そのほか木製品では横櫛5点、鎌の柄2点、横槌1点、曲物5点、有頭棒2点、編錘2点が出土している。

動物形土製品　一般的に土馬と呼称されるものであるが、出土した土製品には特異な形態のものも含まれるためここでは動物形土製品とした。破片を含めて9点出土している。このうち8点は河道西側部分に集中していた。

石製丸玉　8点が出土しておりM94グリッドで4点、N94グリッドで4点と2個所に分かれている。

耳環　1点が東端部で出土した。

紡錘車　N94グリッドで4点出土している。

文字資料　木簡2点（5号木簡「相星五十戸」・「□□」、11号木簡「〓」）と墨書土器1点（「多麻呂」が出土した。「相星五十戸」木簡は長さ13.5cm、幅2.2cm、厚さ0.35cmを測り、下部に1辺0.5cmの方形の穴があけられている。出土地点は河道中央部であり、しかも河床に密着した状態であった。SR56がSR55と交差するのは東端の基準杭Q94周辺だけであることから「相星五十戸」木簡が後代の混入品とはしがたい。「多麻呂」墨書の土器は奈良時代の須恵器であること、出土地点が河道の東端部でSR55と交錯する部分であることから本来はSR55に伴出すべきものであろう。

動物遺存体　獣骨および歯であるが馬が多い。獣骨・歯は祭祀遺物として広く認められるところである。

植物遺存体　桃の種が出土している。SR56は特に多く2,044点が出土した。

石材　こぶし大の礫398個と人頭大以上の礫153個が検出された。これらの礫は、①河道内の覆土を構成する礫よりも著しく大きく自然流出の礫とは考えにくい、②大型の礫は割石がほとんどで人頭大程度に割り揃えた状況がうかがえる。③大型の砥石が混入しているなどの点から何らかの目的で収集・加工し、使用後に河川内に投棄したことは確実とみてよい。

SR56内から出土した遺物は祭祀に用いた祭料と考えて大過はないが、遺物の出土位置を重ねてみると呪術性をもつ遺物が各種混在していることがわかる。これに対し水上7区のSX801では馬形土製品と土師器、宮川3区SX479でも馬形土製品と土師器、宮川6区SR313内にみられたSX335の土器と木製形代類というように形式化された整然さをもっている。出土須恵器は編年上100年余りの年代幅をもつことから祭祀遺物の性格については他調査のあり方をもふまえて後述することにする。

SR55　基準杭94列に沿って西から東に流れる旧河道である。確認面での幅は西側で9m、東側で3mと先細りの形態をみせる。西側での河床最深部標高は3.6m、東側では4.4mを測り、0.8mの比高差が認められる。つまり、わずか15mほどの河道で上流側が下流側よりも0.8m低いということになる。これは上流部の河床が安倍川の氾濫によって形成された砂礫層で、浸食しやすい地質条件であったこと

による。ＳＲ55からは古墳時代後期の須恵器・土師器のほか奈良時代の須恵器が出土している。古墳時代の土器はＳＲ56からの混入と考えられることからＳＲ55は奈良時代の河道跡とする。

ＳＲ55は遺物の量が少ない河道であったが東側の砂礫層より完全な形で鍬が１点検出された。重要な遺物であるので報告しておきたい。鍬はナスビ形着柄鍬と呼ばれている形式である。鉄製Ｕ字形鍬先を装着するものである。柄と身は蔓状植物により２個所で結束されている。柄部は78cmで握部分の直径は3.5cmを測る。柄と着身部は一木で幹と枝を利用しており、身との合せ部分をやや削り窪めて装着を容易にしている。身は長さ37.5cm、幅13.5cm（残存長）を測る。結束部は2個所であるが1本の蔓によって結束している。

河道の年代から奈良時代の鍬とすべきかもしれないが、付近からは古墳時代後期の土師器も出土している。また水上７区および宮川４・５・６区の古墳時代後期の河道からは同形式の鍬を含めて多くの農具が出土している点も考えれば年代がさかのぼる可能性もある。

ＳＲ54　Ｎ93・Ｑ93グリッドを西から東に流れる旧河道である。確認面での幅は5.5ｍで延長13ｍを測る。河床最深部の標高は3.5ｍである。覆土は暗灰色の砂質粘土であるが最下層に厚さ10cmほどの砂礫層をもち遺物の大半を包含している。出土遺物には灰釉陶器11点、墨書土器10点、緑釉陶器１点、馬形土製品２点、斎串７点などがある。斉串の形態はＳＲ56と類似するもののほか、切り欠きや切り込みをもつものがみられる。灰釉陶器は猿投窯で生産された製品が多く黒笹90号窯式から折戸53号窯式のものである。このことから10世紀代を中心とした時期の旧河道跡であると考える。またＳＲ54は宮川３区ＳＲ486の下層と連続する。

ＳＲ53　基準杭93列を中心に西から東に流れる旧河道である。確認面で幅8.1ｍ、延長13ｍを測る。河床最深部の標高は3.5ｍである。暗灰色の砂質粘土を覆土にもつが最下層にわずかな砂礫層があり河床の遺物を被覆している。河床からは49個体以上の山茶碗が出土した。この中には９点の墨書土器が含まれ、「大」・「も」・「北」といった宮川３区のＳＲ486と同一文字が書かれたものも４点ある。木製品では箸状木製品が17点出土している。これもＳＲ486と共通する。このようにＳＲ53は宮川３区のＳＲ486と連続する河道としてまちがいない。年代は平安時代末から鎌倉時代とした。

ＳＲ52　Ｑ92・Ｐ92グリッドを西から東に流れる旧河道跡である。確認面で幅8.4ｍ、延長12ｍを測る。河床最深部の標高は3.6ｍである。暗青灰色の粘土によって厚く覆われている。動物遺存体が出土したが遺物の総量はきわめて少ない。ＳＲ53とＳＲ51との関連から中世の河道と推定した。

ＳＲ52は宮川３区のＳＲ487と連続するが、ＳＲ487の河床最深部標高は2.4ｍでありＳＲ52よりも1.2ｍあまり低い。これはＳＲ487が蛇行の攻撃斜面側の頂点で淵に相当し、ＳＲ52が瀬にあたるためであり河川の一般的特徴にも合致する。

ＳＲ51　調査区の南端部を西から東に流れる旧河道跡である。確認面で幅11.5ｍ、延長11ｍ、深さ1.6ｍを測る。河床最深部標高は4.2ｍである。赤褐色の砂礫が覆土となっている。覆土中からは下駄、樋材などの木製品のほか近世陶磁器片も出土している。ＳＲ51は昭和59年の地籍図にあらわれる大谷川河道と一致する。したがって近世から昭和17年の改修にいたるまでの河道である。

3.　まとめ

宮川４区の最大の成果は古墳時代中期から昭和17年までの旧河道の変遷を確かめることができたことである。７本の旧河道はそれぞれ特徴に富む遺物を包含しているが、本遺跡を含めて一般に旧河道の調査は新旧の遺物が混在することが多く編年観の確立されたもの以外は年代的位置づけが困難である場合がほとんどである。河道内の遺物は祭祀と密接なかかわりをもつため、伴出関係がきわめて重要な課題となるが、この観点から宮川４区での遺物をみると以下のことを指摘することができる。

①　古墳時代中期において河川に投棄された遺物は土器のみであり、しかも器種の偏重は少ない。

② 古墳時代後期における祭祀遺物は土製形代と木製形式および土器を主体とするが、獣骨・玉類・農工具・容器・紡織具などが渾然一体となって投棄される。

③ 7世紀末から8世紀前半代の遺物はきわめて少なく祭祀的色彩が消滅傾向を示す。

④ 奈良時代後半になると須恵器の投棄が若干みられ人名が墨書される場合がある。

⑤ 平安時代になると猿投窯の灰釉陶器が検出されると同時に墨書土器・土製形代（馬形土製品）・斎串なども投棄され、形態的にみても古墳時代後期のものとは差異が認められる。

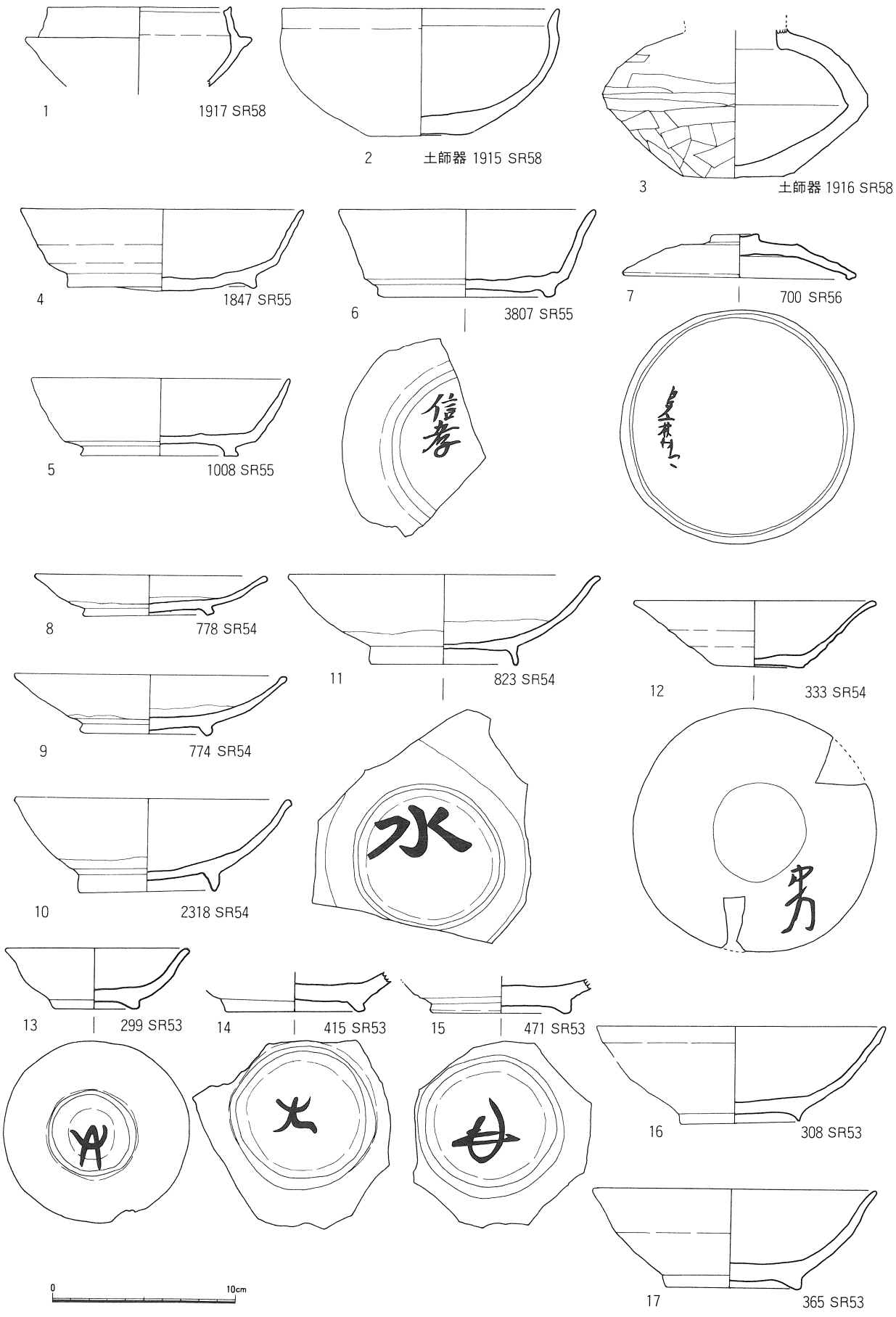
⑥ 平安時代末から鎌倉時代になると墨書土器の内容が記号的なものへと変化する。また斎串も棒状、箸状と変化をみせる。伴出遺物に武器類がみられる点が注目される。

⑦ 中世になると居住域が河道から離れたためか、河川内への投棄はほとんど行なわれていない。

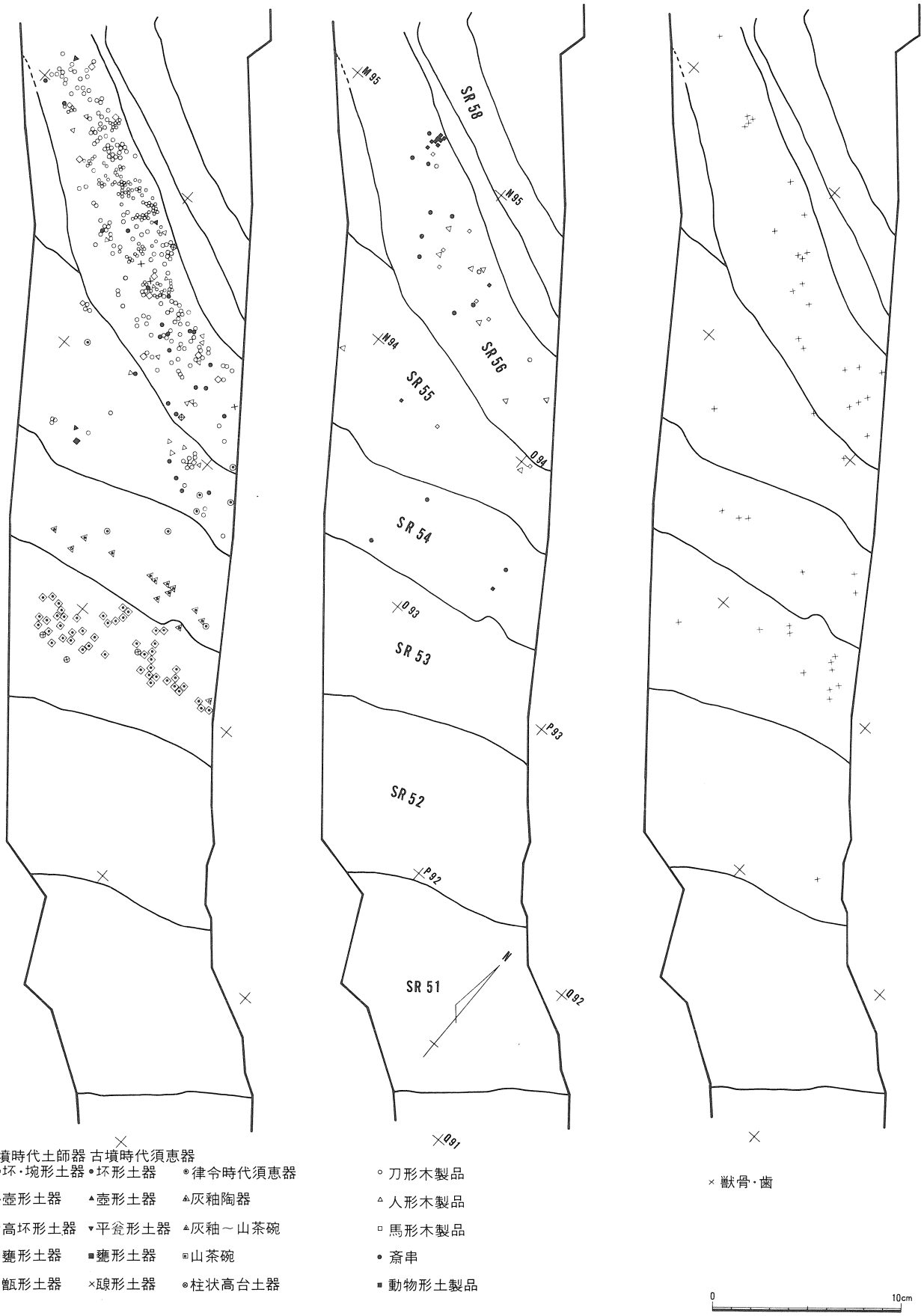
これからの点は宮川4区でのあり方であるが他調査と共通する内容も多い。

第32表　宮川3・4区溝状遺構一覧表

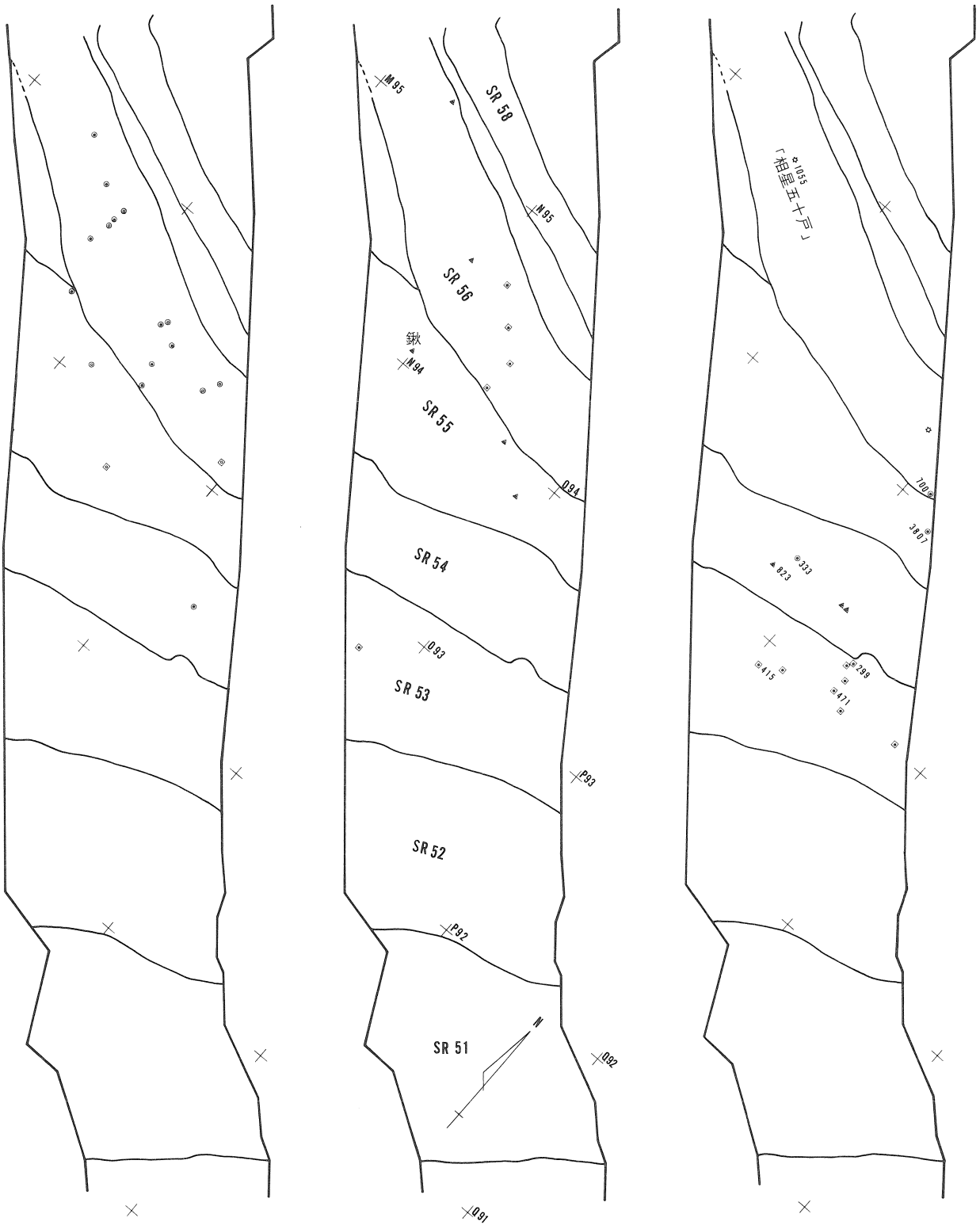
遺構番号	グリッド	延長	幅	深さ	遺構面標高	特記事項
＜宮川3区＞						
SD 145	I 95	16.00	1.90	1.00	5.93	平安時代末
SD 146	I 95	10.20	1.90	0.17	5.85	
SD 162	J 94	2.01	0.30	0.05	6.26	
SD 175	J 94	2.40	0.39	0.15	6.37	平安時代
SD 176	I 94	5.42	0.41	0.13	6.37	
SD 181	N。Y89	12.30	1.95	0.90	5.91	古墳時代(中～後期)
SD 182	M90	21.00	2.25	1.08	5.83	平安時代末～鎌倉時代
SD 187	J 94	1.50	0.47	0.14	6.34	
SD 188	J 94	2.17	0.63	0.53	6.29	奈良時代
SD 192	J 94	2.56	0.52	0.11	6.31	
SD 194	L 90	5.02	1.40	0.28	6.04	
SD 428	K 92	5.76	0.52	0.10	6.32	
SD 450	N。O89	8.42	0.35	0.03	5.90	
SD 458	H 96	(5.00)	1.00	0.25	5.87	
SD 476	G 97	9.82	0.42	0.12	5.88	
＜宮川4区＞						
SD 93	M 96	(5.48)	0.96	0.17	5.78	
SD 94	M 95		1.10	0.03	5.66	
SD 95	M 95	1.62	0.32	0.11	5.86	



第90図　宮川4区SR58・55・54・53出土土器実測図



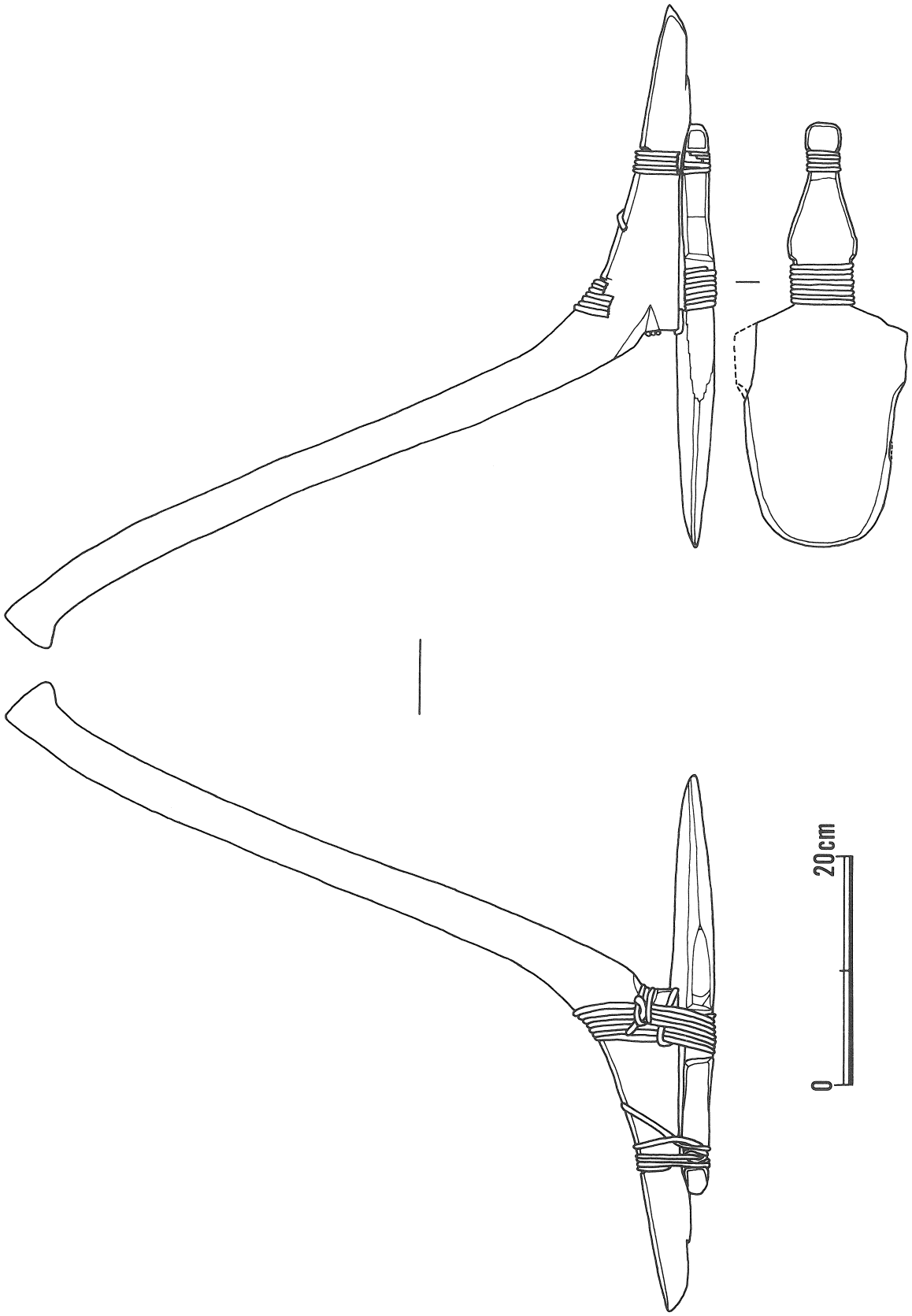
第91図　宮川4区旧河道内遺物分布模式図



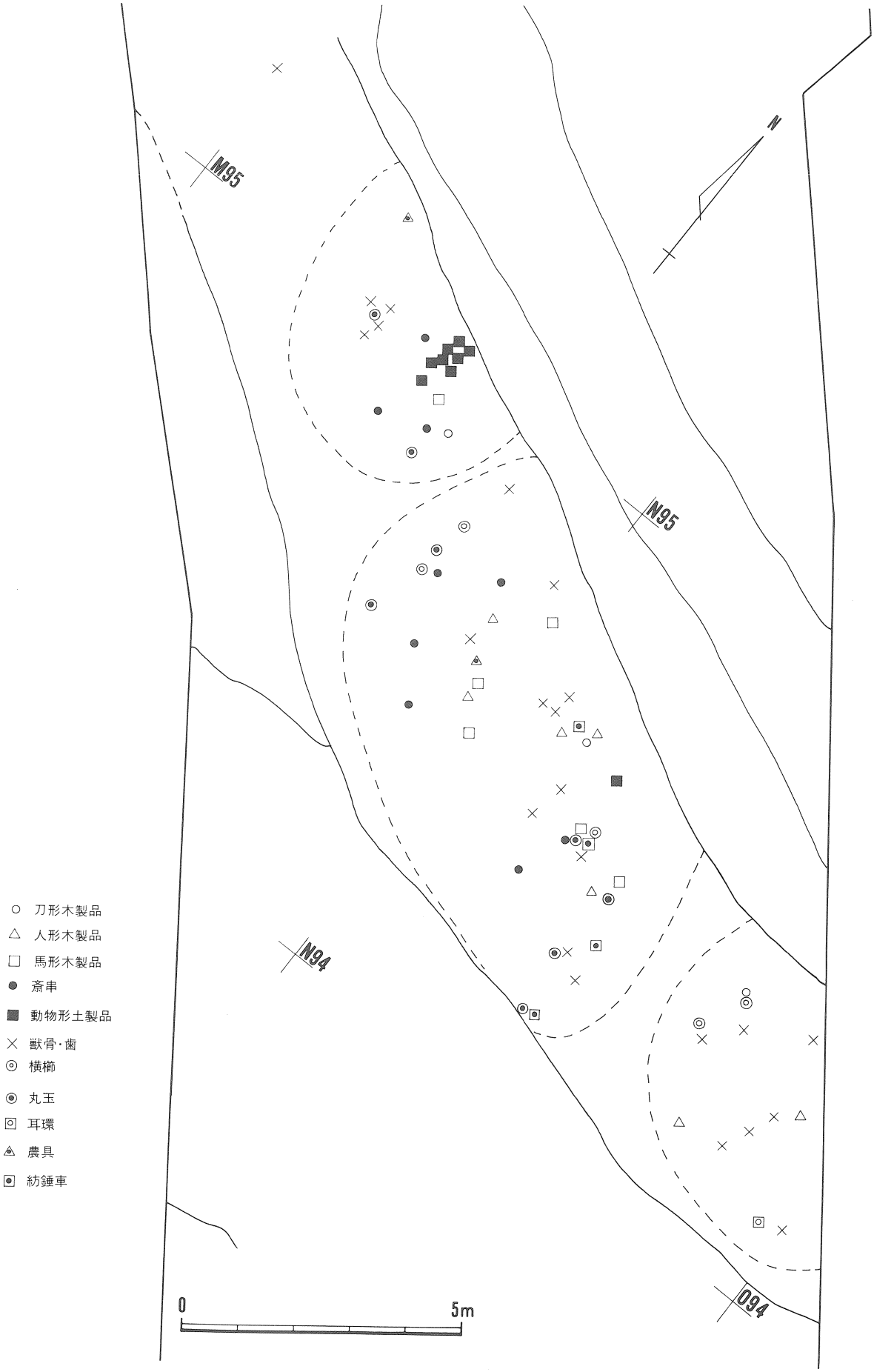
横櫛
丸玉
瓦環
木製農具
紡錘車
木簡
墨書土器(律令時代須恵器)
墨書土器(灰釉陶器)
墨書土器(山茶碗)

0 10cm

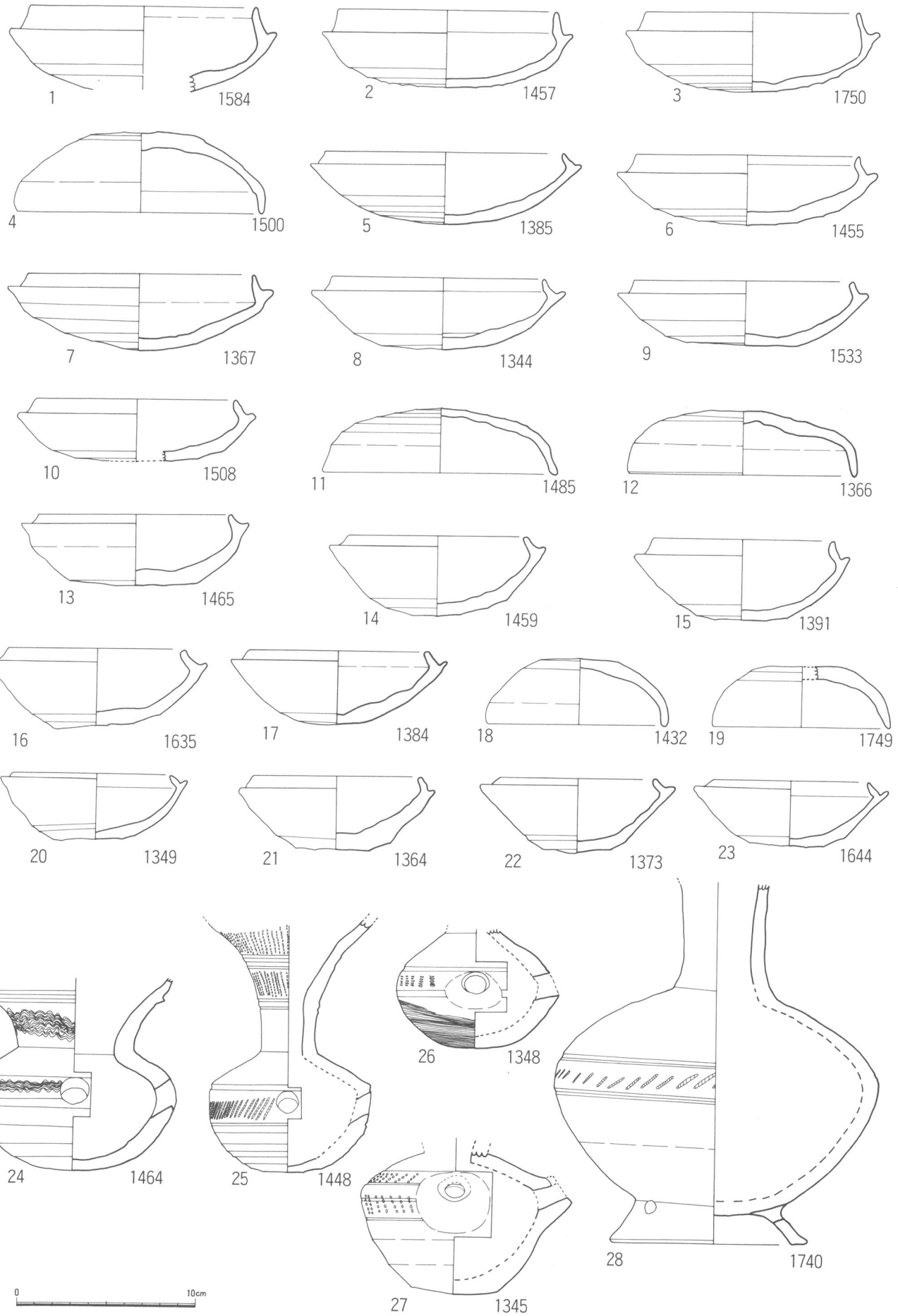
第92図　宮川4区旧河道内遺物分布模式図



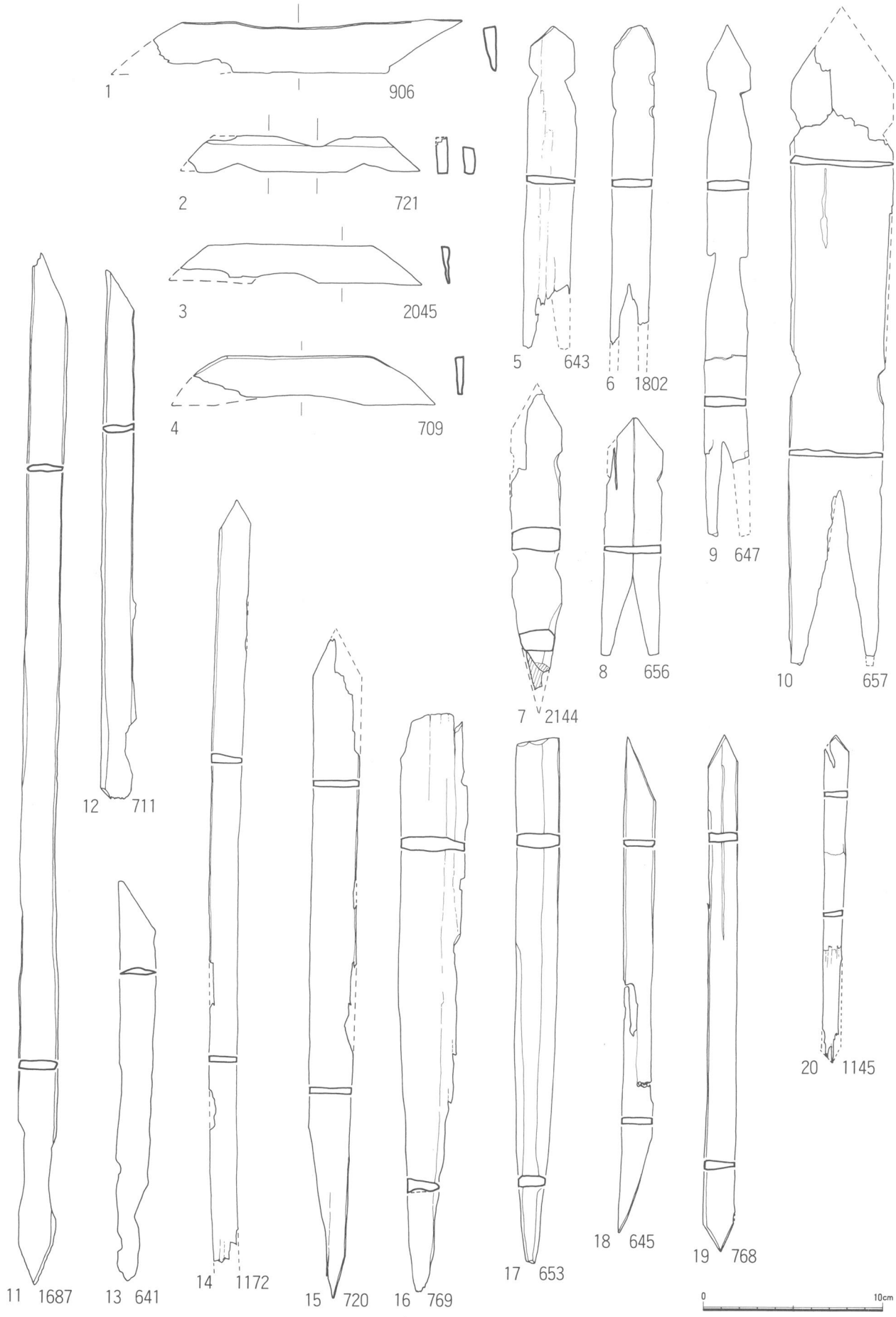
第93図　宮川4区SR55出土鍬実測図



第94図　宮川４区ＳＲ56遺物分布模式図



第95図　宮川4区SR56出土須恵器実測図



第96図　宮川4区SR56出土木製品実測図

第33表　宮川4区(南半部)主要遺物一覧表

遺物＼遺構		SR56	SR55	SR54	SR53	SR52	合計
古墳時代土師器	坏・埦	278	18				296
	壷	10	2				12
	甕	9	1				10
	高坏	3	4				7
	甑	2					2
古墳時代須恵器	坏	19	5				24
	壷	1					1
	甕		1				1
	平瓶	1	1				2
	碗	3	1				4
律令時代須恵器		1	4	3			8
灰釉陶器				11	1		12
灰釉～山茶碗				1	1		2
山茶碗					49		49
その他					3		3
木製品	人形	10	2		2		14
	刀形	4					4
	馬形	6	3				9
	斎串	10		7	1		18
	箸状(斎串)				17		17
	櫛	5	1				6
	農工具	3	5				8
	その他	16	8	7	1		32
動物形土製品		9	1	2			12
手捏土器		11	4	1			16
丸玉		8		1			9
耳環		1	1				2
紡錘車		4			1		5
短刀					1		1
鉄鏃					1		1
墨書土器		1	4	10	9		24
木簡		2		1			3
動物遺存体		48	12	22	19	12	113
植物遺存体(桃の種)		2,044	81	202		6	2,333

第34表　宮川4区小穴一覧表

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標高	特記事項
SP 61	N94	0.80	0.68	0.39	0.85	4.73	
SP 62	M96	0.95	0.59	0.42	0.62	5.79	
SP 63	M96	(1.16)	0.81	0.09	(0.70)	5.71	
SP 64	M96	0.80	0.62	0.14	0.78	5.77	
SP 65	M96	0.70	0.55	0.19	0.79	5.76	
SP 66	M95	0.74	0.65	0.21	0.88	5.76	
SP 67	M95	0.69	0.64	0.13	0.93	5.86	
SP 68	M95	0.68	0.57	0.32	0.84	5.81	
SP 69	M96	0.39	0.33	0.30	0.85	5.75	
SP 70	M95	0.54	0.45	0.17	0.83	5.78	
SP 71	M95	(0.68)	0.45	0.19	(0.66)	5.81	
SP 72	M96	0.70	0.57	0.10	0.81	5.79	
SP 73	M96	0.49	0.43	0.35	0.88	5.77	
SP 74	M96	0.34	0.31	0.11	0.91	5.84	
SP 75	M95	0.44	0.42	0.07	0.95	5.75	
SP 76	M95	0.24	0.21	0.06	0.88	5.81	
SP 77	M95	0.77	0.73	0.32	0.95	5.85	
SP 78	M95	0.30	0.22	0.13	0.73	5.88	
SP 79	M95	0.23	0.21	0.40	0.91	5.74	
SP 80	M95	0.30	0.27	0.14	0.90	5.76	
SP 81	M96	0.61	0.42	0.12	0.69	5.75	
SP 82	M96	0.59	0.44	0.29	0.75	5.71	
SP 83	M96	0.44	0.38	0.25	0.86	5.77	
SP 84	L96	0.33	0.30	0.29	0.91	5.80	
SP 85	L96	0.53	0.49	0.35	0.92	5.84	
SP 86	L96	0.72	0.52	0.36	0.72	5.83	
SP 87	L96	0.48	0.45	0.21	0.94	5.87	
SP 88	L96	0.24	0.22	0.28	0.92	5.88	
SP 89	L96	0.58	0.53	0.22	0.91	5.87	
SP 90	L96	0.55	0.44	0.25	0.80	5.88	
SP 91	M96	0.33	0.19	0.30	0.58	5.78	
SP 92	L97	—	—	0.2	—	5.85	

宮川5区（第97図）

1. 概　要

宮川5区は、河口起点より1,407m 上流に位置し、現大谷川右岸部にあたる。107列以北と調査区東側に旧河道跡が3本検出され、その他の部分は微高地になっていた。微高地部分では奈良時代～平安時代の遺構面が一面確認され、溝状遺構、堀立柱建物跡、井戸状遺構、小穴群が検出された。旧河道部分では、水辺の祭祀に関連すると考えられる遺構が2個所検出された。

2. 遺構各説

北部溝状遺構群

S D 207　B 105グリッドで検出された西から東へ流れる東西方向の溝状遺構である。確認面での延長は6.88m、幅は最大で2.60m、深さは0.21mを測る。年代は遺物から平安時代とする。

S D 220　B 104・105グリッドで検出された西から東へ流れる、東西方向の溝状遺構である。確認面での延長は7.32m、幅は最大で1.07m、深さは0.42mを測る。年代は遺物から平安時代とする。S D 207・S D 220はともにS D 209・S D 210を破壊して開削されている。

S D 209　B 104グリッドからA 106グリッドまで南から北へ流れる南北方向の溝状遺構である。確認面での延長は25.1m、幅は最大で0.92m、深さは0.59mを測る。年代は遺物から平安時代とする。

S D 210　B 104・B 105グリッドで検出された南から北へ流れる南北方向の溝状遺構である。確認面での延長は14.36m、幅は最大で1.21m、深さは0.36mを測る。年代は不明である。

S D 291　C 103・104グリッドで検出された南から北へ流れる南北方向の溝状遺構である。確認面での延長は14.1m、幅は最大で0.62m、深さは0.38mを測る。年代は不明である。

南部溝状遺構群（図版84－1）

S D 270　C 101・D 101グリッドで検出された西から東へ流れる東西方向の溝状遺構である。確認面での延長は12.45m、幅は最大で0.38m、深さは0.23mを測る。覆土は暗茶褐色粘土である。S D 242によって一部破壊されている。年代は遺物から奈良時代とする。

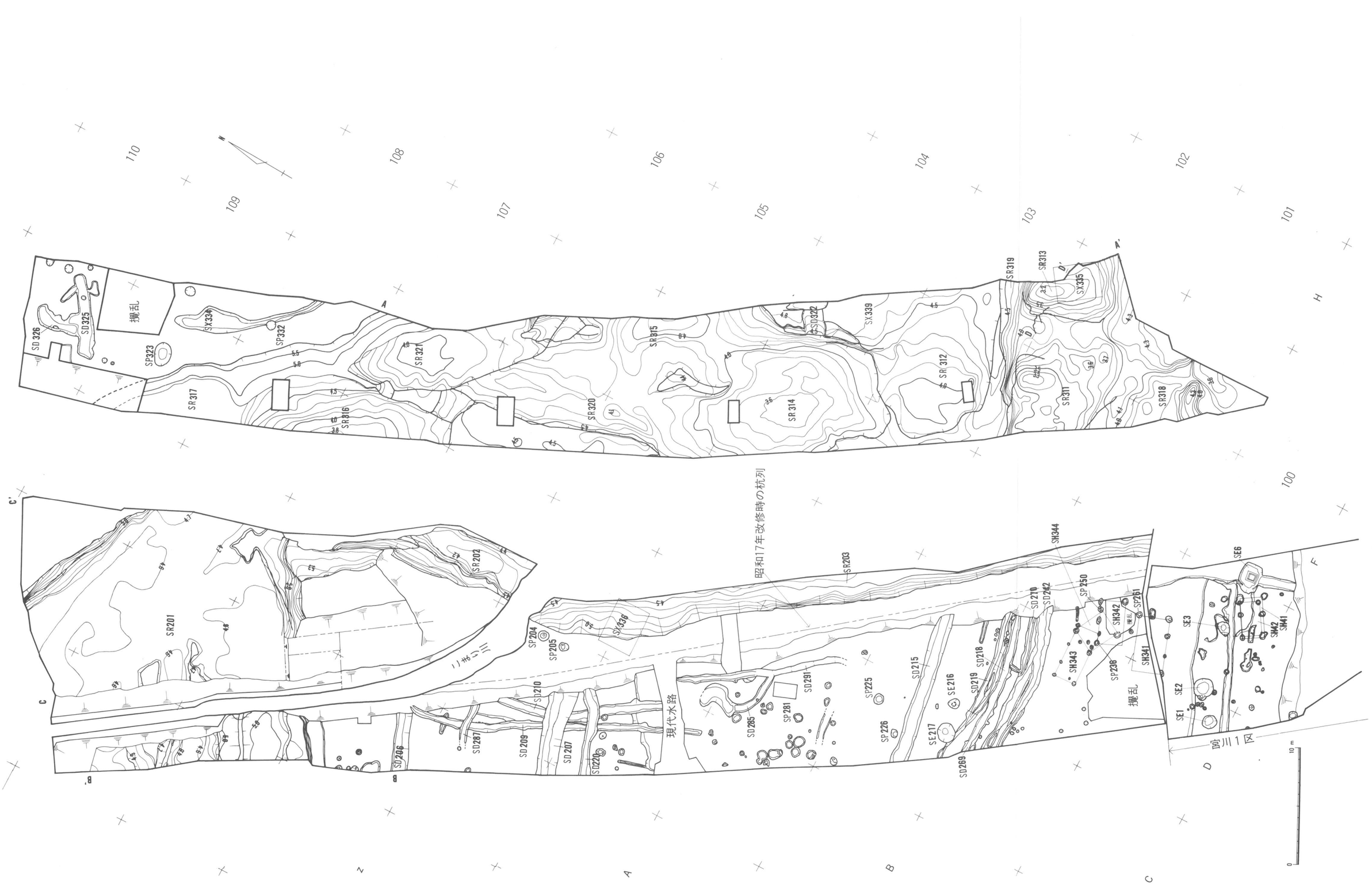
S D 269　C 101・D 101グリッドで検出された西から東へ流れる東西方向の溝状遺構である。確認面での延長は12.42m、幅は最大で0.82m、深さは0.18mを測る。覆土は赤褐色粘土である。断面観察により赤褐色粘土はS D 270の覆土を覆っており、さらに奈良時代の遺物を判出したS D 242の覆土の褐灰色粘土によって覆われているので、S D 269の年代は奈良時代とする。

S D 242　C 101グリッドからE 101グリッドまで西から東へ流れる東西方向の溝状遺構である。確認面での延長は13.12m、幅は最大で1.28m、深さは0.46mを測る。覆土は褐灰色粘土である。覆土中から須恵器片が多数出土し、これらの特徴から年代は奈良時代とする。なおS D 242はS D 270を一部破壊して開削されている。

S D 219　C 102・D 102グリッドで検出された西から東へ流れる東西方向の溝状遺構である。確認面での延長は9.48m、幅は最大で0.54m、深さは0.18mを測る。覆土は褐灰色粘土である。覆土中から手捏土器2個と須恵器を検出した。これらにより、年代は奈良時代とする。またS D 219の一部はS E 217によって破壊されている。

S D 218　D 101グリッドで検出された西から東へ流れる東西方向の溝状遺構である。確認面での延長は13.64m、幅は最大で0.52m、深さは0.44mを測る。覆土は褐灰色粘土である。年代は遺物から奈良時代とする。

以上の5本の溝状遺構はいずれも並行して検出された。断面での覆土の切り合い関係の観察によってまずS D 270、次にS D 269が、最後にS D 242・S D 219・S D 218が開削されるという順序であっ



第97図　宮川5・6区　全体図

たと考えられる。

ＳＤ 215　Ｃ 102・Ｄ 102 グリッドで検出された西から東へ流れる東西方向の溝状遺構である。確認面での延長は、12.82ｍ、上端の幅は 1.25ｍ、底面の幅は 0.90ｍ、深さは 0.45ｍを測る。掘り方は逆台形の断面形をもち、底面は平坦である。覆土は下から黒灰色粘土、灰緑色粘土、灰黒色粘土が自然堆積された状態で検出された。覆土中からの遺物の検出はなかったが、上面を奈良時代の包含層である褐灰色粘土が覆っているため年代は奈良時代以前と考えられる。

前記のＳＤ 270・ＳＤ 269・ＳＤ 242・ＳＤ 219・ＳＤ 218 の溝底は流水の影響により浸食を受けているのに対して、ＳＤ 215 はそれが見られなかった。

井戸状遺構（図版84）

ＳＥ 217（第 121 図）　Ｄ 102 グリッドで検出された井戸状遺構である。確認面で長径は 1.55ｍ、短径は 1.29ｍを測る円形プランを持つ素掘りの井戸である。掘り方は上面プランの中心よりやや北側にずらして 0.90ｍほどの深さで擂鉢状に掘り込まれている。底面は直径 0.38ｍの円形で平坦面となっている。確認面から 0.5ｍほどから下にある透水層にまで掘り込まれており、井戸状遺構とした。井戸廃棄は断面の確認により、自然堆積により埋積されたと考えられる。覆土の茶褐色粘土層（１層）から、多数の須恵器片が検出され、これらにより年代は奈良時代とする。なお、ＳＥ 217 はＳＤ 219 の一部を破壊して掘削されている。

ＳＥ 216（第 121 図）　Ｄ 102 グリッドで検出された木組の枠をもつ井戸状遺構である。確認面で長径は 0.91ｍ、短径 0.81ｍを測る不整円形のプランを持ち、深さは 0.82ｍで透水層に掘り込まれており、井戸状遺構とした。掘り方は、上段を 0.32ｍの深さまで擂鉢状に掘り下げ、さらに下段を一辺 0.40ｍの正方形プランから垂直に 0.40ｍ掘り込み、その中に縦約40㎝、幅約29㎝の割り板４枚を井戸枠としてはめ込み、井戸枠の外側は粘土で裏ごめされていた。さらに井戸枠の下端から一辺 0.30ｍの正方形プランで垂直に 0.11ｍ掘り下げられていた。覆土から手捏土器１点をはじめ、須恵器片、土師器片が検出され、これらにより年代は奈良時代とする。

掘立柱建物群（第98図）

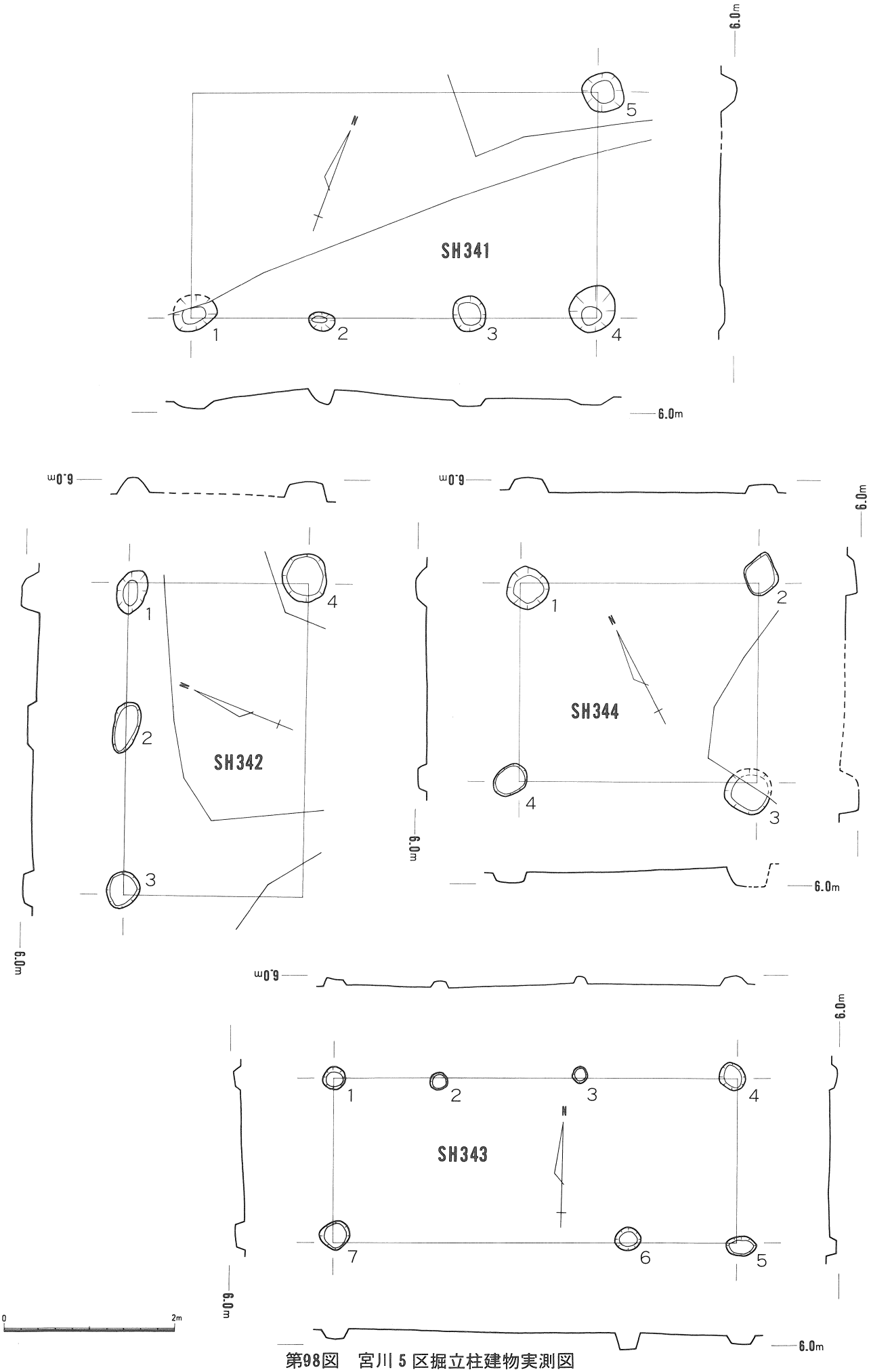
ＳＨ 341　Ｄ 100・Ｅ 100・Ｅ 101 グリッドで検出された桁行３間、梁間１間の掘立柱建物である。桁行 4.76ｍ、梁間 2.64ｍを測る。平側の柱間寸法は等間隔とならず柱穴１と２、３と４の間がともに 1.54ｍ、柱穴２と３の間が 1.70ｍを測る。柱穴の掘り方は確認面でプランがほぼ円形、径24～56㎝、深さ10～20㎝であった。覆土は褐灰色粘土であり、年代は奈良時代とする。なおＳＨ 341 の柱穴１、２、３、４は昭和58年度に調査の行なわれた宮川１区で検出されたＳＰ38、ＳＰ39、ＳＰ45、ＳＰ40である。またＳＨ 341 の北西部は撹乱により破壊されていた。

ＳＨ 342　Ｅ 101 グリッドで検出された桁行２間、梁間１間の掘立柱建物である。桁行 3.66ｍ、梁間 2.10ｍを測る。平側の柱間寸法は、等間隔とはならず柱穴１と２の間が 1.68ｍ、柱穴２と３の間が 1.98ｍを測る。柱穴の掘り方は確認面でプランがほぼ円形（柱穴２は長円形）、径30～56㎝、深さ10～22㎝であった。覆土は赤褐色粘土であり、年代は奈良時代とする。なお南西部が撹乱により破壊されていた。

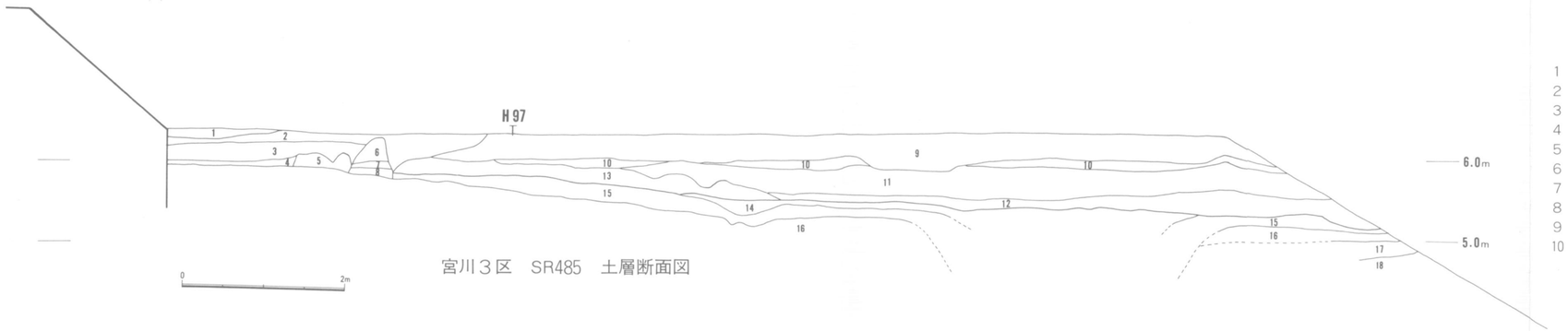
ＳＨ 343　Ｄ 101・Ｅ 101 グリッドで検出された桁行３間、梁間１間の掘立柱建物である。桁行 4.74ｍ、梁間 19.4ｍを測る。平側の柱間寸法は、等間隔とはならない。柱穴の掘り方は、確認面でプランがほぼ円形、径20～36㎝、深さ10～20㎝であった。覆土は赤褐色粘土であり、年代は奈良時代とする。

ＳＨ 344　Ｄ 101・Ｅ 101 グリッドで検出された桁行１間、梁間１間の掘立柱建物である。桁行 2.80ｍ、梁間 2.32ｍを測る。柱穴の掘り方は確認面でほぼ円形プラン、径33～53㎝、深さ10～22㎝であった。覆土は黄褐色粘土であり、柱穴２から出土した灰釉陶器片から年代は平安時代とする。

以上の４棟の掘立柱建物のうち奈良時代のＳＨ 341 とＳＨ 342 は、1.15ｍの間隔を置きほぼ並行してい

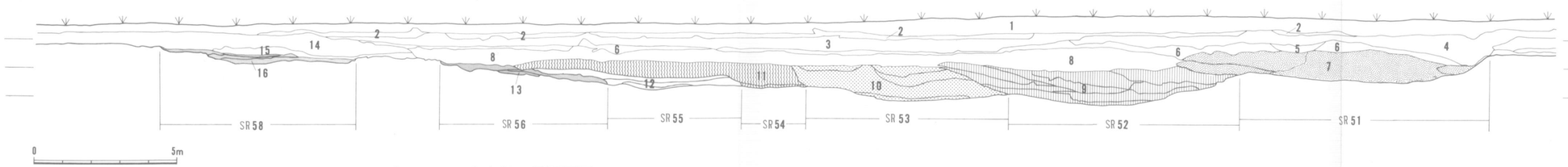


第98図　宮川5区掘立柱建物実測図



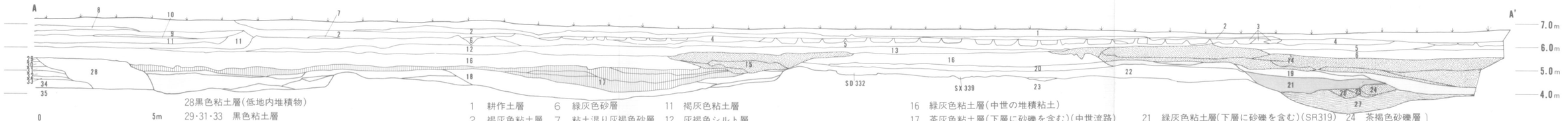
宮川３区　SR485　土層断面図

1 灰茶色粘土層
2 灰茶色粘土層
3 茶灰色粘土層
4 灰茶色砂混粘土層
5 青灰色粘土層
6 茶灰色粘土層
7 暗灰色砂質土層
8 暗灰色砂質土層
9 茶灰色粘土層(平安時代)
10 灰褐色粘土層(奈良時代)
11 茶色粘土層(古墳時代後期)
12 灰黄色粘土層
13 灰白色粘土層(古墳時代中期～後期初め)
14 暗青灰色粘土層
15 灰黒色粘土層
16 黒色粘土層
17 灰色砂層
18 青灰色シルト層



宮川４区　南半部土層断面図

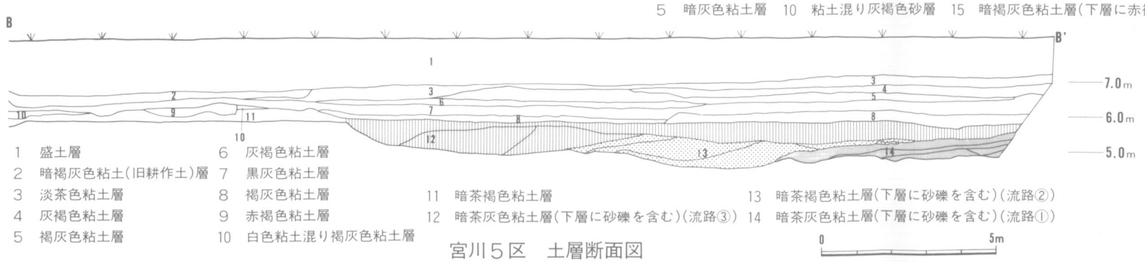
1 表土層
2 灰色粘土層
3 暗灰色粘土層
4 灰茶色粘土層
5 粘土混り砂層
6 灰色粘土混り砂層
7 赤褐色砂礫層(SR51)
8 暗灰色粘土層
9 暗灰色砂質粘土層(最下層は粘土混り砂礫層)(SR52)
10 暗灰色砂質粘土層(最下層は粘土混り砂礫層)(SR53)
11 暗灰色砂質粘土層(最下層は砂礫を含む)(SR54)
12 砂礫混り暗灰色粘土層(SR55)
13 粘土混り砂礫層(SR56)
14 茶灰色粘土層
15 灰色砂質土層
16 灰青色粘土層(SR58)



28黒色粘土層(低地内堆積物)
29・31・33　黒色粘土層
30・32・34　白色粘土層
35灰色砂質粘土層

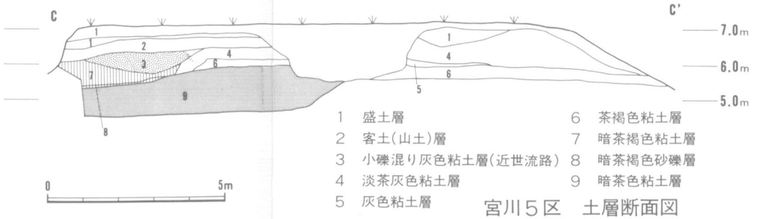
宮川６区　土層断面図

1 耕作土層
2 褐灰色粘土層
3 赤褐色粘土層
4 茶灰色粘土層
5 暗灰色粘土層
6 緑灰色砂層
7 粘土混り灰褐色砂層
8 暗灰色粘土層
9 粘土混り緑灰色砂層
10 粘土混り灰褐色砂層
11 褐灰色粘土層
12 灰褐色シルト層
13 灰褐色粘土層
14 緑灰色粘土層(下層に砂礫を含む)
15 暗褐灰色粘土層(下層に赤褐色砂礫を含む)(近世流路)
16 緑灰色粘土層(中世の堆積粘土)
17 茶灰色粘土層(下層に砂礫を含む)(中世流路)
18 緑灰色粘土層(平安時代～中世の流路内堆積粘土)
19 緑灰色粘土層(下層に砂礫を含む)
20 赤茶色粘土層
21 緑灰色粘土層(下層に砂礫を含む)(SR319)
22 緑灰色粘土層
23 粘土混り緑灰色砂層
24 茶褐色砂礫層 ┐
25 暗灰色粘土層 ┤SR313上層
26 茶褐色砂礫層 ┘
27 暗灰色砂質粘土層(SR313下層)



1 盛土層
2 暗褐灰色粘土(旧耕作土)層
3 淡茶色粘土層
4 灰褐色粘土層
5 褐灰色粘土層
6 灰褐色粘土層
7 黒灰色粘土層
8 褐灰色粘土層
9 赤褐色粘土層
10 白色粘土混り褐灰色粘土層
11 暗茶褐色粘土層
12 暗茶灰色粘土層(下層に砂礫を含む)(流路③)
13 暗茶褐色粘土層(下層に砂礫を含む)(流路②)
14 暗茶灰色粘土層(下層に砂礫を含む)(流路①)

宮川５区　土層断面図



1 盛土層
2 客土(山土)層
3 小礫混り灰色粘土層(近世流路)
4 淡茶灰色粘土層
5 灰色粘土層
6 茶褐色粘土層
7 暗茶褐色粘土層
8 暗茶褐色砂礫層
9 暗茶色粘土層

宮川５区　土層断面図

第99図　宮川地区土層図

る。また同じく奈良時代のＳＨ342とＳＨ343は一部が重複しており、長軸も21.5°のずれをみせている。

旧河道跡（図版85）

ＳＲ201（第99図、第100図、第101図、第102図）　Ｚ109・Ｚ108・Ｚ107・Ａ106グリッドからＢ108グリッド方向に検出された旧河道跡である。確認面での幅は最大で28.6m、延長は24.4mである。河床は平坦で標高は4.60mを測る。

調査区の西壁と東壁の土層断面を検討するとＺ109・Ｚ108グリッド方面からＢ108グリッド方向へ流れたと推定される流路①。流路①の右岸を切ってＺ107グリッドからＢ108グリッド方向へ流れたと推定される流路②。流路②の右岸を切ってＺ107・Ａ106グリッド方面からＢ108グリッド方向へ流れたと推定される流路③。以上の3本の流路がＳＲ201を形成していたことが確認できる。

覆土中からの遺物の出土状況はＡ108グリッド北東部分とＢ108グリッド北西部分に集中していた。人頭大の礫群もこの場所に集中して検出された。また52本の杭が検出され、そのうち16本ほどは、間隔と方向に規則性をもち、杭の太さも25cmほどで一定して、あるいは橋桁かといえる状況が確認できた。これをＳＸ337とする。

土器類では、古墳時代後期、奈良時代の須恵器、平安時代の灰釉陶器が大量の土師器片とともに混在して確認された。その中で注目すべきは、墨書土器5点の出土である。「河カ」の墨書のある手付小瓶（129）（図版86－2）は猿投窯黒笹14号窯の産であり「正」の墨書のある灰釉皿（29）は折戸53号窯式のものに比定され、「仁」の墨書のある灰釉碗（184）は東山72号窯式のものに比定される。

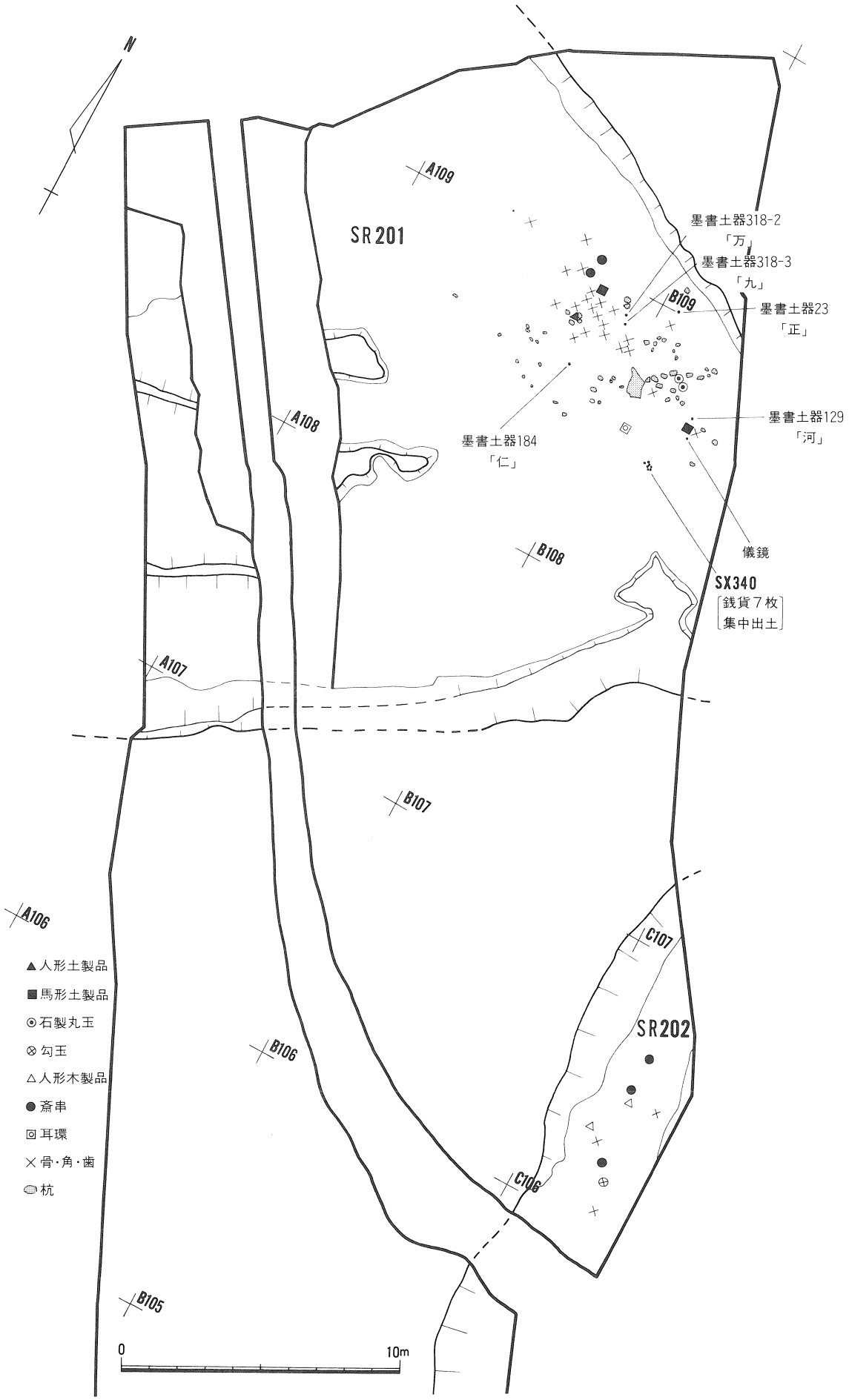
その他の主要遺物としては、馬形土製品が2点、人形土製品1点、獣骨22点、斎串2点、石製丸玉2点、耳環1点、素文鏡1点他が出土している。さらにＢ108グリッドの南西部では銭貨が礫の間から集中出土した。これをＳＸ340とした（図版86－3）。開元通宝・至道元宝・景徳元宝・祥符元宝・元豊通宝・元符通宝・政和通宝の7枚である。初鋳年代は開元通宝の612年または845年から政和通宝の1111年までのものであり、出土状況から一括投棄されたものと考えられ、年代は12世紀以降と考えられる。

ＳＲ201は、年代幅の大きい旧河道跡であり、同一面での検出状況ではあるが、Ａ108・Ｂ108グリッドの出土状況をみると、北部より南部に年代の新しい遺物が多く検出されており、大むね流路が北から南へ変遷したことが推定される。

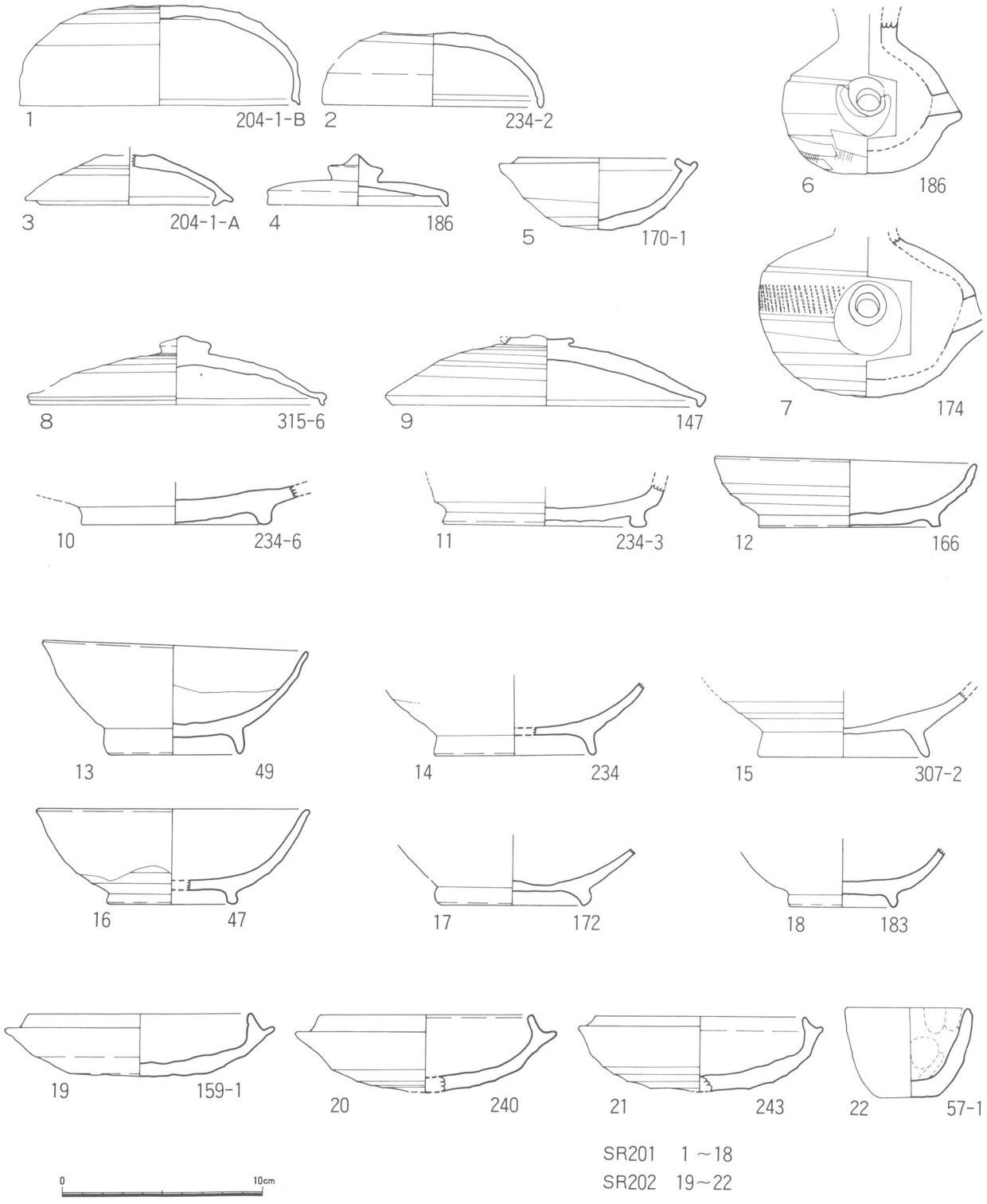
土層断面から確認された流路①は、宮川5区北端に接する稲妻1区の調査結果からも、古墳時代後期の流路とすることができる。また流路③は、Ａ107グリッドから青磁片が出土しており、中世の流路と考えられる。なお、近世流路は、宮川6区北壁断面図の礫混り灰色粘土層（3層）であることは1876（明治9）年の地籍図との照応でも確認できた。

ＳＲ202（第97図、第101図、図版86－3・4）　Ｃ108グリッドからＣ104グリッドにかけて西側に湾曲しながら、北から南へ流れる旧河道跡である。確認面での幅は最大で4.48m、延長は28.65m、河床は平坦で最深部標高4.12mを測る。検出された須恵器（第102図）から年代は、7世紀前半と推定できる。これらと共伴する主要遺物として獣骨3点、斎串3点、人形木製品2点、石製勾玉1点他と大量の桃の種が検出された。

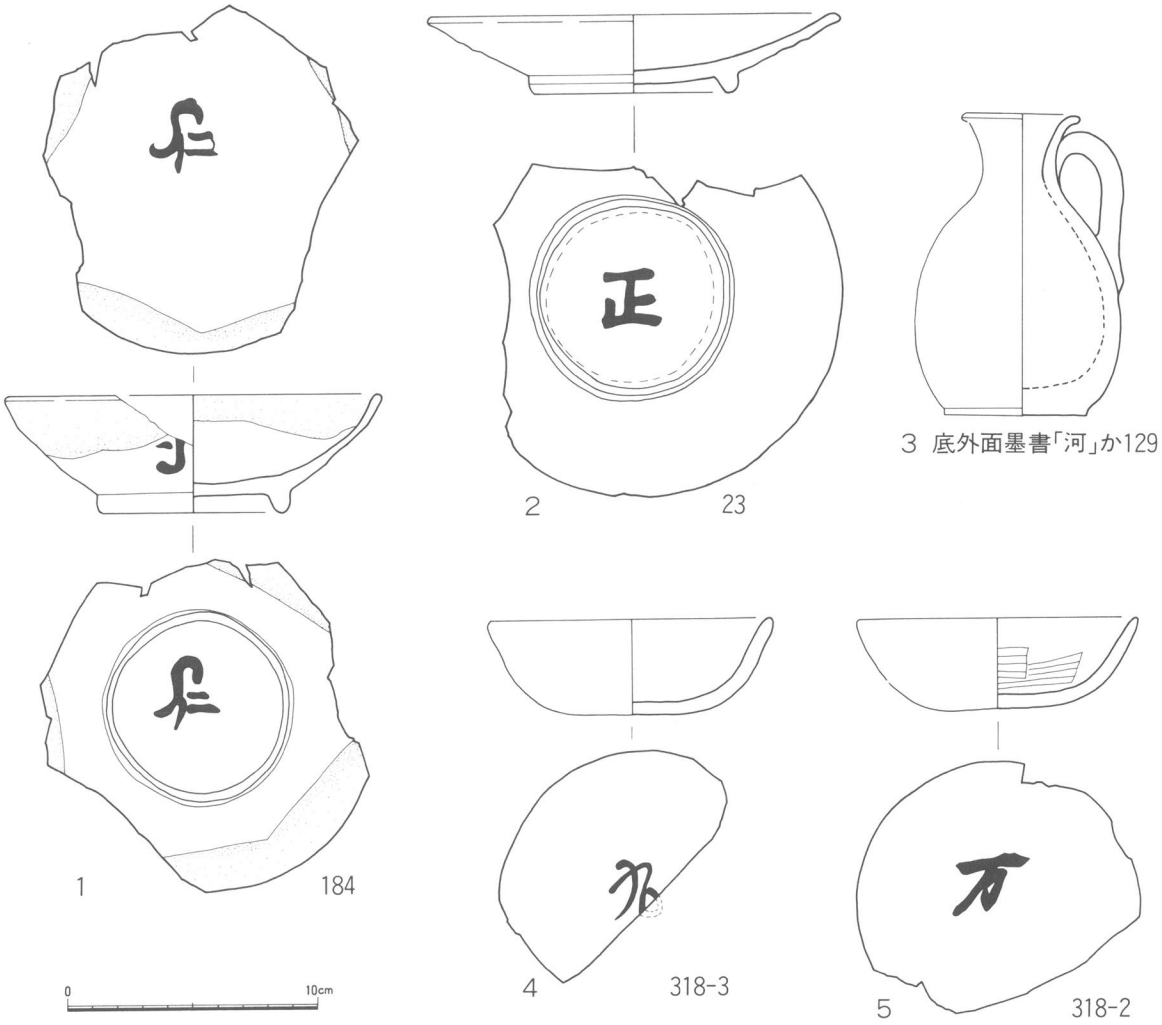
ＳＸ336　（第103図、第104図、図版87）　Ｃ105・Ｃ104で検出された遺物集中部である。検出面は、ＳＲ202の右岸部にあたり標高4.70～5.20mを測る緩斜面であった。基準杭Ｃ105より東3.15mの地点付近を中心とした1.8m×1.5mほどの範囲から木製鍬1点ほか加工木片・土師器の甕形土器2点、坏形土器の完形品16点（第104図9～24）、須恵器の坏形土器の完形品8点（第104図1～8）が一括出土した。出土状況をみると、長さ35cm、幅16cmの礫の北側に隣接して5個の坏形土器が円弧状に並んでおり、その延長線上に10～20cm間隔で4点の坏形土器が検出され、全体として9点の坏形土器が直径65



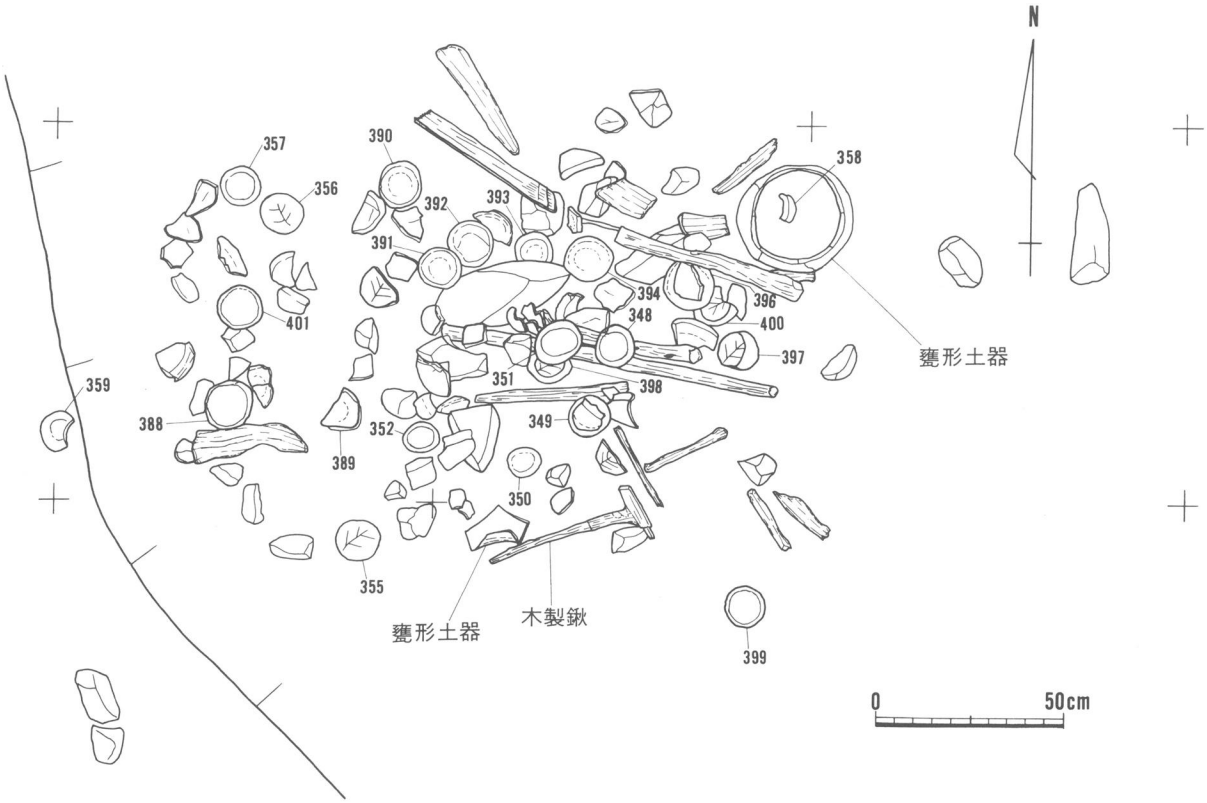
第100図　宮川5区旧河道内主要遺物分布図



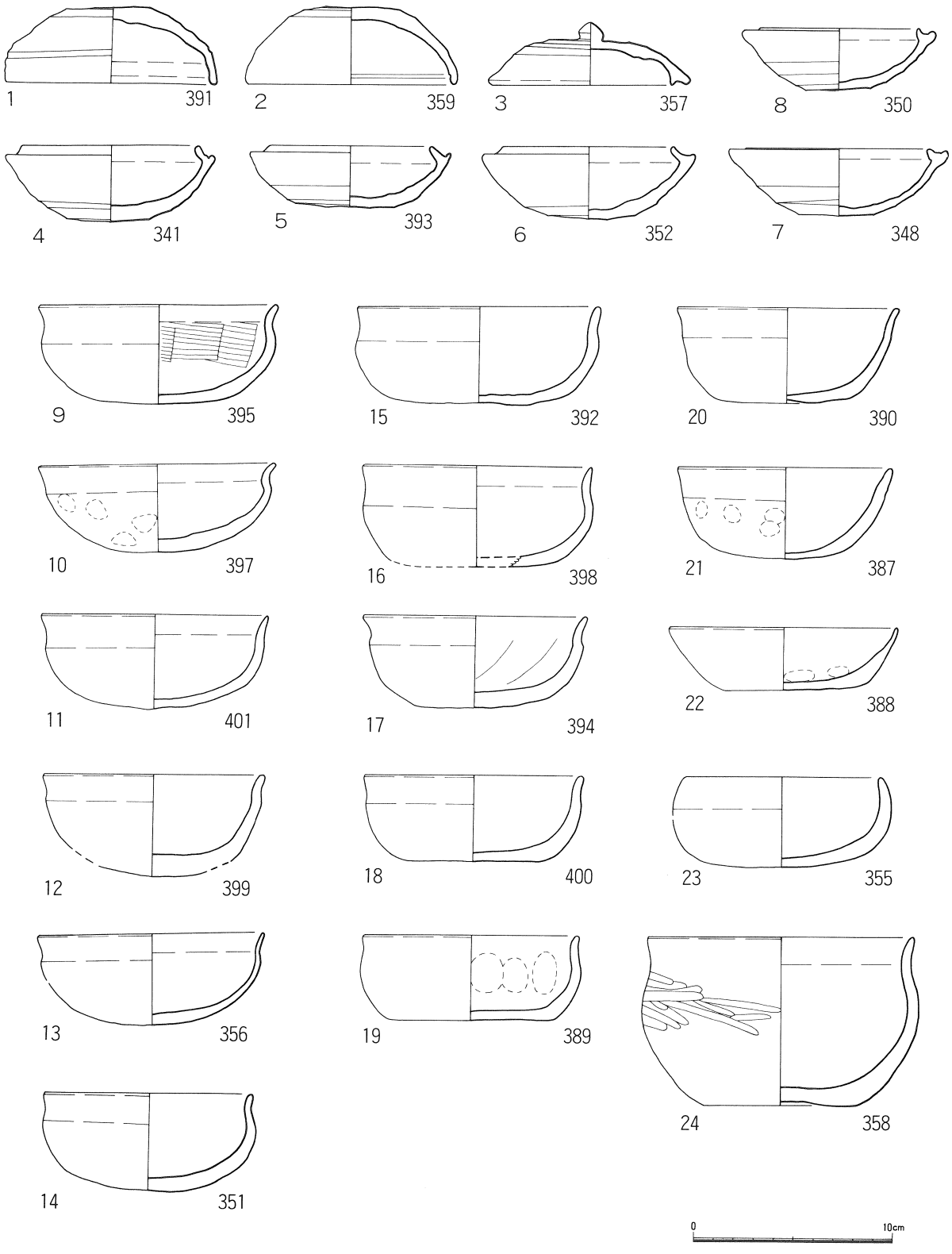
第101図　宮川5区SR 201 • 202出土土器実測図



第102図　宮川5区SR 201出土墨書土器実測図



第103図　宮川5区SX 336実測図



第104図　宮川5区ＳＸ336出土土器実測図

cmの円周上に位置していた。しかもその内7点が底を下に向けた状態で検出された。この円弧の外側には北東32cmほど離れて甕形土器1点、南15cmほど離れて鍬1点が検出された。ＳＸ335の立地するＳＲ202の右岸斜面で流れが常時あるのは4.50m付近までであり、常には流れの及ばない川岸にあたる。しかも土圧で真上から押しつぶされた甕形土器の検出や、ほぼ完形品のまま安定した状態で出土している坏形土器群は、原位置をほとんど動いていないと考えて良いと思われる。さらに坏形土器の円弧状の検出はある種の配置性をうかがわせるものである。木製鍬も共伴していることも考えると、ＳＸ336の出土状況は何らかの意味で祭祀に関わるものとできよう。年代は出土遺物から7世紀後半とする。

ＳＲ203　Ｃ104からＥ101まで延長約38mにわたって検出された昭和17年改修時の流路である。右岸斜面部分から西に1.5～2mほどの地点に杭列が岸に沿って南北方向に検出された。

3. 小　結

本調査区の成果は奈良時代・平安時代の居住域を考える上で関連する遺構を多く検出したことと、古墳時代後期の時代を限定できる流路と祭祀遺構を確認したことである。以下にそれらの特徴を指適したい。

①宮川5区北部の微高地から平安時代の溝状遺構群が検出されたことは、ＳＲ201で灰釉陶器を多数検出し、平安時代中・後期の墨書土器の検出、平安時代末期の銭貨集中出土とあわせて、同地域に平安時代の居住域があったことを想定させるものである。

②宮川5区南部の微高地から奈良時代の遺構が多く検出された。3棟の掘立柱建物の中で南側の2棟は宮川1区のＳＨ41・ＳＨ42とほぼ長軸が並行し、同時代の建物となる可能性がある。またＳＤ219・ＳＤ218・ＳＤ265・ＳＤ270・ＳＤ242の溝状遺構群は、宮川1区のＳＤ4とともに掘立柱建物群に付属する排水路として機能していた可能性がある。ＳＥ217・ＳＥ216も宮川1区の井戸状遺構群と同じように溝状遺構に隣接しており、井戸状遺構にとってもこれらの溝状遺構は排水路としての役割りをもったと考えられる。井戸状遺構は掘立柱建物に付属するものといえよう。ＳＤ215は流水の跡はとぼしく、居住域を区画していた溝状遺構とも考えられる。掘立柱建物群の性格は、検討資料が乏しく不明ではあるが、東側の宮川6区で旧河道跡から奈良時代の大量の須恵器とともに祭祀跡が検出され、かつ銅製の銙帯金具が出土していることから地方官人との関連も考慮する必要があろう。

③古墳時代後期の水辺の祭祀として7世紀後半と考えられるＳＸ336の遺物のうち、坏形土器と甕形土器のセット出土は、同時代の祭祀と考える水上7区ＳＸ801の坏形土器と甕形土器のセット出土との関連も注目される。

第35表　宮川5区小穴・柱穴一覧表

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標　高	特記事項
ＳＰ204	Ｂ105	8.70	7.10	0.27	0.82	5.17	
ＳＰ205	Ｂ105	0.78	0.66	0.17	0.84	5.23	
ＳＰ208	Ａ106	0.47	0.45	0.22	0.96	6.18	
ＳＰ211	Ａ106	0.66	0.65	0.16	0.98	6.21	
ＳＰ212	Ａ106	0.33	0.30	0.19	0.91	6.19	
ＳＰ213	Ａ106	0.68	0.55	0.23	0.81	6.18	
ＳＰ214	Ａ106	0.36	0.35	0.15	0.97	6.18	
ＳＰ221	Ｃ103	0.75	0.59	0.34	0.79	6.08	
ＳＰ222	Ｃ103	0.42	0.37	0.11	0.88	6.10	
ＳＰ223	Ｂ104	0.79	0.57	0.17	0.72	6.12	

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標　高	特記事項
S P 224	B 104	0.31	0.28	0.11	0.90	6.13	
S P 225	C 102	0.86	0.83	0.78	0.97	6.54	
S P 226	C 102	0.71	0.42	0.75	0.59	6.04	
S P 227	C 102	0.25	0.19	5.19	0.76	6.09	
S P 228	C 102	0.72	0.46	0.31	0.64	6.09	
S P 230	C 103	0.57	0.51	0.11	0.89	5.99	
S P 231	D 101	0.25	0.22	0.11	0.88	6.15	
S P 232	D 101	0.24	0.22	0.24	0.92	6.14	
S P 233	C101•D101	0.25	0.21	0.12	0.84	6.14	
S P 234	D 101	0.24	0.18	0.17	0.75	6.14	
S P 235	E 101	0.36	0.23	0.09	0.64	6.13	
S P 236	D101•E101	0.45	0.34	0.17	0.76	6.14	
S P 237	D 101	0.31	0.26	0.22	0.84	6.15	
S P 238	D 101	0.29	0.23	0.12	0.79	6.13	
S P 239	D 101	0.30	0.24	0.22	0.83	6.12	
S P 240	D101•E101	0.49	0.47	0.15	0.96	6.11	
S P 241	E 101	0.34	0.27	0.08	0.79	6.09	
S P 243	B 103	1.24	0.81	0.23	0.65	6.06	
S P 244	B 103	0.85	0.79	0.22	0.93	6.06	
S P 245	C 103	0.58	0.49	0.15	0.84	6.05	
S P 246	C 103	0.51	0.35	0.11	0.69	6.04	
S P 247	C 103	0.34	0.26	0.15	0.76	6.02	
S P 248	B 103	0.43	0.37	0.09	0.86	6.07	
S P 249	B 103	0.04	0.04	0.04	1.00	5.97	
S P 250	E 101	0.05	0.42	0.04	0.84	6.10	平安時代
S P 251	C 103	0.02	0.17	0.02	0.85	5.91	
S P 252	C 103	0.97	0.88	0.15	0.91	6.01	
S P 253	D 103	0.31	0.31	0.05	1.00	6.15	
S P 254	D 101	0.32	0.32	0.06	1.00	6.12	
S P 255	D 101	0.27	0.25	0.08	0.93	6.09	
S P 256	E 101	0.67	0.31	0.05	0.46	6.09	
S P 258	E 101	0.52	0.35	0.09	0.67	6.05	
S P 259	D 101	0.41	0.23	0.06	0.56	6.08	
S P 260	E 101	0.51	0.51	0.11	1.00	6.13	
S P 261	E 101	0.47	0.43	0.10	0.91	6.07	
S P 262	E 101	0.31	0.30	0.10	0.97	6.01	
S P 263	E 101	0.53	0.49	0.24	0.92	6.23	
S P 264	D 101	0.20	0.18	0.04	0.90	6.05	
S P 265	D 101	0.20	0.20	0.04	1.00	6.10	
S P 266	D 101	0.27	0.25	0.03	0.93	6.08	
S P 267	D 101	0.19	0.17	0.02	0.89	6.12	

遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径＝1）	遺構面標　高	特記事項
S P 268	D 101	0.30	0.30	0.12	1.00	6.07	
S P 272	D 102	0.51	0.43	0.05	0.84	6.14	
S P 273	D 102	0.23	0.18	0.06	0.78	6.09	
S P 274	D 102	0.40	0.36	0.09	0.90	6.15	
S P 276	D 102	0.17	0.15	0.07	0.88	6.12	
S P 277	C 102	0.38	0.17	0.03	0.45	6.11	
S P 278	C 103	0.70	0.42	0.05	0.60	6.01	
S P 279	C 103	0.22	0.22	0.06	1.00	6.02	
S P 280	B 103	0.73	0.73	0.06	1.00	5.97	
S P 281	C 103	0.70	0.65	0.04	0.93	6.01	
S P 282	B 103	0.53	0.42	0.17	0.79	6.00	
S P 283	B 103	0.49	0.36	0.18	0.73	6.07	
S P 284	C 103	0.79	0.64	0.13	0.81	6.01	
S P 289	C 103	0.70	0.49	0.08	0.08	6.07	
S P 290	C 103	0.42	0.33	0.01	0.79	6.05	
S P 292	C 103	0.39	0.35	0.12	0.90	5.99	
S P 293	B 103	0.36	0.33	0.10	0.92	6.00	
S P 294	B 103	0.40	0.11	0.07	0.28	5.99	
S P 295	B 104	0.60	0.46	0.09	0.77	6.04	
S P 296	B 104	0.65	0.56	0.21	0.86	6.11	
S P 297	B 104	0.53	0.29	0.11	0.55	6.14	
S P 298	A 105	0.61	0.37	0.18	0.61	6.15	
S P 299	A 106	1.66	0.76	0.11	0.46	6.21	
S P 300	A 105	0.30	0.25	0.24	0.83	6.15	
S P 301	D 100	0.21	0.18	0.07	0.86	6.18	
S P 302	D 101	0.32	0.28	0.07	0.88	6.01	
S P 303	D 101	0.47	0.35	0.10	0.74	6.03	
S P 304	D 101	0.34	0.32	0.19	0.94	6.03	
S P 305	D 101	0.49	0.28	0.15	0.57	6.06	
S P 306	D 101	0.37	0.29	0.14	0.78	6.07	
S P 307	D 101	0.24	0.21	0.14	0.88	6.06	
S P 308	C 102	0.23	0.17	0.06	0.74	5.98	
S P 309	C 103	0.29	0.25	0.06	0.86	5.90	
S P 310	A 105	0.42	0.28	0.01	0.67	5.92	
S P 338	B 104	0.53	0.47	0.09	0.89	6.14	

第36表　宮川５区溝状遺構一覧表

遺構番号	グリッド	延長	幅 最大	深さ	遺構面標高	特記事項
ＳＤ 206	Ａ 106	4.75	1.35	0.19	6.15	
ＳＤ 207	Ｂ 105	6.88	0.86	0.09	5.94	平安時代
ＳＤ 209	Ｂ 105	25.10	0.92	0.59	6.10	平安時代
ＳＤ 210	Ｂ 105	14.36	1.21	0.36	6.00	
ＳＤ 215	C102、D102	12.82	1.44	0.47	6.05	
ＳＤ 218	C 101、102 D 101、102	13.64	0.52	0.44	6.09	奈良時代
ＳＤ 219	Ｄ 102	9.48	0.54	0.05	6.10	奈良時代、手捏２個
ＳＤ 220	B104、105	7.32	1.07	0.42	6.09	平安時代
ＳＤ 229	Ｃ 103	2.16	0.66	0.05	6.08	
ＳＤ 242	C101、D101 E101	13.12	1.28	0.46	6.13	奈良時代
ＳＤ 269	Ｄ 101	12.42	0.82	0.17	6.05	
ＳＤ 270	Ｄ 101	4.03	0.56	0.15	6.03	
ＳＤ 271	Ｄ 101	1.06	0.42	0.10	6.03	
ＳＤ 275	Ｄ 102	1.82	0.33	0.06	6.17	
ＳＤ 285	Ｃ 103	4.42	0.68	0.16	6.01	
ＳＤ 287	Ａ 105	3.30	0.71	0.05	6.07	
ＳＤ 288	Ｂ 104	3.24	0.21	0.06	6.14	
ＳＤ 291	Ｃ 103	14.10	0.62	0.38	5.75	

宮川６区（第97図）

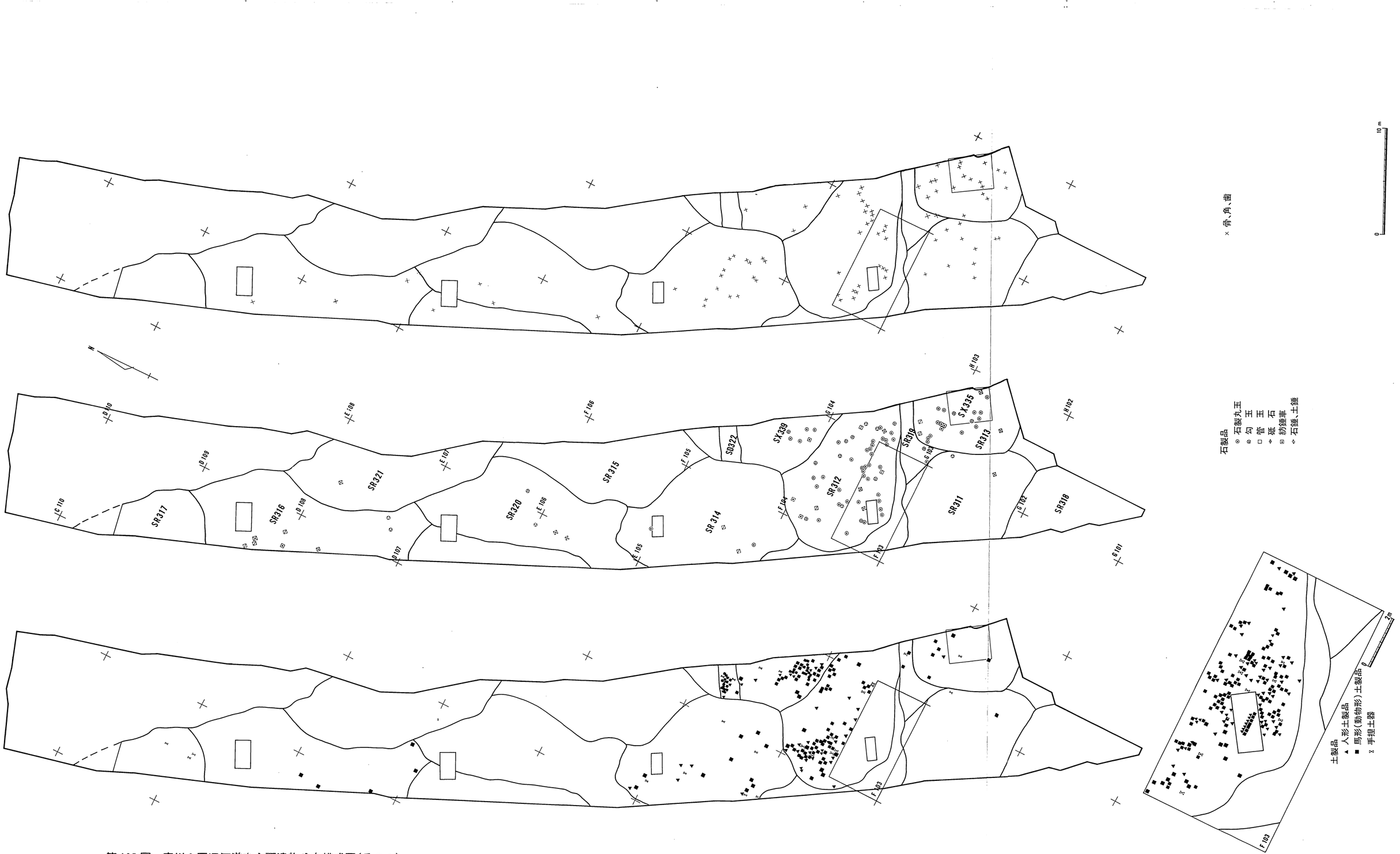
1. 概　要

宮川６区は河口起点より1,400ｍ上流に位置し、現大谷川左岸部にあたる。108列より北側に微高地が検出された他はすべて旧河道跡となっていた。微高地部分での古墳時代後期の遺構面から溝状遺構、小穴が検出された。旧河道部分の検出状況は複数の旧河道が複雑に切りあい、窪地状を呈する部分が大半を占め、それらを含めて河道跡として11個所に遺構番号を付した。したがって流路・年代ともに明瞭に確認ができたものはＳＲ 317・ＳＲ 313の２本のみであった。さらに宮川６区はほぼ中央を近世流路（明治９年地籍図で確認）がＤ 106グリッドからＧ 102グリッドにかけて縦断しており、平均すると河床直上10㎝から上はほとんど近世流路の赤褐色砂礫に覆われていたといえる。遺物検出面は多くの場合、河床覆土１面のみであり、複数の年代の遺物が混在して検出された。

しかし宮川６区は本遺跡の中では祭祀遺物の出土量においては最大規模を有し、水辺の祭祀と関連が深いと考えられる遺構として、ＳＲ 312・ＳＤ 322・ＳＸ 339・ＳＸ 313の４個所を検出できた。

第37表　宮川6区旧河道内主要出土遺物一覧表

遺構 / 遺物	SR317	SR316	SR316の南側高微地	SR321	SR320	SR315	SR314	SR312	SD322	SX339	SR311	SR318	SR319	SR313	合計
人形土製品 ▲							5	82	4	8				1	100
馬形土製品(動物形) ■		5					10	181	15	36	1		2	6	256
手捏土器 ⊠	3						6	15	2	4	1		1	1	33
石丸玉 ⊙							2	34		4			1	12	53
土丸玉 ⊚		2			1			4			1				8
勾玉 ⊗					1			6		1			1	2	11
管玉 ⊟								2							2
砥石 ⊕		2		1	2			3						2	10
紡錘車 ⊡		1						2		1	1			3	8
石錘・土錘 ◈		3					2							2	7
人形木製品 △								2						18	20
馬形木製品 □								5						2	7
箸状木製品(斎串) ●		4		1 (1)	2 (1)		1	4						60	72
刀形木製品 ○								1					1	14	16
その他の木製形代 ▼								1							1
櫛 ◎		1													1
農工具 ◬		鉄鍬先1 鉄手斧1					鉄鎌の刃1	鉄鎌の刃1		木製鍬1 鉄手斧2			鉄鎌の刃1	錐1	9
武器 ◆							鉄鏃4			銑鏃1				鉄鏃1	6
刀子 ◐		2						8		1			1		12
耳環 ◎							1	3						2	6
動物遺存体(骨・角・歯) ×		4	1		3		16	26		2	11		2	20	85
植物遺存体(桃の種)		218			5			2497	250			1	320	901	4192
墨書土器 その他		2		絵馬1	緑釉碗皿2 灰釉皿2	1	銙帯金具1 和同開珎1	分銅1 鈴1					1	乳文鏡1 鉛錘1	13



第 105 図　宮川 6 区旧河道内主要遺物分布模式図(その 1)

墨書土器2641「舎カ」
墨書土器2148「用」
絵馬
SR321出土
墨書土器
2592-1
SR320出土
墨書土器
931-1
808-1「正」
緑釉碗873
灰釉皿874
SR314出土
墨書土器
2539
2489-2「□□長」
2210-4「大成」
鋳帯金具(丸鞆)
和同開珎
鈴
墨書土器2296
墨書土器TP45-15
「神」
分銅
SR319出土
墨書土器
602-1「□人」
乳文鏡

SR317
SR321
SR316
SR320
SR315
SR314
SR312
SR311
SR313
SR318
SD322
SX338
SX335
鉄鏃先
鉄斧(手斧)
木製鎌
鉄鏃
鉄鏃の刃
鉄鏃の刃
鉄鏃
鉄斧(手斧)
鉄鏃の刃
鉄鏃
鉛錘
鉄鏃
錐
横槌

農工具
武器
刀子
耳環

木製品
人形木製品
馬形木製品
斎串
刀形木製品
その他の形状
槌

0 10m

第106図　宮川6区旧河道内主要遺物分布模式図(その2)

2. 遺構各説

ＳＲ 317（第 107 図、図版89―１）　Ｃ 109 ・Ｃ 108 グリッドで検出された旧河道跡である。北西方向から微高地を抉って蛇行し南西へ流れる。確認面での河床は平坦で最深部は標高 4.80ｍを測る。覆土中から手捏土器３点他と土師器片・須恵器片を多数検出し、これらから古墳時代後期の河道跡とした。ＳＲ 317 は、その後の河道によって破壊されることがなく遺物がそのまま遺存したと考えられる。

ＳＲ 316（第 107 図、図版89―２・３）　Ｃ 108 ・Ｃ 107 ・Ｄ 108 ・Ｄ 107 グリッドで検出された旧河道である。ＳＲ 317 の攻撃斜面であるＣ 108 グリッド北部が突破され、流路が南側に移り北西方向から入りＤ 108 グリッド杭の付近で南西方向に蛇行して流れる。確認面での河床はゆるやかに擂鉢状に傾斜し、最深部の標高は 3.74ｍを測る。覆土は暗灰色砂質粘土で標高 4.60ｍまでを被覆していた。覆土中から多数の土師器・須恵器・灰釉陶器が出土した（第 109 図）。これらから年代は古墳時代後期から平安時代までとする。主要出土遺物には馬形土製品５点、土製丸玉２点、砥石２点、紡錘車１点、錘３点、斎串４点、横櫛１点、鉄製鍬先１点、鉄製手斧１点、刀子２点、獣骨４点、桃の種 218 点他が確認されている。さらに墨書土器２点が検出された。

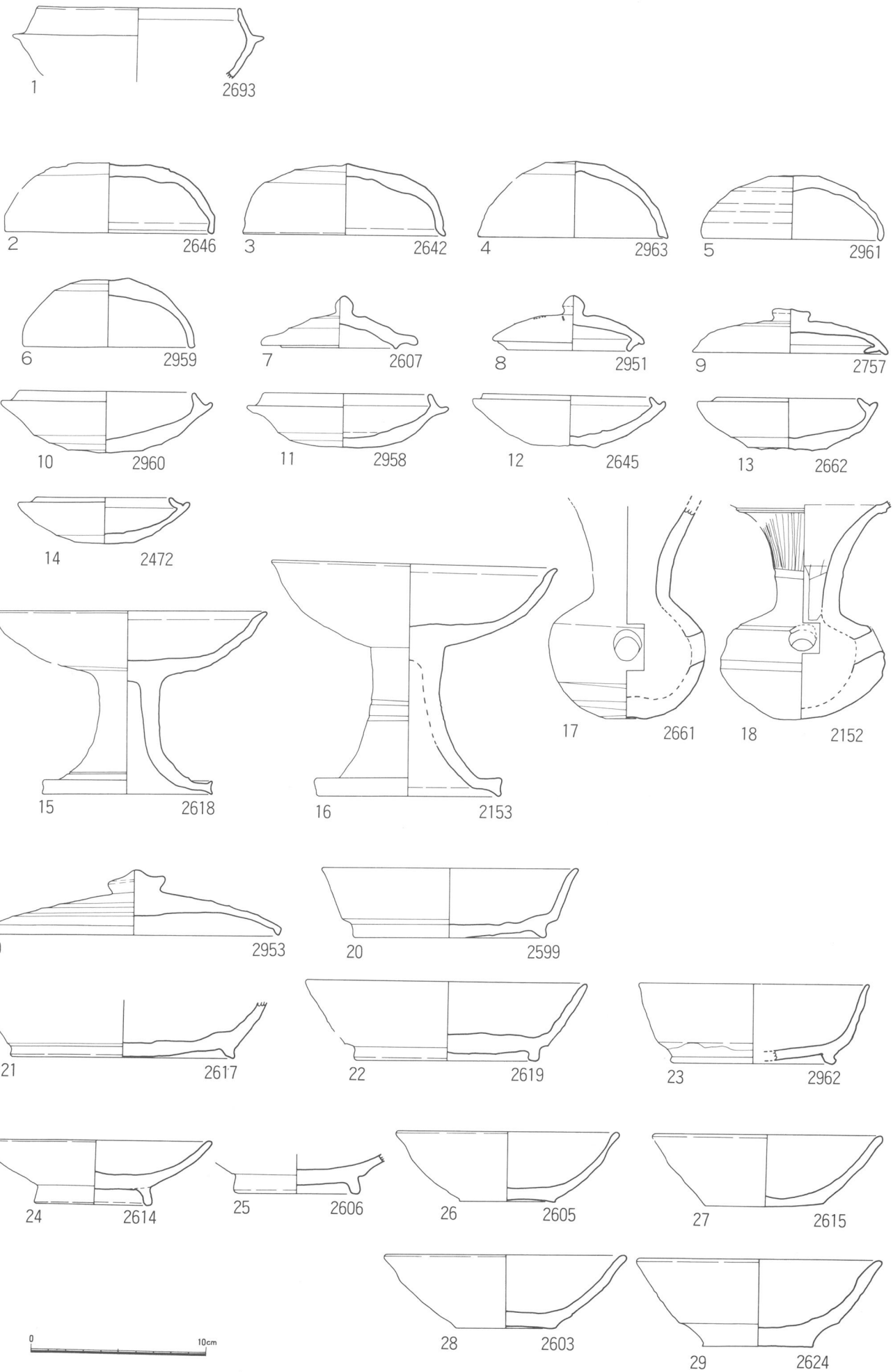
ＳＲ 321 ・ＳＲ 320 ・ＳＲ 315（第 108 図、図版89―１、90―１・２）　Ｄ 108 ・Ｄ 107 ・Ｅ 107 ・Ｄ 106 ・Ｅ 106 ・Ｄ 105 ・Ｅ 105 ・Ｆ 105 で検出された旧河道である。出土遺物から１本の流路と考えられるが、Ｄ 107 グリッドの河道の淵の部分をＳＲ 321、Ｄ 106 ・Ｄ 105 グリッドの河道の直線的な流れがのる瀬の部分をＳＲ 320、Ｅ 106 ・Ｅ 105 グリッドの分流して淵をつくる部分をＳＲ 315 とした。

確認面での幅はＳＲ 320 部分で 7.50 ｍ、延長は 31.5 ｍ、河床はＳＲ 321 とＳＲ 315 の淵の部分では擂鉢状を呈し、最深部の標高がそれぞれ 3.92 ｍ、3.79 ｍを測り、ＳＲ 320 の瀬の部分では平坦で最深部の標高が 4.10 ｍを測る。本河道はＳＲ 316 の攻撃斜面部分が突破され新しく開かれた流路である。

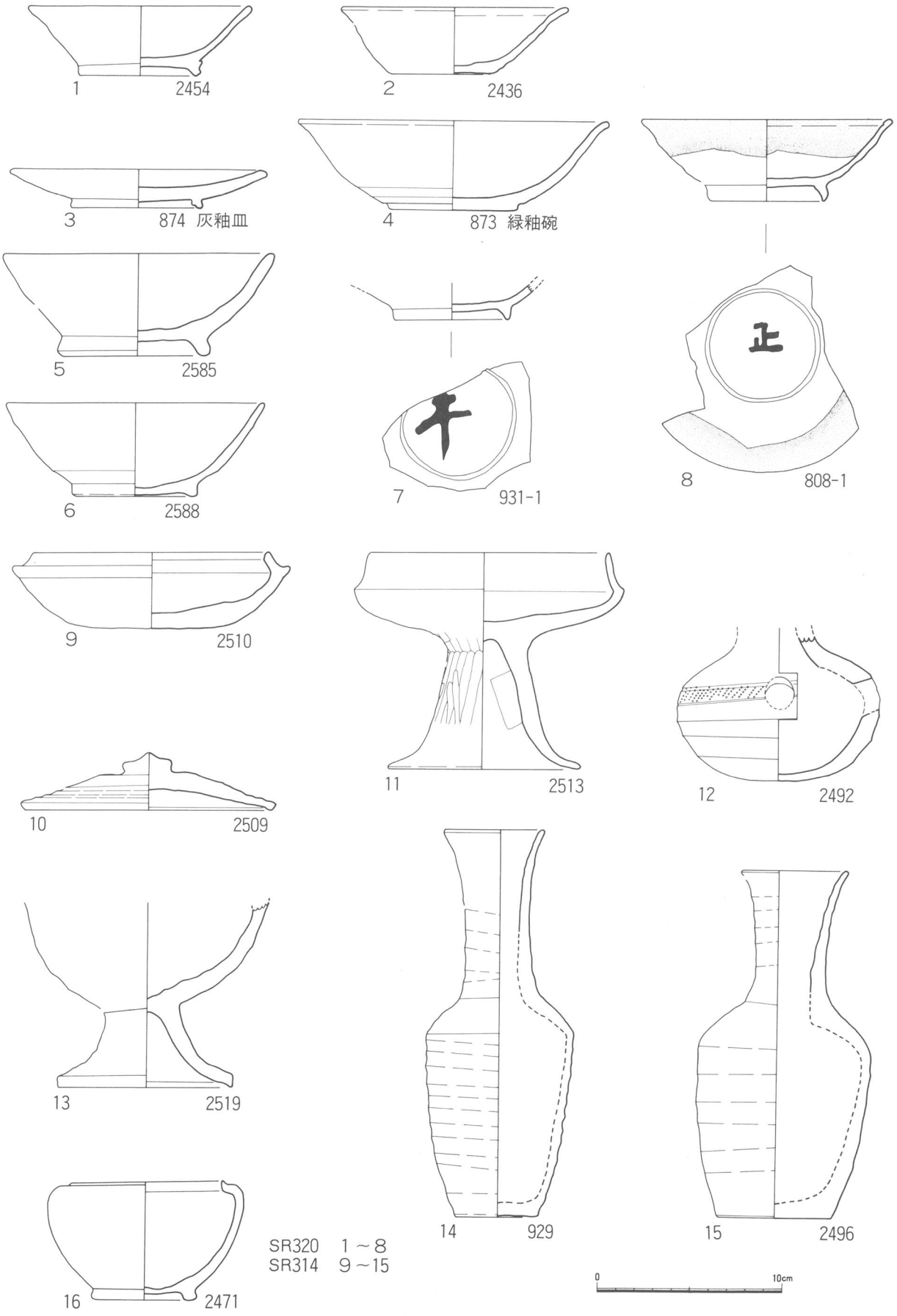
出土遺物は須恵器片・土師器片とともに多くの灰釉陶器・山茶碗を検出している。その他、主要遺物として玉類では勾玉１点、土製丸玉１点、砥石３点、斎串３点（その内箸状木製品２点）、獣骨３点、桃の種５点、絵馬１点、灰釉皿・緑釉碗各１点が確認された。箸状木製品の出土は本遺跡では宮川３区ＳＲ 486 ・水上６区ＳＤ 228 からの大量出土があり、平安時代末から鎌倉・中世と考えられる。絵馬は馬と馬を曳く人物の描写の特色から奈良県当麻寺の絵馬と同類型であり、平安末から鎌倉時代と考えられる。灰釉皿（874）は猿投窯笹14号の産であり、緑釉碗（873）は黒笹14号窯式の新か黒笹90号窯式の古に併行する時期のものと考えられる。以上から、本河道の年代は平安時代中期から鎌倉時代と考えられる。また墨書土器３点が出土している。

ＳＲ 314（第 108 図、図版90―３）　Ｅ 105 ・Ｅ 104 ・Ｆ 104 ・Ｅ 103 グリッドで検出された旧河道跡である。河床はＥ 104 グリッドを中心に擂鉢状を呈しており最深部で標高 3.60ｍを測る。出土遺物は土器類では土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗などで、これらから年代は古墳時代後期から奈良時代・平安時代とされる。

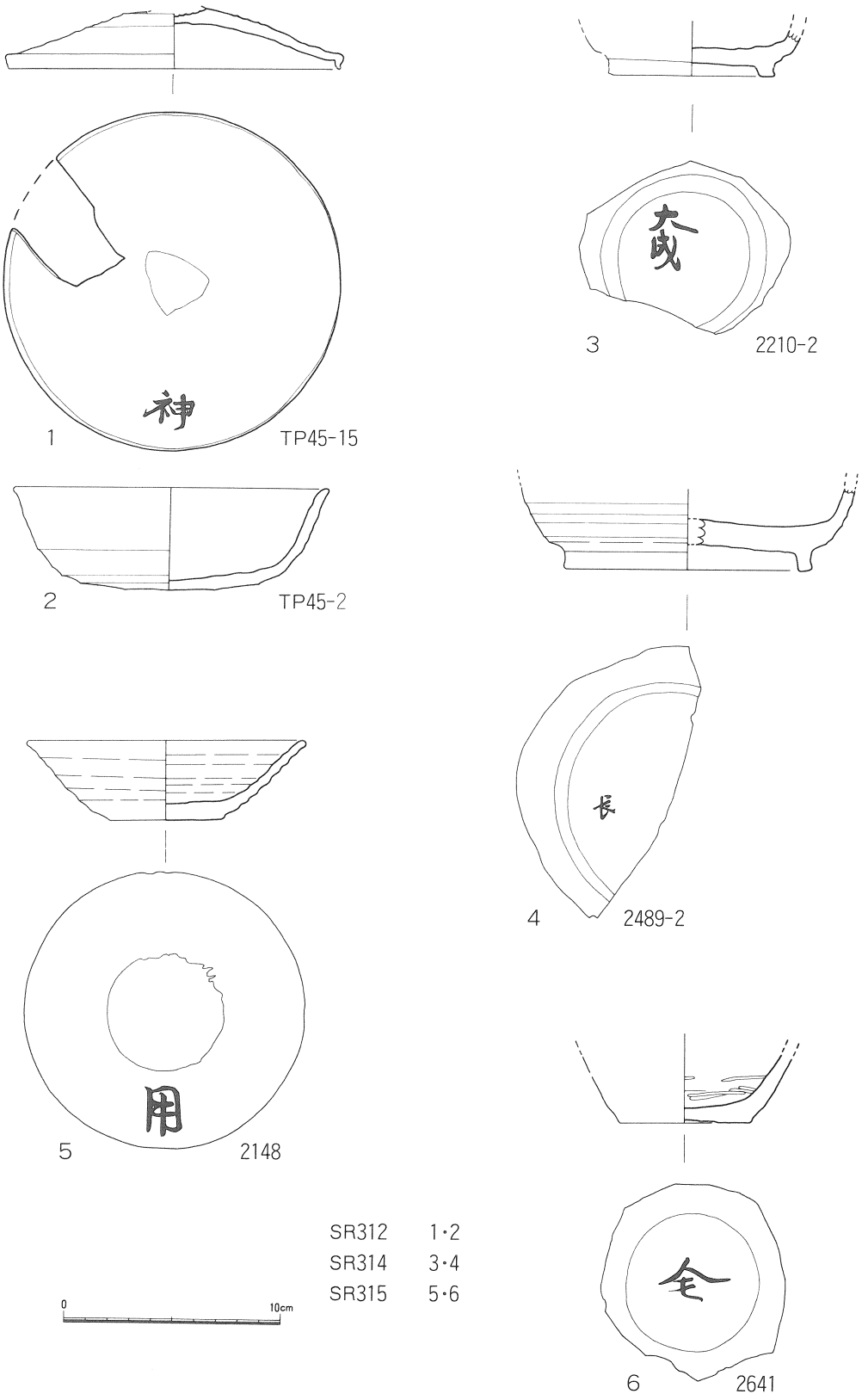
古墳時代後期から奈良時代にかけての流路は宮川６区北部から宮川５区北部へと蛇行し、一部は宮川５区ＳＲ 202 として検出されている。その延長上の流路が再び西から宮川６区へ入りＳＲ 314 の淵をつくったと考えられる。その後、この淵に平安時代の流路が流れ込んできたと推定できる。ＳＲ 321 ・ＳＲ 320 ・ＳＲ 315 では、確認されなかった土製形代類が、ＳＲ 314 では出土している。人形土製品５点、馬形土製品10点他の検出である。その他の主要遺物としては、手捏土器６点、石製丸玉１点、錘２点、斎串１点、鉄鎌の刃１点、鉄鏃４点、耳環１点、獣骨16点他が出土し、複数の時代の祭祀遺物の混在が認められる。墨書土器３点、銅製の銙帯（丸鞆）１点、和同開珎１点も検出されている。



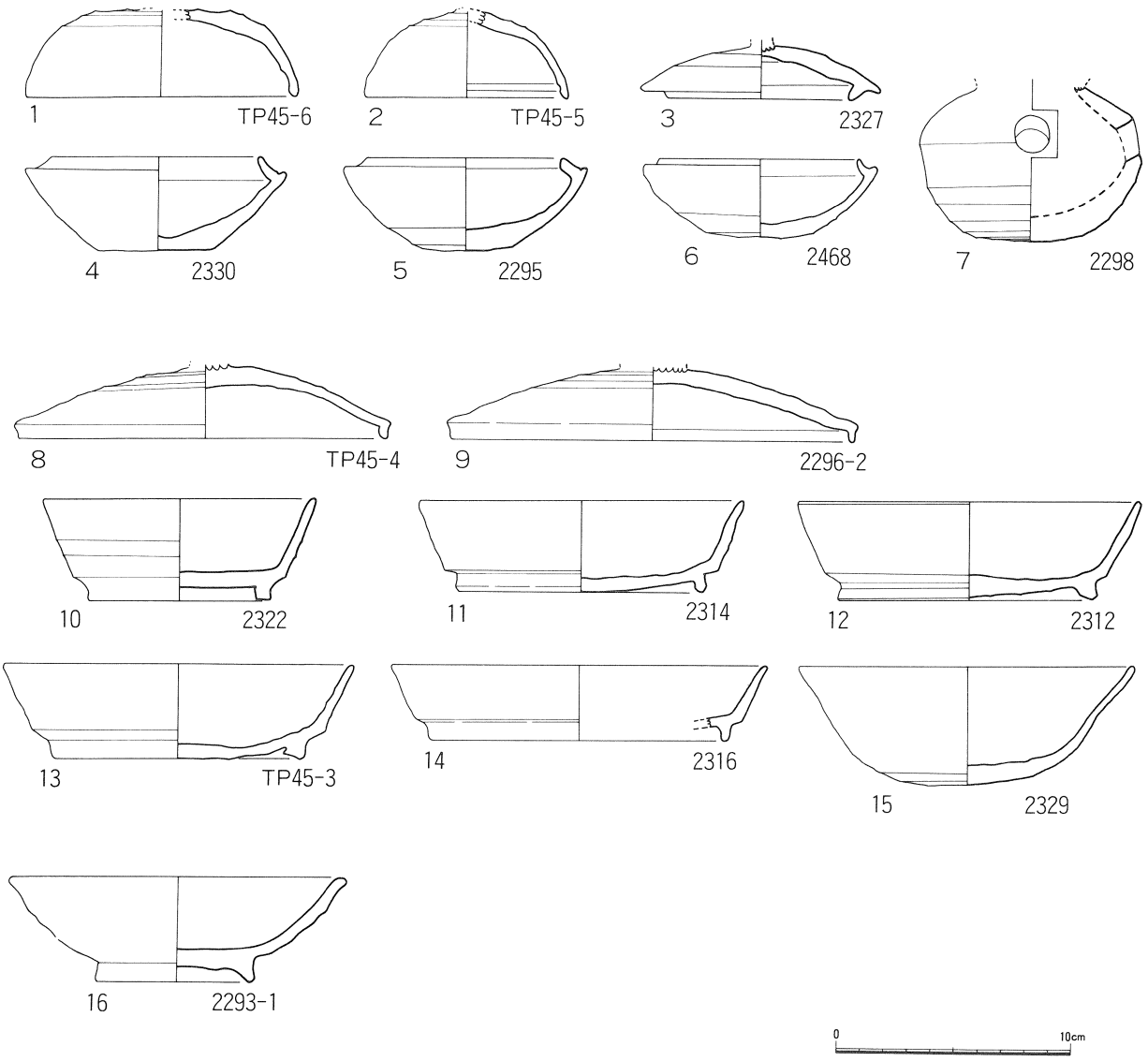
第107図　宮川6区SR317・SR316出土土器実測図



第108図　宮川6区SR320・SR314出土土器実測図



第 109 図　墨書土器実測図



第110図　宮川6区SR 312出土土器実測図

SR 312（第110図、図版91—1・2・3）E 104・F 103・G 103で検出された旧河道跡である。河床はF 103グリッドを中心に浅い擂鉢状を呈しており最深部で標高3.93*m*を測る。出土遺物の土師器・須恵器・灰釉陶器などから、年代は古墳時代後期から奈良時代・平安時代にまでおよぶと考えられる。

SR 312の出土遺物で注目すべきは祭祀関連の遺物である。主要遺物として人形土製品82点、馬形土製品181点、手捏土器15点、石製丸玉34点、土製丸玉4点、勾玉6点、管玉2点、砥石3点、紡錘車2点、人形木製品2点、馬形木製品5点、斎串4点、刀形木製品1点、鉄鎌の刃1点、刀子8点、耳環3点、獣骨26点、桃の種2,497個、分銅1点、鈴1点、墨書土器2点(そのうち1点に「神」の墨書)他が検出されている。

土製模造品、玉類の検出密度・量はSR 312が本遺跡の中で卓越している。遺物の分布を見ると、玉類が比較的全体から一様に出土しているのに対して土製模造品は南東側に偏在し、獣骨は南東側から南側にかけて偏在している。今後、遺物の年代を確定させ、祭祀の時代ごとの形態を明らかにすることが課題となる。また土製人形・土製馬形の最密集部分から検出された奈良時代の須恵器の坏蓋に「神」と

墨書された土器は、坏身セットで出土している（湖西市早稲川窯産とみられる）。

ＳＤ 322（図版91—１・３）　Ｆ 104 グリッドで検出された東西方向の溝状遺構である。ＳＲ 314 の東側の微高地状部分に位置し、確認面での延長は 2.90m、幅は 1.75m、深さは 0.22m を測る。出土遺物としては人形土製品４点、馬形土製品15点、手捏土器２点であった。年代は不明であるが土製模造品の形態がＳＲ 312 出土のものと類似している。

ＳＸ 339　104 グリッド検出された南北方向の溝状地形を含む微高地部分である。主要出土遺物は人形土製品８点、馬形土製品36点、手捏土器２点、木製鍬１点、鉄製手斧２点、鉄鏃１点、石製丸玉４点、勾玉１点、紡錘車１点、刀子１点、獣骨２点他である。とりわけ馬形土製品10点が並んで検出された点と農工具・武器類の出土が注目される。ここの馬形土製品もＳＲ 312 出土のものと類似している。

なおＳＤ 322 ・ＳＸ 339 の両者から桃の種 250 個が検出された。これらの二地域とも祭祀にかかわる場所であったと考えられる。

ＳＲ 311　Ｆ 102 ・Ｇ 102 グリッドで検出された旧河道である。河床はＦ 102 グリッド北東部を中心に擂鉢状を呈しており最深部で標高 3.30m を測る。基盤層は砂層である。出土遺物は土師器・須恵器片のほかに主要遺物として土製馬形１点、手捏土器１点、土製丸玉１点、紡錘車１点、獣骨11点であった。年代は不明である。

ＳＲ 318　Ｇ 102 グリッドで検出された旧河道跡である。河床は砂層で、最深部の標高 3.60 m を測る。

なおＳＲ 311 ・ＳＲ318 ともに上層の緑灰色砂層から灰釉陶器片を出土している。

ＳＲ 319（図版92—１）　Ｆ 103 ・Ｇ 103 で検出された東から西へ流れる旧河道跡である。確認面での延長は 6.45 m、幅は 4.10 m、深さは 0.63 m である。覆土は緑灰色粘土である。覆土中から主要遺物として馬形土製品２点、手捏土器１点、石丸玉１点、勾玉１点、刀形木製品１点、鉄鎌の刃１点、刀子１点、獣骨２点、桃の種 320 個他を検出した。また土師器片・須恵器片とともに墨書土器１点を検出した。年代は遺物により古墳時代後期から奈良時代と考えられる。

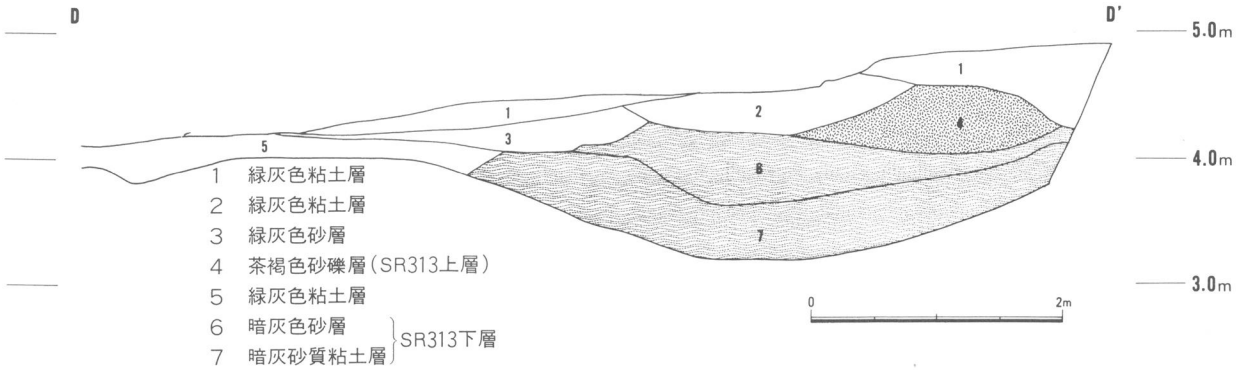
ＳＲ 313（第 111 ・ 112 ・ 113 図、図版92—３・93・94—１）　Ｇ 103 ・Ｇ 102 グリッドで検出された旧河道跡である。河床はＧ 103 グリッド杭の東 5.30m 付近を中心に擂鉢状を呈しており、最深部で標高 3.20m を測る。覆土は上層が茶褐色砂層、下層が暗灰色砂層である。上層は大半がＳＲ 319 によって削られているのに対し、下層の遺存状態は良好であった。ＳＲ 313 は出土した土器から古墳時代後期の旧河道である。

上下両層からの主要出土遺物は以下のとおりである。人形土製品１点、馬形土製品６点、手捏土器１点、石製丸玉12点、勾玉２点、砥石２点、紡錘車３点、錘３点、人形木製品18点、馬形木製品２点、斎串60点、刀形木製品14点、錐１点、鉄鏃１点、耳環２点、獣骨20点、桃の種 901 点、乳文鏡１点他であった。この流路の特徴は斎串、木製模造品の大量出土である。

これらのうち出土状態が良好な下層の一括出土部分を図示したのが第 116 図である。ＳＲ 313 の中央部の網かけ部分からは大量の礫とともに土師器・須恵器が多数出土した。この部分は土層断面図（第 117 図）からもわかるように河床最深部でもあり、常時流れのあった場所と考えられる。第 116 図から木製品が網かけ部分の流路の外側と内側に分かれて分布していることがわかる。外側のものは流水により岸辺に打ち上げられたような状況を呈しており、岸辺に沿って線状に集積して検出された。それに対し、内側のものは標高 3.60m を中心としたほぼ同一平面からの出土を示し、遺物が同じ方向性をもって砂層の上に並べられたような検出状況を呈していた。しかも壺形土器の中に、刀形木製品１本が入ったまま出土していることから、流路の外側に集積した木製品と比べて、流路の内側の木製品は流水の影響がより少なかったものかと考えられる。

ＳＸ 335（第 114 ・ 115 図、図版94・95—１・２）　Ｇ 103 ・Ｇ 102 グリッドで検出された遺物集中部

第111図　宮川6区SR313下層木製品出土状況実測図



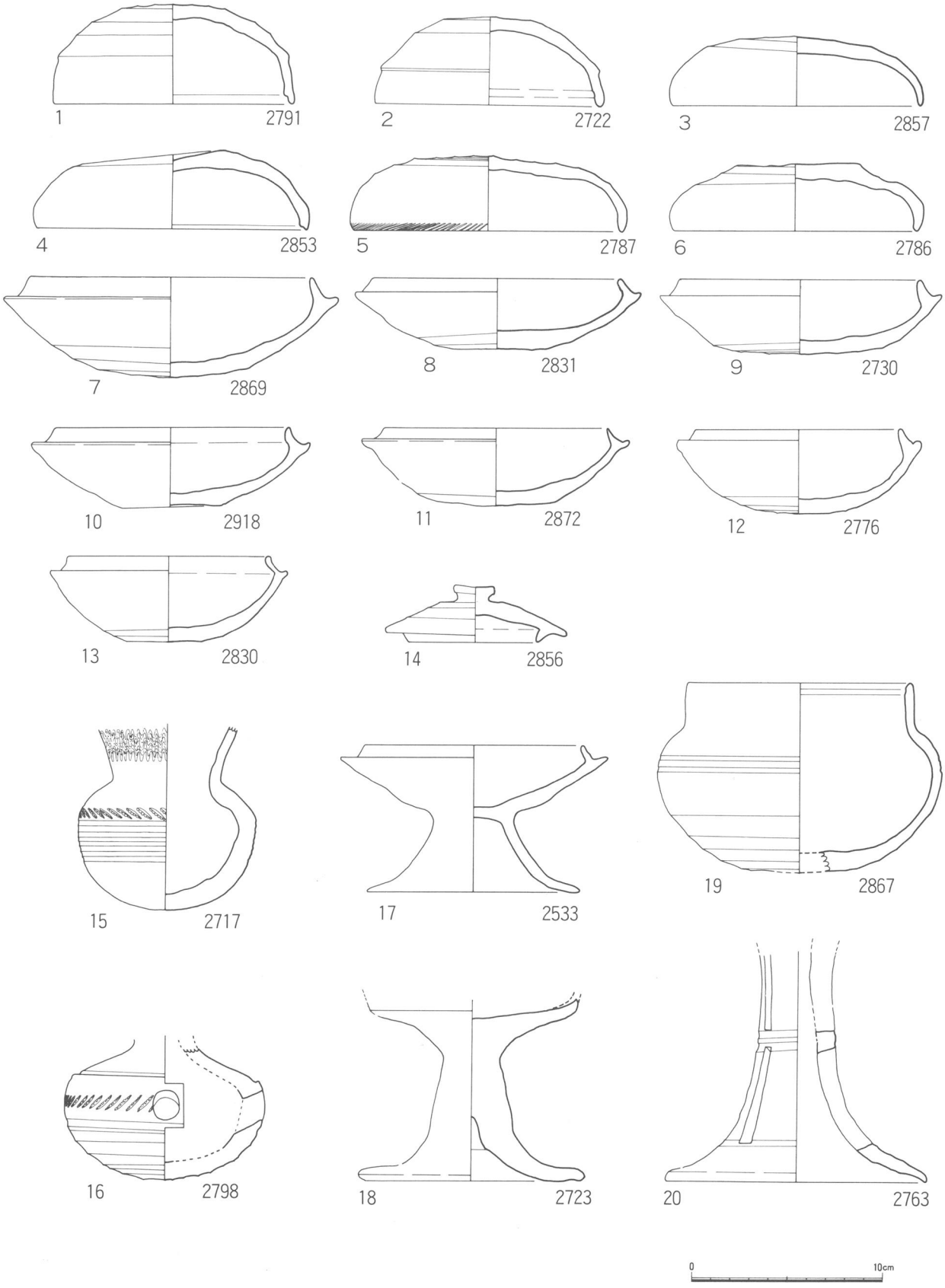
第112図　宮川6区ＳＲ313断面図

である。ＳＲ313の下層部の礫が大量に検出された流路部分より内側の砂層の上に、同一面に並べられたような状態で検出された主要遺物は木製品群（斎串19点・人形４点・刀形７点）とそれに伴出した土師器壺形土器１点、須恵器坏形土器２点他からなる。

基準杭Ｈ102より西3.50ｍの地点付近を中心とした3.4ｍ×2.2ｍほどの範囲から検出され、検出面の標高はほぼ3.60ｍである。ただし、東部の刀形木製品２点と斎串３点が並んで検出された部分付近の標高は3.80ｍを測り、東が高く西が低い緩やかな斜面となっている。

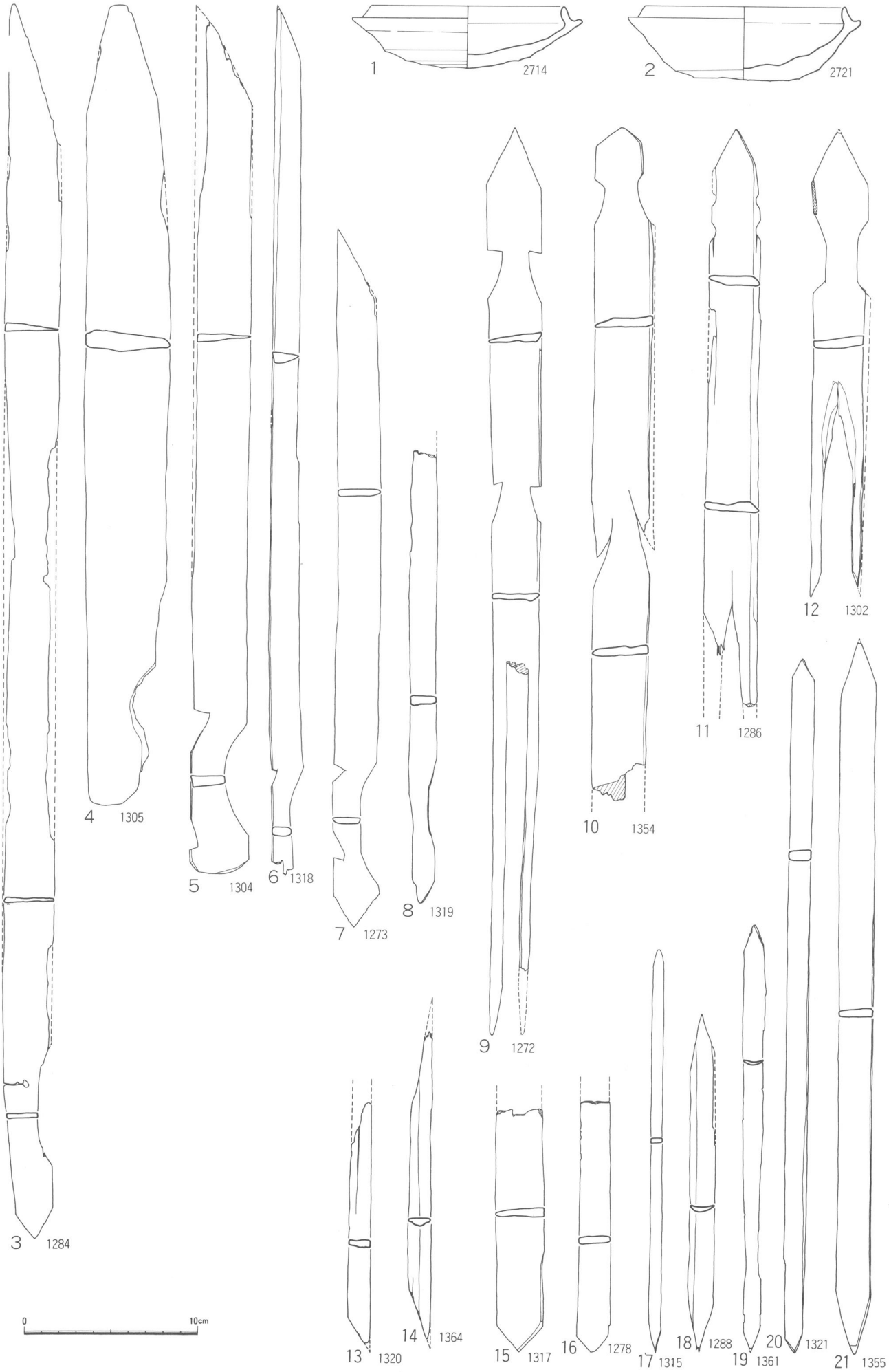
ＳＸ335の北部に位置する土師器壺形土器の中に刀形木製品の把部が入ったままの出土や斎串(1361)付近の木製品や刀形木製品（1319）付近の木製品が同一方向性をもち平面的に並んだ状態で検出されたことは、蛇行洲として形成されつつあった流路内側の砂層の上に投棄された木製模造品と斎串が、その後撹乱を受けずに砂の中に埋積していったと推定できる。とりわけ壺形土器に刀形が入ったまま出土したことは、壺に入れて運ばれた人形・刀形の木製模造品・斎串等を投棄した場所であったと推定することも可能となる。

出土遺物のうち人形木製品はいずれも短冊状の薄板の一端を削って圭頭状の頭部をつくり、撫で肩である。腰部は三角形に切り欠くものと表現されないものがある。脚部は三角形に切り欠くものと、平行切り込みのものがある。刀形木製品には飾大刀を模し、刀身と把部を削り出したものがみられる。斎串は短冊状の薄板を用いたものと角棒を用いたものがみられた。上端、下端ともに圭頭状のつくりをしたものと斜め切り落としのものがみられた。ＳＸ335の年代は伴出した須恵器から７世紀前半代とする。



第113図　宮川6区SR313下層出土土器実測図

第114図　宮川6区SX335実測図



第 115 図　宮川 6 区 S X 335 主要出土遺物実測図

3. 小　結

宮川6区は祭祀遺構としての側面からいくつかの特徴を指摘できる。

①古墳時代後期の旧河道ＳＲ313で検出されたＳＸ335を中心とする木製模造品・斎串等を主体とした水辺の祭祀で刀形・人形・馬形・斎串がセットで使用され、かつ壺形土器の用法の一端を確認できた点で重要である。しかもＳＲ313下層は他の時代の流路による撹乱がほとんどなく、ＳＸ335の年代を7世紀前半代と限定できた点でも貴重な検出例といえる。7世紀後半代の宮川4区ＳＲ56の祭祀と比べても、木製模造品・斎串を主体とした整然とした祭祀形態の特色がうかがえる。

②ＳＲ312・ＳＤ322・ＳＸ339で検出された祭祀関連遺物はＳＸ313と異なり土製形代類の圧倒的数量と複数の時代の祭料の混在が指摘できる。そのため祭祀遺物の時代別分離が今後の重要課題である。

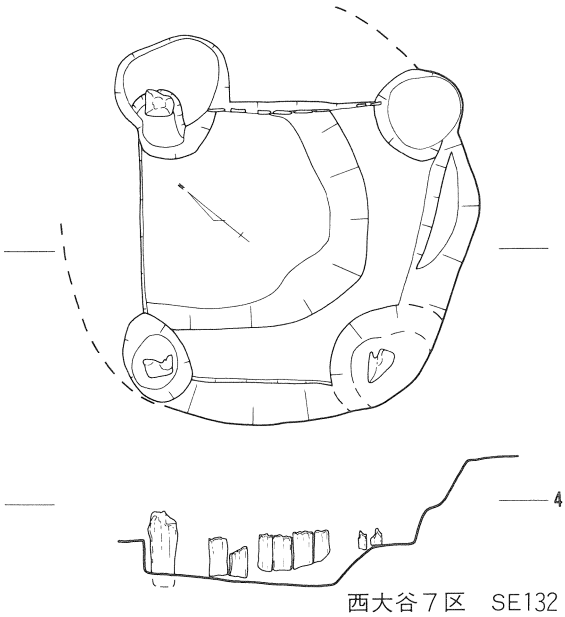
以上の祭祀関連での特徴の他に墨書土器11点の出土も重要である。奈良時代の須恵器に墨書されたＳＲ312の「神」、ＳＲ319の「□人」、ＳＲ314の「□□長」、「大成」さらに平安時代前期の土器に墨書されたＳＲ321の「舎ヵ」、「用」のうち「□□長」、「舎ヵ」は、銙帯（丸鞆）の検出、緑釉陶器・猿投窯黒笹14号産の灰釉皿の出土とあわせて考えると、奈良時代から平安時代にかけて地方官人層との関連をもつ可能性も指摘できよう。宮川1区・5区で検出された奈良時代の掘立柱建物群の存在もそれと何らかの関係があると考えられる。

第38表　宮川6区小穴一覧表

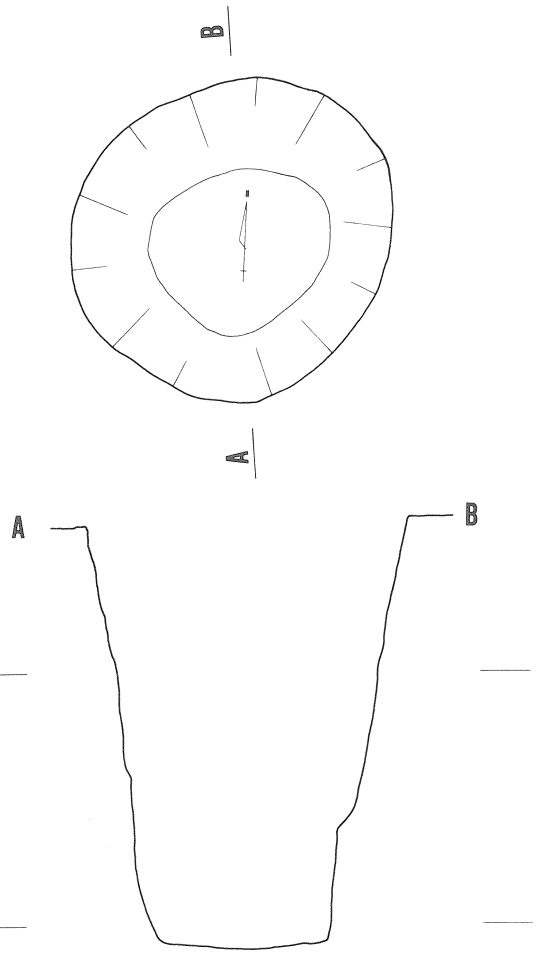
遺構番号	グリッド	長　径	短　径	深　さ	長短比（長径=1）	遺構面標　高	特記事項
ＳＰ323	Ｃ109	1.91	1.66	0.21	0.87	5.76	
ＳＰ324	Ｄ109	0.89	0.79	0.37	0.89	5.95	
ＳＰ327	Ｃ109	0.43	0.36	0.15	0.84	5.73	
ＳＰ328	Ｃ109	0.23	0.21	0.06	0.91	5.73	
ＳＰ329	Ｃ110	0.43	0.32	0.13	0.74	5.88	
ＳＰ330	Ｃ110	0.66	0.51	0.11	0.77	5.82	
ＳＰ331	Ｃ110	0.69	0.46	0.12	0.67	5.83	
ＳＰ332	Ｄ108	0.78	0.72	0.33	0.92	5.92	

第39表　宮川6区溝状遺構一覧表

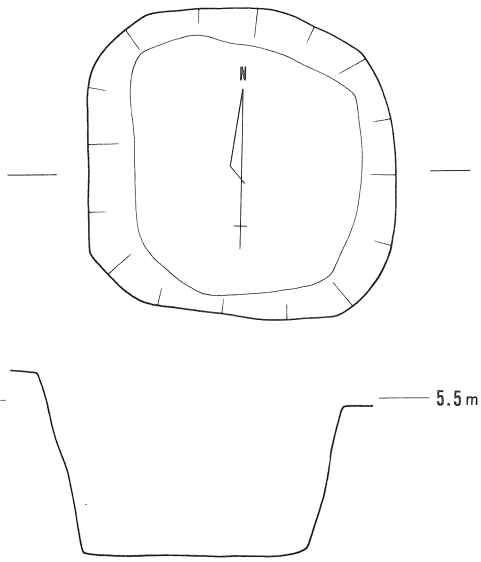
遺構番号	グリッド	延　長	幅	深　さ	遺構面標　高	特記事項
ＳＤ322	Ｆ104	2.14	1.69	0.31	4.78	馬形・人形土製品・手捏土器
ＳＤ325	Ｃ110	7.06	1.20	0.08	5.89	
ＳＤ326	Ｃ110	4.20	1.27	0.19	5.84	



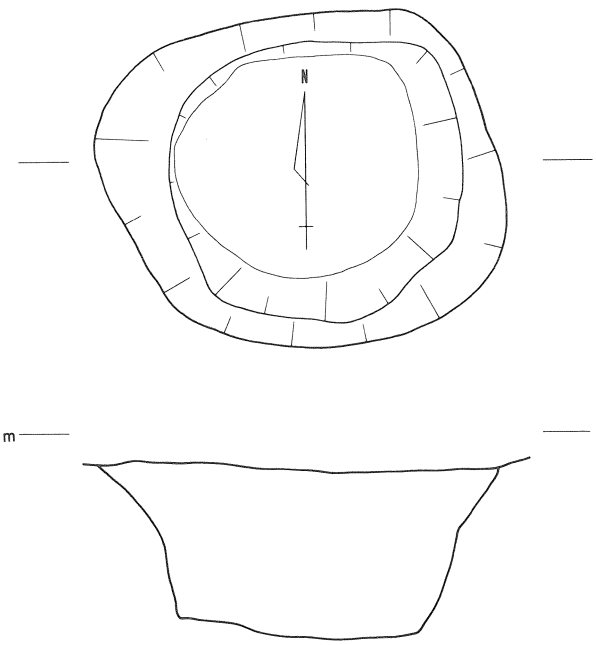
西大谷７区　SE132



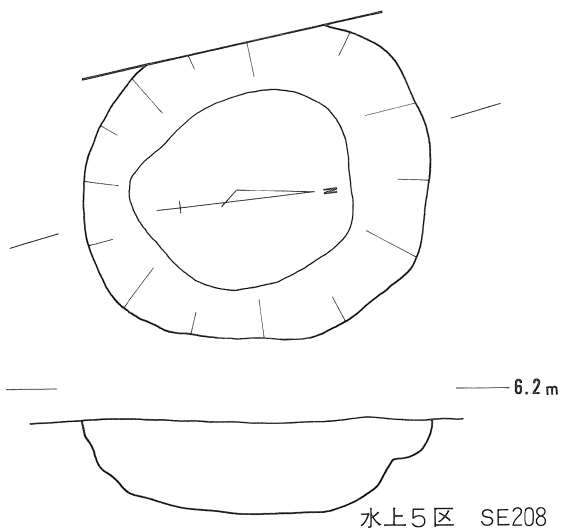
西大谷３区　SE62



西大谷８区　SE332



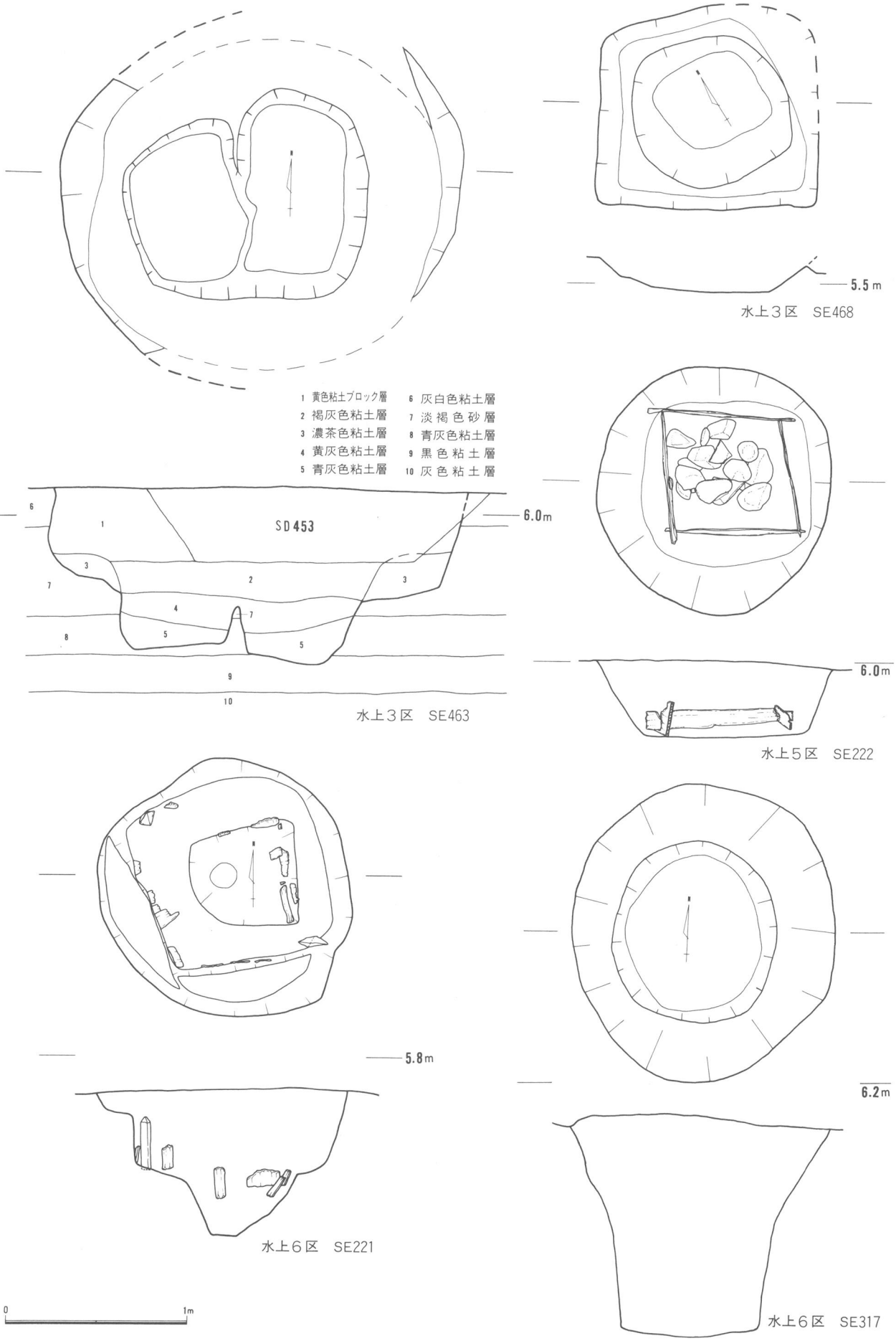
水上５区　SE212



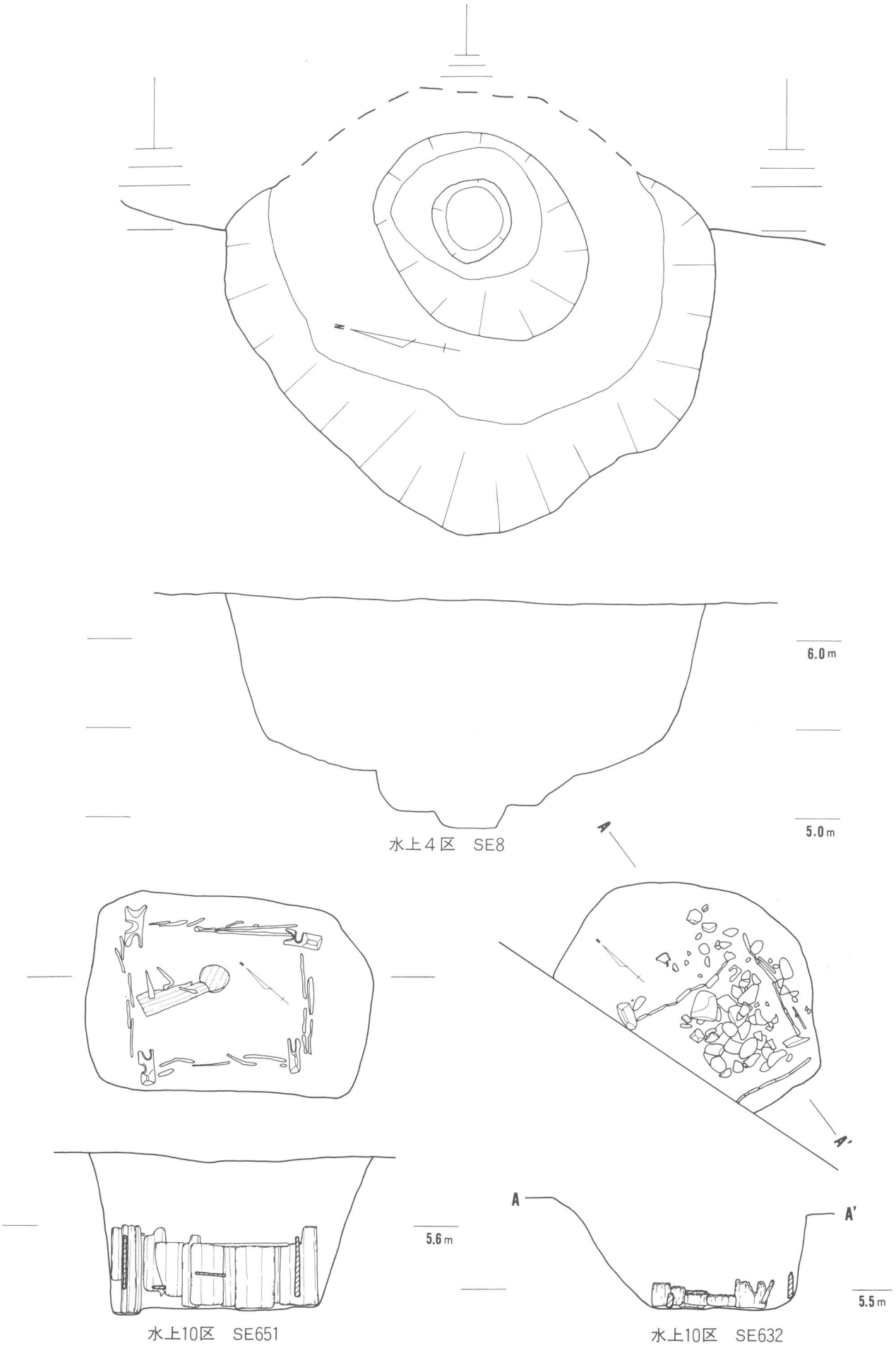
水上５区　SE208

0　1m

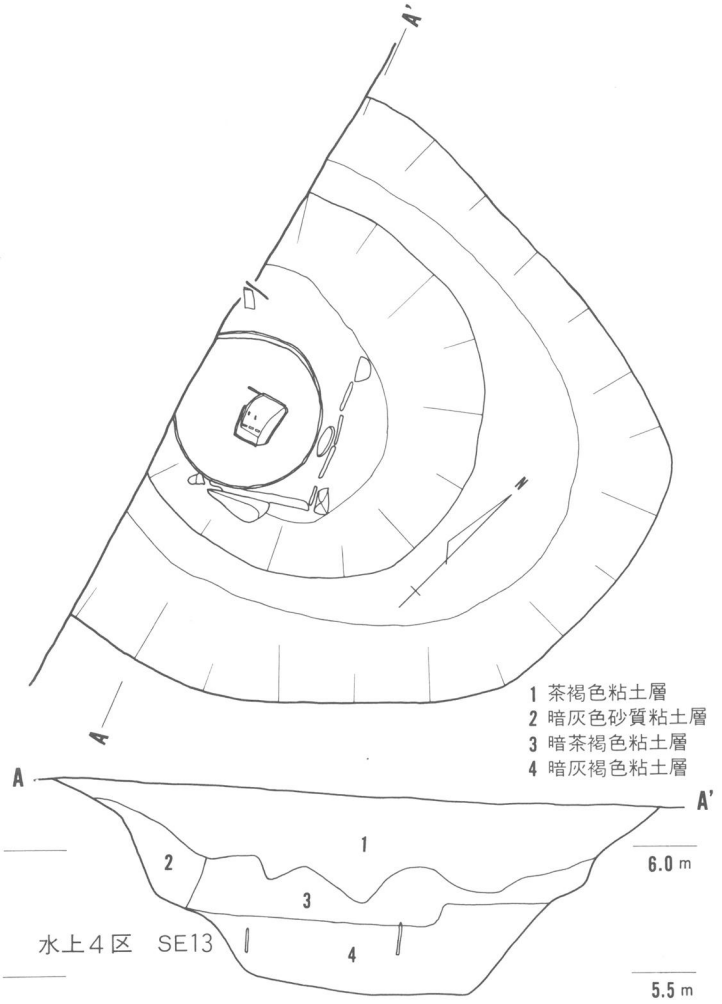
第 116 図　西大谷地区・水上 5 区井戸状遺構実測図

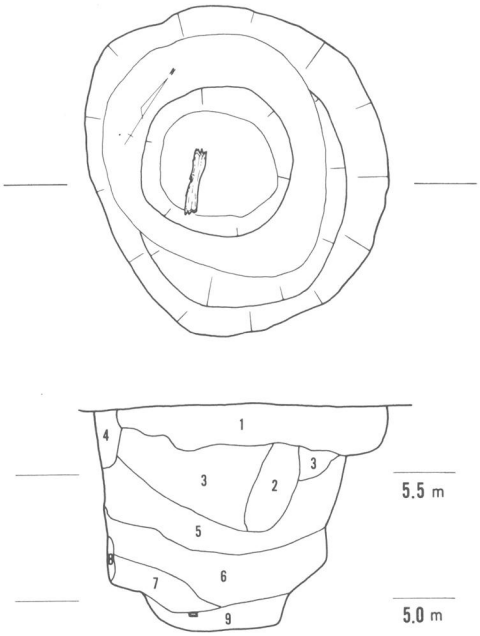


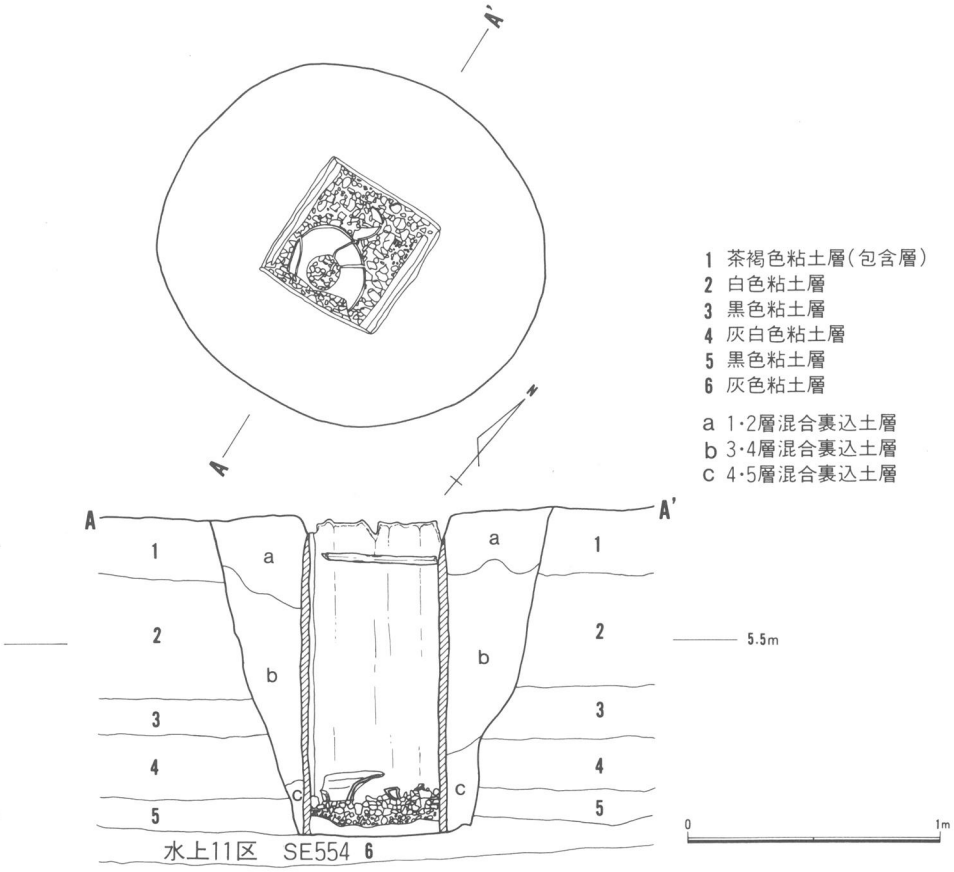
第 117 図　水上地区　井戸状遺構実測図 1



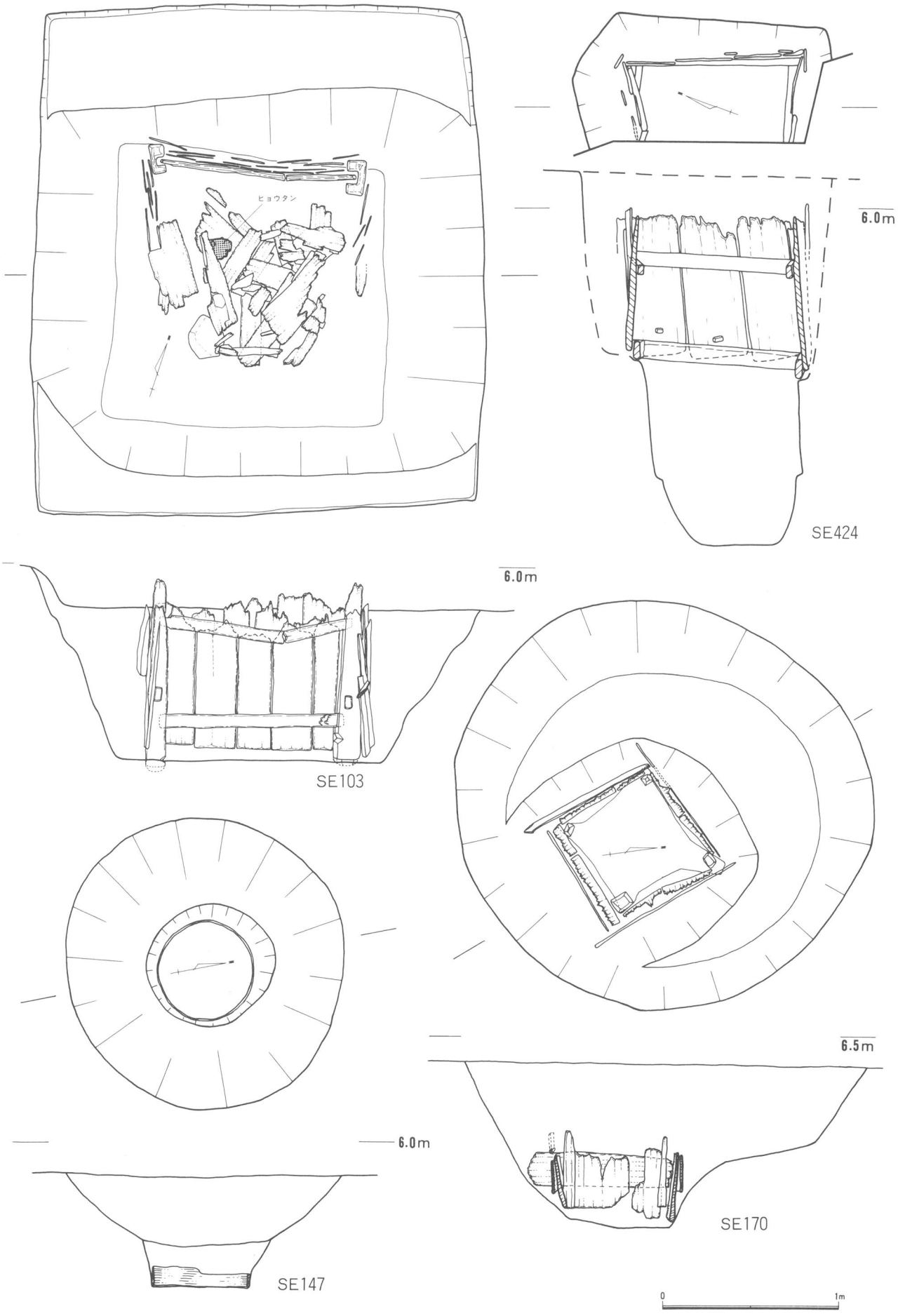
第118図　水上地区　井戸状遺構実測図2



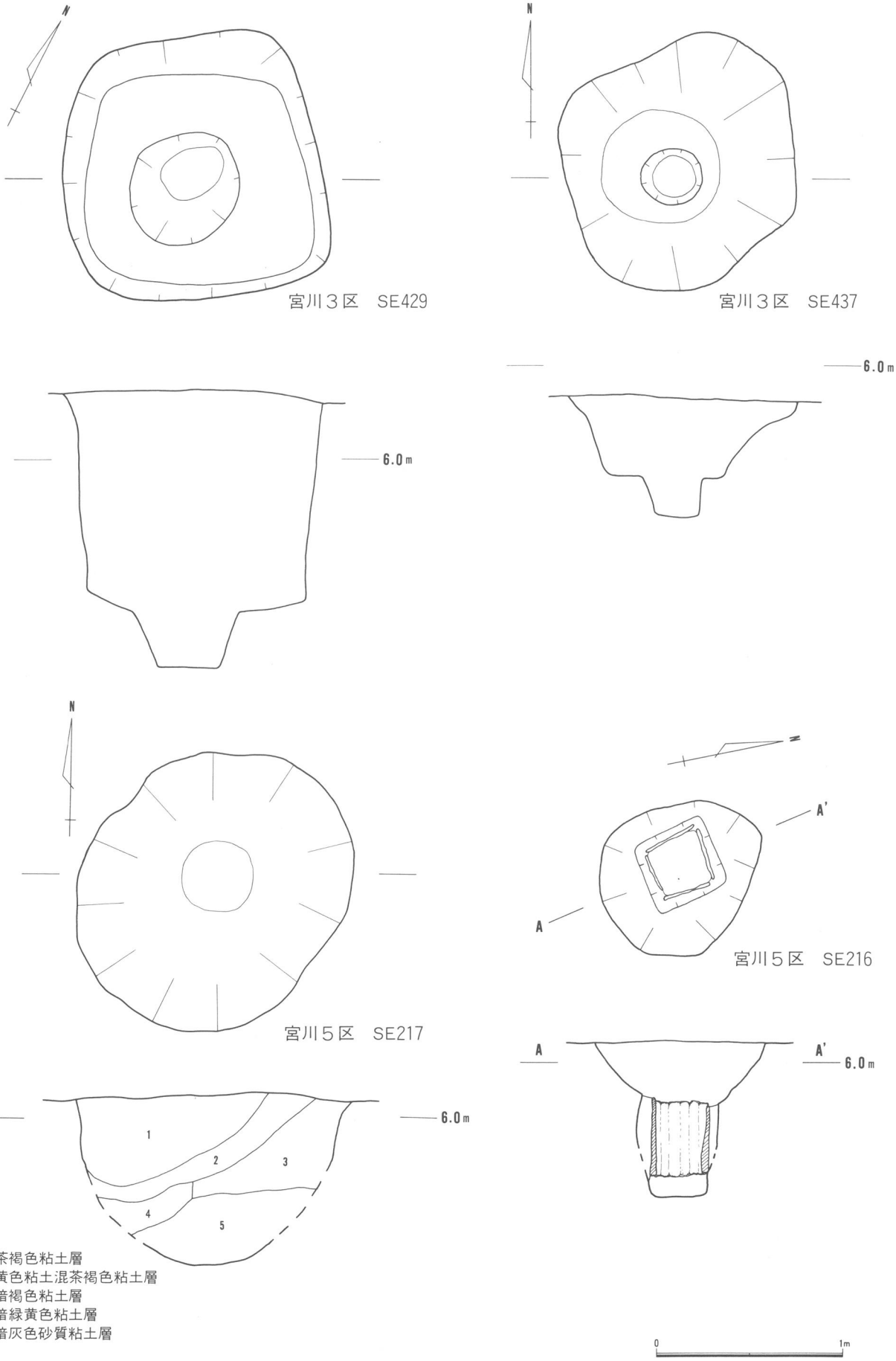




第119図　水上地区　井戸状遺構実測図3



第 120 図　宮川 3 区　井戸状遺構実測図



第121図　宮川3・5区　井戸状遺構実測図

第Ⅳ章　ま　と　め

静岡平野の南東部を流れる大谷川流域に位置する本遺跡は、南北約１㎞、東西約500ｍの広がりをもっている。調査は河川改修工事に伴って破壊をうける範囲に限定されたことにより、遺跡の中央部を縦断する長いトレンチ状とならざるを得ない状況であった。地形的には低湿地地形と古墳時代中期に初現をもつ旧河道跡が各調査区で断片的に検出され多くの祭祀遺物を包含していた。また微高地上には集落の一部と考えられる掘立柱建物跡・井戸状遺構・溝状遺構なども検出されている。本遺跡の年代は層位および遺物の編年から、縄文時代後期から近世にまでわたっていることが明らかとなった。前章までと重複する内容も含まれるが以下で、1.　低湿地地形、2.　旧河道跡、3.　居住域（集落）、4.　祭祀、について、その特徴を年代をおってまとめてみることにする。

1.　低湿地地形

低湿地地形が検出されているのは南から、大谷２区、大谷１区、西大谷１・４・５・６・７区、水上７・８・９・10区、　宮川２・３・４・６区である。

低湿地地形の広がりは現大谷川の左岸に広くおよんでいるが、その形状は数個所の池沼部分とそれらをつなぐ帯状の部分からなると考えられる。帯状の低湿地地形は水上７区と10区、宮川３区と４区で明らかとなっている。埋積土中からの出土遺物は縄文時代後期以降のもので、とくに大谷２区では石皿、木製ヤス、丸木弓、丸木舟、櫂などまとまりをみせている。なお、埋積土中には富士火山を起源とする大沢スコリア（Ｂ、Ｐ、2700年）の堆積がみられ年代決定の根拠のひとつにもなった。この大沢スコリアは旧河道等の二次的な浸食をうけない低湿地部分には層をなして遺存している。静岡平野の諸遺跡でもカワゴ平パミス（Ｂ、Ｐ、2900年）とともに検出されることが多く今後の低湿地遺跡で注目する必要があろう。

2.　旧河道跡

低湿地地形の埋積は、縄文時代からすすみ古墳時代後期には帯状の低湿地がほぼ完全に埋没した。宮川３区ＳＲ485の土層断面はその状況を如実に示している。初期の旧河道の出現はこの低湿地地形の埋没が最終段階をむかえる古墳時代中期にもとめることができる。この時期には帯状低湿地に微高地を浸食するほどの水流をもたない水路的な流れが認められる。水上７区ＳＲ807、水上10区ＳＲ673、宮川４区ＳＲ58などはその例である。

古墳時代中期後半から後期初めごろになると、海退現象にともない海水面と池沼部との相対的落差が拡大する。そして大量の砂礫の押し出しにより低湿地内埋積土を激しく浸食しながら池沼間を連結し、しだいに河川としての形状を整えるにいたる。水上７区ＳＲ808、水上８区ＳＲ778、西大谷４区Ｓ21グリッド最下層などがこの段階の旧河道跡である。

古墳時代後期は安定した河川となり1986（明治９）年の地籍図にみられる大谷川の旧河道とおおむね同一地点を曲流するようになる。埋積土は砂礫が主体をなすが粒子の大きさは古墳時代中期にくらべてやや小さい。この時代の旧河道跡は水上７区ＳＲ809・810・811・812、宮川４区ＳＲ56、宮川５区ＳＲ202、宮川６区ＳＲ313などが認められた。

奈良時代の旧河道跡が独立して検出されたのは宮川４区ＳＲ55が唯一であるが平安時代の旧河道跡内に奈良時代の遺物が混入している地点もある。宮川４区では古墳時代後期のＳＲ56が自由蛇行によって地点を変化させた様相がうかがわれる。

平安時代になると、海進現象にともなって海水面との相対的落差が縮小され水量は豊富で静穏な河川に変化する。埋積土も前代までの砂礫主体から粘土およびシルトが主体となる。静穏な水流は蛇行を強め

微高地が浸食されている地点が目につく。宮川３区のＳＲ486（下層）はその例である。

平安時代末ごろから鎌倉時代・中世になっても、海進傾向は継続し高い水位を維持した河川が微高地を浸食している。宮川４区では、この時期の旧河道跡としてＳＲ53とＳＲ52が検出された。ＳＲ53は宮川３区ＳＲ486と連続し、ＳＲ52は宮川３区ＳＲ487とつながる。中世後半期には河川の幅が著しく拡大し、広範囲にわたって沼沢地化したと思われる。中世居館跡の一部とみられる遺構が検出された水上３区を中心とする地区（旧地籍では構井ノ坪とその周辺）は旧河道や沼沢地によって半島状あるいは島状に孤立した微高地部分であったと考えられる。

近世になると、ふたたび様相が一変する。大量の砂礫が押し出され河道内はこの砂礫によって完全に埋積されている。急激な寒冷化にともなって海水面が下降したことなどが原因と思われる。宮川４区ＳＲ51をはじめとして旧地籍図（1877年）にみられる河道部分はすべて同様な状況であった。

3. 居住域（集落）

縄文時代後・晩期の遺物は低湿地内埋積土からのみ出土している。微高地上にはこの時期の遺構は検出されていない。また遺物は石鏃・弓・ヤス・丸木舟・櫂などの狩猟採集具が主体であることから居住域は丘陵部分あるいは丘陵裾部にあったと推定される。

弥生時代中期の遺物も低湿地内埋積土またはこれを浸食した旧河道内埋積土中より出土しているだけであり、微高地上に遺構はみられない。本遺跡の北西約0.7㎞の位置には同時代の遺構・遺物が出土した集落遺跡（有東遺跡）が存在することから本遺跡は弥生時代中期の集落からはずれているといえよう。

弥生時代後期から古墳時代前期になると西大谷８区および高松地区（昭和55・56年度静岡市教育委員会調査地区）に集落が形成される。西大谷８区では掘立柱建物（ＳＨ378）や大型柱穴列が検出されている。高松地区でも同様な建物群が数回の建てかえの状況をみせながら密集して検出されている。掘立柱建物は大型化する傾向をみせ、しかも柱間寸法が最大で3.5ｍにおよぶ建物が南北約330ｍという広範囲にわたって確認されていることから、倉庫群をもつ大規模な集落が存在することはあきらかである。

古墳時代中期の遺構はきわめて少ない。土器の集中部を除外すれば、宮川３区の溝状遺構（ＳＤ181）と水上３区ＳＥ468・ＳＤ456および水上10区ＳＤ690だけである。したがって居住域の推定は困難な状況であった。

古墳時代後期になると、河川内に膨大な量の遺物が投棄されるが、出土地点は調査区全域にわたり偏重はみられない。河川内への投棄は左右両岸から行なわれている。遺構も高松地区に竪穴式住居跡が１基みられることが注目される程度である。このことからは居住域の設定は困難であるが縁辺の微高地上に大規模な集落を予想しても大過ないであろう。

奈良時代から平安時代前半期は宮川地区を中心にして旧河道の右岸に遺構・遺物が集中する傾向がみられた。遺構では宮川１区ＳＥ６、宮川３区ＳＥ103、宮川５区ＳＥ216、ＳＥ217などの井戸状遺構のほか掘立柱建物ＳＨ341・342・343・344（宮川５区）などが検出されている。遺物では宮川３・４・５・６区で奈良前代の墨書土器７点（「多麻呂」・「信孝」・「神」・「大成」・「□□長」・「万」・「□人」）のほか銙帯金具・皇朝十二銭３枚（和銅開珎・万年通宝・長年大宝）などがみられる。遺構・遺物のあり方から、宮川地区が奈良時代から平安時代前半代にかけての中心地域であった可能性は強い。また「他田里戸主宇刀マ真酒」と墨書された１号木簡や、７世紀後半代と推定される「相星五十戸」と書かれた５号木簡をも考え合わせれば、官衛または官衛関連施設が存在した可能性も考慮しなければならない。

平安時代末から鎌倉時代の遺構・遺物の集中は宮川３区で顕著にみられる。ＳＤ145とＳＤ182および旧河道跡ＳＲ486によって三方区画された範囲は居住域と考えられる。しかし、この時代の遺構は宮川３区のみならず遺跡全般にわたって散見される。水上６区の溝状遺構（ＳＤ228）と井戸状遺構のセ

ット関係は宮川３区の状況と類似していた。このことから宮川３区で発見された居住域は小単位のものと考えられ、同様な居住域が複数存在した可能性が強い。

中世になると、遺構はほとんどみられなくなる。これは、この時代の環境が水位の上昇にともなって川幅の拡大と沼沢地化した部分（宮川３区における奈良時代生活面等）が広がったため微高地のなかでもっとも高い地区にしか居住できない状況に変化したためと思われる。

4. 祭　祀

本遺跡における祭祀遺物の出土地点は

① 低湿地の岸部、または河川の岸部あるいは河道内
② 溝状遺構内
③ 土坑状遺構内
④ 井戸状遺構内

のいずれかである。遺構・遺物の年代から古墳時代前期にはすでに水辺のまつりが行なわれ、13世紀から14世紀まで確実に継続されている。この千年余りの間に祭祀の方法や祭料は除々に変容していく。

古墳時代前期の祭祀的性格を示す遺構は、西大谷７区（北区）の８・９層、水上１区の井戸状遺構ＳＥ261、水上10区の土坑状遺構ＳＰ727に代表されるように、低湿地の岸部、井戸状遺構内、土坑状遺構内と様々であり祭祀遺物も玉類、鍬、壷、木製舟形と変化をみせている。祭祀の性格はかならずしも明らかではないが、ＳＥ261の腰掛状木製品・壺は埋井祭祀の祭料として納置された可能性がある。

古墳時代中期になると滑石製模造品を用いる祭祀とともに手捏土器を用いる祭祀、土師器を主体としながらも手捏土器を加える祭祀がさかんに行なわれるようになる。祭祀が行なわれる場所は低湿地の岸部がもっとも多いが水上１区ＳＸ323のように井戸状遺構廃絶後の窪地部分に手捏土器を主体とした土師器群が器種ごとに一括投棄される例もある。低湿地の岸部での祭祀はまず滑石製模造品が中心的位置を占める段階があり、土師器高坏が圧倒的優位を占め滑石製模造品を伴出しない段階へと変化する傾向をみせる。この過程のなかで小型の坩形土器は消滅していく（水上10区ＳＸ624ａ・ｄ群、宮川３区ＳＸ484などから水上８区ＳＸ775、宮川３区ＳＸ483への変遷）。一方宮川３区ＳＤ181や水上10区ＳＲ673などの溝状遺構や溝状地形内では須恵器碗が単独で出土している。碗が祭祀性をもつ土器であったかの断定はむずかしいが完形品が単独で出土すること、水辺であること、古墳時代後期の河道内には大量の祭祀遺物に伴出して須恵器碗が相当量出土していることなどから、祭祀性をもった投棄であると考えたい。

古墳時代後期、とくに６世紀代には土師器および須恵器の坏を一括投棄する遺構が出現する。宮川３区ＳＸ482が初現的位置を占め、以降７世紀後半まで続くが、坏を主体にしながらも甕形土器がセットとして加わる例（水上７区ＳＸ803・ＳＸ804）や、甑・甕・横瓮なども加わる例（宮川３区ＳＸ478・481）もある。これらは古墳時代中期にみられた高坏を中心におく祭祀の伝統を受け継いでいると考えられる。この場合に土器は祭料そのものであるか、または祭料をのせる補助的用具であるかが問題となるが、食品が中心となるであろう供物は遺存しにくく、本遺跡では数千個にのぼる桃の種と馬・牛・鹿・犬・イルカ・鯨・鮪等の動物遺存体が検出されたのみであるため判然としない。いずれにしても土器は奉献する祭料の中心をなすものであり、もっとも普遍的な構成要素でもある。本遺跡において祭祀的な意味を持つと思われる墨書土器も本来の器としての機能をふまえたうえでの墨書後投棄であろう。この意味で、祭祀遺構における土器の器種構成は馬形土製品や人形など特殊な形態をもつ典形的な祭祀遺物と同様に祭祀の祈願内容や背景を究明する重要な手掛りとなろう。

７世紀になると土器を中心に投棄する祭祀が行なわれている一方で大きな変革もみられる。人形土製品・馬形土製品（土馬）・人形木製品・馬形木製品等の祭祀具が大量に出土し、これには大陸系（道教

系）の影響があったとも考えられる。土製模造品と木製模造品が供伴する場合もあるが河道内の出土が大半であり、時間的差をもって投棄された可能性が強い。基本的には目的の相異を反映して別々に検出されている。水上7区ＳＸ801では中心部に土師器坏形土器30点が上向きにならべられ、その周囲に土馬4点が配置されていた。また同区ＳＸ802では土馬4点と土製人形3点が土器の伴出をみずに検出されている。このような土製模造品の出土状況に対して木製模造品は宮川6区ＳＸ335でみるように、刀形・人形・馬形・斎串などがセットで用いられていた。ＳＲ335は模造品のうち刀形1本が土師器壷形土器に入ったままの状態であった。このことから壷に入れて運ばれた木製模造品を投棄した場所であったと推定される。以上みてきたように古墳時代後期の祭祀は①土器を中心とした祭祀、②土製模造品を中心とした祭祀、③木製模造品を中心とした祭祀の3つにまとめることができる。しかし、このような整然とした状況をもった遺構ばかりではなく、7世紀後半頃から装身具や農具などを加えて行なう祭祀形態があったことをうかがわせる遺構も検出されている。宮川4区ＳＲ56がその例である。ＳＲ56では土製模造品や木製模造品のほか石製丸玉、耳環、紡錘車、横櫛、鎌の柄、横槌、曲物、編錘、有頭棒、桃の種、動物遺存体、大型の割石などが渾然一体となって出土している。前段階までの祭祀遺構は耳環、紡錘車、横櫛などは共伴しないことから、これらの遺物はＳＲ56のもつ年代幅のなかで最終の段階（7世紀後半代）に一括投棄された可能性が強く、それまでの整然とした祭祀から別形態の祭祀への移行ともいえよう。このＳＲ56の状況から、何らかの実相を明らかにしようとすれば『日本書紀』巻二十四、皇極天皇三年七日条にみられる常世の神を祭った記事が参考になるかもしれない。記事によれば東国不盡河のほとりで大生部多が「常世の神」を祭ったことが記録されている。この祭は「常世の虫」を神体として富と不老長生を祈願したもので、巫巫覡も神語を託して里人に勧めたという。民衆は①財寶・珍財を捨てる、②酒・菜・六蓄を路側にならべて「新富入来れり」と呼ぶ、③常世の虫を清座に置いて歌い儛いて福をいのる、という3つのことを行なったと記録されている。ＳＲ56の状況をこの記述に則して解釈すれば①財寶・珍財が農具、紡織具、耳環、玉類、横櫛などにあたり、②路側にならべた六蓄が動物遺存体となる。さらに③河道内にみられた大・小551個の礫群は割り揃えていることから清座として利用した仮説祭壇の石材であった可能性もある。以上のような点も含めて、7世紀後半の祭祀について今後さらに検討していきたい。

奈良時代から平安時代を概観すると古墳時代後期に始まる土製模造品や木製模造品が継続して用いられることに加えて墨書土器や、井戸状遺構内に投棄されたひょうたんや手捏の小皿、また皇朝十二銭などが新しい要素として登場する。宮川6区ＳＲ312では「神」と墨書された8世紀中葉の須恵器坏身・蓋のセットが出土した。ＳＲ312からはこのほか、土製模造品263点、斎串を含む木製模造品13点、玉類46点などがみられ、古墳時代後期の祭祀遺物が大量に混在している可能性が強い。形態分類などを通して伴出関係を明らかにすることが遺物編での課題となろう。

奈良時代の溝状遺構では宮川5区ＳＤ219で手捏土器が出土している。手捏土器は古墳時代前期から出土例があるが、奈良時代後半期以降の井戸状遺構には新たに小皿形の手捏土器が投棄されるようになる（宮川3区ＳＥ170・水上11区ＳＥ554）。また井戸状遺構での祭祀に着目すると埋井時あるいは廃棄時の祭祀と考えられる遺構が2例が発見された。宮川3区ＳＥ103と水上11区ＳＥ554がその例である。ＳＥ103では廃棄と同時に井戸枠の2分の1を取り壊し、その廃材の上にひょうたんをのせていた。ＳＥ554は井戸枠中位まで埋没して井戸としての機能を果さなくなった段階で、須恵器壷形土器1点、手捏土器1点、手捏小皿形土器4点、そしてひょうたんが投棄されていた。

奈良時代の祭祀遺構は後半期に集中しており、7世紀末～8世紀前半代が希薄となる。気候的には寒冷期にあたり地盤が安定し居住する地理的条件は整っているにもかかわらず、遺構・遺物が希薄となるのは注目に値する。

平安時代は河道内への墨書土器の投棄が増加するとともに水上1区ＳＥ192から出土した3点の墨書土器にみられるように合成文字とも思える内容のものが祭祀に用いられるようになる。ＳＥ192ではこの3点の墨書土器とともに緑釉陶器皿と木製品が覆土中層から一括して検出されている。さらに儀式終了後は人頭大の礫で埋めている。この一連の行為をもって埋井の祭祀としてよいと考える。

平安時代末から鎌倉時代・中世になると仏教的性格をもつ祭祀が宮川3区ＳＲ486で行なわれている。塔婆形の木簡には「大日」・「仁王」という文字が墨書されている。伴出する墨書土器には4種類の文字または語句が呪語として記されていた。またこの段階で出現する祭祀遺物に箸状を呈する斎串がある。15cm～26cmほどの長さで両端をとがらせたもので、直径は0.5cm～0.8cmで粗く削って仕上げている。出土した481点の大半が先端から2cmほどの位置で折れている。これは地面などに立てて用いた際に折れたと考えられる。この箸状の斎串は河道ばかりではなく水上6区の溝状遺構ＳＤ228（43点）、宮川3区の溝状遺構ＳＤ145（3点）、同区井戸状遺構ＳＥ424（6点）および429（2点）などからも出土しており祭祀において一般的な用具であったと思われる。

仏教的祭祀以外には、殺馬祭祀、人形木製品・呪符木簡の祭祀、銭貨を投棄する祭祀、絵馬の祭祀、種入り壷の祭祀などがみられ多様化する傾向を示している。

殺馬の祭祀は馬の骨や歯を河道や溝内に投棄するもので、前代までの動物遺存体が上腕骨・大腿骨や歯などの部位が散在する様相を示すことに対して、下顎骨を主体として上腕骨・大腿骨・肋骨などが伴出する傾向が顕著となる。大谷1区ＳＸ1、水上6区ＳＤ228、宮川3区ＳＲ53などがこの例である。

人形木製品や呪符木簡が出土したのは西大谷4区の中世河道跡（ＳＲ2）である。ここでは、短刀・鉄鏃なども伴出し、祭祀の形態に変化を認めることができる。

水辺での銭貨の投棄は奈良・平安時代の皇朝十二銭の投棄に始まり、鎌倉・中世になると宋銭が一括投棄される。大谷1区ＳＸ1では92枚、宮川5区ＳＸ340では7枚が出土した。

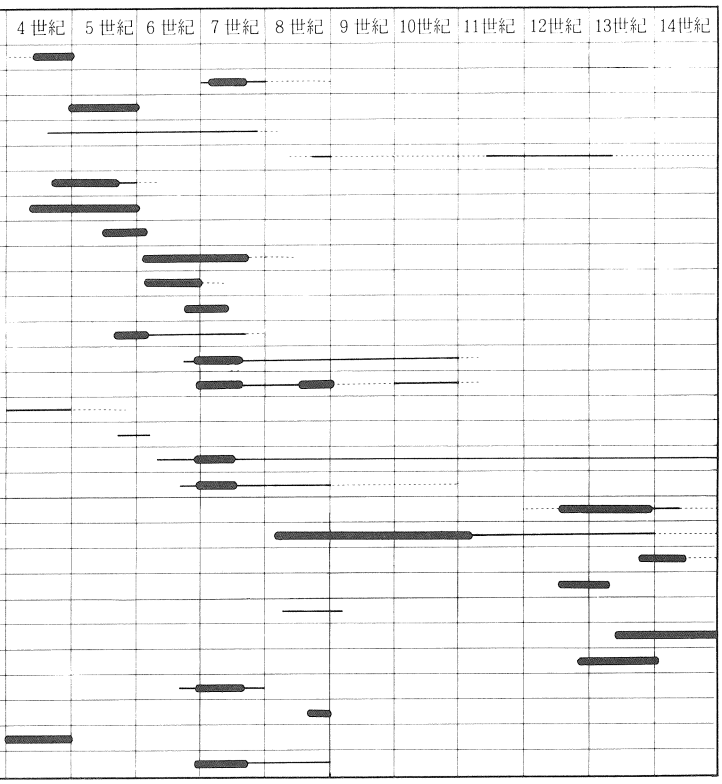
絵馬は宮川6区ＳＲ321で1点出土している。出土状況からは祭祀の状況を推定することは困難であった。

種入り壷は西大谷2区の旧河道内から出土したもので、円筒形の小形壷にソバやイネなど数種類の種子を入れたのち円形の木蓋で密封して投棄されていた。壷が体部の中位まで上底という特殊な構造をもっていることから祭祀に用いたものと判断した。

以上みてきたように、本遺跡の調査では水辺での祭祀遺構が多く発見され、当地域での古代祭祀の一端をうかがい知ることができた。本書が「遺構編」として刊行されながらも、多くの遺物について言及しているのは遺物の集合をもって遺構と認識しようとする概念からであるが、資料整理が不十分のため認識に誤りがあったかもしれない。今後さらに資料の検討を深め「遺物編」および「遺物・考察編」を通して検討していきたいと思う。

第40表　祭祀遺構分類表

類型	主要素	類型	主要素
Ⅰ	玉類	a	碧玉製管玉・ガラス小玉
		b	勾玉・管玉・丸玉
Ⅱ	手捏土器	a	手捏土器が主体
		b	手捏土器は付帯的構成要素
		c	手捏小皿・盃形
Ⅲ	滑石製模造品		土師器坩・高坏等と伴出
Ⅳ	土器	a	土師器各種
		b	土師器高坏
		c	土師器坏
		d	土師器坏と甕
		e	土師器甑と甕
		f	須恵器碗
Ⅴ	土製模造品	a	**馬形土製品**
		b	**馬形と人形**
Ⅵ	木製模造品	a	舟形（単独）
		b	刀形（単独）
		c	刀形・人形・馬形・斎串
Ⅶ	獣骨・歯	a	複数種の動物が混在
		b	馬下顎骨完形遺存
Ⅷ	文字資料	a	墨書土器
		b	木簡
		c	墨書土器と木簡
Ⅸ	銭貨	a	皇朝十二銭
		b	宋銭
Ⅹ	絵馬		
Ⅺ	ト骨		
Ⅻ	ひょうたん		
ⅩⅢ	農具	a	井戸内（鍬）
		b	河道内（農具）



参　考　文　献

1. 静岡県河川課　1982：『大谷川史』
2. 静岡県　1930：『静岡県史』第1巻
3. 〃　1931：『静岡県史』第2巻
4. 静岡市　1931：『静岡市史』第1巻
5. 静岡郷土研究協会　1935：『静岡県郷土研究』第5輯
6. 静岡県教育委員会　1979：『静岡県遺跡地図』・『静岡県遺跡地名表』
7. 静岡県教育委員会　1983：『有東遺跡Ⅰ』
8. 静岡県教育委員会　1963：『静岡県の古代文化』静岡県文化財調査報告書第2集
9. 静岡市教育委員会　1966：『片山廃寺跡第3次発掘調査報告書』
10. 〃　1966：『片山廃寺調査略報　東名高速道路建設に伴う発掘調査』
11. 静岡市登呂博物館　1975：『駿河宮川遺跡（第1次概報）』
12. 浜松市教育委員会　1971：『伊場第四次調査月報』4・6
13. 〃　1977：『伊場遺跡遺構編』
14. 〃　1978：『伊場遺跡遺物編1』
15. 〃　1980：『伊場遺跡遺物編2』
16. 〃　1982：『伊場遺跡遺物編3』
17. 静岡県教育委員会　1981：『静岡県の中世城館跡』
18. 静岡県消防防災課　1966：第2章「静清地域の地盤と防災上の問題点」『1965年静岡県防災地学調査報告書静清地域およびその周辺地域の防災上の諸問題』

19. 袋井市教育委員会　1981：加藤芳朗「大畑遺跡周辺の地学的背景と遺跡立地」『袋井大畑遺跡一1951・1977・1978・1980年度の発掘調査』
20. 土隆一・高橋豊　1972：「東海地方の沖積海岸平野とその形成過程」『地質学論集』第7号
21. 山本武夫　1974：「日本の気候変動と沖積世の寒冷気候」『第四紀研究』12巻4号
22. 望月董弘　1973：「神明原遺跡出土の土器」『土師式土器集成本編』3
23. 望月董弘　1961：「駿河の条里制について」『駿台史学』11
24. 金子裕之　1980：「古代の木製模造品」研究論集Ⅵ『奈良国立文化財研究所学報』38　奈良国立文化財研究所
25. 黒崎　直　1976：「斎串考」『古代研究』10
26. 新東晃一　1978：「南九州における人形・馬形土製品の祭祀形態」『古代文化』第30巻　第2号　古代学協会
27. 小笠原好彦　1975：「土馬考」『物質文化』25
28. 土肥　孝　1983：「日本古代における犠牲馬」『文化財論叢』
29. 水野正好　1983：「馬・馬・馬一その語りの考古学」『奈良大学文化財学報』第2集
30. 向坂鋼二　1985：「考古資料にみる水辺のまつり」『生活文化史』生活文化史学会
31. 亀井正道　1983：「河神信仰の考古学的考察」『坂本太郎博士頌寿記念日本史論集』上巻
32. 亀井正道　1971：「祭祀遺物一模造品の変遷一」『古代の日本2一風土と生活』
33. 比嘉政夫　1971：「常世神と他界観」『古代の日本2一風土と生活』
34. 泉　武　1982：「人形祭祀の基礎的考察」『橿原考古学研究所紀要考古学論攷　第8冊』奈良県立橿原考古学研究所
35. 中口　裕　1978：「踞の用途」『考古学研究』第25巻第3号　考古学研究会
36. 宇野隆夫　1986：「井戸」『弥生文化の研究7弥生集落』
37. 〃　1982：「井戸考」『史林』第65巻第5号
38. 山本　博　1970：「井戸の研究」
39. 奈良県立橿原考古学研究所　1976：『纒向』「奈良県桜井市纒向遺跡の調査」
40. 大谷誌編集委員会　1974：『大谷誌』

大谷川 Ⅱ

遺構編

昭和59・60年度巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業
埋蔵文化財発掘調査報告書（神明原・元宮川遺跡）

昭和62年3月30日

編集発行　財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所　株式会社　三　創
静岡市中村町166番地の1
TEL（0542）82－4031